

# 虚空蔵信仰の伝播と受容

— 民俗宗教の歴史地理学的研究 —

中村雅俊

## はじめに

虚空蔵菩薩は、虚空のように広大無辺な知恵と徳と富を象徴する仏教における菩薩の一つである。虚空蔵菩薩は地藏菩薩と天地一対のものとして、京都太秦広隆寺講堂にはそのような両尊が祭祀されている。密教において虚空蔵求聞持法という記憶力を求める僧侶の修行の対象として尊重された虚空蔵菩薩は、阿弥陀如来や観音菩薩、あるいは虚空蔵・地藏と一対であるとされる地藏菩薩などの諸尊に比べて、一般には知られることの少ない菩薩であるといえる。

とはいえ、十三歳になった者が京都の嵯峨にある法輪寺に詣でて知恵を受ける「十三まいり」や、あるいは人が亡くなった後に営まれる追善供養において三十三回忌という節目の本尊仏に虚空蔵菩薩をあらわす「十三仏」など、民間にも多様な虚空蔵信仰が展開しているのである。

本論では、虚空蔵菩薩とそれから派生する様々な信仰に注目し、民衆に支持された十三まいり、十三仏を扱うのはもちろん、それら民間信仰の基盤となる虚空蔵信仰そのものも含めて、伝播と受容を主題として歴史地理学の立場から体系化を試みた。

虚空蔵菩薩に関心を持つてから二十年以上になるが、この間継続してきた研究において、おおむね、前半は日本民俗学における仏教民俗学的な取り組み、後半は歴史地理学における民俗地理学的な取り組みが主体となった。ただ筆者は地理学の出身であるので、仏教民俗学を援用している場合でも地理学的な思考が基盤となった。

本論をなすにあたって、文献史料や民俗資料また自治体刊行物や地図資料を活用したことは言うまで

もないが、地理学の特性を活かすために特に実地調査を重視し現地での伝承に留意したつもりである。本論では原則として研究の進展過程にそって章を立て、それぞれの論文を節としてならべている。従って第一章と第二章は仏教民俗学的方法、第三章から第五章は民俗地理学的な関心が強いものであり、この構成は必ずしも歴史的な順序に従っていない。

本論の概要は次のようなものである。

序論では、研究対象である虚空蔵菩薩とその信仰について概観し、また研究史と筆者の研究方法について論述した。

第一章では、虚空蔵信仰として現在民間で最も大きな位置をしめている「十三まいり」をとりあげて論述した。十三まいりは近世中ごろに京都の法輪寺において成立した。法輪寺は平安時代から虚空蔵菩薩を本尊としており、その伝統にたつて町衆の支持のもとに十三まいりという行事が確立されたと推論した。また、その十三まいり信仰は、絹織物の技術者の移住にともなって山形県米沢市に伝播したのではないかと考えた。そこで近世における十三まいりという虚空蔵信仰の伝播と受容を考察した。

第二章では、日本に特有な追善供養である十三仏信仰を取り上げ伝播と受容について論述した。十三仏は、死後初七日から三十三回忌までの十三度の供養に、それぞれの忌日仏をあてたものであり、現在全国的にあまねく浸透している。中世において十三仏信仰が成立する過程での虚空蔵菩薩の係わりを検証し、十三仏信仰が虚空蔵信仰の中に位置付けられることを確認するために各地の事例をとりあげた。つぎに十三仏信仰の伝播にあたったのは「和泉式部」伝承を持ち歩いた女性民間宗教者と、「隔夜」という特別な修行をする僧であったのではないかと考えた。また近年淡路島に十三仏霊場が設けられたが、

その成功が契機となり各地に同様の十三仏霊場が企てられた。「十三仏」と「巡礼（霊場めぐり）」との組み合わせが人々の共感を得たのではないかと考えた。

第三章では、我が国の伝統産業として著名な漆器業における虚空蔵信仰を取り上げて論述した。十三まいりの成立には法輪寺に町衆である職人たちが信仰を寄せたことが背景となった。現在法輪寺で漆器関係者が集い漆器守護祭を催している。各地の漆器産地には法輪寺と関係しながら虚空蔵菩薩が祭祀されている。また根来塗りで知られる和歌山県那賀郡岩出町の根来寺がまた虚空蔵信仰と関係が深いことを考察した。

第四章では、虚空蔵信仰そのものの伝播と受容について、山岳信仰と海上交通の二面を視点として論述した。まず、虚空蔵菩薩に関する小字地名を検索した際、福井県勝山市に集中して虚空蔵地名が小字としてあることを知った。この虚空蔵地名は白山信仰の越前側の拠点である越前馬場平泉寺の丑寅の四至にある虚空蔵堂に由来していた。これにとどまらず、平泉寺の白山五社の一つである加宝社の本地も虚空蔵菩薩である。さらに福井県今立郡今立町の大滝神社神宮堂にも秀逸な虚空蔵菩薩像が祭祀されている。白山信仰における虚空蔵菩薩の意義を再評価すべく実地調査に基づいて検討した。また、伊勢神宮と関係が深い朝熊山金剛証寺の本尊虚空蔵菩薩と奥美濃高賀山の諸社に伝わる虚空蔵菩薩とでは、その像容に違いがあることから系譜が異なることを考察し、高賀山の虚空蔵菩薩の像容が法輪寺様式とすべき特別なものであることを問題提起した。さらに、薩摩坊津に現存する大永六年（一五二六）の銘をもつ虚空蔵菩薩の梵字であるタラクを刻んだ石造物に注目した。この坊津には根来寺の末である虚空蔵菩薩を本尊とした一乗院が勢力を持っていた。海上交通との関係で虚空蔵菩薩を祭祀する例をあ

げること、虚空蔵信仰が海上交通によって伝播した可能性と、それら虚空蔵信仰を共有する地域が互いに連携していたことを想定した。

第五章では、琉球における虚空蔵信仰と十三仏信仰について伝播と受容を論述した。琉球への虚空蔵信仰の導入には二つの系譜があった。ひとつは真言宗の薩摩坊津一乗院から護国寺への伝播であり、これには疱瘡送りの民間信仰が付託されている。もうひとつは禅宗による円覚寺への伝播である。また近世初頭活躍した浄土僧の袋中は『琉球神道記』で十三仏信仰を説いたが、当時十三仏信仰がいかに注目されたか、本土ではかえって見落としてしまう点を考察した。

以上の考察によって、虚空蔵信仰の伝播と受容を大系的に捉えるようとするもので、虚空蔵信仰がこのような展開を示し得た要点を整理してみると、次の三点にまとめることが可能であろう。

第一の点は、虚空蔵菩薩の信仰の基盤になった求聞持法が、観念的な修行にとどまらず、集中力を高めるという実効性をもった科学的な修行であった点である。虚空蔵菩薩の知恵は、求聞持法によって得られる知恵を「自然智」と呼ぶように、才能や発想などその人が本来持っているものをいかに引き出すかという面がある。そのことによって、虚空蔵菩薩に対する信仰が宗教者の枠を超えて広がったと考えられる。

第二の点は、虚空蔵菩薩が地蔵菩薩と一対のものとして対偶関係を有する点である。末法思想による地蔵信仰の隆盛によって、虚空蔵菩薩は極楽往生のための臨終正念をつかさどるとされるようになった。臨終にあたり虚空蔵菩薩の陀羅尼を唱えることで心をつっかり持ち西方極楽浄土への往生を確実なものにしたいと願ったのである。この虚空蔵菩薩と地蔵菩薩との対偶関係が、十三仏を成立させ追善供養に

大きな影響を与えたと考えられる。

第三の点は、虚空蔵信仰が各時代において貴族、武士、町衆という宗教者でない人たちに受け入れられてきたという点である。これには平安時代以降、京都の法輪寺の果たした役割が大きく、そのことによつて史料が多く残される結果となった。また十三仏信仰についても足利將軍家にとり入れられた。さらに近世に入ると町衆という市民に支持された十三まいり信仰が成立した。そして現代において、十三仏信仰が日本人の祖先祭祀に決定的ともいえる影響を与えていると考えられる。

## 目次

はじめに

序 論 研究課題と研究方法

第一節 研究対象・研究方法・研究資料

八

第二節 地名を指標とした虚空蔵信仰の考察

四七

第一章 十三まいり信仰の伝播と受容

第一節 十三まいり信仰の成立

八八

第二節 十三まいり信仰の伝播

一〇六

第四節 十三まいり・十三仏・十三塚信仰

一二五

付節一 法輪寺と『平家物語』

一五四

付節二 虚空蔵信仰と十三まいり信仰

一六〇

第二章	十三仏信仰の伝播と受容	
第一節	十三仏信仰の成立	一七〇
第二節	十三仏信仰の伝播	二〇五
第三節	十三仏信仰の伝播者	二四二
第四節	淡路島の十三仏霊場	二六八
第五節	石巻の中世板碑にみる十三仏信仰	二八八
第三章	漆器業における虚空蔵信仰の伝播と受容	
第一節	漆器業の虚空蔵信仰	三〇八
第二節	浜仏壇にみる虚空蔵信仰	三四七
第四章	山と海における虚空蔵信仰の伝播と受容	
第一節	白山にみる虚空蔵信仰	三五六
第二節	虚空蔵信仰の伝播	三九〇
第三節	海上交通と虚空蔵信仰	四一四
第五章	琉球における虚空蔵信仰の伝播と受容	
第一節	虚空蔵信仰の南進	四四六
第二節	『琉球神道記』にみる十三仏信仰	四七七
おわりに		

序  
論  
研究課題と研究方法



# 第一節 研究課題・研究方法・研究資料

## 一 研究課題

### (1) 研究対象

本論で研究対象とする虚空蔵菩薩について、『広辞苑』では、

こくうぞうぼさつ【虚空蔵菩薩】(梵語 Akasagarbha)

虚空のように広大無辺の福德・智慧を蔵して、衆生の諸願を成就させるという菩薩。胎蔵界曼荼羅虚空蔵院の主尊で、ここでは蓮華座に坐し、五仏宝冠を頂き、福德の如意宝珠、智慧の宝剣を持つ。求聞持法の本尊。虚空孕(こくうよう)菩薩。

とし、虚空蔵菩薩が広大無辺な知恵と福德を司る菩薩であり、求聞持法の本尊として知られているとする。

国語辞典として古典籍からの引用が豊富な『日本国語大辞典』第八巻では、

#### ①こくうぞう【虚空蔵】

「こくうぞうぼさつ(虚空蔵菩薩)」の略。\*観智院本三宝絵・下「阿波の国の大たきのみ子にして虚空蔵の聞持の法を行ふに」\*黄表紙・唯心鬼打豆「鰻をつかはしめにし給ふ虚空蔵(コクウザウ)さまざま御存じ無事なれば」\*大日経・五「西方虚空蔵、円白悦意壇、大白蓮華座、置大慧刀印」

こくうぞうの求聞持(ぐもんじ)の法(ほう)「||法」「こくうぞうぐもんじほう(虚空蔵求聞持法)」

に同じ。\*今昔・11・9 「大安寺の勒操僧正と云ふ人に会ひて、虚空蔵の求聞持の法を受け学びて」  
\*今昔・11・9 「阿波の国の大龍の嶽に行きて、虚空蔵の法を行ふに」\*源平盛衰記・40・法輪寺事  
「其後虚空蔵求聞持法（コクウサウグモンヂノホフ）を修せんとして、勝地を尋求ける」

②こくうぞうぼさつ【虚空蔵菩薩】（梵 Akasagarbha または、Gagaanaagna の訳語）

仏語。菩薩の一つ。「虚空蔵」は、虚空がすべてを蔵するように、無量の智慧と福德をそなえているの意で、人々にこれらを与え、願いを満たし救うという菩薩。密教では、胎蔵界曼荼羅（たいぞうかいまんだら）の虚空蔵院の主尊で、同じ釈迦院の釈迦の脇侍ともするが、金剛界では賢劫十六尊の一つ。その形像は、胎蔵界曼荼羅の虚空蔵院では、体は肉色で、頭に五仏の冠をいただき、右手には光炎のある剣、左手には宝珠のついた蓮華を持ち、所持の宝と剣は福德と智慧を表わすが、また種々の形像があり、求聞（ぐもん）持法を修するときの本尊や五大虚空蔵などがある。また民間では、うなぎとの関連から、丑寅の年に生まれた人の守本尊とするなどの俗信がある。虚空蔵。こくぞうぼさつ。\*今昔・11・5 「願くは、虚空蔵菩薩、我れに智慧を令得給へ」\*虚空蔵菩薩神呪経  
「虚空蔵菩薩即於夢中自現色身令其悔過」

とし、虚空蔵求聞持法について阿波の大龍山と京都の法輪寺にふれ、虚空蔵菩薩の形像が多様であることを述べ、民間信仰として鰻を使者とすることや丑寅年生まれ守本尊とされることを述べている。

平凡社の『大百科事典』（一九八四年刊）では「虚空蔵」の項目をたてており、小学館の『日本大百科全書』（一九八六年刊）と、同じ小学館の『大日本百科事典 ジャポニカ』（一九八一年刊）ではともに「虚空蔵菩薩」の項目をたてほぼ上記と同様の説明を加えている。

次ぎに専門分野における辞書・辞典類の検討にうつるが、まず仏教関係の辞典として『岩波仏教辞典』では、

虚空蔵菩薩（こくうぞうぼさつ）[s: Akasagarbha]

大集経（だいじつきょう）虚空蔵品や虚空蔵菩薩経などに説かれる虚空のごとく無量の智慧や功德（くどく）を蔵する菩薩。密教の教主である大日如来（だいにちにょらい）の働きのうち、（虚空）と（蔵）という特性を持った菩薩。虚空は何ものにも打ち破られないから無能勝であり、蔵はすべての人びとに利益（りやく）安樂を与える宝を収めているという意味である。胎蔵界曼荼羅（たいぞうかいまんだら）虚空蔵院の主尊、金剛界（こんごうかい）曼荼羅では賢劫（げんごう）十六尊中にある。また、虚空蔵は金剛界大日、地藏は胎蔵大日で、両者同体ともいわれ、あるいは明星はこの尊の化身（けしん）であるともいわれる。求聞持法（ぐもんじほう）本尊としても有名。遺例に、額安寺像（奈良時代、奈良県大和郡山市）や東京国立博物館画像（平安後期）があり、五大虚空蔵菩薩の作例に神護寺（じんごじ）像（平安初期）、唐より請来されたと伝える教王護国寺観智院像がある。なお求聞持法の呪力を介して知恵を授ける菩薩としての信仰を集め、僧俗貴賤が学芸向上のために祈願した事例は平安時代以来諸書に見える。その代表的なものが、虚空蔵菩薩を本尊とする法輪寺（京都市西京区）詣である。

としており、虚空蔵菩薩と地藏菩薩の対偶関係、明星が化身とされること、求聞持法を介して知恵を授ける民間信仰が生じ、その代表が法輪寺詣であるとしている。

虚空蔵求聞持法について、『密教大辞典』増訂版第二巻では、

虚空藏菩薩を本尊として、聞持聰明を求むるに修する法なり。虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法を本據とす。弘法大師出家以前に、勤操大徳に就きて此法を受け、阿波の太龍山・土佐の室戸崎に於て修行せしこと、三教指帰の序に明かなり。興教大師は此法を八ヶ度修したりと云ふ。此法の相承は善無畏三藏開元五年長安の菩提院に於て虚空藏菩薩求聞持法を譯して一行阿闍梨に授く、當時我國より入唐せし大安寺の道慈之を相傳して帰、善議を経て勤操に傳はりたるものなり。とあり、弘法大師空海が勤操からこの虚空藏求聞持をうけて阿波の太龍山や土佐の室戸崎で修行し、そのことが『三教指帰』の序文に見えることをあげる。

空海の名の由来が、室戸岬の海に面した洞窟で行われた求聞持修行において感得された、空（そら）と海（うみ）が世界を二分することによるとされるように、空海と虚空藏求聞持の結びつきは後の虚空藏信仰の展開に大きな影響を与える。また、空海の門下で新義真言宗を紀州根来寺に興じた興教大師覚鑿が八度までも求聞持法を反復して行ったことをあげるが、求聞持法は結願である百日目に明星が来臨してはじめて完成するのであつて、覚鑿がいかに熱心に求聞持法に取り組んだかがわかる。

覚鑿の新義真言宗根来寺は、戦国期に織田信長によって兵火に係りほとんど宗教的機能失うが、近世に入り学僧だけが許されて、長谷寺における新義真言宗豊山派と京都智積院における新義真言宗智山派を継承して今日に至っている。

求聞持法について『国史大辞典』第五巻は、興味深い指摘をしている。

密教の修法の一つ。博聞強記を得るために修するもので、求聞持法とも略称する。これ以外に観音求聞持法があるが、普通虚空藏菩薩を本尊とするこの法が最も多い。真言（陀羅尼）を百万遍百

日間誦じてその利益によつて記憶力を増進させる。生理学的にも脳細胞や神経を一つのこと集中することで白紙の状態にし、新しい能力を蓄積することはきわめて有効な方法であることが説明される。日本へは道慈が伝え、入唐前空海も大安寺の僧（勤操大徳とする説もある）よりこの法を授けられ、阿波の大滝岳や土佐の室戸崎などで修行し明星の飛来を体験したと伝えられる。宮島の弥山、室戸崎はいまその行をする人たちの霊場である。

（田村隆照）

すなわち、「生理学的にも脳細胞や神経を一つのこと集中することで白紙の状態にし、新しい能力を蓄積することはきわめて有効な方法であることが説明される」とされることで、虚空蔵求聞持法が宗教的な觀念の修行に加えて、科学的に裏付けされる集中力を高める法であることが、虚空蔵菩薩から派生する諸々の信仰に技術・技術者が関係する素地となったと考えられる。

先にあげた『密教大辞典』において、「修法」の中に、

牛蘇加持に就きて、百日間乳器を密閉したる儘灑水加持すと云ふ説、或は毎日朝暮に蓋を開きて加持すと云ふ説あり、或は我國にては蘇の製法に通ぜず、期限内に腐る処あるが故に、結願の時に之を取りて加持すと云へり。

とあるが、ここでいう「蘇」は現在のチーズであり、苦行である求聞持を修する際に栄養価の高い蘇を食料として使用するように儀軌で指導されていることも興味深いことである。

『国史大辞典』は、「虚空蔵寺跡」についても項をたてている。それには、

大分県宇佐市大字山本にある古代寺院跡。塔跡が露出していた所から、昭和二十九年（一九五四）日本考古学協会による塔跡と金堂跡（一部）の調査、同四十六年大分県による寺跡確認調査、同五

十二年宇佐市による講堂の一部調査が行われた。その結果、塔(西)・金堂(東)が対峙し、北側に講堂を配置した法隆寺様式の伽藍配置で、白鳳時代創立と推定された。出土品で注目されるものは、法隆寺式忍冬唐草文字瓦と甄仏(せんぶつ)で、特に甄仏は、奈良壺坂寺発見の甄仏のうちの一つの種類と同范で興味深い。

〔参考文献〕小田宮士雄他「虚空蔵寺と法鏡寺社址」(『大分県文化財調査報告』二六)

(賀川光夫)

とあり、宇佐神宮とも結びつきの強い虚空蔵寺が白鳳時代の創立と推定されていることは、虚空蔵信仰がわが国にもたらされた時代を考える上で重要である。

また、『日本仏教史辞典』の「法輪寺」の項は、同名寺院の(一)として奈良斑鳩の法輪寺をあげ、ついで京都嵯峨の法輪寺について、

(二)京都市西京区嵐山虚空蔵山町所在の真言宗五智教団の寺。別称、嵯峨虚空蔵。山号は智福山。和銅六年(七一三)元明天皇の勅願で行基が開創、空海の弟子道昌が再興、貞観十六年(八七四)諸堂宇を建立したと伝える。後陽成天皇より智福山の勅号を下賜。前田利家の帰依を受ける。徳川綱吉は寺領五十石の朱印状を与えた。持国天像・多聞天像はともに鎌倉時代の作で、重要文化財に指定されている。

〔参考文献〕中村雅俊『虚空蔵信仰の研究』

(宮坂宥勝)

と、行基開創で道昌再興であるとし参考文献として拙著をあげている。

また、『日本民俗大辞典』上巻では、「虚空蔵信仰」として、

表0・1・1

## 虚空蔵関係經典

經典名	訳者	備考
虚空蔵菩薩經	(後秦) 仏陀耶舎	大正蔵一三・六四九～六五〇
大方等大集經虚空蔵品	(北凉) 曇無讖	大正蔵一三
虚空蔵菩薩神呪經	(劉宋) 曇摩蜜多	大正蔵一三・六六三b
虚空蔵菩薩神呪經	失訳	大正蔵一三・六五七C 虚空蔵菩薩經の別訳
觀虚空蔵菩薩經	(劉宋) 曇摩蜜多	大正蔵一三・六七七c
虚空蔵菩薩問七仏陀羅尼經	(梁代) 失訳	大正蔵二一
虚空孕菩薩經	(隋) 闍那崛多	虚空蔵菩薩經の別訳
虚空蔵求聞持法(求聞持軌)	(唐) 善無畏	開元五(七一七)年 大正蔵二〇・六〇二a
虚空蔵菩薩問仏經		天平勝宝三(七五一)年以前。大集經虚空蔵品の抄出、奈良時代の写経目録に登場
虚空蔵菩薩問持幾福經	失訳	天平勝宝三(七五一)年以前。奈良時代の写経目録に登場
大集大虚空蔵菩薩所問經	(唐) 不空	大方等大集經虚空蔵品の異訳
大虚宝蔵菩薩念誦法 (大虚空蔵軌)	(唐) 不空	大正蔵二〇・六〇四a
聖虚空蔵菩薩陀羅尼經	(宋) 法天	大正蔵二〇
仏説虚空蔵陀羅尼經	(宋) 法賢	咸平四(一〇〇一)年
虚空蔵經	宝思惟	元久二年以前(覺禪鈔虚空蔵法奥書)覺禪鈔虚空蔵法による 大正蔵 図像⑤-四〇b
如意虚空蔵菩薩陀羅尼經	伝菩提流志	新纂統蔵二・八六〇、偽経か

初から伝えられた菩薩であり、その伝来には新羅系渡来氏族秦氏の力が与っていた。広大無

邊の功徳を包蔵することが虚空のようであるとするこの菩薩は教理上からは虚空蔵法による福德増進、一種の暗記法である虚空蔵求聞持法による智慧増進、災害消除のために辛酉年に修された五大虚空蔵菩薩に依拠する金門鳥敏法により修され、民間でもこれに沿った信仰が展開していた。虚空蔵菩薩の

表0・1・2 奈良時代の虚空蔵関係経典・写経一覧			
	経典名	初出年次	回数
1	虚空蔵菩薩経(仏陀耶舎訳)	天平9(737)年	22
2	観虚空蔵菩薩経(曇摩蜜多訳)	天平9(737)年	21
3	虚空孕菩薩経(闍那崛多訳)	天平9(737)年	19
4	虚空蔵菩薩神呪経(曇摩蜜多訳)	天平9(737)年	19
5	大集大虚空蔵菩薩所問経(不空訳)	天平2(730)年	17
6	虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法(善無畏訳)	天平9(737)年	14
7	虚空蔵菩薩問仏経	天平勝宝3(751)年	8
8	虚空蔵菩薩問七仏陀羅尼呪経(失訳)	天平10(738)年	6
9	虚空蔵菩薩落問持幾福経	天平9(737)年	6
10	仏説虚空蔵菩薩陀羅尼経	天平9(737)年	6
11	虚空蔵菩薩説陀羅尼句経抄	天平20(748)年	1

紺野敏文氏の作表に基づく  
(「虚空蔵菩薩像の成立(上)」『佛教藝術』140参照)

使令とか、乗り物だとして信者やこの菩薩をまつるムラや一族か鰻を食べない禁忌、丑・寅年  
生まれの守り本尊信仰がよく知られており、寺院行事としては虚空蔵菩薩をまつる寺堂に十三

歳になった男女児が知恵貫に参る十三参りが各地で行われている。このほか、作神・蚕神・漆工職祖神・鉞山神・産神・漁業神などとしても信仰されている。虚空蔵信仰は空海による虚空蔵求聞持法勤修の伝統をつぎ、主に真言系修験・寺僧を中心にして護持されてきた。岐阜県郡上郡美並村粥川谷の人々は現在でも鰻を捕獲したり、食べないなどの虚空蔵信仰の民俗を色濃く残すか、その信仰は虚空蔵信仰をもって高賀山に依拠した修験者と里人の水神信仰を媒介にして成立した伝承と考えられる。このように虚空蔵求聞持法に関連する十三参り・星宮、また密教的浄土観の発現である十三仏とその最終仏としての虚空蔵菩薩の定着などの信仰は、真言系修験・寺僧と民間との交渉の内に醸成されてきたと考えられる。

「参考文献」中村雅俊『虚空蔵信仰の研究』、一九八



表0・1・3 中村雅俊著『虚空蔵信仰の研究』 (御影史学研究会、1986年刊)
<b>第一章 十三まいり信仰</b>
十三まいりの成立—嵯峨虚空蔵法輪寺について—
十三まいり信仰の成立と伝播—絹織物技術との関連において—
虚空蔵信仰と十三まいり
十三まいり・十三仏・十三塚—「十三」という数をめぐって—
<b>第二章 十三仏信仰</b>
十三仏信仰の成立について—空海の入定と虚空蔵求聞持法—
淡路島の巡礼—弘法大師信仰と十三仏霊場—
隔夜スル法師—十三仏信仰伝播者の問題—
十三仏信仰の伝播について—京都誓願寺十三仏堂を中心として—
<b>第三章 嵯峨法輪寺の虚空蔵信仰</b>
虚空蔵信仰の伝播—能登石動山・美濃高賀山・山城法輪寺、本尊の像容を視点として—
法輪寺と『平家物語』の世界—小督局・滝口入道と横笛—
<b>第四章 民俗調査報告</b>

七、佐野賢治編『虚空蔵信仰』（「民衆宗教史叢書」二四、一九九一）、佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究—日本の仏教受容と仏教民俗学—』、一九九六

（佐野賢治）

としている。筆者はこの項を担当している佐野賢治とは意見を異にすることも多いが、民俗学関係の辞書の項目として「虚空蔵」があることは評価できる。『日本宗教民俗辞典』も「虚空蔵信仰」で項をたてている。

虚空蔵関係の経典とわが国において奈良時代に写経された経典を整理した。平安時代以降の虚空蔵信仰は、先にあげた空海の関係から展開していく面の強いことを本文で詳説している。

## (2) 民俗宗教と民間信仰

本論文では、虚空蔵信仰の民俗宗教としての面に主眼をおいて検討を加えている。民俗宗教という概念は、一九七〇年以降、民俗学、特に仏教民俗学において使われている。従来使われてきた民間信仰との明確な定義上の差異はまだ十分には確定されていない。

『日本民俗大辞典』の「民俗宗教」の項には、

表0・1・4 『虚空蔵信仰』 (民衆宗教史叢書第二十四巻、佐野賢治編、雄山閣出版、 1991年刊)		
論文名	著者	初出
<b>第一篇 虚空蔵菩薩と民俗信仰</b>		
十三参りの成立と展開—特に置賜地方を中心に—	佐野賢治	1974
十三まいりの成立—嵯峨虚空蔵法輪寺について—	中村雅俊	1976
鰻と虚空蔵信仰禁忌の歴史民俗学的一考察	佐野賢治	1976
虚空蔵菩薩信仰と「鰻」	木村 博	1985
養蚕守護神としての虚空蔵菩薩	木村 博	1975
星と虚空蔵信仰—日本星神信仰史覚書・その一	佐野賢治	1983
漆工祖神としての虚空蔵薩	佐野賢治	1981
鉾山と信仰	若尾五雄	1980
<b>第二篇 虚空蔵信仰の史的展開</b>		
古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめ ぐって—	藺田香融	1957
記憶の技法—虚空蔵求開持法とF・A・イエイツ—	正木 晃	1980
高賀山と虚空蔵信仰—中世修験の動態を中心として—	佐野賢治	1977
唱導説話縁起としての高賀山縁起	小林一葵	1986
別山加宝虚空蔵信仰論序説(1)	吉田幸平	1975
奥美濃における虚空蔵信仰	近藤喜博	1970
虚空蔵信仰の伝播—能登石動山・美濃高賀山・山城法輪 寺、本尊の像容を視点として—	中村雅俊	1984
石動山の開山伝承と石動修験	由谷裕哉	1984
房総の虚空蔵信仰と日蓮聖人	平野元三郎	1980
山中他界観念の表出と虚空蔵信仰—浄土観の歴史民俗学的 一試論—	佐野賢治	1976
<b>第三篇 虚空蔵信仰の研究成果と課題</b>		
	佐野賢治	

民間信仰にかわって一九七〇年代以降使用されるようになった語。英語のFolk religion に当たる。民間信仰は術語として不明確な部分を含むが、概して仏教やキリスト教などの創唱宗教、成立宗教、外来宗教とは対立するものとして民間に伝えられている呪術的、

迷信的で体系性を欠いた信仰ととらえられてきた。それに対して成立宗教と生活慣習の中に伝えられている非体系的な民間信仰とは必ずしも対立して存在するのではなくむしろ習合しているのが実情であり、その動態を包括的にとらえるものとしてこの民俗宗教という語が使用されるようになった。現在では民俗学においても、この民俗宗教という概念が有効とされている。

(新谷尚紀)

とされる。また、「民間信仰」の項には、

〔定義〕 folk-beliefs, Volksglauben, croyances populaires の訳語。原始・古代以来の宗教が蓄積されている一方で、創唱宗教との交渉を通して、あるいは国の宗教政策、社会の変化・変貌などによって、変容・変質しながらも、生産活動や人間関係をはじめとする人々の日常生活・社会生活を基盤として現われてくる宗教現象。民間信仰は民俗のなかの宗教現象、宗教のなかの民俗的現象と言い換えることも可能で、近年では民俗宗教 folkreligion, Volksreligion, religion populaire と称されることも多い。ただし民間信仰と民俗宗教との関係について、両者を同一のものとする立場と両者の間に差異を認める立場とがあり定まっていない。しかし教祖・教理・教団

を備えた仏教・キリスト教・イスラム教などの創唱宗教（成立宗教・世界宗教）と対比して民間信仰・民俗宗教を捉えていることが一般的である。

（宮本袈裟雄）

としている。

本論文では、体系化した教派仏教に内包する虚空蔵信仰から、民衆によって支持されたいわゆる民間信仰として受容された虚空蔵信仰まで広範に捉えている。したがって民俗宗教と民間信仰の定義に必要な

表0・1・5 佐野賢治著 『虚空蔵菩薩信仰の研究 —日本的仏教受容と仏教民俗学—』 (吉川弘文館、1996年刊)
<b>第一部 虚空蔵信仰の歴史的展開</b>
教理体系としての虚空蔵信仰
秦氏と虚空蔵信仰
古代仏教の密教的性格と虚空蔵信仰
中世修験の動態と虚空蔵信仰
十三塚と十三仏
修験の土着化と虚空蔵信仰
<b>第二部 虚空蔵菩薩と民俗信仰</b>
寺院信仰としての虚空蔵信仰
鰻と虚空蔵信仰
星と虚空蔵信仰
殖産技術伝承と虚空蔵信仰
虚空蔵信仰の作神的展開
十三参りの成立と展開
葬送・他界観念と虚空蔵信仰

表0・1・6 日本の美術 No.380 虚空蔵菩薩像、泉武夫編著、 至文堂、1998年刊。
インド・西域・中国の虚空蔵
奈良時代の虚空蔵
平安時代の虚空蔵
平安前期
平安後期
中世以降の虚空蔵

以上にこだわるものではないが、虚空蔵信仰の場合には非体系的とされる民間信仰が実はゆるやかな体系によって規定されていることも指摘できる。そこで、民俗宗教という概念を、創唱宗教と民間信仰の中間的な概念として、仏教の日本的な展開過程としてとらえたいと考えている。

『日本民俗大辞典』の「民間信仰」の項には、「民間信仰と創唱宗教・宗教政策」として、

民間信仰と深くかかわる創唱宗教は仏教である。仏教は時代によって様相を変えてきているが、民衆支配の一翼を担うようになった近世において、民間信仰と最も深くかかわりをもつようになったといえる。江戸幕府の宗教政策によって宗派ごとの本寺末寺の関係が確立し、寺請制によって檀那寺と檀家という関係が確立するとともに、滅罪寺の僧侶は葬祭を執行し、死後の供養を掌るようになって祖先信仰と深くかかわりをもつようになった。そして寺請制がなくなった近代以後においても、寺檀関係の多くは継承されている。この寺檀関係は一家一寺制が原則であるが、一家で二つ以上の檀那寺をもつ複檀家(半檀家)もみられるほか、滅罪寺以外にも檀家をもたない祈祷寺が存在してきた。こうした祈祷寺も民衆の現世利益的要求に応えてきた。しかし寺檀関係は仏教と民間信仰とのかかわりを示す一例であり、それ

以上に阿弥陀・地藏・観音・薬師・不動をはじめとする諸仏諸神に篤い信仰が寄せられていること、古代以来の聖をはじめとする仏教系・修験道系下級宗教者の活動、巡礼や本山参り、盆行事や彼岸行事が仏教的色彩が濃厚になっていることなどを見逃すことができない。

とされていることは、本論文の目指すところの一面を示している。

### (3) 研究史

虚空蔵信仰に関する研究は、研究史としてまとめるだけの蓄積がなされているとは云い難い。先に挙げた『日本民俗大辞典』の「虚空蔵信仰」を担当した佐野は、参考文献として、中村雅俊『虚空蔵信仰の研究』（一九八七）、佐野賢治編『虚空蔵信仰』（「民衆宗教史叢書」二四、一九九一）、佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究―日本の仏教受容と仏教民俗学―』（一九九六）をあげたが、虚空蔵菩薩と虚空蔵信仰を扱った研究書は他に見出すことができない。加えて雑誌ではあるが、『日本の美術』三八〇号（一九九

表0・1・7 大法輪 第53巻・第9号 昭和61年9月号、 大法輪閣、1986年刊。	
<b>特集 虚空蔵菩薩のすべて</b>	
虚空蔵菩薩とは	宮坂宥勝
『虚空蔵菩薩経』を読む	加藤精一
虚空蔵求聞持法とは	田中千秋
虚空蔵菩薩の形像	清水 乞
虚空蔵菩薩の民間信仰	木村 博
清澄寺と虚空蔵菩薩	北川前肇
私の求聞持法体験日記	桑山慈紹
虚空蔵信仰の寺々	
表0・1・8 大法輪 第57巻・第7号 平成2年7月号、 大法輪閣、1990年刊。	
<b>特集 十三仏信仰と追善供養</b>	
日本の十三仏信仰	渡辺章悟
十三仏信仰の源流	牧田諦亮
十三仏信仰の民俗	中村雅俊
十三仏霊場案内	
鎌倉十三仏霊場	
京都十三仏霊場	
秩父十三仏霊場	
おおさか十三仏霊場	
大和十三仏霊場	
淡路島十三仏霊場	
追善供養をどう説くか	

八）は京都国立博物館の泉武夫編著で「虚空蔵菩薩像」を刊行しており形像を知る上で参考となる。仏教総合雑誌である『大法輪』は昭和九年（一九三四）に創刊された伝統をもつが、第五三巻九号（一九八六）で「虚空蔵菩薩」特集を、第五七巻七号で「十三仏信仰」特集を刊行したことも虚空蔵信仰の研究史において意味があると考えられる。

次に、虚空蔵信仰に関する主要な著作及

び論文について発表された年次の順に並べたが、これによってわかるように、虚空蔵信仰の研究は、十三仏に関して石造美術の方面から関心を寄せられたことが初めである。そして、本論文でも節として取り上げている淡路島の十三仏霊場の設置が注目され、それに伴って主尊である虚空蔵菩薩にも注意が払われるようになった。そのことが、『大法輪』誌に昭和六一年（一九八六）に虚空蔵菩薩を特集する契機となった。

虚空蔵信仰に関する研究に、幾つかの段階を設定してみると、まず第一の段階としては石造物としての十三仏に関心がもたれた段階、第二として文化財としての虚空蔵菩薩の仏像や画像に関心が持たれた段階、第三として日本民俗学会において民間信仰としての虚空蔵信仰に関心がもたれた段階、第四として、中村著（一九八六年刊）、佐野編（一九九一年刊）、佐野著（一九九六年刊）という虚空蔵信仰に関する三部作が刊行された段階を考えることが出来るかと思える。佐野と筆者は、別々な動機から虚空蔵菩薩に関する民間信仰に関心を持ち、ほとんど同じ時期に並行して研究をすすめてきた。筆者の研究とその成果については本論文に詳述しているので、佐野の研究について若干の指摘をして研究史のまとめとしたい。佐野は主として南東北をフィールドとしてきたが、それは東京教育大学時代から山形県の置賜文化研究所の活動に参加してきて以来のことである。また佐野は東京教育大学から筑波大学という日本民俗学会における中枢の一翼に関係しながら研究活動を行ってきた。ただ、地域的な面においては愛知大学に勤務した際には、三河における十三塚について緻密な検討を行ったことも付記しておく必要がある。

とはいっても、南東北をフィールドとすることと、日本民俗学会の中枢にいるという点が佐野の研究

を知るための基礎的な面となっていよう。そして、佐野の研究がややもすると時間軸が希薄であり、文献の使用にためらいを持つことなど日本民俗学そのものの問題と一致するとも言い得るのである。確かに南東北では虚空蔵信仰について中世史料を活用することには限界があり、当山派修験の土着化と

表0・1・9

## 虚空蔵信仰関係・主要著作及び論文・一覧

	発表年	著者	著作論文名・収録誌名
1	1933	服部清五郎	「十三仏信仰と板碑」『板碑概説』(鳳鳴書院)
2	1957	菌田香融	「古代仏教における山林修行とその意義―特に自然智宗をめぐって―」『南都仏教』4(南都仏教研究会)
3	1964	上原昭一	「虚空蔵菩薩考」『大和文化研究』9-1
4	1967	岸田定雄	「隔夜のこと」『奈良文化論叢』(堀井先生停年退官記念会)
5	1969	川勝政太郎	「十三仏信仰の史的展開」『大手前女子大学論集』3
6	1969	片岡長治	「生駒山脈を中心とした十三仏石造遺品について」『石仏』3(奈良石造美術研究会)
7	1969	桜井徳太郎	「山中他界観の成立と展開―伊勢朝熊山のタケマイリー」『日本歴史』249
8	1970	近藤喜博	「奥美濃における虚空蔵信仰」
9	1970	木下密運	「中世の念仏講衆」『元興寺仏教民俗資料研究所年報』1969年版(同研究所)
10	1970	奥村邦道	「隔夜」『近畿民俗』51
11	1972	田中久夫	「地藏信仰の伝播者の問題―『沙石集』『今昔物語集』の世界―」『日本民俗学』82(日本民俗学会)
12	1972	木村 博	「白鷹山虚空蔵菩薩の信仰について」『置賜の民俗』5(置賜民俗学会)
13	1972	川勝政太郎	「逆修信仰の史的研究」『大手前女子大学論集』6
14	1973	天岸正男・奥村隆彦	『大阪金石志―石造美術―』(三重県郷土資料刊行会)
15	1974	佐野賢治	「十三参りの成立と展開―特に置賜地方を中心に―」『我楽苦多』2(東京教育大学物質文化研究会)
16	1975	木村 博	「養蚕守護神としての虚空蔵菩薩」
17	1975	吉田幸平	「別山加宝虚空蔵信仰論序説(1)」
18	1975	木村博	「養蚕守護神としての虚空蔵菩薩」『日本民俗学』101(日本民俗学会)
19	1975	植島基行	「十三仏について(上・下)」『金沢文庫研究』234・5(神奈川県立金沢文庫)
20	1976	中村雅俊	「十三まいりの成立―嵯峨虚空蔵法輪寺について―」『御影史学論集』3(御影史学研究会)
21	1976	佐野賢治	「鰻と虚空蔵信仰禁忌の歴史民俗学的―考察」
22	1976	佐野賢治	「山中他界観念の表出と虚空蔵信仰―浄土観の歴史民俗学的―一試論―」『日本民俗学』108(日本民俗学会)



29	1980	正木 晃	「記憶の技法—虚空蔵求聞持法とF・A・イエイツー—」『史境』1（歴史人類学会）
30	1980	平野元三郎	「房総の虚空蔵信仰と日蓮聖人」
31	1980	望月友善	「初期十三仏石碑と年忌供養」『歴史考古学』4（歴史考古学研究会）
32	1980	五来 重	『増補 高野聖』（角川書店）
33	1980	中村雅俊	「淡路島の巡礼—弘法大師信仰と十三仏霊場—」『まつり』36（まつり同好会）
34	1980	中村雅俊	「十三仏信仰の成立について—空海の入定と虚空蔵求聞持法—」『御影史学論集』6（御影史学研究会）
35	1980	篠原良吉	「奈良県生駒市・奥山の種子十三仏板碑」『歴史考古学』5（歴史考古学研究会）
36	1981	佐野賢治	「漆工祖神としての虚空蔵薩」
37	1981	中村雅俊	「隔夜スル法師—十三仏信仰伝播者の問題—」『仏教と民俗』17（仏教民俗学会）
38	1981	山岸 共	「中世能登石動山の虚空蔵信仰」『石川郷土史学会々誌』14（同史学会）
39	1983	佐野賢治	「星と虚空蔵信仰—日本星神信仰史覚書・その一—」
40	1984	中村雅俊	「虚空蔵信仰の伝播—能登石動山・美濃高賀山・山城法輪寺、本尊の像容を視点として—」『御影史学論集』9（御影史学研究会）
41	1984	由谷裕哉	「石動山の開山伝承と石動修験」
42	1985	木村 博	虚空蔵菩薩信仰と「鰻」
43	1986	小林一葵	「唱導説話縁起としての高賀山縁起」
44	1986	中村雅俊	「虚空蔵信仰と十三参り」『仏教年中行事』仏教民俗学大系6（名著出版）
45	1986	中村雅俊	『虚空蔵信仰の研究』（御影史学研究会）
46	1986	大法輪閣編	『大法輪』53-9、虚空蔵菩薩特集。
47	1990	大法輪閣編	『大法輪』57-7、十三仏特集。
48	1991	佐野賢治編	『虚空蔵信仰』民衆宗教史叢書24（雄山閣出版）
49	1996	佐野賢治	『虚空蔵菩薩信仰の研究—日本的仏教受容と仏教民俗学—』（吉川弘文館）
50	1997	中村雅俊	「漆器業の虚空蔵信仰—伝統産業における信仰と技術伝承に関する民俗地理的一考察—」『ジオグラフィカ センリガオカ 3』（大明堂）
51	1998	泉武夫編著	『日本の美術』380（至文堂）虚空蔵菩薩像。
52	1998	中村雅俊	「海上交通と虚空蔵信仰—薩摩坊津の大永6年虚空蔵種字碑をめぐる—」『地理学の諸相—「実証の地平」—』（大明堂）

いう同じパターンの推論を生む結果と成らざるを得ない面もあろう。

ただ虚空蔵信仰に関しては、中世からさらに遡って古代の史料との検証も可能な場面があり得る。そのことは、本論文の第四章第二節「虚空蔵信仰の伝播」の中では虚空蔵菩薩の像容を視点として論争している。しかし、佐野はその論争から逃げるのではなく、佐野編『虚空蔵信仰』を編む段階で中村の論文を積極的に収録している。佐野の方法論は、いま佐野が取り組んでいる中国少数民族との比較民俗学（民族学ではなく）を提唱しているように、文字による文化継承を前提としない場面においてより精彩を放つと思えるのである。

## 二 研究方法

### (1) 歴史地理学

本論文は、歴史地理学あるいはさらに細分化された民俗歴史地理学によって、虚空蔵信仰を伝播と受容という観点から体系化したものである。

ここでは、方法論としての歴史地理学について一瞥しておくことにしたい。

まず、『新訂歴史地理』の第一章「歴史地理学とその研究法—歴史の地理的研究と歴史地理学—先学のことども—」において、

歴史地理学 *historical geography* は、その名のように歴史時代の地域性に関する地理学である。ドイツの地理学者ハッシンガー *Hassinger, H.* は、著名なその教本の中で *"Aufgabe einer*

historischen Geographie aber müsses sein, die Kulturlandschaften vergangener Zeiten zu rekonstruieren”つまり各時代ごとの文化景観の復原であると述べている。このことをいち早くわが国に紹介し、歴史地理学は地理学の領域であることを強調したのは小牧実繁であった。歴史地理学の研究家の出身が歴史畑であろうが地理畑であろうが、それらは問題ではない。ただ歴史地理学が歴史学の地理的研究法ではなく地理学そのものであることに変わりはないのである。

とし、さらに、

ただここで注意すべきは、歴史の地理的研究と歴史地理学とは同一ではないことである。両者はたとえ資料を共通にしても、明らかに研究目的を異にすることである。

とし、歴史の地理的研究と歴史地理学を明確に区別する必要に論究しており、この姿勢は他の書物でも繰り返し強調されている。

さて、同書の続く部分で「三 歴史地理学の研究法と野外調査」として、

これを要するに、地理学は机上のみの学問ではない。歴史地理学の研究調査が歴史学者によって行なわれるべきか、地理学者によってなされるべきかといった論議をここで述べる必要はない。机上の理論をたたかわし、限られた文献を渉猟することは比較的容易である。しかし、実際に野外に出て踏査することは労多くして功が少ない。それにもかかわらず歴史地理学の研究においては、その名も地理の文字があるように、足による労多き研究が必要である。

今日社会科学として歴史学も人文地理学も緊密に手をつなぐに至ったおりから、両者のボーダーラインの領域にあたる歴史地理学の領域の研究こそ、今後若い歴史学者や人文地理学者の間に展開

されなければならない。

とされており、歴史地理学も地理学の一分野として実地における調査の重要性を説いている。

歴史地理学の分類についての藤岡の見解は、藤岡の念願の一つであった「考古地理学」の体系化を指した『考古地理学』の「I総論 1考古地理学と研究法 (2)歴史地理学と考古地理学―その研究法 (a)歴史地理学の分類」においてより明瞭に示されている。

考古地理学 (Archaeological Geography) は地理学の大分類からすると広義の歴史地理学 (Historical Geography) の一部門である。歴史地理学は藤岡の分類からするとまず「時間的分類とII資料的分類とに二大別することが出来る。前者Iではこれをさらに

1 先史地理学 (Prehistoric Geography)

2 原史地理学 (Protohistoric Geography)

3 狭義の歴史地理学 (Historic Geography)

に三区分する。

つぎに取扱う資料によっても歴史地理学は、

1 考古歴史地理学 (Archaeologic-historical Geography)

2 文献歴史地理学 (Philologico-historical Geography)

3 民俗歴史地理学 (Ethnologico-historical Geography)

と同じく3区分出来る。これは取り扱う研究資料の性質による分類であって、時代を問わない。従って、この文献歴史地理学が時代分類からする歴史地理学と研究領域を同じくすることが多いのは

当然であるが、1の考古歴史地理学―以下略して考古地理学と呼ぶ―と3の民俗歴史地理学には先史時代以来、現在までの時間的範囲がふくまれるが、さらに3の中には世界各地の現存原住民の生活用具や日本でも各地に現存するふるい民家や民具等民俗的資料や無形文化財、さらに現存する歴史的地名の研究等もこの中に入れることが出来る。

とされている。さらに民俗地理学については、『日本歴史地理用語辞典』の序に、

戦後、ことに近年の歴史地理学の研究は非常な発展を示し、その対象も先史時代から近現代までを広く包含するに至っている。また、昨今巷間では埋蔵文化財の発掘や歴史的景観の保全など、開発と保全をめぐる問題が真剣に論議されているが、これも歴史地理学の研究と深いつながりをもつものである。周知のように、歴史地理学は地理学の範疇に入り、その考察方法は地理学的でなければならぬ。しかし一方、歴史時代の地理的空間を取り扱う点で、現代を研究する系統地理学や地域地理学と異なる。

このため、実際の研究にさいしては、現代地理学にも増して隣接諸科学、ことに歴史系科学との連繋を緊密にしなくてはならず、その基礎として各分野の専門学術用語の知識の豊かさや用語の正確な概念の把握が必要とされる。

とし、地理学はもとより、地質学・考古学・歴史学・社会学・民俗学等、各分野から用語を収集したことをあげ、民俗学が歴史地理学ときわめて近い存在であるとしている。同辞典の「歴史地理学」の項目も藤岡が担当しているが、

歴史地理学 Historical geography 地理学のなかで歴史的な部門を取り扱う。人類初現時代以

来、現在に至るまでの地域における自然・人文両現象の変遷や歴史時代における地域構造の特質を動態的に把握する。歴史地理学は取り扱う資料の性質によって文献歴史地理学、考古歴史地理学、民俗歴史地理学に三大別される。また対象とする時代によつても先史地理学、原史地理学、有史地理学に三大別される。前者の場合、絵図や地籍図などは文献地理学に、また地割や城趾などの研究は考古地理学に、地名伝承の研究や古い民家などは民俗地理学にはいる。後者の場合、原史地理学とは同一時代の文献を欠く原史時代 (Protohistoric age) を対象とする。日本の場合は奈良時代以前の古墳時代がこれにあたる。一方、歴史地理学にもまた系統歴史地理学と地域歴史地理学、すなわち歴史地誌の二大部門があり、前者はさらに歴史自然地理学と歴史人文地理学に大別される。先史時代や歴史時代の地形や気候の変化や、植生などを取り扱えば歴史自然地理学であり、古代の道路や都市などの問題を取り扱えば歴史人文地理学の領域となる。現在、地域を過去からの堆積物とみならず場合、歴史的現在もまた歴史地理学の研究対象となる。歴史地理学の研究法は各時代の古文書や古地図などによつて過去の地域を復原するほか、現地調査すなわちボーリングや発掘、現存する歴史地名や伝承、現存する各時代の遺跡・遺物微地形研究や土壌分析などによつて完成される。たとえば、自然遺物のうち貝塚出土の貝殻の種類によつて半淡半鹹の汀線を想定し、植物遺品の花粉を分析 (Pollen analysis) しつゝ当時の気候や植生を推定することもできる。また有機物に含まれる放射性炭素の含有量の測定によつて (C<sup>14</sup>)、その時代を推定することもできる。一方、助郷差出帳の村々と近世の街道および宿場との関係を図示したり (図二二三八・略)、城下絵図と現代都市の用途指定地区を対比することも歴史地理学の仕事である。同様に宗門改帳によつて村の人口や社会を

復元するのもよいが、地理学であるためには地域的特質、つまり地域の自然的社会的構造の把握が究極の問題になる。「文献」略。

(藤岡謙二郎)

とあり、歴史地理学の概念規定として行き届いた解説をなし、民俗地理学の可能性として地名伝承の研究や古い民家などを対象とした研究を想定している。ただ、藤岡は民俗地理学の重要性は認識しながらも、考古地理学においてなされたような藤岡自身が先頭に立って体系化を試みることはなかったことが惜しまれるのである。

さて、谷岡武雄は、『歴史地理学』（古今書院、一九七九年刊）の「序章 歴史的空間組織のシンクロニク分析とダイアクロニク分析」において、

歴史地理学とは、過去のある時期を歴史的現在としてとらえ、そこにおける特定の地表空間組織を復元し、歴史的变化のあとをたどることを目的とした地理学の一研究分野である。歴史地理学は、人口・集落・産業・交通などに関する分野とは次元の異なる固有の研究領域をもっており、他のブランチにとっては有用な方法論として機能している。かかる点でこの研究分野は、地理学の計量化に努める計量地理学、その応用をはかる応用地理学とともに、斯学の歴史的オリエンテーションを行なおうとする、古くてかつ新しい意欲的な方法論であるということができる。地理学が四次元的で、時間的な厚みをもつ地表空間を研究対象とする以上、あらゆる分野において歴史地理学の手法が活用されなければならない。

として、歴史地理学の重要性を説いている。

最近に編纂された地理学辞典である『人文地理学辞典』（山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚 章編、

朝倉書店、一九九七年刊）では、

歴史地理学 historical geography 歴史地理学は、扱う現象や方法がどのようなものであれ、過去の、あるいは過去とかかわる地理学である。人文地理学は、現在の世界や諸地域における人間の活動、社会や文化を扱うが、人間は歴史的存在のゆえに、その理解にはとくに歴史的、動態的考察が不可欠である。歴史地理学の内容と方法はさまざまであり、厳密に定義することはむずかしいが、過去の時の断面を区切って、その時代の地理学的課題を検討する横断的考察法と、さまざまな現象や地域を取り上げて、地理的空間の形成を検討する継時的・縦断的考察法という二つの研究方法があることは広く認められている。歴史地理学が利用する資料や情報は、主に文献資料、過去の統計、記録、地図、絵画、写真や地名などである。近年では、遺物や遺跡の発掘調査が各地で行われており、物的資料の活用も盛んである、これらの資料は、ほかの学問分野でも利用されるが、歴史地理学では野外調査で確認しつつ、時間と空間の解明という目的に関連づけて利用される。歴史地理学は、扱う資料によって文献歴史地理学、考古歴史地理学、民俗歴史地理学、対象とする時代によって先史地理学、歴史地理学、現代地理学、あるいは方法の違いに基づいて系統歴史地理学、地域歴史地理学などに細分されたり、分割されることもある。また、歴史地理学は、地理学の一分野を構成しているが、自然を含む地理学の他分野を研究する際の研究方法であると主張する意見もある。これらの意見は、地理学の体系をどのように考えるのか、あるいはその中で歴史地理学をどのように位置づけるかという考え方の違いに基づく。歴史地理学という概念と用語の使用は、ヨーロッパでは少なくとも一七世紀までさかのぼることができるが、当初は歴史の補助学であった。歴



史地理学は、一九世紀後半から二〇世紀初期にかけて、とくにヨーロッパ各国において急速に発達し、近代的学問として成立した。しかし、各国における歴史地理学の関心は若干趣を異にした。大きくみれば、イギリスでは、ダービー H. C. Darby のドウムズデーブツクの研究に代表されるように、史料の利用と歴史学の方法を重視する歴史地理学が発達した。フランスやドイツでは、シュリユーター O. Schliuter の景観変遷に関する研究に代表されるような、地理的空間の歴史的变化に関心を払う歴史地理学が発展し、それは大陸ヨーロッパに広まった。アメリカ合衆国をはじめとする新大陸諸国や日本では、この二つの伝統が混ざり合っている。一九六〇年以降、歴史地理学も計量主義の興隆に大きく影響され、空間科学の概念や技術の導入によってその可能性を開こうとする努力がなされた、しかし、とくに歴史地理学では、その反動として、人間の側面を重視する人文主義的な考え方が強く主張されるようになった。今日では、計量的方法を受容しつつ、人文主義地理学と伝統的な環境論を統合し、かつ社会史、経済史や歴史人類学と共有しうる方法論の開拓に努力が払われている。【文献】略。

井英也)

(石

とし、計量主義地理学やその反動という面もある人文主義地理学という近年の動向をもうけて解説を加えている。

筆者の研究は、民俗地理学（民俗歴史地理学）を主たる方法論としているが、一方で文化地理学と宗敎地理学の研究方法や研究の蓄積を援用している場合もある。ただ、先に研究史において日本民俗学が時代性を曖昧にした論議に成らざるを得ない点を指摘したが、文化地理学という場合に同様に時代性・

時間軸が曖昧にされる危惧を拭うことが出来ない。地理学と民俗学の境界領域の研究者の中で、時間軸を重視する者が歴史地理学を標榜し、あるいは時間の概念の束縛から超越しようとする者が文化地理学を目指す傾向があるとはいえないだろうか。そのことも含めて、研究方法について述べる最後として、地理学と民俗学との関係に注目してまとめにかえたいと思う。

## (2) 地理学と民俗学

地理学と民俗学の間を考えると、『民俗学の方法』において八木康幸が「民俗学と地理学」としてまとめている論考が参考となる。それには、

はじめに 大げさにいえば学問の発展は新しい研究の枠組みや方法をたえず生みだし、また目を向けるべき新たな対象を見つけだす。古い方法もただちに消え去るわけではなく、複数の関心がつねに同時的存在を許される。したがって隣り合う学問の間に、時代を超えて変化することのないただ一つの安定した境界領域が成立すると考えることは必ずしも正しいとはいえない。民俗学と地理学の関係も、その境界領域のあり方は当初から一つではない。とくにこの二十年ほどの間、民俗学と地理学の双方ともに激しい変化を経験することによって、その関係はさらに複雑なものとなった。この節では二つの学問の伝統的な関わりから近年の展開までを、もっぱら「地理学および地理学者による民俗学との境界領域研究」に求め、民俗学からの地理学理解に役立てたいと考える。

とし、以下「民俗学と地理学の初期」「文化地理学と民俗」「人文主義地理学の展開」「伝統的領域の課題」「地理思想史研究と民俗」「文化地理学の新たな展開」という項目を展開し、

おわりに 以上、おもに地理学から行われてきた民俗学との境界領域研究を、文化地理学の展開過程のなかにまとめてみた。文化地理学はそのアース・バウンドな地理学固有の関心を持続させながら、民俗事象や民俗文化を対象化して現在にいたっている。かつての村落空間論のように、そこには民俗学の積極的な境域侵犯を誘う課題がな少なからず見られ、両学の再度の親和的關係を期待することは可能であろう。しかし同時に、地域・環境・景観・空間・場所などを扱う科学としての地理学の特権的立場が、徐々に失われつつある事実も認めねばなるまい。近年の歴史学における「空間」への目覚めや、社会学・文化人類学・建築学・都市計画などの諸学が「景観」や「環境」などの概念を使いこなす軽やかな手さばきを目の当たりにするとき、地表の学としての地理学の優位は明らかに揺らいでいる。そのような窮地にあつて、現在の地理学が模索しつつある地域や景観の新たな理解や解釈、あるいは地理学がそれらのタームを介して新たに目指そうとするものも民俗学は見逃さずにいたい。

としめくくっている。どうしても八木自身の研究姿勢が反映した視点となっているが、地理学と民俗学の両面で活躍する研究者の発言として傾聴すべき内容となっている。

一方、地理学の総合雑誌である『地理』誌において、四六巻（二〇〇一年）から四七巻（二〇〇二年）にかけて一二回にわたって「民俗世界の地理学」が連載された。これは内田忠賢が佐々木高弘と分担しながら執筆したものである。最終回となった第一二回には、「民俗地理の世界」と筆者が目指すところと同じテーマが題辞にあげられている。そこには、

民俗世界の地理学 この一年間ほど、民俗世界の地理学的な解説例を、具体的に語ってきた。私と

ペアを組んだ佐々木は、「見えない景観」「見えない景観の土地情報」、「景観を見立てる神話」、「理想郷の景観」、「昔話の感覚地理」、「昔話の原風景」というテーマで、従来、客観性に乏しいとされ、地理学から無視されがちであった説話や伝承が、実は現実の空間や景観と深くリンクしていることを主張した。一方、私は、村落や都市の民俗事象が、空間と社会の文脈で地理的に読みうることを示した。

「民俗世界の地理学」に分類される成果は、当たり前ながら、もっとたくさんある。連載期間中に逝去された千葉徳爾など先達の業績はもちろん、例えば、最近の宗教地理の成果に限っても、岩鼻通明、田中智彦、小田国保ら諸先輩による修験道や巡礼に関する豊かな実績がある。残念ながら、それらの成果を紹介できなかった。

この連載は、いわゆる文化地理学の流れに位置づけられる。

八木（康幸）によれば、文化地理学における、地理と民俗をめぐる最近の展開として、①人文主義地理学関連、②伝統的領域関連、③地理思想史関連、および④それ以外の新たな展開、があると  
いう。

とされている。内田は「よさこい祭り」の研究で知られ、八木は「ねぶた祭り」の五島列島への伝播の研究で知られるという共通性に文化地理学の系譜を認めるとすれば、筆者の虚空蔵信仰研究は、空間面が時間軸によって階層という厚みを持つと考え、一つ一つの現象を時間軸に対して十分に配慮しながら分析することで、伝播と受容という主題を解き明かそうとする立場、繰り返すと空間面とともに時間軸を明確に意識していることから、やはり歴史地理学の範疇であることになる。とはいっても、民俗地理

学への指向について、文化地理学の動向についても無関心ではいられない。

本論文は、地理学における虚空蔵信仰研究の方向性を定位するとともに、民俗地理学が、藤岡の歴史地理学の一分野としての規定を補強する文化地理学の側面からの深化を認めつつ、さらに発展させる一助になればと期待しているのである。

### 三 研究資料

#### (1) 民俗誌

近年刊行されている府県史あるいは市町村史には、独立して民俗編をもうけている場合も少なくないし、そうでない場合でも、民俗にかなりの分量をさいているようである。また、大学の民俗学教室や民俗学研究会が、毎年、フィールドを変えて民俗調査をおこなない、その報告書を刊行している場合もある。そして、民俗学の特色として、地方の民俗学研究会の団体が、活発に民俗調査を行っておりその報告を機関誌に発表している。さらに加えて宮本常一などの個人の業績による民俗誌も、また見過ごすことが出来ない。

それらの民俗誌で、虚空蔵信仰の事例を検索しようとする時、注意して目を通す必要があるのは、「年中行事」「人の一生」「信仰」などの分野である。

「年中行事」は、ムラやイエの一年間の行事を、月日の順に記述するのが普通である。正月を中心とした冬の行事、春の行事、盆を中心とした夏の行事、秋の行事である。虚空蔵信仰が具体的にみられる

事例は、まず、三月あるいは四月の一三日に行われる「十三まいり」である。これは、男女十三歳になつたものが、虚空蔵菩薩に知恵と福を授けて貰うもので、京都の法輪寺や大阪の太平寺に詣つたり、奈良では弘仁寺などに参る例がある。次に注目するのは、二月八日、一二月八日に行われる「針供養」である。針供養の対象となる京都法輪寺や和歌山の加太の淡島神社は虚空蔵菩薩を本尊・本地仏としているので、関係を注意しなければならない。盆行事のなかに、十三仏の掛け軸を用いる例があるし、また、まれに正月行事にも十三仏の掛け軸を用いることがある。

次に「人の一生」の分野は、誕生、生育、婚姻、葬制の習慣が取り上げられている。虚空蔵信仰と関係するのは、年中行事にもあげた「十三まいり」が十三歳の通過儀礼として年祝いにあたる事例がある。葬儀の際には、十三仏の掛け軸や、十三仏の念仏があげられることがある。年忌供養にも注意しなければならない。墓地にも、十三仏に関係した塔婆がたてられることがある。

「信仰」の分野では、もちろん虚空蔵信仰そのものが扱われることもあるし、講行事にしばしば十三仏が関係する。特に、念仏講では、十三仏の念仏というものが唱えられることがある。

また、民俗編とは別に、寺社編、金石文編などにも事例を見つけることが出来るのは、もちろんのことである。

以下、民俗誌にみられる虚空蔵信仰の一例をあげることにした。

〈事例1〉室戸岬には、八十八カ所の霊場のひとつである最御崎寺があり、ここは空海にゆかりの虚空蔵菩薩を本尊としている。

正月「虚空蔵祭り」(一三日)男子三歳の時、力をもらうために、最御崎寺(東寺)にお参りに行く。

寺では毎年相撲をしている。昔は女人禁制で、若し禁を破ると一天俄にかき曇り、ヒヨウが降った  
りしたという。現在では自由である。

「花立て」男子が三歳になり、一三日の虚空蔵さまにお参りに行った留守の家に、近隣の人が人形(注)  
を作り、門口に派手な女の帯三本を二つ折りにして、先端に扇子を広げてつけ、酒樽をくくった棒  
に結びつけて祝った。その家では、簡単な手料理を作り、近隣の人をもてなし、近隣の人もありあ  
わせの料理を持ってきて楽しく歌い興じた。女の子は一八日の観音さまの日に同じようにしたが、  
男女とも初めての子供にした。また、初嫁の家にも同じように、「花立て」をした。

一名「オドケ花」ともいい、主として女の祝宴で、娯楽の少なかった時代の楽しみの一つであった。  
(注)「人形」竹を十字に結んで骨組みを作り、それに着物を着せ、顔は徳利を布又は紙で包んで作  
り、ひき臼を土台にして床の前に立てた。

〈事例2〉「十三まいり」の信仰は京都から各地に伝播している。鎌倉の例を民俗学者の大藤ゆき氏の報  
告でみてる。

「十三まいり」男女とも十三になると、坂の下の虚空蔵様にまいる。虚空蔵様は丑寅の守り神で、知  
恵の神様として、とくに十三歳になった子どもに知恵をさずかるといって、一月十三日の祭にはおま  
いりをする。受験地獄の現在にはまいる子どもも多く、大学受験合格祈願の札などがはってある。十三とい  
う年は、もとは十五歳で一人前になる前の準若者で、子供から大人へ移り変わる一つの折目であった。

〈事例3〉千葉県成田市船方には、子供のある家を中心に組織される虚空蔵講がみられる。

「虚空蔵様」虚空蔵様の講は江弁須の正蔵院への講である。虚空蔵様は子供の神様とされるため、子

供が丈夫に育つことを祈り、体の弱い子がいるとその子の下着を護摩であぶってもらったりする。江弁須出身の④（家番号）が、大正の初め頃、正蔵院の僧侶に頼まれて始めたものである。本村一九軒、角川三軒の計二十二軒が参加しているが、子供のいないうちでも参加することがある。世話人は⑤（家番号）一軒である。一月一日の虚空蔵様の縁日が近づいて来ると寺から大護摩名簿が送られて来るので、世話人はそれを持って各戸を回り、参加の意志を確認する。参加する家では名前を名簿に書いてもらい、護摩札代一五〇〇円を支払う。世話人はそれらを寺に持って行く。寺へはかつては講員全員が行っていたが、今は世話人が家順に毎年三名を選び、代参する。当日は代表者三名と世話人の計四名で寺に行く。虚空蔵様の乗り馬が鰻であるため、江弁須ではウナギ断ちといって、鰻を食べない習慣があるが、一月と九月の縁日の両方には行かず、一月のみに行くようにしているという。虚空蔵様にお参りした後、講金で弁当や酒が振舞われる。護摩札を人数分もらってきて各戸に配る。

「虚空蔵講」④（家番号）家の所帯主の男親が、虚空蔵様のある江弁須から婿に來た。大正の初め頃である。その人が虚空蔵様（正蔵院）の僧侶に頼まれて講をつくった。子育ての神といわれる虚空蔵様の場合、小さい子供のいない家は仲間にならない、あるいは世話人が声をかけないということがあつた。虚空蔵講の代参は、世話人の他不特定の希望者二、三名によって行われる。代参の期日が近づくと、世話人は各講員の家を訪ねて、これからも講への参加を続けるか否かを聞いてまわる。もし脱退したければ、その場で世話人に断われればそれですむのである。虚空蔵講の場合は、毎年それを確認する。つまり、一定の年数ごとに講員が更新されるのである。しかも各講員の自由意志によってである。むろん一度講に入ればツキアイで長く続けることが多いが、虚空蔵様のように「子育ての神様」なら



ば、「子供が大きくなったからしばらくぬける」<sup>②4</sup>（家番号）ということも当然あるのである。また反対に、<sup>①4</sup>（家番号）家では3人目の子供が生まれて（昭和五二）新しく虚空蔵講に加入したが、このときも「仲間に入れて下さい」という意味のことを世話人に一言いえば、それですぐに加入できたのである。虚空蔵講、宗吾講、助寄講などは「講ではない」とさえいわれ、一般に、それぞれ虚空蔵様、宗吾様、助寄様と「講」を付さない呼び方をされている。

へ事例4へ虚空蔵菩薩の講は、必ずしも子供のためばかりではない。姫路市には、同族祭祀として興味深い事例がある。

「シヨウロウサン送り コクゾ（虚空蔵）講 姫路市書写 東坂」寶聚寺については、寺宝は如意輪寺に吸収され、今は跡かたもないが、墓は残り、そこを有する家だけで御本尊虚空蔵菩薩にちなみ、コクゾ講を組織し、現在一八戸が輪番で当番に当たり、毎月熱心に集い、読経、飲食する。さらに墓の裏山をコクゾ山と称し、八〇年くらい前までのシヨウロウサン送りは、このコクゾ山を尾根伝いに北に登った地点の平坦な場所に子供（男児）達だけで、周辺の木を枝を集めて火を焚き、その火を持参した松明に点じて、村人の待つ小川の洗い場付近まで走った。その後は現在と同じ。地図における破線の道順である。寶聚寺は明治初年に如意輪寺に併合された。

へ事例5へ次に、最終三十三回忌の忌日仏を虚空蔵菩薩とし、虚空蔵信仰から派生した十三仏信仰の例をみてみたい。まず、新潟県東頸城郡松代町奴奈川地区の年中行事であるダンゴマキの事例である。

「ダンゴマキ」二月一五日 月遅れで三月一五日に行っているブラクが多い。涅槃会であるこの日には、ブラクごとに集まり、十二支や十三仏の掛軸を飾り、数珠を回しながら百万遍の念仏を唱える。

その後で事前につくっておいた赤・白・緑のダンゴを撒き、拾いあう。そのダンゴを身につけておくと、マムシ除けになるとか厄除けになるといい、食べると風邪をひかないとか病気にならないともいう。福島では、南無阿弥陀仏を百回唱え数珠を百回回す。ダンゴは、区長・婦人会長・厄年の人が撒く。竹所では、お釈迦様の日ともいって、親類にもダンゴを配る家もある。木和田原では各家から集めた米で老人クラブがダンゴをつくり午前中に一回と夕方子供を交えて菓子と共にもう一回撒いて拾いあう。

〈事例6〉盆に十三仏の掛け軸を用いる例は真言宗を中心に広くみられる習俗である。神奈川県町田市田中谷の事例をあげる。

「盆迎え（八月一三日）」お盆様を迎える日は午前中から盆棚を作り始める。盆棚となる枠を木で組み両脇に竹を立て竹と竹の間に糸を張ってほおぎ数個をたらす。盆棚の上には盆ごぎをかけ上に位牌、ろうそく、鐘等をおく。棚の上部には十三仏の掛け軸をかける。お盆様は山から降りてくるので盆棚は山の形に似せて作る。

〈事例7〉念仏講でもしばしば十三仏の掛け軸が掛けられ、十三仏念仏が唱えられる。先にあげた新潟県東頸城郡松代町奴奈川の事例である。

「念仏講」木和田原では、農閑期の十一月〜四月にかけて念仏講があり、六〇歳以上の女性が参加している。昭和五八年までは、一七日と二四日の月二回行っていたが、昭和五九年からは月一回一七日だけと決め、講を行っている。月一回になった理由は、毎月二回では、実際に行うには難しく、一七日が、観音様の命日だからである。念仏講の時使用する掛け軸は、公民館で行う場合は、観音様の掛

軸を、民家で行う場合は、十三仏の掛軸をというように使い分けている。また、御馳走を持ち寄り、会費の一〇円を鉦に入れ、読経する。読経のあと、「ホボキ」といい、各々一円玉を三〇個持ち、人数分の紐を用意し、その中の一つに当たりくじであるお金のついた紐を入れておき、くじをひいてこれが当たれば、くじをひく前に掛けたお金をもらえるという一種のかけごとをして遊んだ。

〈事例8〉鎌倉の念仏講では、淡島信仰と関係する点が注目される。和歌山市加太の淡島神社は願人とよばれる人たちによって全国にその信仰が流布した。古針を集めて供養する針供養は、現在でも淡島神社の行事として行われている。この淡島神社は虚空蔵菩薩を本地としており、淡島信仰・針供養も虚空蔵信仰としての側面がある。

「念仏講」台では上・中・下に分れ、念仏講中は各十軒ぐらいずつである。下では一日、十五日の他に春安芸の彼岸にも行う。宿は今は公会堂であるが、ここにはもと地藏堂があり、ここで行われていた。十三仏の軸をかけ供物を供える、また糸巻きを持った淡島様が祀られている。講中は浄土宗・時宗・禅宗で、三十五歳以上の女の人たちが、円座に座って、両手のひらを上に向けて膝におき、その上に直径三センチくらいの大きな数珠をのせて、オシヨウニンの読経に合わせてまわす。数珠の中に大きな玉があり、それがまわってくるごとに各自頂礼する。

ここの淡島様には針供養が行われており、興味深い事例である。

〈事例9〉最後に、墓地に供えられる十三仏の事例を、千葉県成田市船形であげる。

「葬具」男たちが作る葬具はベンケイ、ツエ、テンガイ、サカサダケ、大きな藁草履等である。(略)これらの他、六角塔婆や十三仏等の葬具一式を、この日までに北須賀の店で買って、用意しておく。

「埋葬」火葬になってからは、葬式が終る頃、ロクドローがトラックで、花輪、生花、墓標、施主花、十三仏等を墓場に先に運び、墓前に飾っておく。シホウダケも予め立てておく。

以上で、民俗誌からの事例の紹介をおわり、次ぎに文献史料について見ておくことにしたい。

## (2) 文献史料

日本民俗学は、文献史料を扱うことを必ずしも評価していないが、虚空蔵信仰を研究する場合には、文献史料のなかに偶発的にあらわれる情報が有効な場合が多い。

筆者は、三条西実隆の『実隆公記』の全巻に目を通したのを最初に、『史料集成』や『大日本古記録』などにおさめられた貴族の日記を検索した。こうして『中右記』などなどから、貴重な資料を得ることが出来たのである。そして、京都における虚空蔵信仰の大まかな動向について、各時代を通じて把握出来る程度にまで資料を集めることが出来た。

また近世については、京都、江戸のみならず各地に名所案内記の類が刊行され、それによって随分と各地の虚空蔵信仰を知ることが出来た。また京都など多数の名所案内記が時代ごとに刊行されているので、お互いを比較することで信仰の展開過程を考えることが出来る場合がある。京都の場合には『京都叢書』が基本資料となるし、大阪では『浪速叢書』に主要な資料が収められている。

（事例1）中世の虚空蔵信仰の展開については、すでに幾らかの考察をしてきているが、最近になって新しい史料によって従来の考え方を修正すべき必要を感じることもある。一四六七年から始まる応仁の乱で京都の市中は多く廃墟となったことはよく知られている。「十三まいり」の発祥の地であり日本三大虚

空蔵菩薩の第一の霊場である、嵐山の法輪寺も例外ではなく、焼け落ちたものと考えていた。その根拠となったのは、嵯峨の辺りが一面焼けたという記事と、具体的に法輪寺について、その本尊である虚空蔵菩薩を火の手から逃すため背負って愛宕山に移したという記事があったからである。ところが、『宣胤記』の文明一二年（一四八〇）九月七日程に、

七日、甲申、晴、昨日人数令同道帰京、嵯峨乱後始而一見、諸寺・諸院以下悉以焼失荒野也、天龍寺・臨川寺等如形取立者也、釈迦堂・法輪寺虚空蔵堂、此両所者所残也、奇特不可過之、

とあり、釈迦堂と法輪寺虚空蔵堂は奇跡的に焼け残っていたというのである。この記述から見ると、京都の街中からは嵯峨の火の手をみて、一面焼失したとの風聞がたったことも想像される。

ただ、この『宣胤記』は原典にあたったのではなく、斎木一馬編著『古記録学概論』（吉川弘文館）によっている。

〈事例2〉『撰津名所図会』は十三仏の興味深い話しを載せている。

「興正寺（高須村にあり。壺亀山と号す）」本尊釈迦仏（当寺開基但称上人は当郷の人なり。壮齢にして仏乘に帰入し、ついに髪を薙りて山居し木実を食とす。世の人木食上人と呼ぶ。後に江府に下向し芝に住し石像の五智光仏を鑄し木像の十三仏を彫刻してその地に安置せり。今芝大仏といふはこれなり。またその後山州鳴滝山に登り、五智如来十三仏の石像を手造し自影の像も鑄しともに山内に安ず。世人鳴滝の五体仏と称す。上人の影像を奇妙仏と賞じける）

「有馬、清涼院（薬師堂の東にあり。禅宗黄檗派。温泉寺奥の院と称す）」（中略）地蔵堂（地蔵尊は定朝の作。元禄一四年四月二一日、この地蔵尊壇上より転び墮つる。その時腹内より十三仏と化仏

の地藏尊二十一体出づる。これより安産子安地藏といふ。(後略)

〔事例3〕三重短期大学の『月報 三重法経セミナー』に、『伊勢輯雜記』が連載された。これは、松宮子道祐重という人が収録した伊勢の地誌である。その巻七によると、音羽という集落(現在、三重県菰野町)に虚空蔵堂があるとされる。

「虚空蔵堂」村ノ南東ニ有。堂宇南向。本尊虚空蔵菩薩。此尊像ハ中古村ノ南三岳川ヨリ出現シ玉フ。其元ハ三岳ノ三岳寺ノ可遺佛左右ニ両尊在ス。手水石盤白砂ノ左ニ有。瓦燈炉一基白砂ノ外左ニ有文政三年出来施主内田善兵衛。

### (3) 地名

以上あげてきた検索方法は、従来から行ってきた方法である。それに対して新たに取り組んだのが地名による検索である。

民俗誌は、今日では、かなりの地域を網羅してはいるが、それでも全国的な分布を論じる場合には、かなり断片的なものと成らざるを得ない。また文献史料は、時代が遡るほど史料が偏在し、奈良や京都、鎌倉や大阪などをのぞくと、極端に史料が希薄になってしまうのである。それに比べて、地名の場合には、二万五千分の一地形図が全国にわたって整備され、また吉田東五の地名辞書に加えて平凡社と角川書店から各県別の地名辞書が刊行されており(角川書店のものは完結している)、全国的な視野で均一に近い条件で検索が可能である。従って、データ・ベースの骨格として基本的な分布を見るのに好都合であるといえよう。

そこで、次節において、地名を手がかりとした虚空蔵信仰研究の可能性について考えてみることにしたい。

## 第二節 地名を指標とした虚空蔵信仰の考察

本論文では、現在知られている虚空蔵信仰について、その伝播と受容という観点から体系化を試みたのであるが、しかし虚空蔵信仰の全てを網羅しているのかについては、さらに検討を続ける必要があることはもちろんである。

虚空蔵菩薩が仏菩薩のなかで一般的なものとはいえず、むしろ特殊な存在であることは前節において概観したとおりである。それゆえ、虚空蔵菩薩が存在する場所は、存在することそれ自体に意味をもつと考えることが出来よう。虚空蔵菩薩の所在をいかに多く網羅できるかは、虚空蔵信仰の研究において大切な点であると考えられる。

虚空蔵菩薩の存在は、大きく有形なものとは無形なものに大別できよう。有形なものとは、仏像や画像の虚空蔵菩薩像あるいは石造物などにその種字を刻んだもの、求聞持堂のような建築物、虚空蔵経を刷る版木などをあげることが出来る。一方無形なものには、行事や習俗といったものの中での虚空蔵信仰であり、念仏の中の虚空蔵呪などもここに含めることが出来る。前者が美術工芸の分野など有形文化財であるとする、後者は無形文化財にあたる。

無形という範疇の虚空蔵菩薩を見いだすために、前節では研究資料として民俗誌や文献史料を紹介した。民俗誌は現在行われている虚空蔵信仰を検討するのに不可欠な資料である。また文献史料は、歴史の地理学的研究を目指す歴史地理学の立場から時間軸に当たる年代の検討に必要となる。ただ民俗誌に扱われていることは既知の事柄が多くすでに研究の対象となっていない場合がほとんどであり、文献史料



については時代を遡るほど京都・奈良などごく一部の先進地域に偏在していて全国的な広がりをするところが難しいという制限がある。

そこで虚空蔵信仰を網羅的・悉皆的に検討しようとするとき、地名を手がかりとする方法によって有力な手がかりを得ることが出来ると考えられる。そこで、地図上に表記される「虚空蔵」地名について、最小の単位である小字地名をもふくめて検討し、虚空蔵地名の分布から虚空蔵信仰の特性を検討してみることにはしたい。

#### 一 虚空蔵地名の所在検索

##### (1) 寺院名称にみる虚空蔵地名

最初に、「虚空蔵」という語句をそのまま寺院の名称としている例をあげてみたい。寺名は厳密な意味では地名とは言えないが、公共施設や建物の名称などとともに、場所を示す手がかりとなることから広い意味での地名と考えることが出来よう。

さて、『全国寺院大鑑』（法蔵館）によって、「虚空蔵」を寺院名称の中に含む寺院を検索すると次のようになる。

(寺院名)	(所在)	(宗派)
虚空蔵院	広島県府中市	真言宗御室派

虚空蔵寺	埼玉県秩父市	曹洞宗
虚空蔵寺	新潟県柏崎市	曹洞宗
虚空蔵寺	福井県福井市	浄土宗
虚空蔵寺	香川県仲多度郡	真言宗醍醐派
虚空蔵寺	大分県宇佐市	黄檗宗
虚空蔵寺	鹿児島県出水市	臨済宗相国寺派
虚空蔵堂	山形県鶴岡市	真言宗醍醐派
虚空蔵堂	茨城県那珂郡	真言宗豊山派
虚空蔵堂柳谷布教所	三重県安芸郡	天台真盛宗

ここで注意すべきことは、虚空蔵菩薩を本尊とするなど虚空蔵信仰と関係する寺院、例えば京都嵐山の法輪寺など、多くのいわゆる虚空蔵寺院は、寺院名称に虚空蔵という語句を含んでいないことである。従って、寺院名称としての虚空蔵地名は一部の虚空蔵寺院に限定されたものであることになる。

(2) 地名辞書にみる虚空蔵地名

(a) 『歴史地名大系』(平凡社刊) 索引による

各巻の索引から虚空蔵関係地名をあげると次のようになる。都道府県名を括弧で示しているものは検索した時点で未刊であったことを示している。

- (都道府県名) (名称) (市・郡)
- 1 (北海道)
    - 2 青森 虚空蔵遺跡 (三戸郡)
    - 虚空蔵堂 (三戸郡)
    - 虚空蔵山 (三戸郡)
  - 3 岩手 虚空蔵小路 (水沢市)
  - 4 宮城 虚空蔵堂 (仙台市)
  - 虚空蔵城 (塩竈市)
  - 5 秋田 穀蔵神社 (秋田市)
  - 虚空蔵社 (秋田市)
  - 6 山形 虚空蔵堂 (東田川郡)
  - 虚空蔵山 (四か所)
  - 7 福島 (なし)
  - 8 茨城 虚空蔵下 (水戸市)
  - 虚空蔵堂 (那珂郡)
  - 虚空蔵貝塚 (稲敷郡)
  - 虚空蔵さま (古河市)
  - 虚空蔵東貝塚 (古河市)
- 9 栃木 (なし)
  - 10 群馬 虚空蔵堰 (渋川市)
  - 虚空蔵塚古墳 (渋川市)
  - 虚空蔵山 (富岡市)
  - 11 埼玉 (なし)
  - 12 千葉 (なし)
  - 13 (東京)
  - 14 神奈川 虚空蔵堂 (鎌倉市)
  - 虚空蔵山 (緑区)
  - 15 新潟 虚空蔵堂 (中蒲原郡)
  - 十三仏岩 (北蒲原郡)
  - 十三仏塚 (北魚沼郡)
  - 十三仏村 (栃尾市)
  - 16 富山 虚空蔵窟 (中新川郡)
  - 虚空蔵社 (金沢市)
  - 虚空蔵山城 (能美郡)
  - 18 福井 (なし)

	20	長野	虚空蔵（小県郡）	27	京都市	（なし）
	19	（山梨）		28	大阪	（なし）
			虚空蔵山（上田市）	30	奈良	虚空蔵寺（奈良市）
			虚空蔵山（東筑摩郡）			虚空蔵村（奈良市）
			虚空蔵山城（上田市）	31	和歌山	虚空蔵庵（有田郡）
			虚空蔵山城（埴輪郡）	32	鳥取	（なし）
			虚空蔵堂（上田市）	33	島根	（なし）
			虚空蔵堂（東筑摩郡）	34	（岡山）	
			虚空蔵山（飯田市）	35	広島	虚空蔵院（府中市）
			虚空蔵山（長野市）			虚空蔵堂（三原市）
			虚空蔵山城（東筑摩郡）			虚空蔵山（東広島市）
	21	岐阜	（なし）	36	山口	虚空蔵堂（厚狭郡）
	22	（静岡）		37	（徳島）	
	23	愛知	（なし）	38	香川	虚空蔵院（大川郡）
	24	三重	庫蔵寺（鳥羽市）	39	愛媛	（なし）
	25	滋賀	（なし）	40	高知	（なし）
	26	京都	虚空蔵川（八幡市）	41	（福岡）	
			虚空蔵堂（綴喜郡）	42	佐賀	虚空蔵山（藤津郡）

虚空蔵山（武雄市）

虚空蔵寺瓦窯跡（宇佐市）

43（長崎）

46（宮崎）

44 熊本 虚空蔵山（荒尾市）

47（鹿児島）

45 大分 虚空蔵寺（宇佐市）

48（沖縄）

(b) 『歴史地名大系』（平凡社刊）本文記事による

前項で検索した『歴史地名大系』索引による虚空蔵地名について本文記事の一例をあげると、次のようなものである。

〈事例1〉青森県三戸郡南郷村島守大開「虚空蔵堂」

島守の中心集落の西、竜興山神社の北東山麓の道路の北側に位置する。本尊は福一満虚空蔵菩薩で、高松寺に保管され、堂も同寺の管理下にある。寛文五年（一六六五）の無量院の御立願状（常泉院文書）に「一 嶋森ノ虚空蔵 鮎之絵之事」とある。建立の年代は不詳であるが、八戸藩成立以前より建立されて信仰を得ていた。

〈事例2〉宮城県仙台市向山四丁目「虚空蔵堂」

曹洞宗の虚空蔵山大満寺の北東、広瀬川右岸沿いにある。「封内風土記」によると根岸村の愛宕山にあった仏宇であるが城下のうちで、安政仙府絵図でも城下内にみえる。別当は大満寺。虚空蔵堂は初め中世に近隣を領した国分盛重の居城であった千代城内にあったが、慶長の初め頃藩祖正宗が仙台城造営のため経ヶ峰に移した。正保仙台城絵図には経ヶ岬に虚空蔵とみえ、寺屋敷とあるのが大

満寺と思われる。

〈事例3〉秋田県秋田市土崎港南一丁目「穀蔵神社」

旧土崎湊町の最南端にあたり、現祭神は宇迦之御魂神・大山祇神。元文年間の湊古絵図に穀保町東側を二つに分ける路に沿って石段を登ると、虚空蔵社がある。現在穀蔵というのは虚空蔵の言い換えである。明治期の寺院台帳（秋田県庁蔵）に、虚空蔵社の別当寺である真言宗新義派、久保田宝鏡院末地蔵院の書上がある。「万治三年庚子年八月、当町一統之信仰仏トシテ虚空蔵菩薩安置堂建立ス。延宝九年酉三月中、町中一円ニテ虚空蔵堂境内へ守護寺建築、清徳院ト号、貞享三丙辰八月中、当郡秋田保戸野本丁士族塩谷主鈴允ヨリ運慶之作地蔵菩薩木像壹軀当院ニ安置相成候ニ付、地蔵院と改号」。穀保町が開かれた万治三年（一六六〇）に同町に蔵宿をもつ問屋・小宿によって勧請され、虚空蔵社が設けられたことになる。堂社に地蔵尊を安置したことは、虚空蔵内の貞享三年（一六八六）の銘文（土崎港町史）と符号する。

〈事例4〉山形県東田川郡立川町三ヶ沢「虚空蔵堂」

（三力沢村は）北は添津村、南は添川村（現藤島町）、東は羽黒台地の西麓、西は関根村（現同上）。元和八年（一六二二）の酒井氏知行目録では高五六〇石余。ほかに羽黒山領として高二五九石余があり（同年庄内寺社領目録）、幕末に至った。寛永元年庄内高辻帳では高七八一石余。正保郷帳では田七八八石余・畑五四石余・社領二五九石余（村高は一千二〇〇石余を記す）。寛文九年（一六六九）の検地帳（旧三ヶ沢村文書）では高一千九百九石余。元文元年（一七三六）の検地帳（同文書）では田七八町九反余・畑七町七反余、名請人八一人。式郡詳記では免五ツ三分六厘、家数七七、小名と

して北川・野崎を記す。鎮守は虚空蔵堂。当村は度々干害に苦しみ、虚空蔵菩薩を祀り水利を祈願したと伝える。明治に入り、社守村上式部大夫が羽黒山出羽三山神社（現羽黒町）の分霊を勧請して御獄神社と称した。ほかに薬師堂（現本間久助家屋敷神）がある。明和五年（一七六八）の検地帳（旧三ヶ沢村文書）に薬師の前という字名がみえる。古四王様（現小砂川茂左衛門家屋敷神）も同検地帳に「長五郎前こしあふ屋敷」とみえる。虚空蔵堂（現乙坂利右衛門家屋敷神）には享保三年（一七一八）の棟札および同五年の絵馬が残る。寺院は延宝六年（一六七八）の狩川組御林山本書付（斉藤文書）に善光寺・光星寺・靈光院（現靈輝院）とある。三寺とも現曹洞宗。善光寺には「出羽国風土略記」に「閻浮壇金如来といふ長さ一寸八分其台座共に五寸程」とある阿弥陀如来を祀る如来堂がある。現在は善光寺式一光三尊仏を祀る。元和八年酒井氏が信州松代（現長野市）から移封の際に家臣栗田某が棒持して建立したと伝える。光星寺は貞観年間（八五九〜八七七）の建立といい、観音・弁財天・咤枳尼天（稲荷）の三尊を祀る。「出羽国風土略記」に「七月二三日寺中の森へ土俗参詣して亡霊の菩提を弔ひしとぞ」とあるように、七月二三日を中日に三日間万界の精霊を供養する森の山という行事がある。住民だけでなく、他地方からも多くの人々が参詣する。下清水（現鶴岡市）の森の山とともに有名である。靈輝院の境内に乳イチョウと称する大木があり、県指定天然記念物。根元に安産地藏尊を祀る。

〈事例五〉 茨城県那珂郡東海村村松「虚空蔵堂」

村松砂丘の内陸寄りにある。村松山日高寺と号し、真言宗豊山派。本尊は虚空蔵尊。大同二年（八〇七）空海の開基と伝え、「心車集」の村松山勤疏（「新編常陸国誌」所収）によると、大同年中慈

覚大師によって開かれた三虚空蔵の一寺とする。平城天皇から「村松山神宮寺」の勅額を与えられたと伝える。中世には佐竹氏の外護を受け隆盛を極めた。文明一七年（一四八五）佐竹の乱で堂塔が灰燼に帰したが、白頭によって再建され、村松山日高寺と称した。徳川家康から朱印五〇石を受け、徳川光圀は天和二年（一六八二）堂塔伽藍と虚空蔵尊を修繕、貞享三年（一六八六）にも虚空蔵尊を修理させた。明治三三年（一九〇〇）堂塔・仁王門・古文書を焼失したが、昭和五五年（一九八〇）すべて再建された。三月には十三詣の行事があり、数え年一三歳の子の厄を払い、知恵を授けてもらうため参拝する者が多い。この付近一帯の松林は江戸時代に砂防林として造成され、真崎浦は虚空蔵堂の御手洗となっている。

〈事例六〉群馬県富岡市星田「虚空蔵尊」

文政三年（一八二〇）の虚空蔵由来書（佐藤文書）によると、慈覚大師が嫡川岸に至ると明星が地より湧出し岩窟に光が輝いていた。岩窟に入ると虚空王蔵菩薩が現れ、大師は堂を建て仏像を彫り、同地にとどまって、明星が田より湧出していたので星田と名付けたという。永禄十一年（一五六八）小幡播磨守が同寺を建立し、この虚空蔵尊を安置したという。同寺は前掲領内村々書上帳にみえるが、「郡村誌」には記されない。現在、虚空蔵山中腹の岩窟に祀られている満願虚空蔵尊は、ふだんは伝宗寺が保管し、大師の故事にちなむ一月一六日の縁日の早朝に移して夕方再び寺に運んでいる。朝には像を運んだ者には福があると伝える。嫡川と古河堀に挟まれた城ノ口に小幡氏の出城と伝える城跡があり、高田川に架かる橋を城下橋と称している。

などとされており、これらの事例を含む虚空蔵信仰の多様性について、本論文中で検討を加えたところ



である。

## 二 地図上の虚空蔵地名に関する検索方法

### (1) 地形図（国土地理院）にみる虚空蔵地名

国土地理院発行の二万五千分の一地形図について、金井弘夫編『新日本地名索引』（アボック社出版局、一九九三年刊、全三巻）を利用することで容易に虚空蔵地名を検索することが可能である。ただ地形図は逐次更新されており、現在刊行されている地形図では削除されていたり、表記が変更されている場合があるので注意が必要となる。

### (2) 『日本地名大辞典』（角川書店）所収「小字一覧」にみる虚空蔵地名

より細部の地名である小字地名を検討する場合、『日本地名大辞典』に収録された「小字一覧」を利用することが出来る。表（0・2・1）に「小字一覧」の収録状況を府県別に整理した。この「小字一覧」については、二点考慮が必要である。

まず、「小字一覧」が収録されていない道府県について、収録されていない利用は様々であろうが、奈良県の場合にはすでに小字地名を網羅した『大和地名辞書』（日本地名学研究所）があることが利用の一つであった。そこで奈良県については同書によって、また兵庫県についても現在刊行中である『兵庫県小字名集』（兵庫県地名研究会編）によって小字虚空蔵地名を追加することにした。

表0・2・2

## 虚空蔵関係小字地名数（都道府県別集計）

『角川日本地名大辞典』（全47巻）による

都道府県名	小字一覧 の有無	ページ数	小字地名 概数(1)	ランク (2)	虚空蔵関係小字 地名数(3)	
1	北海道	無	—	—	—	
2	青森	有	24	16800	C	2
3	岩手	有	23	16100	C	6
4	宮城	有	56	39200	B	4
5	秋田	有	48	33600	C	5
6	山形	有	78	54600	B	1 4
7	福島	有	117	81900	A A <sup>※</sup>	1 9
8	茨城	有	165	115500	A A <sup>※</sup>	3 5
9	栃木	有	76	53200	B	6
10	群馬	有	56	39200	B	1 5
11	埼玉	有	23	16100	C	1
12	千葉	有	135	94500	A	9
13	東京	有	18	12600	C	0
14	神奈川	有	30	21000	C	0
15	新潟	無	—	—	—	—
16	富山	有	69	48300	B	0
17	石川	有	59	41300	B	1
18	福井	有	62	43400	B	7
19	山梨	有	29	20300	C	0
20	長野	有	39	27300	C	1 0
21	岐阜	有	87	60900	B	8
22	静岡	有	126	88200	A	3
23	愛知	無	—	—	—	—
24	三重	有	78	54600	B	1
25	滋賀	有	113	79100	A A <sup>※</sup>	1
26	京都	有	99	69300	B	1 7
27	大阪	無	—	—	—	—
28	兵庫	無	—	—	—	—
29	奈良	無	—	—	—	—
30	和歌山	有	43	30100	C	0
31	鳥取	有	103	72100	A	5
32	島根	無	—	—	—	—
33	岡山	有	155	108500	A A <sup>※</sup>	1 1
34	広島	有	33	23100	C	5
35	山口	有	116	81200	A A <sup>※</sup>	0
36	徳島	有	22	15400	C	0
37	香川	有	27	18900	C	0
38	愛媛	有	59	41300	B	1
39	高知	有	162	113400	A A <sup>※</sup>	4
40	福岡	無	—	—	—	—
41	佐賀	有	35	24500	C	1
42	長崎	有	58	40600	B	3
43	熊本	有	64	44800	B	0
44	大分	有	46	32200	C	1
45	宮崎	有	32	22400	C	1
46	鹿児島	有	112	78400	A	1 5
47	沖縄	有	15	10500	C	0
全国計		2,692	1,884,400		2 1 1 (約0.01%)	

(1)「小字地名概数」は、目安として小字地名の概数をつかむために、収録ページ数に700をかけた。1ページあたりの地名数を700としたのは、滋賀県小字一覧のP 1009にある地名数が720であることによった。

(2)小字一覧は、各都道府県によって、収録数、採集方法・時期などでかなり差異がある。そこで、収録ページが50ページ未満をC、50ページ以上100ページ未満をB、100ページ以上をAとした。また、150ページをこえるものと、100ページ以上で採集が一律な場合は、AAとした。

(3)「虚空蔵関係小字地名」として数に含めたものは、「虚空蔵（小空蔵・古空蔵・虎虚蔵・国蔵・国造）」と「十三仏」である。なお「国造」は、岡山県・鹿児島県のみ数に含めた。

表0・2・2 角川地名辞書所収「小字一覧」の各府県別・凡例一覧						
番号	県名	頁数	ランク	基礎資料・作成方法等	表記・配列等	用字・その他
2	青森県	24	C	明治25年10月1日青森県内務部第二課通達により町村小字名調べとして調査された「地籍字名簿」(青森県立図書館蔵)に基づいて作成した。	配列は原資料記載のままとし、当時の自治体名を〔 〕内に、大字名(地区名・町名など)をゴシック体で示した。大字名の記載がない場合は、自治体名に続けて小字名を記した。なお、郡名は当時のものによる。	用字は新字に統一し、振り仮名は原則として原資料のままとした。ただし、原資料は手書きであるため、判読不能な文字や表記において明らかに誤りと思われる箇所がある。この場合、「新訂青森地名辞典」(青森放送)により確認できるものについては( )を用いて補足した。
3	岩手県	23	C	岩手県立博物館蔵「岩手県管轄地誌」所載の字地の全部を、当時の郡別・村別に書き出したものである。	字名の表記は、漢字・振りがなともに、大方の場合、原典のままとした。ただし、若干の異字体について、現在通用の字体に改めたものがある。構成・配列は原典のそれに従った。なお郡名・町村名・字名はそれぞれを以下のように表示した。	
4	宮城県	56	B	「宮城県各町村字調書」(宮城県史32、史料集Ⅲ所収)である。同資料は、宮城県永年保存文書で、仙台区および16郡の計17冊からなる。作成年月は明治17、8年と推定される。	小字の配列は原本のままに従った。①利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、原資料の旧町村名を〔 〕内に、小字の所属する大字相当の地名をゴシック体で示した。②「安永風土記」記載の小字名・屋敷名と同一と考えられる大字・小字相当地名には* (小字)、○ (屋敷名) を付した。正確を期したが、明治初年より村域の合併・分割があり、必ずしも比較対照が十分行われたとはいえない。	用字は新字に統一し、振り仮名は単純誤植のみ訂正して原資料のままを付した。
5	秋田県	48	C	「秋田県史一大正・昭和篇」(昭37年刊)付録「秋田県市町村字名称調」により、その原本である各郡別の「秋田県町村字名称調」(9冊本、未刊)をもって補った。	明治22年の市町村合併以前の旧町村名を見出しとし、配列もほぼ原資料によった。なお、秋田市旧市内における編入区域の町はそのまま市内町名となり、小字がないとして記載が省かれている。①利用の便を考え、市部および旧郡名をゴシック体で示し、合併時の町村名を〔 〕内に、小字の所属する旧町村名をゴシック体で示した。②原資料に追加分と記載された小字名は( )内に示した。	用字は新字に統一し、振り仮名は単純誤植のみ訂正して原資料のままを付した。
6	山形県	78	B	昭和2年山形県「町村小字名調査」(山形県総務部広報課県史編纂室所蔵)を原資料とし、山形県郷土研究会編「山形県地名録」(昭和13年刊、同41年復刊)をもってその不足を補った。補った部分は( )内に示した。	小字の配列は原資料のままに従った。①利用の便を考え、市部および旧郡名を示し、さらに当時の町村名を〔 〕内に、大字および大字に相当する地名をそれぞれゴシック体で示した。②記載例をあげると次の通りである。	用字は新字に統一し、振り仮名は現代よみに直した。しかし原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
7	福島県	117	A A	福島県歴史資料館所蔵の地籍帳・地積図(明治15年現況調査)から作成した。福島県地名総覧(昭和45年福島県刊)によって補った村は<総覧>と注記した。	配列は県内を中通り・会津・浜通りの3地域に分け、①見出しに明治19年現在の郡名をゴシック体で示し、②次に郡内の町村を昭和45年現在の市町村(自治体)ごとに分け、市町村名を〔 〕内にゴシック体で示し、③さらに明治19年12月現在の町村名をゴシック体で示し地籍帳の配列に従って並べ、④最後に小字名を列挙し、配列は明治19年12月現在の町村ごとに地籍番号順とし、同一小字名が存在する場合もそのままとした。	小字名の用字は新字体に統一し、呼称は福島県地名総覧によった。
8	茨城県	165	A A	茨城県全域を網羅する同年度の小字資料がないため、主として各市町村役所の協力を得て、各自治体所蔵のコード表などの資料、市町村史および個人調査によって作成した。したがって、資料および小字名採集の年次は一律ではない。なお、笠間市旧南山内地区など資料の不明な地区は除いた。また、小字のない大字・町名は割愛した。	配列は、市部の五十音順、郡部別のそれぞれの五十音順とし、各自治体所属の大字名・小字名は原資料のままとした。	用字は新字体に統一し、振り仮名は片仮名で示したほか、すべて原資料によった。
9	栃木県	76	B	大正6年、大愚狂人(本名未詳)によって筆写された「下野小字名鑑」(関口文庫所収・栃木県立図書館蔵)を原資料とした。ただし原資料中の足利郡菱村は現在群馬県桐生市に所属するため省略した。なお、原資料に欠本があり、その補遺として、現行自治体名を見出しとして現県域に属する小字名を「栃木県市町村合併誌」と当該自治体執筆者の協力により補った。	配列は、原資料の価値を重視し、原資料の冊数順とし、あえて現在の自治体別に再分類しなかった。利用の便を考え、大正6年の市名および所属郡名を示し(補遺については現行自治体名)、さらに当時の自治体名を〔 〕内に、大字をゴシック体で示した。	用字は新字体に統一し、振り仮名は原資料のままとした。

10	群馬県	56	B	県議会図書室旧蔵の「地理雑件」(明治12年小字名調書)を基本とし、「上野国郡村誌」および各郡誌・市町村誌等を参考にして補い、作成したものである。	郡・町・村名については、原資料を尊重し、旧郡名、旧町村名のままとした。配列については旧郡名の五十音順とした。	用字は原則として新字とし、原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
11	埼玉県	23	C	「武蔵国郡村誌」(明治8~9年)中の字地の項に書き上げられた地名を集録した。	配列は原資料の価値を重視し、原資料の巻数順とし、あえて現在の自治体に再分類しなかった。	用字は新字に統一し、振り仮名は単純誤植のみを訂正、片仮名で示したほか、すべて原資料によった。
12	千葉県	135	AA	千葉県および各自治体提供の資料によって作成した。	表記は、大方の場合、提供された資料のそれに従った。資料の誤写、誤読かともみなされるものも、訂正せずに載せた。千葉市の小字については、以下のように年次の異なるものを利用した。千葉町(昭和11年)、検見川町・蘇我町・都村・都賀村(以上昭和13年)、千城村(昭和26年)、犢橋村(昭和34年)、幕張町・生浜町・権名村・菅田村(以上昭和8年)、泉町(昭和38年)、土気町(昭和初期)。配列は地誌編の配列順に従った。利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、資料の大字名をゴシック体で示した。なお、小字	
13	東京都	18	C	足立・荒川・板橋・江戸川・大田・葛飾・北・品川・渋谷・新宿・杉並・墨田・世田谷・豊島・練馬区は「東京市接続町村一覧表」(大正14年)、西・南・北多摩郡は、「東京府市区町村便覧」(昭和14年)による。	配列は利用の便を考え、次の要領に従った。①原資料の旧市区町村を、現在の自治体に再分類した。②小字名を除く現自治体名、原資料の旧市町村名とその所属大字名は、すべて50音順に配列した。	振り仮名は単純誤植のみ訂正して原資料によった。なお、原資料の振り仮名のないものは付さなかった。
14	神奈川県	30	C	本資料は、神奈川県全域を網羅する同一年度の小字資料がないため、主として各市町村役所の協力を得て、各自治体所属のコード表・字地図などの資料によって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。なお、小字のない大字・町名は割愛した。	配列は、地誌編の自治体配列順とし、各自治体所属の大字名・小字名は原資料のままとした。ただし、川崎市は自治体で一本化した。	振り仮名は片仮名で示したほか、すべて原資料によった。
16	富山県	69	B	昭和54年1月、主として各自治体役場の協力を得て作製した。次の自治体は、各市町村誌によった。小矢部市・井波町・小杉町・入善町・福岡町・福野町・八尾町滑川市・氷見市・上平村・平村・利賀村は、次の各氏の個人調査に基づく資料によった。金子忠雄(滑川市)・橋本芳雄(氷見市)・高田善太郎(上平村・平村・利賀村)なお、氷見市の小字は、小島清文・清水一布氏の研究から一部を引用した。	配列は原資料のままに従い、補足分はこれに準じた。①利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、原資料の旧町村名を〔 〕内に、小字の所属する大字名をゴシック体で示した。②原資料に割注形式で記載された地名を( )内に示した。	用字は新字に統一し、振り仮名は原資料のままを付した。なお、原資料に振り仮名のないものは付さなかった。
17	石川県	59	B	明治年間存在した小字を採取した。七尾市・志賀町は、松浦五郎・室矢幹夫両氏の個人調査による採取である。他の自治体分は、堂口一男・森榮松・岡田泰の3氏が明治13~昭和55年に刊行された皇国地誌・郡誌・市町村誌(史)・小字図から採取した。	配列は各史資料からの採取順による。利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、旧町村名を〔 〕内に、小字の所属する大字名をゴシック体で示した。	用字は新字に統一し、振り仮名は原資料のままを付した。なお、原資料に振り仮名のないものは付さなかった。
18	福井県	62	B	主として各市町村役場の協力を得て、各自治体所蔵のコード表・字切図・一覧表などの資料、および個人資料などによって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。なお収集できなかった自治体については掲載されていない	自治体の配列は、福井市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は原則として新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
19	山梨県	29	C	昭和54年調べ「山梨県地名鑑」(山梨県総務部地方課編)を原資料とし、甲府市については自治体提供資料(旧市街地を除く)に基づいて作成した。	自治体の配列順は甲府市を冒頭に置き、他は原資料記載のままとした。①利用の便を考え、市部および郡名を示し、さらに自治体名を〔 〕内に、当時の大字名(地区名・町名など)をゴシック体で示した。②記載例は次の通りである。	用字は新字に統一し、振り仮名は現代よみに直した。しかし、原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。

20	長野県	39	C	昭和11年長野県刊行の「長野県町村誌」所収の明治11年から同16年頃までに調査された字地を当時の郡別・村別に書き出したものである。	字名の表記については、原則としては原典のままとした。ただし、常用漢字に新字体のあるものはそれに従った。また若干の異字体については、現在通用の字体に改めたものもある。3. 本一覧の構成・配列は原典のそれに従った。なお、郡名・町村名・字名はそれぞれ以下のように表示した。	
21	岐阜県	87	B	揖斐郡・恵那郡・加茂郡・不破郡・益田郡・山県郡・養老郡については各郡史（志・誌）に準拠し、その郡域はそれぞれの郡史刊行当時のものとした。なお、郡史刊行年度は以下の通り。揖斐郡志（大正13年）・恵那郡史（大正15年）・美濃国加茂郡誌（大正10年）・不破郡史（昭和2年）・岐阜県益田郡誌（大正5年）・山県郡志（大正7年）・養老郡志（大正14年）各郡史に該当しない現在の自治体、および郡史によってその領域を網羅し得ない現在の自治体については、それぞれの自治体所属の現行資料によった（ただし、高山市は荒川喜一氏採集資料	配列は原資料の資料的価値を重視し、次の要領に従った。①郡史に見える旧町村はそのまま掲載し、現在の自治体別に再分類しなかった。②郡史および現在の自治体はそれぞれ五十音別に配列したが、その所属大字名および字名の配列は原資料の配列に従った。	用字は新字に統一し、振り仮名は単純誤植のみ訂正して原資料のまま付すようにした。ただし、原資料に振り仮名の無いものは付さなかった。
22	静岡県	126	A	各自治体の協力を得て新たに作成したものである。次の自治体は、県立中央図書館所蔵の県史編纂資料（昭和10年頃）によった。由比町・岡部町・川根町・中川根町・相良町・引佐町・細江町・舞阪町 3. ①静岡市は、駿河古文書会編の「静岡市の大字・小字名集成」によった。②沼津市は、市所蔵資料と「沼津市誌」によった。③浜松市は、松下誠氏による「浜松市庄内地区地名集覧」、浜松市立中央図書館所蔵の「浜松小字名集覧（昭和16年）」、県立中央図書館所蔵の県史編纂資料とによったが、資料に一部未調整の部分がある。	配列は、地誌編の自治体配列順によった。なお各自治体内では、原資料のままに従った。利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、原資料の旧町村名を〔 〕内に、小字名の所属する大字名をゴシック体で示した。	6. 振り仮名は原資料のままを付した。
23	三重県	78	B	三重県全域を網羅する同一年度の小字資料がないため、主として各市町村役所の協力を得て、各自治体所蔵のコード表・字地図などの資料、および個人調査によって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。なお、小字のない大字・町名は割愛した。	配列は、市部の五十音順、郡部別のそれぞれの五十音順とし、各自治体所属の大字名・小字名は原資料のままとした。	用字は新字に統一し、振り仮名は片仮名で示したほか、全て原資料に寄った。
25	滋賀県	113	A A	滋賀県立図書館所蔵の明治15年の「滋賀県小字取調書」（県有文書の写本）である。同資料は、滋賀県の一部を欠くため、入手し得た「取調書」と同年の「滋賀郡誌」（村上近世文化研究所所蔵）の一部と、現在の土地台帳に付された字限図により、脱落部分を補った。その場合、「滋賀郡誌」は<郡誌>、字限図は<字限図>と注記した。	配列は原本のままに従い、補足分はこれに準じた。①利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、原資料の旧町村名を〔 〕内に、小字の所属する大字名をゴシック体で示した。②原資料に割注形式で記載された小字内でお小分け地名を（ ）内に示した。	用字は新字に統一し、振り仮名は単純誤植のみ訂正して原資料のままを付した。
26	京都府	99	B	京都府全域を網羅する同一年度の小字資料がないため、主として各自治体役場の協力を得て、各自治体所蔵のコード表・字地図などの資料、および各市町村誌所収の小字書上、字地図などによって作成した。以上により、資料および小字名採取の年次は一律ではない。	配列は、市部の五十音順、郡部別のそれぞれの五十音順とし、各自治体所属の大字名・小字名は原資料のままとした。	用字は新字に統一し、振り仮名は片仮名で示したほか、すべて原資料によった。

30	和歌山県	43	C	収集可能な資料を基礎として作成した。字切図など古い資料によったものが多く、また各資料の年代はまちまちであり、確定できない場合も多い。	自治体の配列は和歌山市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。記載例は次の通りである。ただし、和歌山市の旧城下町の部分は町名を小字とみなし、各地区名内にまとめた。	用字は新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
31	鳥取県	103	A	各自治体、各執筆者の協力により、新たに収集したのものである。小字資料を所有している各自治体分については、その資料によって記載し、小字資料を所有していない自治体分については、各執筆者に現地での聞き取り調査をお願いした。鳥取大学名誉教授岩永実氏の指導のもとに、小字を研究した岸本昭・西尾三郎両氏の資料を部分的に比較参照したところもある。	4. 配列は地誌編の配列順に従った。利用の便を考え、見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、資料の大字名をゴシック体で示した。なお、鳥取市については昭和27年段階での鳥取市域とその後の合併により市域となった旧村部分とを分け、旧村名を [ ] 内にゴシック体で示した。	振り仮名は各自治体資料についてはそれに従い、各執筆者の聞き取り調査によるものは現代仮名づかいによった。
33	岡山県	155	A	主として各市町村役場の協力を得て、各自治体所蔵のコード表・字切図・一覧表などの資料、および個人資料などによって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律でない。なお収集できなかった自治体については掲載されていない。	自治体の配列は、岡山市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は原則として新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
34	広島県	33	C	収集可能な資料を基礎として作成した。研究者による昭和30年代の調査を基本とし、各市町村誌、国土行政図画総覧のほか、一部は執筆者の御好意で新に収集していたものもある。なお収集できなかった自治体については掲載されていない。	自治体の配列については、広島市を筆頭に、市部の五十音順、郡部の五十音順、各郡に所属する自治体の五十音順としたが、資料の成立年度を尊重し、現在までに合併・統合が行われている郡部や、自治体名についても、旧名のままとした。3. 記載例は次の通りである。	用字は新字に統一し、原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
35	山口県	116	A A	本資料は明治20～22年に各市町村で作成された「字図」（分間図）目次を調査・収集し、現自治体別に編集したものである。	自治体配列は、山口市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。記載例は次の通りである。明治22年市制町村制施行以前の原資料では、のちの大字名が村名で示されている。ここでは便宜上、明治22年当時の大字名をもって統一し、現在の大字名との関連がわかりにくいものなどについては、（ ）を用いて現在の大字名を示した。（原稿作成=高橋文雄）	用字は新字に統一した。振り仮名は「山口県地名明細書」（田村哲夫編）などにより確認できるものはこれを補った。
36	徳島県	22	C	原則的に各自治体提供の資料、および個人調査によって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。	自治体の配列は、徳島市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。①利用の便を考え、見出しに自治体名をゴシック体で示し、大字名（町名・地区名など）をゴシック体で示した。②記載例は次の通りである。	用字は新字に統一し、振り仮名は現代よみに直した。しかし、原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
37	香川県	27	C	高松藩領の村々については江戸後期の成立とされる「東讃郡村免名録」、丸亀・多度津藩領については安政5年成立の「西讃府志」から江戸期の小地名を採取し、これ以外の地域は小西正一・徳山久夫・西川淳三各氏の個人調査によった。なお、「東讃郡村免名録」は、鎌田共済会所蔵本を底本とし諸本によって校訂した。	配列は「東讃郡村免名録」「西讃府志」（丸亀治下、多度津治下）、その他の地域の順とし、個人調査以外は末尾に典拠資料を示した。「東讃郡村免名録」「西讃府志」については原資料の価値を重視し、資料の記載順のままとした。その他の地域については、現行の自治体ごとに本辞典地誌編の配列順に従った。郡・自治体の配列は以下の通りである。「東讃郡村免名録」大内・寒川・三木・山田・香川（東）・香川（西）・阿野（南）・阿野（北）・那珂・鶴足郡 「西讃府志」丸亀治下 鶴足・那珂・多度・三野・豊田郡 「西讃府志」多度津治下 多度・三	用字は新字体に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。

38	愛媛県	59		明治12年頃と推定される「愛媛県各郡地誌」を原資料とし、同資料の残存しない地域、および同資料中に字名の記載が欠落している地域については、該当する現在の各自治体に照会し、これを補った。	各自治体における小字名(小地名)の記載方法はまちまちであるが、上記「愛媛県各郡誌」に記載された字名に質的に最も近いと思われるものを小字と見なし、記載した。なお、( )内は小字に準じる小地名。3.配列は「愛媛県各郡地誌」によるものは旧郡の五十音順により先に揚げ、現在の各自治体からの資料によるものは本辞典地誌編の配列順に従った。①利用の便を考え、見出しに原資料による郡名、または現在の自治体名をゴシック体で示し、原資料による村名、または現大字に相当する旧村名を〔 〕内に、小字の所属する地域名をゴシック体で示し	振り仮名はすべて原資料によった。
39	高知県	162	A A	収集可能な資料を基礎として作成した。字切図など古い資料によったものが多く、また各資料の年代はまちまちであり、確定できない場合も多い。なお収集できなかった自治体については掲載されていない。	自治体の配列は、高知市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
41	佐賀県	35	C	東京大学史料編纂所に所蔵される明治15年ころの「佐賀県各町村小字取調書」によって編集した。	配列は、郡を五十音順に、さらに村名を五十音順に配列した。①明治15年当時の町村を〔 〕内にゴシック体で示し、字を明朝体で列記した。②町村が名・大字などを有する場合は、それをゴシック体で示し、引き続いて字を列記した。また字が小字を有する場合は( )内に列記した。	用字は新字に統一し、振り仮名は原資料によった。
42	長崎県	58	B	主として各市町村役場の協力を得て、各自治体所蔵コード表・字切図・一覧表などの資料、および個人資料などによって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。なお収集できなかった自治体については掲載されていない。	自治体の配列は、長崎市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
43	熊本県	64	B	収集可能な資料を基礎として作成した。字切図など古い資料によったものもあり、また各資料の年代は一定でなく、確定できない場合も多い。	自治体の配列は、熊本市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
44	大分県	46	C	東京大学史料編纂所に所蔵される明治15年の「大分県各町村小字取調書」をはじめ、県内に残る郡村誌など同時期の小字資料によって編集した。	配列は、郡を五十音順に、さらに村名を五十音順に配列した。①明治8年の町村を〔 〕内にゴシック体で示し、字を明朝体で列記した。②字が小字を有する場合は( )内に列記し、さらに細分化された小地名を有する場合は前後のー(ハイフン)で区別し、またさらに区分された地名の場合< >で囲った。	用字は新字に統一し、振り仮名は原資料によった。
45	宮崎県	32	C	宮崎県全域を網羅する同年度の小字資料がないため、主として各市町村役場の協力を得て、各自治体所属のコード表・字切図・一覧表などの資料、および個人提供の資料や郡誌などによって作成した。したがって、資料および小字名採取の年次は一律ではない。	自治体の配列は、宮崎市を冒頭に置き、次に市部の五十音順、各郡の五十音順とし、各郡内は町村の五十音順とした。	用字は新字に統一した。原資料に振り仮名がない場合はそのままとした。
46	鹿児島県	112	A	県内各市町村役所からの提供資料に基づいて作成したが、鹿児島市・鹿屋市など小字が全廃され、現在行政上使用されていない自治体については歴史的な資料(字図・書籍など)によった。したがって現時点の自治体の小字と、古い資料による自治体の小字一覧との2種類から成っている。	配列は地誌編の自治体配列順とし、①見出しに現在の自治体名をゴシック体で示し、②次に小字の所属する大字名(地区名・町名・旧大字名)をゴシック体で示し、そのあとに小字名を列挙した。小字の配列は資料の配列順に従った。	小字名の用字は新字体に統一し、振り仮名は資料にあるもののみ付した。
47	沖縄県	15	C	沖縄県土地調査事務局の「沖縄県市町村別大字・小字名集」を基本資料とし、「沖縄各間切村原名」(明治36年以降)と照合、各市町村発行の小字地図および名嘉順一収集の地名資料によって、名嘉順一が校訂の上作成した。	配列と各自治体所属の字名・小字名は、原資料のままとした。	用字は新字に統一し、字名の振り仮名は削除した。なお、行政区名には〔 〕を付した。

また、各府県の採集方法と時期を知るために凡例を一覧とし表（0・2・2）に示した。

### 三 虚空蔵地名の分布

#### (1) 地形図虚空蔵地名の一覧と分布

前項に述べた方法で検索した地形図虚空蔵地名は次の通りである。また、その分布地図を図（0・2・2）に示した。

名称	所在		
虚空蔵	岩手・江刺市	虚空蔵川	山形・鶴岡市
虚空蔵	山形・白鷹町 <small>〔米沢藩の上杉鷹山が厚く信仰した〕</small>	虚空蔵川	山形・鶴岡市
虚空蔵	宮城・仙台市	虚空蔵山	秋田・東由利町
虚空蔵	宮城・花山村	虚空蔵山	秋田・本荘市
虚空蔵	群馬・川場村	虚空蔵山	山形・上山市
虚空蔵	長野・丸子町	虚空蔵山	山形・鶴岡市
虚空蔵	静岡・小笠町	虚空蔵山	山形・温海町
虚空蔵	岐阜・大垣市 <small>〔赤坂の明星輪寺〕</small>	虚空蔵山	山形・鶴岡市
虚空蔵	京都・西京区 <small>〔法輪寺「十三参り」で有名〕</small>	虚空蔵山	宮城・花山村
虚空蔵岩	福島・檜枝岐村	虚空蔵山	宮城・栗駒町
		虚空蔵山	新潟・笹神村







虚空蔵山 新潟・朝日村  
 虚空蔵山 新潟・村上市  
 虚空蔵山 長野・長野市  
 虚空蔵山 長野・飯田市  
 虚空蔵山 長野・本城村  
 虚空蔵山 長野・四賀村  
 虚空蔵山 長野・上田市  
 虚空蔵山 長野・上田市  
 虚空蔵山 長野・坂城町  
 虚空蔵山 静岡・焼津市  
 虚空蔵山 石川・辰口町  
 虚空蔵山 奈良・奈良市〔弘仁寺〕  
 虚空蔵山 兵庫・三田市  
 虚空蔵山 岡山・里庄町  
 虚空蔵山 岡山・笠岡市  
 虚空蔵山 広島・黒瀬町  
 虚空蔵山 広島・東広島市  
 虚空蔵山 高知・須崎市

〔『地理学の諸相』所  
収論文で紹介した〕

虚空蔵山 高知・佐川町  
 虚空蔵山 佐賀・塩田町  
 虚空蔵山 佐賀・武雄市  
 虚空蔵山 長崎・西海町  
 虚空蔵山 長崎・川棚町  
 虚空蔵山 長崎・佐世保市  
 虚空蔵山 宮崎・南郷町〔陸けい島〕  
 虚空蔵尊 宮城・津山町  
 虚空蔵尊 新潟・村松町  
 虚空蔵岳 秋田・西仙北町  
 虚空蔵岳 山形・立川町  
 虚空蔵町 奈良・奈良市〔弘仁寺〕  
 虚空蔵堂 茨城・東海村〔日本三虚空蔵、村松〕  
 虚空蔵堂 長野・丸子町  
 虚空蔵峠 埼玉・飯能市  
 虚空蔵橋 山形・小国町  
 虚空蔵前 福島・福島市  
 虚空蔵森 福島・喜多方市

〔黒岩、但し現在の地  
形図では名称が削除〕

虚空蔵島の亜熱帯林 宮崎・南郷町

『地理学の諸相』  
所収論文で紹介』

虚空蔵塚古墳 熊本・菊水町

虚空蔵菩薩堂 新潟・湯之谷村

## (2) 小字地名の一覧と分布

前項に述べた方法で検索した虚空蔵小字地名は次の通りである。またその分布地図を図(0・2・2)に示し、地形図虚空蔵地名と虚空蔵小字地名をあわせた分布地図を図(0・2・3)に示した。

青森県上北郡四和村米田虚空蔵

宮城県丸森町虚空蔵中

青森県三戸郡名久井村平虚空蔵

宮城県丸森町虚空蔵上

岩手県岩手郡川口村虚空蔵

秋田県南秋田郡潟西村本内虚空蔵下

岩手県岩手郡御明神村虚空蔵

秋田県河辺郡豊島村豊成虚空蔵大台滝

岩手県稗貫郡外川目村小空蔵

秋田県由利郡石沢村鳥田目虚空蔵

岩手県江刺郡石原村虚空蔵

秋田県雄勝郡皆瀬村川向虚空蔵森

岩手県胆沢郡塩竈村虚空蔵小路

秋田県北秋田郡花岡町花岡虚空蔵下夕

岩手県磐井郡母躰村虚空蔵

山形県南村山郡上山町大字未詳虚空蔵

宮城県花山村虚空蔵

山形県南村山郡東村小笹虚空蔵平

宮城県丸森町虚空蔵下

山形県東村山郡作谷沢村畑谷虚空蔵

山形県南置賜郡玉庭村大舟虚空蔵前  
山形県東置賜郡高島町泉岡虚空蔵山  
山形県東置賜郡中郡村時田虚空蔵田  
山形県東置賜郡中郡村時田虚空蔵山  
山形県西置賜郡長井町小出虚空蔵山  
山形県西置賜郡長井村五十川虚空蔵  
山形県西置賜郡鮎貝村黒鴨虚空蔵山  
山形県西置賜郡鮎貝村黒鴨虚空蔵森  
山形県西置賜郡鮎貝村黒鴨虚空蔵森一  
山形県西置賜郡鮎貝村黒鴨虚空蔵森二  
山形県西置賜郡鮎貝村黒鴨虚空蔵森三  
福島県福島市山田虚空蔵前  
福島県福島市金沢虚空蔵  
福島県伊達郡国見町泉田虚空蔵上  
福島県須賀川市前田川虚空蔵  
福島県西白河郡東村上野出島虚空蔵  
福島県西白河郡浅川町小貫虚空蔵前

福島県耶麻郡熱塩加納村加納虚空蔵西  
福島県耶麻郡熱塩加納村加納虚空蔵道下  
福島県耶麻郡北塩原村大塩虚空蔵  
福島県喜多方市新宮虚空蔵森  
福島県喜多方市新合虚空蔵森山  
福島県河沼郡湯川村勝常虚空蔵免  
福島県いわき市塩虚空蔵  
福島県福島市上野寺十三仏  
福島県福島市上鳥渡十三仏  
福島県伊達郡梁川村大関西十三仏  
福島県伊達郡梁川村大関東十三仏  
福島県福島市下川崎十三仏  
福島県須賀川市狸森十三仏  
茨城県古河市鴻ノ巣虚空蔵道東  
茨城県古河市鴻ノ巣虚空蔵東  
茨城県下館市茂田上虚空蔵  
茨城県下館市茂田虚空蔵前

茨城県土浦市常名虚空蔵下  
茨城県土浦市沖宿虚空蔵  
茨城県竜ヶ崎市塗戸虚空蔵久保  
茨城県竜ヶ崎市塗戸虚空蔵  
茨城県稲敷郡阿見町石川虚空蔵  
茨城県牛久市柏田こくう蔵  
茨城県稲敷郡桜川村四箇虚空蔵  
茨城県稲敷郡桜川村甘田虚空蔵  
茨城県稲敷郡桜川村三次虚空蔵  
茨城県稲敷郡桜川村南山来虚空蔵  
茨城県稲敷郡美浦村土浦虚空蔵  
茨城県旭村箕輪虚空蔵  
茨城県鹿島郡大洋村梶山虚空蔵  
茨城県つくば市国松虚空蔵  
茨城県行方郡北浦村行戸虚空蔵下  
茨城県行方郡玉造町甲虚空蔵  
茨城県行方郡玉造町八木蒔古虚空蔵  
茨城県桜村東岡虚空蔵

茨城県西茨城郡友部町矢野下虚空蔵前  
茨城県西茨城郡友部町矢野下虚空蔵後  
茨城県竜ヶ崎市羽原拾三仏  
茨城県鹿島郡銚田町串挽十三仏  
茨城県鹿島郡銚田町徳宿十三仏  
茨城県行方郡麻生町青沼十三仏  
茨城県行方郡麻生町四鹿十三仏  
茨城県行方郡麻生町板峯十三仏  
茨城県行方郡麻生町籠田十三仏  
茨城県行方郡北浦村小貫十三仏  
茨城県行方郡北浦村小貫十三仏  
茨城県行方郡玉造町西蓮寺十三仏  
茨城県結城郡八千代町東露田十三仏  
栃木県河内郡吉田村上坪山虚空蔵  
栃木県芳賀郡真岡町西高間木虚空蔵林  
栃木県那須郡親園村宇田川虚空蔵前  
栃木県芳賀町下高根沢虚空蔵山

栃木県塩谷郡阿久津村石末十三仏

栃木県茂木町鮎田十三仏

埼玉県秩父郡高山村虚空蔵

群馬県吾妻郡大戸村手子丸虚空蔵

千葉県市原市大桶虚空蔵

群馬県碓氷郡安中駅虚空蔵

千葉県佐原市香取こくう蔵

群馬県碓氷郡坂本宿虚空蔵山

千葉県八日市場市安久山虚空蔵

群馬県碓氷郡大谷村後道東虚空蔵山

千葉県鴨川市油田虚空蔵

群馬県碓氷郡小日向村虚空蔵

千葉県鴨川市和泉虚空蔵

群馬県北甘楽郡大日向村梅木窪虚空蔵平

千葉県多古町牛尾虚空蔵

群馬県北甘楽郡小幡村光善入虚空蔵谷

千葉県成東町津辺虚空蔵台

群馬県北甘楽郡桑原村菅田虎虚空蔵

千葉県船橋市楠ヶ山町十三仏

群馬県西群馬郡金井村虚空蔵

千葉県沼南町藤ヶ谷十三仏塚

群馬県新田郡別所村虚空蔵免

群馬県東群馬郡靄光路村虚空蔵

石川県志賀町志加浦安部屋虚空蔵

群馬県緑埜郡中大塚村虚空蔵

群馬県緑埜郡保美村虚空蔵山

福井県勝山市下毛屋下虚空蔵

群馬県緑埜郡保美村虚空蔵下

福井県勝山市下毛屋上虚空蔵

群馬県南勢多郡山田村東片貝十三仏

福井県勝山市下高島虚空蔵





福井県勝山市北市虚空蔵

福井県勝山市猪野虚空蔵

福井県勝山市平泉寺上虚空蔵

福井県勝山市平泉寺下虚空蔵

長野県更級郡山平林村古虚空蔵

長野県更級郡山平林村虚空蔵

長野県更級郡石川村虚空蔵平

長野県小県郡常磐城村虚空蔵山

長野県小県郡上塩尻村虚空蔵山

長野県小県郡前山村虚空蔵

長野県北佐久郡矢島村虚空蔵

長野県北佐久郡布施村虚空蔵

長野県北佐久郡八幡村虚空蔵

長野県北佐久郡印内村虚空蔵

岐阜県揖斐郡八幡村市橋虚空蔵下

岐阜県不破郡赤坂町虚空蔵下

岐阜県不破郡赤坂町虚空蔵裏

岐阜県不破郡赤坂町虚空蔵

岐阜県大垣市赤坂町虚空蔵下

岐阜県大垣市赤坂町虚空蔵裏

岐阜県大垣市赤坂町虚空蔵

岐阜県大垣市南市橋町虚空蔵下

静岡県静岡市石部虚空蔵川

静岡県富士宮市栗倉拾三仏

静岡県富士宮市舟久保町十三仏

三重県嬉野町中川十三仏

滋賀県五個荘町旭伊野部虚空蔵

京都府宮津市獵師虚空蔵前

京都府宮津市獵師虚空蔵谷

京都府宮津市獵師虚空蔵





京都府宮津市鍛冶虚空蔵谷  
 京都府宮津市鍛冶虚空蔵宇谷  
 京都府宮津市滝馬虚空蔵  
 京都府宮津市宮村虚空蔵ケ尾  
 京都府宮津市宮村コク蔵ノ尾  
 京都府宮津市宮村コク蔵ノ裏  
 京都府宮津市惣虚空蔵  
 京都府宮津市山中虚空蔵尾  
 京都府宮津市山中コクゾウヲ  
 京都府宮津市喜多虚空蔵  
 京都府宮津市喜多コクゾウ  
 京都府綴喜郡田辺町大住虚空蔵谷  
 京都府与謝郡伊根町野村コクゾウ  
 京都府与謝郡伊根町野村コクソウ  
 兵庫県氷上郡市島町北奥虚空蔵谷  
 兵庫県氷上郡市島町北奥虚空蔵  
 兵庫県城崎郡香住町森コクゾウ  
 奈良県南葛城郡大正村西松本コクゾウ前  
 奈良県山辺郡丹波市村瀧本十三仏  
 奈良県山辺郡波多野村中之庄十三仏  
 奈良県添上郡五ヶ谷村虚空蔵（大字）  
 鳥取県日南町矢戸虚空蔵谷右平ラ  
 鳥取県日南町矢戸虚空蔵谷左平ラ  
 鳥取県日南町矢戸虚空蔵  
 鳥取県日南町矢戸虚空蔵谷入口  
 鳥取県日南町上石見虚空蔵  
 岡山県岡山市長岡村国蔵地  
 岡山県笠岡市横島虚空蔵  
 岡山県倉敷市浅原虚空蔵  
 岡山県英田町青野村コクゾウ谷口  
 岡山県英田町青野村コクゾウ谷奥  
 岡山県大佐町永富虚空蔵

岡山県牛窓町長浜村旧小津虚空蔵撫

岡山県川上村西茅部コクゾウ

岡山県八束村下福田虚空蔵後

岡山県建部町福渡虚空蔵

岡山県御津町新庄小空蔵

広島県芦品郡駄家町服部永谷虚空蔵

広島県芦品郡駄家町服部永谷虚空蔵下

広島県賀茂郡河内町戸野虚空蔵

広島県賀茂郡大和町大草虚空蔵

広島県賀茂郡福富町久芳虚空蔵

愛媛県宇摩郡上分村古宮虚空蔵

高知県土佐市永野虚空蔵

高知県中村市磯ノ川虚空蔵谷

高知県室戸市佐喜浜町虚空蔵

高知県吾川郡春野町弘岡上虚空蔵の沖

佐賀県藤津郡下宿村湯ノ田名虚空蔵谷

長崎県諫早市輪内名虚空蔵下

長崎県諫早市輪内名虚空蔵平

長崎県諫早市輪内名虚空蔵頭

大分県南海部郡佐伯村鶴谷西谷虚空蔵谷

宮崎県川南町川南虚空蔵面

鹿児島県加世田市武田虚空蔵

鹿児島県川内市宮内虚空蔵峯

鹿児島県枕崎市東鹿籠犬牟田虚空蔵

鹿児島県枕崎市西鹿籠虚空蔵平

鹿児島県枕崎市枕崎枕崎国造

鹿児島県枕崎市枕崎国造

鹿児島県穎娃町上別府コクゾウ岡

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 鹿児島県喜入町前之浜虚空蔵嶺 | 鹿児島県東郷町南瀬区小空蔵  |
| 鹿児島県笠沙町片浦コク蔵   | 鹿児島県宮之城町屋地虚空蔵岡 |
| 鹿児島県笠沙町赤生木国蔵平  | 鹿児島県郡山町厚地国蔵    |
| 鹿児島県知覧町郡虚空蔵免   | 鹿児島県知覧町郡十三     |

#### 四 虚空蔵地名の考察

虚空蔵地名の一覧と分布を、虚空蔵信仰の研究に取り込むのに二つの側面が考えられよう。一つは、その土地に刻まれた虚空蔵地名について、地籍図や聞き取りによって位置を確認しその虚空蔵地名の由来や伝承、あるいは周辺の虚空蔵寺院との関係などを個別に追求していく方法である。また一つは、個々の事例の持つ意味の上にたって分布としての意味をとらえる方法である。

以下その二側面について、小字虚空蔵地名に関して考えることにしたい。というのは、地名の最小の単位である小字地名について考察することで、地形図地名やそれ以外の「虚空蔵」に関する名称についても同様の考え方を援用することが可能であると考えるからである。

#### (一) 個々の事例としての側面

ここでは具体的に、福井県勝山市の小字虚空蔵地名を見てみたい。

次の七事例である。

勝山市下毛屋下虚空蔵

勝山市下毛屋上虚空蔵

勝山市下高島虚空蔵

勝山市北市虚空蔵

勝山市猪野虚空蔵

勝山市平泉寺上虚空蔵

勝山市平泉寺下虚空蔵

このように、一つの市域でしかも違う大字に虚空蔵地名が集中する事例は他に見られず、大変注目されたのである。この勝山市の事例は、北陸の名峰白山の越前での拠点である白山平泉寺の四至の一つにおかれた虚空蔵堂に由来するもので、本論文第四章第一節「白山にみる虚空蔵信仰」で詳説したが、本節の冒頭でも述べたように、虚空蔵地名は、その存在が即ち意味を有することからしても、一つ一つの虚空蔵地名について綿密な検討が必要になる。

## (2) 分布状況としての側面

一方、広がりとして虚空蔵地名を見ようとしたときには、小字虚空蔵地名を包含する集落に注目して考察することが出来ると考える。虚空蔵地名は信仰に關しており、それが集落のどこに位置するかももちろん大切ではあるが、生活の場としての集落内に虚空蔵という信仰要素があるということに意味を持

たせることも大切な視点となる。

小字虚空蔵地名を包含する集落の地域属性について、『歴史地名大系』が項目として取り上げている近世村落を一つの目安として考え、同書が未刊である静岡県については『日本地名大辞典』によって補い一覧表としたのが表（0・2・3）である。

このように集落の地域属性を概観すると、自然条件として山地や峠、河川や湖沼などの要素があり、人文条件として、街道、宿場など交通、中世城郭、木地や曲げ物、漆器など伝統工芸等の要素をあげることが出来る。中でも運輸・交易に関する要素が目につくように思われるので、街道・宿場・町場・市・水運の要所・河川等の渡船場の要素を含む集落についてまとめたのが表（0・2・4）である。また、そのような属性を持った集落の分布地図を図（0・2・4）に示した。

虚空蔵地名はその分布ということを考えるときに、交通という視点が特性のひとつとなることが伺えよう。近代以前において、交通はたんに人や物の動きにとどまらず情報の伝達をにない、広く文化の伝播にかかわっていた。虚空蔵地名の分布を見ると、虚空蔵信仰の伝播と受容とが虚空蔵信仰にとどまらず各時代の文化伝播に密接に関係することが予測できるのである。

本論文では、第一・二・三章においてはおもに民間信仰としての虚空蔵信仰の伝播と受容を論じ、第四・五章においてはおもに虚空蔵菩薩の信仰そのものの伝播と受容を論じることになる。



県番	県名	市町村・大字名	小字名	近世村名	集落の属性	有力寺社、文化財等	虚空蔵の有無
2	青森県	三戸郡名川町	虚空蔵	平村	八戸城下の南西、馬淵川の中流右岸の河岸段丘。	平神社、虚空蔵遺跡。	○
2	青森県	十和田市米田	虚空蔵	米田村	大不動川が東流、暮末村内に修験。	東昌寺(本尊薬師)	
3	岩手県	胆沢郡前沢町生母	虚空蔵	母体村	北上川左岸、東山街道、宿駅、町場、船着場		
3	岩手県	水沢市虚空蔵小路	虚空蔵小路	塩竈村	北上川右岸、現水沢市の中心部、「安永風土記」に虚空蔵堂が記載。	駒形神社、塩竈神社。	○
3	岩手県	江刺市田原	虚空蔵	原体村	中央部は伊手川によって開析された平地、小名に虚空蔵。大山蔵神社(元当村鎮守虚空蔵)は虚空蔵に鎮座し、正中2年(1325)当地を領した及川清勝が、自身の守本尊である虚空蔵菩薩を奉安した、応永23年(1416)再建、江刺氏より柱12本を寄進された、明治の神仏分離で現社名に改めた。		○
3	岩手県	稗貫郡大迫町外川目	小空蔵	外川目村	山間部、銚銭座。		
3	岩手県	岩手郡雫石町御明神	虚空蔵	御明神村	曲物生産の中心地、砥石。	多賀神社	
3	岩手県	岩手郡岩手町川口	虚空蔵	川口村	北上川、奥州街道・町場。	明圓寺(曹洞宗・釈迦)	
4	宮城県	伊具郡丸森町大張大蔵	虚空蔵上、虚空蔵中、虚空蔵下	大蔵村	標高200mほどの山間。	虚空蔵堂	○
4	宮城県	栗原郡花山村本沢	虚空蔵	花山村	仙北通・伝馬歩夫。	御嶽神社、花山寺跡、花山館跡、寒湯番所跡(国指)	
5	秋田県	本荘市石沢島田目	虚空蔵	島田目村	本荘藩の参勤交代路	島田目堰	
5	秋田県	雄勝郡皆瀬村川向	虚空蔵森	川向村	周囲700m級の山々、脇街道、漆器の形木。	熊野神社	
5	秋田県	河辺郡河辺町豊成	虚空蔵大台滝	豊成村	岩見川の downstream、羽州街道、渡船。	豊成神社(虚空蔵さま)	○
5	秋田県	南秋田郡若美町本内	虚空蔵下	本内村	男鹿街道		
5	秋田県	大館市花岡町	虚空蔵下夕	花岡村	大館盆地の北西部、大森川流域。	七ツ館跡、信正寺(曹洞宗・観音)、根ノ井権現(十三)	○
6	山形県	西置賜郡白鷹町黒鴨	虚空蔵山、虚空蔵森、虚空蔵森一、虚空蔵森二、虚空蔵	黒鴨村	実淵川流域、行者道(道智通・出羽三山)、米沢藩の本口番所、宿四軒・二坊。		
6	山形県	長井市小出・等	虚空蔵山	小出村	最上川左岸、扇状地、町場、長井地方の経済の中心地、六斎市。		
6	山形県	長井市五十川	虚空蔵	五十川村	最上川の左岸		
6	山形県	東置賜郡川西町時田	虚空蔵山、虚空蔵田	時田村	鬼面川左岸、宿場として町割。	壇山窯跡群(虚空蔵山の東麓)	○
6	山形県	東置賜郡高島町大舟	虚空蔵前	大舟村	黒川上流	大舟縁塚	
6	山形県	東置賜郡高島町泉岡	虚空蔵山	泉岡村	文珠山の北麓		
6	山形県	上山市小笹	虚空蔵平	小笹村		虚空蔵平遺跡	○
6	山形県	東村山郡山辺町畑谷	虚空蔵	畑谷村	白鷹山の北麓、山間の地、中越道、戦国期には最上氏領と伊達氏領の境、虚空蔵山(入会山野)		○
6	山形県	上山市(大字不詳)	虚空蔵	(不詳)			
7	福島県	いわき市平塩	虚空蔵	塩村	夏井川左岸	「塩の虚空蔵」(浄土宗金台寺)	○
7	福島県	西白河郡東村上野出島	虚空蔵	上野出島村	矢武川中流域	谷地前C遺跡、筑内古墳群、佐平林遺跡	
7	福島県	須賀川市前田川・等	虚空蔵	前田川村	阿武隈川西岸の氾濫原と北から張り出す	乙字ヶ滝遺跡	
7	福島県	須賀川市狸森	十三仏	狸森村	阿武隈高地中の山間、連絡道。		
7	福島県	福島市上野寺	十三仏	上野寺村	川の合流点、板谷峠越の米沢街道。		
7	福島県	福島市山田	虚空蔵前	山田村	集落は山麓線に沿い		
7	福島県	福島市松川町金沢	虚空蔵	金沢村	阿武隈川左岸、渡船。		
7	福島県	伊達郡国見町泉田	虚空蔵上	泉田村	中央を羽州街道、南部を奥州道中、口留番入。	虚空蔵堂(村明細)	○
7	福島県	伊達郡梁川町大関	西十三仏、東十三仏	大門村、関波村	道		
7	福島県	耶麻郡北塩原村大塩	虚空蔵	大塩村・等	大塩川の上流域、檜原峠越米沢街道、宿駅、一里塚、茶屋。木地師。		
7	福島県	耶麻郡熱塩加納村加納	虚空蔵西、虚空蔵道下	五目村・等	濁川左岸河岸段丘。木地小屋。		
7	福島県	喜多方市慶徳町新宮	虚空蔵森	新宮村	濁川西岸	熊野神社(新宮庄総鎮守・国指定)、新宮城跡。	
7	福島県	喜多方市熊倉町新合	虚空蔵森山	小沼村・等	雄国山西麓、檜原峠越米沢街道上街道		
7	福島県	河沼郡湯川村勝常	虚空蔵免	勝常村	勝常寺に因む村名、会津盆地の中央、阿賀川。	勝常寺(会津中央薬師、真言宗豊山派、薬師)会津を代表する古刹。木造天部立像(伝虚空蔵菩薩像)・国指定。	○
7	福島県	石川郡浅川町小貫	虚空蔵前	小貫村	社川の西岸平坦地、淡島信仰、宥貞上人のミイ像。		
7	福島県	耶麻郡熱塩加納村熱塩	虚空蔵西	熱塩村	押切川左岸、周囲を熱塩五山に囲まれる、古刹示現寺の門前集落、熱塩温泉の湯治場。	示現寺(曹洞宗、本尊虚空蔵、以前は真言宗)	○
7	福島県	福島市上島渡	十三仏	上島渡村	福島街道及び至米沢街道商人宿、旧荒川筋で洪水被害、山論、養蚕、古碑石仏。		
7	福島県	福島市松川町下川崎 等	十三仏	下川崎村	阿武隈川左岸、和紙の生産。		
8	茨城県	西茨城郡友部町矢野下	虚空蔵前、	矢野下村	濁沼川左岸		
8	茨城県	鹿島郡鉾田町徳宿	十三仏	徳宿村	丘陵上、七瀬川。		
8	茨城県	鹿島郡鉾田町串挽	十三仏	串挽村	北浦西岸の丘陵上		
8	茨城県	鹿島郡大洋村梶山	虚空蔵	梶山村	北浦東岸、水上交通の要所。	光福寺(真言宗豊山派・薬)	
8	茨城県	行方郡北浦村小貫	十三仏(2カ所)	小貫村	武田川の水源地		
8	茨城県	行方郡北浦村行戸	虚空蔵下	行戸村	山田川左岸		

8	茨城県	行方郡玉造町甲	虚空蔵	玉造村・等	霞ヶ浦沿岸、古代の曾尼駅。	玉造城跡、永幸寺(時宗・阿弥陀)、一閑寺(曹洞宗・釈)	
8	茨城県	行方郡麻生町筈田	十三仏	籠田村			
8	茨城県	行方郡麻生町青沼	十三仏	青沼村	中世は鹿島神宮領加納十二郷	春日神社	
8	茨城県	新治郡桜村東岡	虚空蔵	岡村	台地上		
8	茨城県	土浦市神宿町	虚空蔵	神宿村	南は霞ヶ浦に臨む	海蔵寺(曹洞宗・阿弥陀)・県指定	
8	茨城県	土浦市常名・等	虚空蔵下	常名村	中世居城	金山寺(真言宗豊山派・阿弥陀)	
8	茨城県	下館市茂田	上虚空蔵、虚空蔵道	茂田村	小貝川左岸、真壁街道沿い。		
8	茨城県	筑波郡つくば市国松	虚空蔵	国松村	筑波山西麓、山根道筋、古墳群。	虚空蔵宮(書上帳)	○
8	茨城県	稲敷郡阿見町石川	虚空蔵	石川村			
8	茨城県	稲敷郡美浦村土浦	虚空蔵	土浦村	村の南側は半島状に霞ヶ浦に突出	妙香寺(天台宗・釈迦)、大宮大神。	
8	茨城県	稲敷郡桜川村三次	虚空蔵	三次村	霞ヶ浦に面する		
8	茨城県	稲敷郡桜川村四箇	虚空蔵	四箇村			
8	茨城県	稲敷郡桜川村甘田	虚空蔵	甘田村	漁業		
8	茨城県	稲敷郡桜川村南山東	虚空蔵	山東村			
8	茨城県	稲敷郡牛久町柏田	こくろ蔵	柏田村	小野川右岸		
8	茨城県	龍ヶ崎市塗戸町	虚空蔵、虚空蔵久保	塗戸村	台地の南		
8	茨城県	龍ヶ崎市羽原町	拾三仏	羽原村	台地の南端		
8	茨城県	結城郡八千代町東露田	十三仏	東露田村	半島状台地	天満社	
8	茨城県	古河市鴻巣	虚空蔵道東、虚空蔵東	鴻巣村	御所沼に突出した半島状の台地上	虚空蔵東貝塚、竜樹院(虚空蔵さま)・古河公方ゆかり、鴻巣御所跡、徳源院(臨濟宗)・県指定。	
8	茨城県	行方郡玉造町八木蒔	古空蔵	八木蒔	霞ヶ浦沿岸		
8	茨城県	行方郡麻生町四鹿	十三仏	四鹿村			
8	茨城県	行方郡麻生町板峰	十三仏	板嶺村	蔵川左岸		
8	茨城県	行方郡玉造町西蓮寺	十三仏	西蓮寺村		西蓮寺(本尊薬師、「仏立て」行事)	
9	栃木県	大田原市宇田川	虚空蔵前	宇田川村	那須扇状地扇端部、蛇尾川右岸台地		
9	栃木県	塩谷郡高根沢町石末	十三仏	石末村	野元川流域、関街道。		
9	栃木県	芳賀郡茂木町鮎田	十三仏	鮎田村	逆川支流、水戸と茂木の往還。		
9	栃木県	芳賀郡芳賀町下高根沢	虚空蔵山	下高根沢	野元川が南流		
9	栃木県	真岡市西高間木・等	虚空蔵林	西高間木	五行川支流の段丘上		
9	栃木県	河内郡南河内町上坪山	虚空蔵	上坪山村	田川南岸の低地		
10	群馬県	吾妻郡吾妻町大戸	手子丸虚空蔵	大戸村	尾根の西側斜面、大戸道(信州道)、大戸宿が賑わった。	大戸宿:中山道・北国街道の脇往還、また草津温泉への湯治客、大戸開所跡、加部安邸跡。	
10	群馬県	碓氷郡松井田町坂本	虚空蔵山	坂本村・坂本宿	急峻な上信国境から流れ下る碓氷川・霧積川に挟まれた舌状台地中央部、西方の碓氷峠を越えて信州に通ずる中山道の宿村。		
10	群馬県	碓氷郡松井田町小日向	虚空蔵	小日向村	丘陵南側、沓瀨源に水田、丘陵縁辺部に集落。		
10	群馬県	安中市安中	安中駅虚空蔵	下野尻村	中山道沿いに町立て、一・六の市。	安中宿・中山道の宿駅	
10	群馬県	安中市大谷	後道東虚空蔵山	大谷村			
10	群馬県	甘楽郡南牧村大日向	虚空蔵平	大日向村	南牧川沿い、川の右岸を南牧道が通る。	安養寺(天台宗・阿弥陀)	
10	群馬県	甘楽郡甘楽町小幡	虚空蔵谷	小幡村	雄川が北流、近世には小幡藩の陣屋が置かれ、町場を形成。	小幡陣屋跡	
10	群馬県	富岡市桑原	菅田虚空蔵	大桑原村	中山道安中宿定助郷		
10	群馬県	藤岡市保美	虚空蔵山・虚空蔵下	保美村	神流川が北流、「和名抄」保美郷の遺称地、渡船。		
10	群馬県	藤岡市中大塚	虚空蔵	中大塚村	鮎川が西境を北流	中大塚縄文時代敷石遺構	
10	群馬県	渋川市金井	虚空蔵	金井村	三國街道の宿駅、吾妻川右岸。	金井古墳	
10	群馬県	前橋市東片貝町	十三仏	東片貝村	絹糸を前橋市へ出していた		
10	群馬県	前橋市鶴光路町	虚空蔵	今宿村	女は養蚕製糸に従事		
10	群馬県	太田市別所	虚空蔵免	別所村	低台地の西端	円福寺(高野山真言宗・不動)・新田氏ゆかり新田本宗家歴代の墓所	
10	群馬県	藤岡市保美	虚空蔵下	保美村	十国街道が南北に通る城戸宿、神流川の渡船、神流川の洪水被害、浅間焼けの被害。		
11	埼玉県	飯能市高山	虚空蔵	高山村	山村、関東三大不動の高山不動尊があることで知られる。	常楽院(真言宗智山派・軍荼利明王)・国指定	
12	千葉県	東葛飾郡沼南町藤ヶ谷	十三仏塚	藤ヶ谷村	手賀沼に流入する金山落の谷津最奥端、「なま道(鮮魚)」が通る、荷駄通行の中継地。	十三仏塚(県指定)	○
12	千葉県	船橋市楠が山町	十三仏	楠ヶ山村			
12	千葉県	香取郡多古町牛尾	虚空蔵	牛尾村	中世は牛尾郷		
12	千葉県	香取郡小見川町油田	虚空蔵	油田村			
12	千葉県	香取郡小見川町和泉	虚空蔵	和泉村			
12	千葉県	佐原市香取	こくろ蔵	香取村	丘陵、香取神宮を中心とした村。	香取神宮、新福寺(曹洞宗・十一面観音)	
12	千葉県	八日市市場市安久山	虚空蔵	安久山村	日蓮宗円静寺を中心に形成、中世には千田庄。	円静寺は当地方に日蓮宗が進出する上で重要な寺院であった。	
12	千葉県	山武郡成東町津辺	虚空蔵台	津辺村	銚子に通じる街道	津辺城跡(南に虚空蔵台の地名を伝える)	○
12	千葉県	市原市大桶	虚空蔵	大桶村	中世の城跡		
17	石川県	羽咋郡志賀町安部屋	虚空蔵	安部屋村	北前船の寄港地として栄えた。	安部屋湊	
18	福井県	勝山市下毛屋	下虚空蔵、上虚空蔵	下毛屋村	白山平泉寺四至内七ヶ村		○
18	福井県	勝山市下高島	虚空蔵	下高島村	白山平泉寺四至内七ヶ村		○
18	福井県	勝山市北市	虚空蔵	北市村	白山平泉寺四至内七ヶ村		○
18	福井県	勝山市猪野	虚空蔵	猪野村	白山平泉寺四至内七ヶ村		○

39	高知県	室戸市佐喜浜町	虚空蔵	佐喜浜村	佐喜浜川流域の広域、南東は太平洋、他地域との交流の少ない地。離回り航路の寄港地、木材積み出しの港湾。真言宗の大寺院下の職人集団居住地・大鍛冶。	佐喜浜浦：江戸初期参勤交代の海路整備、佐喜浜八幡宮、大日寺（真言宗豊山派・大日）、佐喜浜経塚、佐喜浜城跡。
39	高知県	吾川郡春野町弘岡上	虚空蔵の沖	弘岡上ノ村	西は仁淀川が南東流する、東西に中村街道、同街道の仁淀川の船渡し。	弘岡井筋、吉良城跡、八幡八幡宮。
39	高知県	土佐市永野	虚空蔵	永野村	永野川流域。天正17年(1589)の戸波郷地検帳に静亀村の虚空蔵堂がみえる。	○
39	高知県	中村市磯ノ川	虚空蔵谷	磯ノ川村	磯ノ川流域、宿毛街道。「南路志」等に虚空蔵堂がみえる。	○
41	佐賀県	藤津郡嬉野町大字下宿湯野田	虚空蔵谷	湯野田村	現嬉野町北部、長崎街道筋。	湯野田城跡
42	長崎県	諫早市天満町・等	虚空蔵下・虚空蔵平・虚空蔵頭	輪内村	多良岳南麓の緩傾斜な台地、本明川右岸の諫早市中を含む。	
44	大分県	佐伯市鶴谷	虚空蔵谷	塩屋村	佐伯湾に面する番匠川河口付近の低平地、塩焼(製塩)、佐伯城。	
45	宮崎県	児湯郡川南町川南	虚空蔵面	大池村	南北に豊後街道が通る	白髭神社、川南古墳群・国指定、
46	鹿児島県	揖宿郡喜入町前之浜	虚空蔵嶺	前之浜村	東は海に臨む、具底川河口一帯などに集落がある。	
46	鹿児島県	揖宿郡須賀町別府	コクノ園	別府村	古代の遣唐船の到着地に比定、米蔵屋敷、遠見番所。	
46	鹿児島県	川辺郡知覧町郡	虚空蔵面・十三仏	郡村	西流する麓川流域、領主仮屋および麓集落がある。	豊玉姫神社、西福寺跡、知覧麓庭園・国指定、
46	鹿児島県	川辺郡笠沙町片浦	コク蔵	片浦村	南に野間岳、北と西は海に面する。異国船遠見番所。	野間神社
46	鹿児島県	川辺郡笠沙町赤生木	国蔵平	赤生木村	中央に野間岳南麓の山並、北東は大浦湾、西は海に面する。	
46	鹿児島県	枕崎市東鹿籠	大牟田虚空蔵	鹿籠村	当村の浦は鹿籠浦と総称され、漁業・商業兼業の浦として栄えた。異国船遠見番所。	枕崎浦、塩屋八カ村、南方神社。
46	鹿児島県	枕崎市西鹿籠	虚空蔵平	鹿籠村	同上	同上
46	鹿児島県	枕崎市枕崎	国造	鹿籠村	同上	同上
46	鹿児島県	加世田市武田	虚空蔵	武田村	加世田川が北東流、麓集落。	別府城、日新寺跡。
46	鹿児島県	日置郡山町厚地	国蔵	厚地村	山地・丘陵の斜面	花尾神社
46	鹿児島県	薩摩郡東郷町南瀬	小空蔵	南瀬村	蛇行して西流する川内川北岸	香積寺跡
46	鹿児島県	薩摩郡宮之城町屋地	虚空蔵岡	屋地村	南西流する川内川東岸、宮之城島津氏の領主仮屋が当村中央に置かれ、周囲に麓、各方面への街道。当村の麓は伊佐地方の交通の要であった、川内川の渡船場、市町。	虎居城跡、信教寺(真宗・阿弥陀)
46	鹿児島県	川内市宮内町	虚空蔵峯	宮内村	川内川右岸	新田神社・国指定

33	岡山県	真庭郡川上村西茅部	コクゾウ	西茅部村	旭川右岸に東西に広い村域、大山往来、鳥井峠は大山を遙拝する所、郷原は大山往来の宿場町(博労宿)で街村。郷原漆器、木地師。	茅部神社	
33	岡山県	邑久郡牛窓町長浜	虚空蔵撫	小津村	錦海湾の最奥部、海に迫った丘陵上、塩田。		
33	岡山県	御津郡御津町新庄	小空蔵	新庄村	新庄川中流の小盆地		
33	岡山県	御津郡建部町福渡	虚空蔵	福渡村	旭川に面する、明徳3年(1394)の文書に「深渡虚空堂」とある。中世末には町場化、渡船、津山往来の馬継・宿場、旭川を上下する高瀬舟の番所。	妙福寺(日蓮宗・一塔兩尊像)、八幡神社。	
33	岡山県	岡山市長岡	国蔵地	長原村	山陽道が通り、茶屋があった。		
33	岡山県	倉敷市浅原	虚空蔵	浅原村	山村、南面谷間、平安時代以来「浅原千坊」と俗称される寺坊群とともに開けた古い集落。	安養寺(高野山真言宗・阿弥陀)・国指定	
33	岡山県	笠岡市横島	虚空蔵	横島村	寛永の備中国絵図には孤島として描かれる。		
33	岡山県	阿哲郡大佐町永富	虚空蔵	永富村	小坂部川の左岸、東城往来。		
33	岡山県	八束村下福田虚空蔵後	虚空蔵後	下福田村	蒜山三座の中央中蒜山の南面裾野、旭川の水源地。		
34	広島県	福山市駅家服部永谷	虚空蔵・虚空蔵下	服部永谷村	服部川が貫流する細長い谷	北塚古墳	
34	広島県	賀茂郡大和町大草	虚空蔵	大草村	椋梨川支流に展開、中世は沼田庄の本庄から新庄への交通上の要地、古銭三千枚が出土、内陸交易の中継的小市場が形成された可能性。	安国寺跡	
34	広島県	賀茂郡福富町久芳	虚空蔵	久芳村	鷹ノ巣山東南麓、沼田川の本支流域。	岡山八幡神社、正覚寺(真宗・阿弥陀)	
34	広島県	賀茂郡河内町戸野・他	虚空蔵	戸野村	戸野川流域		
38	愛媛県	川之江市上分町	虚空蔵	上分村	土佐・阿波に通じる谷口集落として山物の集散地として繁栄、土佐道・阿波道沿いに商家などの並ぶ街村。		
39	高知県	室戸市佐喜浜町	虚空蔵	佐喜浜村	佐喜浜川流域の広域、南東は太平洋、他地域との交流の少ない地。難回り航路の寄港地、木材積み出しの港湾。真言宗の大寺院下の職人集団居住地・大鍛冶。	佐喜浜浦:江戸初期参勤交代の海路整備、佐喜浜八幡宮、大日寺(真言宗豊山派・大日)、佐喜浜経塚、佐喜浜城跡。	
39	高知県	吾川郡春野町弘岡上	虚空蔵の沖	弘岡上ノ村	西は仁淀川が南東流する、東西に中村街道、同街道の仁淀川の船渡し。	弘岡井筋、吉良城跡、八幡八幡宮。	
39	高知県	土佐市永野	虚空蔵	永野村	永野川流域。天正17年(1589)の戸波郷地検帳に静亀村の虚空蔵堂がみえる。		○
39	高知県	中村市磯ノ川	虚空蔵谷	磯ノ川村	磯ノ川流域、宿毛街道。「南路志」等に虚空蔵堂がみえる。		○
41	佐賀県	藤津郡嬉野町大字下宿湯野田	虚空蔵谷	湯野田村	現嬉野町北部、長崎街道筋。	湯野田城跡	
42	長崎県	諫早市天満町・等	虚空蔵下・虚空蔵平・虚空蔵頭	輪内村	多良岳南麓の緩傾斜な台地、本明川右岸の諫早市を含む。		
44	大分県	佐伯市鶴谷	虚空蔵谷	塩屋村	佐伯湾に面する番匠川河口付近の低平地、塩焼(製塩)、佐伯城。		
45	宮崎県	児湯郡川南町川南	虚空蔵面	大池村	南北に豊後街道が通る	白髭神社、川南古墳群・国指定、	
46	鹿児島県	揖宿郡喜入町前之浜	虚空蔵嶺	前之浜村	東は海に臨む、貝底川河口一帯などに集落がある。		
46	鹿児島県	揖宿郡額娃町別府	コクノ岡	別府村	古代の遣唐船の到着地に比定、米蔵屋敷、遠見番所。		
46	鹿児島県	川辺郡知覧町郡	虚空蔵面・十三仏	郡村	西流する麓川流域、領主仮屋および麓集落がある。	豊玉姫神社、西福寺跡、知覧麓庭園・国指定、	
46	鹿児島県	川辺郡笠沙町片浦	コク蔵	片浦村	南に野間岳、北と西は海に面する。異国船遠見番所。	野間神社	
46	鹿児島県	川辺郡笠沙町赤生木	国蔵平	赤生木村	中央に野間岳南麓の山並、北東は大浦湾、西は海に面する。		
46	鹿児島県	枕崎市東鹿籠	大牟田虚空蔵	鹿籠村	当村の浦は鹿籠浦と総称され、漁業・商業兼業の浦として栄えた。異国船遠見番所。	枕崎浦、塩屋八カ村、南方神社。	
46	鹿児島県	枕崎市西鹿籠	虚空蔵平	鹿籠村	同上	同上	
46	鹿児島県	枕崎市枕崎	国造	鹿籠村	同上	同上	
46	鹿児島県	加世田市武田	虚空蔵	武田村	加世田川が北東流、麓集落。	別府城、日新寺跡。	
46	鹿児島県	日置郡郡山町厚地	国蔵	厚地村	山地・丘陵の斜面	花尾神社	
46	鹿児島県	薩摩郡東郷町南瀬	小空蔵	南瀬村	蛇行して西流する川内川北岸	香積寺跡	
46	鹿児島県	薩摩郡宮之城町屋地	虚空蔵岡	屋地村	南西流する川内川東岸、宮之城島津氏の領主仮屋が当村中央に置かれ、周囲に麓、各方面への街道。当村の麓は伊佐地方の交通の要であった、川内川の渡船場、市町。	虎居城跡、信教寺(真宗・阿弥陀)	
46	鹿児島県	川内市宮内町	虚空蔵峯	宮内村	川内川右岸	新田神社・国指定	

表0・2・4 街道と関係する集落・一覧

	県名	市町村・大字名	小字名	近世村名	虚空蔵の有無	街道	町場	宿場	市	水運の要所	主要河川	渡船	木地曲物漆器
1	岩手県	胆沢郡前沢町生母	虚空蔵	母体村		○	○	○		○	○		
2	岩手県	岩手郡岩手町川口	虚空蔵	川口村		○		○			○		
3	宮城県	栗原郡花山村本沢	虚空蔵	花山村		○							
4	秋田県	本荘市石沢鳥田目	虚空蔵	鳥田目村		○							
5	秋田県	雄勝郡皆瀬村川向	虚空蔵森	川向村		○							○
6	秋田県	河辺郡河辺町豊成	虚空蔵大台滝	豊成村	○	○							
7	秋田県	南秋田郡若美町本内	虚空蔵下	本内村		○							
8	山形県	西置賜郡白鷹町黒鴨	虚空蔵山 他	黒鴨村		○	○						
9	山形県	長井市小出・等	虚空蔵山	小出村		○		○	○		○		
10	山形県	東村山郡山辺町畑谷	虚空蔵	畑谷村	○	○							
11	福島県	須賀川市狸森	十三仏	狸森村		○							
12	福島県	福島市上野寺	十三仏	上野寺村		○							
13	福島県	伊達郡国見町泉田	虚空蔵上	泉田村	○	○							
14	福島県	耶麻郡北塩原村大塩	虚空蔵	大塩村・等		○	○						○
15	福島県	喜多方市熊倉町新合	虚空蔵森山	小沼村・等		○							
16	福島県	福島市上鳥渡	十三仏	上鳥渡村		○	○						
17	茨城県	下館市茂田	上虚空蔵 他	茂田村		○							
18	茨城県	筑波郡つくば市国松	虚空蔵	国松村	○	○							
19	栃木県	塩谷郡高根沢町石末	十三仏	石末村		○							
20	栃木県	芳賀郡茂木町鮎田	十三仏	鮎田村		○							
21	群馬県	碓氷郡松井田町坂本	虚空蔵山	坂本村・等		○	○						
22	群馬県	安中市安中	安中駅虚空蔵	下野尻村		○	○	○	○				
23	群馬県	甘楽郡南牧村大日向	虚空蔵平	大日向村		○							
24	群馬県	渋川市金井	虚空蔵	金井村		○	○						
25	群馬県	藤岡市保美	虚空蔵下	保美村		○	○					○	
26	千葉県	東葛飾郡沼南町藤ヶ谷	十三仏塚	藤ヶ谷村	○	○							
27	千葉県	山武郡成東町津辺	虚空蔵台	津辺村	○	○							
28	長野県	北佐久郡浅科村八幡	虚空蔵	八幡村		○	○						
29	長野県	北佐久郡望月町布施	虚空蔵	牧布施村等		○							
30	長野県	北佐久郡望月町印内	虚空蔵	印内村		○							
31	長野県	上田市常磐城	虚空蔵山	常磐城村		○							
32	岐阜県	大垣市赤坂町	虚空蔵 他	赤坂村	○	○	○						
33	静岡県	静岡市石部	虚空蔵	石部村		○							
34	三重県	一志郡嬉野町中川	十三仏	小川村		○							
35	奈良県	御所市東松本・元町	コクゾウ前	松ノ本村		○		○					
36	鳥取県	日野郡日南町矢戸	虚空蔵 他	矢戸村		○				○			
37	鳥取県	日野郡日南町上石見	虚空蔵	月瀬村・等		○							
38	岡山県	英田郡英田町青野	コクゾウ谷口 他	青野村		○							
39	岡山県	真庭郡川上村西茅部	コクゾウ	西茅部村		○	○				○		○
40	岡山県	御津郡建部町福渡	虚空蔵	福渡村		○	○	○		○	○	○	





第一章 十三まいり信仰の伝播と受容



## 第一節 十三まいりの信仰の成立

### 一 はじめに

昭和五十年（一九七五）の春から秋にかけて、私は関西大学民俗研究会の一員として、兵庫県多紀郡篠山町（現在は篠山市）知足の民俗調査に参加した。篠山盆地の北には、かつて吉野と勢力を争ったという修験道の山、多紀アルプスが横たわっている。知足はその多紀アルプスにくいこんだ谷筋である黒岡川にそった山あいの村である。かつて、修験道が盛んであったところには、宿坊があった所とも伝える。

この知足の村は「こくうぞう」を氏神として祀っている。土地の人は気やすく「こくぞうさん」と呼んでいる。祭礼は十月十一日でこの日は近隣八ヶ村の氏神である大売神社の祭礼でもあり、知足の人々は午前中に大売へ詣り、午後はこくうぞうに集まってくる。

はじめ、菩薩である虚空蔵が氏神として信仰されていることに興味を覚えたが、土地の長老である七十七歳のおじいさんから「知足の神社にある虚空蔵は、年よりの話によると京都の嵐山からいただいたもの。年番の時に御神体を見たが木ぼりの質素なものだった」という話を聞いてから、この虚空蔵の由来を追いかけてみようと思いついた。

### 二 嵯峨虚空蔵の由来

嵐山の虚空蔵というところ、『今昔物語集』卷十七におさめられた「比叡山僧、依虚空蔵助得智語第卅三」が思い出される。学問の志ありといえども遊びたわぶれに心を入れて、学問することのない若き僧は、常に法輪に詣で、虚空蔵菩薩に「オヲ付ケ、智ヲ令有ヨ」と祈っていた。しかるに虚空蔵菩薩は「女ノ身ト変ジテ」僧に学問を勧めたおかげで、やがて比叡山においてやんごとなき学生になったという話である。若き僧が常に詣でたという法輪とは、現在も渡月橋の西、下嵯峨にある智福山法輪寺のことであった。そして、この法輪寺の虚空蔵信仰は同じ『今昔物語集』卷十一「□□建法輪寺語第卅四」にもおさめられていたと考えられ、なかなか有名なものであったらしい。

法輪寺については、仏教全書の寺誌叢書の中に応永二十一年（一四一四）成立の『法輪寺縁起』が収録されているので、これを使って法輪寺の虚空蔵菩薩について述べておきたい。<sup>(1)</sup>

#### 『法輪寺縁起』

右寺者、道昌僧都之建立、(略)道昌者、讃岐国香河郡人、弘法大師御弟子、俗姓泰氏、(略)天長五年就神護寺僧都弘法大師登灌頂壇受真言大法、然後為修虚空蔵求聞持能滿諸願法尋求勝驗之地、

大師数日、於葛井寺今法輪寺可修之、彼山靈瑞至多、勝驗相応之地也、仏徳載于挺、利益遍于四海云々、仍同六年参籠百ケ日、修求聞持法、

夏同五月之比、皓月隱西山之後、明星出東天之暁、奉拝明星汲二闕伽水之处、光炎頓耀、宛如電光、恠而見之、明星天子来顕、虚空蔵菩薩現袖、

非画非造、如縫、如綺、雖経数日其体不滅、尊像巖然、異香芬馥、是則生身御体、奇特靈像也、

誰緩欽仰之誠、

於是道昌造虚空藏形像、奉納件影像於彼木像之中、則於神護寺弘法大師供養之(以下略)

比叡山の若き僧に、「女ノ身ト変ジテ」学問をすすめた虚空藏菩薩は、道昌作と伝えるものであった。『今昔物語集』卷十一「□□建法輪寺語第卅四」の欠字部分は「道昌」の二字を補うべきだと指摘されている<sup>(2)</sup>。

古代仏教においては、虚空藏は求聞持法の本尊として信仰をあつめていた。そして、求聞持法が宗門宗派にこだわらず、広く学問を志す者が第一に修すべき法であった点に注目しなければならない<sup>(3)</sup>。

『続日本後紀』承和二年(八三五)三月廿一日の条には、空海が、

十八遊学槐市、時有一沙門、呈示虚空藏□聞持法、其経説、若人依法読此真言一百万遍、乃得一  
切教法文義暗記、於是信大聖之誠言

と記されている。この話は『三教指帰』序文にもある有名な話であって、この後、真言密教の世界では空海との関係から虚空藏菩薩が大切に扱われる。道昌もやはり、そのような門下生の一人であった。そもそも虚空藏菩薩はバラモン教においては天の神であり、地の神である地蔵と一対となって信仰されてきた。中国を経て日本に伝わった虚空藏信仰が、やはり地蔵と対となっていたことは、道昌作と伝える太秦広隆寺の阿弥陀如来の両脇侍が虚空藏・地蔵であるのをはじめ、初期の虚空藏が地蔵と一組で造像される例の多いことから知られる<sup>(4)</sup>。

ところが、浄土教、末法思想の流布の中で、地蔵は無仏の時代、すなわち釈尊入滅の後五十六億七千万年たつて弥勒菩薩が龍華三会を催すまでの間、衆生を救済するとの信仰が貴族のみならず広く民衆の

中に広まってゆくのである。『今昔物語集』卷十七は、まさに地蔵の巻ともいえるもので卅二話の地蔵利益の話があるのに対し、虚空蔵の利益については先に紹介した一話をのせるだけである。むしろ同じ『今昔物語集』卷十一「道茲亘唐伝三論帰来、神叡在朝試語第五」にみられるように、僧の自然智を得るための虚空蔵信仰が一般的であった。虚空蔵菩薩は寺の中にとどまって、僧侶の個人的信仰の対象として存在したと考えられる。

### 三 十三まいり

地蔵菩薩の信仰が民衆の中に定着化していったのに対して、虚空蔵菩薩は寺の堂の中に納まって、僧侶によって大切に守られてきた。それでも知足の虚空蔵のように、本来の利生は忘れられているにしても民衆の中に根をおろしている姿を無視できないと思う。知足ではすでに利生は忘れられている。しかし、そのもとと伝える嵯峨虚空蔵は、現在「十三まいり」という民衆の信仰によって支えられている。「十三まいり」とは十三歳になった男女が虚空蔵に福と智慧を祈るものであるが、中でも嵯峨虚空蔵に対する信仰が中心であろう<sup>(5)</sup>。西角井編の『年中行事辞典』によると、もとは境内で十三種の菓子を売り、参詣人はこれを買って虚空蔵にそなえて後これを持ち帰って家中のものに食べさせたという。また渡月橋を渡りおわるまでに振り返ると、授かった智慧を返してしまうとあって振り返らない風は今でも守られている。現在は四月十三日が大祭であるが、従来は三月十三日であった。

筆者が法輪寺をおとずれたのは、紅葉もさかりをすぎた十一月も末の休日のことである。寒さを感じ

させる小雨の降る日であったにもかかわらず、境内は年ごろの子供達でにぎわっていた。虚空蔵菩薩への願いを漢字一字で墨で書きつけるのであるが、さすがに『智』とか『学』とかという字を書く者が多いようである。女の子の中には『美』と書くものもいた。年齢が十三歳で、大祭が三月あるいは四月の十三日であるという、「十三」という数字は虚空蔵菩薩の縁日が十三日であることに由来すると思われるが、お参りする人の中では、十二支が一巡する故という説明も聞かれた。

#### 四 室町時代の法輪寺信仰

十三まいりの風習がさして古くさかのぼれないことは、『年中行事辞典』で、「起源は比較的新しく、安永二年（一七七三）が始であるという」と指摘されている。江戸時代の資料を検討する前に『実隆公記』によって、室町時代の法輪寺の信仰について一瞥しておこうと思う。三条西実隆は当時の文化界を代表する人物であり、また書をよくしたという。もし室町期の貴族の中に法輪寺「十三まいり」の前提となるような行事があるならば、実隆が関係する可能性が大きいと思うからでもある。

彼の二十歳から八十歳に及ぶ日記の中で散見する法輪寺の記事には、「十三まいり」と関係する積極的な記載はみられない。実隆は毎年七月上旬に、両親の墓へ参るのを常としていた。父の墓は嵯峨二尊院に、母の墓は志野坂にあったが、その帰路に法輪寺にも立ちよっている。例えば延徳三年（一四九一）七月十二日の条には次のような記載がある。

向嵯峨二尊院墳墓、謁長老房、於真乘院寮聊休息、便路詣清涼寺、法輪寺、太秦寺、誓願寺、

永觀堂等、如法曉天出立、仍歸路昼時分也、

『実隆公記』の中にみられる虚空蔵菩薩の信仰は、智福とか技芸とかの面ではなく、十三仏信仰の十三回忌の仏として認識されている。例えば永正元年（一五〇四）十月十四日母親の三十三回忌の記載によると、追善として新図十三仏尊像一鋪を奉納したのをはじめ、光明真言随求陀羅尼と共に、虚空蔵菩薩咒を五千反奉唱している。又、延徳二年（一四九〇）十月廿日の条では、故相公羽林三十三回忌の作善目録の第一として、虚空蔵菩薩像一軀を造立する旨あげている。

以上『実隆公記』の中でみられる法輪寺・虚空蔵菩薩の信仰を検討したが、「十三まいり」に結びつく要素は見出せなかった。

次に法輪寺中興の祖として活躍した恭畏について触れておこう。

法輪寺が昭和十二年（一九三七）に発行した『虚空蔵法輪寺要誌』によると、恭畏は永禄八年（一五六六）京都西院村に生れ出家して広隆寺乗全に師事し、内典を学び顕密の大義に通じ、さらに南都諸大寺を回歴して三論、華嚴、法相、戒律等を研学したという。法輪寺に来てからは慶長二年（一五九八）日本大勸進の綸旨を賜った。

嵯峨木上山法輪寺、空亘光陰、既逮破壊之处、淨侶頻嘆、而興滅繼絶、為補其闕略、慈悲之輩、所奉加懇志之至也、吾朝者雖神国、仏法東漸之間、不顧難行、早速致再興之沙汰者、忠功以何加之者、依天气執達如件。

慶長二年一月二十四日

頭右中弁

## 法輪寺別当恭畏法印御房

慶長七年（一六一三）には都鄙に勧進して堂塔伽藍の再建に成功している。この時、後陽成天皇勅額を賜わり、依って木上山の旧号を智福山とあらためた。恭畏は平生より名山聖跡に遊び、

金峰、葛城、富士、白山等の高嶮を経行せざるなし、西遊して安芸嚴島に寓して求聞持を修行し、又日向、薩摩、大隅三国を行脚すること五年

に及んだという。

応仁の大乱によつて荒廃した寺院の復興には、驚くべき行動力をもった僧の出現が必要であった。法輪寺の復興は、恭畏の活躍によるところが大きいのである。次に、江戸時代の法輪寺の動きを追いかけてみたい。

## 五 「十三まいり」の成立

この章では、『京童』以下続々と発刊された京都の地誌、社寺案内記を検討することで、法輪寺の虚空蔵信仰に「十三まいり」の習俗が定着していく過程を考察することにした。明暦四年（一六五九）『京童』が発刊され、観光のために京都を訪ずれる者ばかりでなく、京都の町の人にも読まれたらしいことは、応仁の乱以降の復興が一段落し、社寺参拝が盛んになっていたことを思わせる。

さて、この種の地誌類を資料として扱うには、慎重を期す必要があるかと思う。それで「十三まいり」の成立という主題からはずれるが、法輪寺に関する記載のすべてについて検討を加えてゆきたい。

ここでは主として光彩社版二十巻本の『新修京都叢書』を利用し、他からも適宜補った。

(イ) 虚空蔵菩薩の由来

これは、法輪寺の虚空蔵菩薩の由来を道昌との関連で説明したもので、法輪寺の説明として一番基本的な話である。その内容については『法輪寺縁起』を使って先に紹介してあるが、『山城名勝志』のように丹念に原典をあげたものから『京内まいり』の

元明天皇和銅六年に釈道昌開基本尊虚空蔵

という短くまとめられたものまで一括してこの項目で扱うことにした。

(ロ) 道昌伝

これも『法輪寺縁起』をもとにしたらしいが、先にあげたものでは省略してあるので、ここでは『洛陽名所集』から引用しておく。

釈道昌は、秦氏にて讃州香河の人なり。幼稚の頃より、三論を学び東大寺にゆき具足戒を受け、また弘法にしたがひ、灌頂壇にのぼり、天長七年に内闕にして仏名懺悔導師せし折ふし、帝昌に帝王と臣庶と、庖宰の罪いづれかおもからんや、とはせたまふめれば、昌あからさまにこたへたてまつりて、先帝には山沢の飛走かずかずをとり、いろいろにさき、あざらけき一膳をすすめぬ。臣はやや少余にて口腹をたすくるまで見えたりさてぞ帝の罪はおもく臣はかろし覚え侍りぬよし、奏言なほおろそかならねば、しかしより虞禁もゆるく庖供をもはぶき給ふとぞ。



初承和中に大井河の水溢れみちけるに昌ひとり、いせきつくらん事もよほし侍るに、衆人子のごとくきたりて、いく日なくととのひけると也。みな人行基菩薩を見侍るよしいふとぞ。

なお表（1・1・1）においては、「道昌の年譜」、「庖宰の罪」、「大井河の洪水」の三つに分類しておいた。

（ハ） 鎮守

これも、同じく『法輪寺縁起』によったと思われる。『山名城勝志』により引用する。

南法華寺古老伝云山城ノ国嵯峨法輪寺縁起云法輪寺鎮守者法幢法護大菩薩明星之垂跡本地虚空蔵菩薩也崇神天皇之御宇依託宜被崇大和国壺坂寺畢其後天平年中就行基菩薩来止当山仍行基菩薩構小社所被崇也

（ニ） 道命の法花

この話は『縁起』にはないが『今昔物語集』卷十二「天王寺別当、道命阿闍梨語第卅六」によったと思われる。『京師巡覧集』より引用する。

道命在此寺読法花、金峯、熊野、住吉、松尾諸神等来而聴玉フ

以上みてきた（イ）（ニ）の話は、それぞれ原典をたしかめうるものであった。次から紹介する話は原典が不明である。というよりは、もともと法輪寺にあった信仰ではなく、のちになってなんらかの理由

によつて法輪寺に付加されたと考えられるものである。

(ホ)日蓮上人と左甚五郎

『都名所車』によつて紹介すると左のようになる。

日蓮上人も三七日籠給ひて法花の宗門をひろめ給ふ、ちかくは左の甚五郎百日籠りて靈夢をうけ日本に彫物師の名人といへり則御本尊の御厨子の龍は甚五郎が細工といへり

(ヘ)虚空蔵の富

『諸国年中行事』には(6)、

正月十三日 さが虚空蔵の富

と記載されている。同書の三月十三日の条には法輪寺関係の記事は見出せない。

(ト)こもり堂

『都名所図会』には参籠堂として興味深い話をのせる。

都の工職人この所に籠り、一七日断食し、滝に垢離し、本尊に智福を祈る。近年断食の輩つねに絶え間あらず。

また、(ホ)としてあげた日蓮の話のをのせる『山城名所寺社物語』には、『都名所車』と同一内容の話の後に、

当寺は智福山とて智恵と福をさづけんとの御せいがん故今も御堂に寵人おほしと述べている。

(チ)十三まいり

まず『都林泉名所図会』<sup>(7)</sup>

近年、下嵯峨法輪寺に、三月十三日、十三歳なる男女都鄙より来りて、群集大かたならず。本尊虚空蔵菩薩に智恵を貰ふとて、年々に増て来る也。これを十三参といふ。

つぎに『年中故事』三月十三日の条<sup>(8)</sup>、

当本尊虚空蔵菩薩へ、男女十三歳の者今日参詣すれば、福德の恵みを授け給ふと、大に群参す、大坂殊に多し。今日境内にて十三品の菓子を売る、参詣の人は是を求めて本尊へ備へて、児どもへ食わしむ。

是の参詣古きことにあらず、四十年余りにて近年別して盛んなり、本尊十三日の縁日ゆへに云へり。是の寺及近辺嵐山の桜花盛りの折なれば、都鄙の老若大井川の辺にて遊獵し、春色を興ず、いわん方なし。

最後に『京城勝覧』(再刻版)をあげる<sup>(9)</sup>

近年三月十三日、十三歳になる都の男女参詣する事おびただし、是を十三まいりといふ。

『京童』から『年中故事』に至るおよそ百五十年間にわたる法輪寺に関する伝承を調べてきた。そして、それぞれの本の成立年代と内容を表(1・1・1)として次にあげておく。このように並べてみる

(表1・1・1)

## 近世の名所案内等にみられる法輪寺の伝承

			(イ)	(ロ)			(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)	(ト)	(チ)
			虚空蔵由来	年譜	庖宰の罪	大井河の洪水	鎮守	道命の法花	日蓮と左甚五郎	虚空蔵の富	こもり堂	十三まいり
1	京童	1658年	○									
2	洛陽名所集	1659	○	○	○	○						
3	扶桑京華志	1665	○	○		○						
4	出来齋京土産	1677	○	○	○	○						
5	京師巡覧集	1679	○	○				○				
6	菟芸泥赴	1684	○	○								
7	京羽二重	1685	○									
8	日次紀事	1685	(記載なし)									
9	雍州府志	1686	○									
10	近畿歴覧記	1673～87	○									
11	京内まわり	1708	○									
12	山城名勝志	1711	○	○			○					
13	都名所車	1714							◎			
14	山城名所寺社物語	1716～35							◎		◎	
15	諸国年中行事 ※1	1717								◎		
16	山城名跡巡行志	1754	○									
17	京城勝覧(再刻)	1784										◎
18	都名所図会(再刻)	1786	○								◎	
19	都林泉名所図会 ※2	1799										◎
20	年中故事 ※1	1800										◎

○は、『法輪寺縁起』など出典が明かな事項。

◎は、出典が明かでない事項。

<『新修京都叢書』(光彩社・20巻本)による。但し※1は『民間風俗年中行事』(国書刊行会、1916年刊)、※2は『都林泉名所図会』(柳原書店、1975年刊)による。>

と、一冊一冊の本の内容だけでは理解しえない流れを読みとることができよう。

まず第一にいえることは、法輪寺に対する信仰が虚空蔵菩薩から離れられないことである。『今昔物語集』の世界から一貫して虚空蔵の法輪寺として存在してきたことは、再認識しておく必要があるろう。

第二として、正月十三日の「虚空蔵の富」に注目しなければならぬ。これが、虚空蔵菩薩が民衆の利益を具体的に代表した記事であるからだ。『諸国年中行事』の成立から若干さかのぼる元禄四年（一六九二）卯月十九日に、松尾芭蕉は嵯峨野に遊んでいる。その時の印象を『嵯峨日記』には<sup>(10)</sup>、

　　午半臨川寺二詣ズ。大井川前二流て、嵐山右に高く、松の尾里につづけり。虚空蔵に詣ル人往かひ多し

と、記している。すでにこの頃から嵯峨虚空蔵への参詣者の多かつたことが知られる。

第三として、「十三まいり」の成立が享保年中（一七一六～一七三六）からさかのぼるとは考えにくいことがある。次になぜ日蓮と左甚五郎が法輪寺と結びついたのかを考えてゆきたい。

## 六 日蓮宗と虚空蔵信仰

日蓮は貞応元年（一一二二）安房で生れ、十二歳にして清澄山にのぼっている。若い時には京都へ遊学したこともあり、その際法輪寺に参籠した可能性が全くないわけではない。しかし、ここではその可能性について考えるのではなく、『法輪寺縁起』には書いていない話が、この法輪寺と結びついて語られるようになる背景を考えなければならぬ。

結論からいうなら、日蓮もやはり虚空蔵求聞持法を修していたのである。天福元年（一二三三）十二歳の時、清澄寺に入り道善の門下となった。彼は虚空蔵堂に安置されていた虚空蔵菩薩の宝前に於て、日本第一の智者となさしめ給えという大願をたてる。そして寺の経蔵などに収蔵されている経論について広く学び、師について疑いを質したのではあるが、なにぶん遠国の寺である故に経論も完備しておらず、真の求道修学の人もいなかったもので、二つの大きな疑問、「寿永・承久の事変で王位にあるものが遠島されたのはなぜか」「仏は釈尊一人なのに、多くの宗派にわかれているのはなぜか」は、なかなか解決できそうになかった。それ故に、「日本第一の智者となさしめ給へ」という虚空蔵菩薩への祈願を益々切実にしていったというのである<sup>(1)</sup>。

実際『善無畏三蔵鈔』には<sup>(2)</sup>、

幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云く、『日本第一の智者となし給へ』云々。虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給ひて、明星の如くなる智徳の宝珠を授けさせ給ひき、諸宗諸論の失をわきまふる事は虚空蔵菩薩の御利生、本師道善御房の御恩なるべし

と記している。さらに『清澄寺大衆中』においても<sup>(3)</sup>、

生身の虚空蔵菩薩より大知恵を給はりしことありき。『日本第一の智者となしたまへ』と申せしことを、不便とや思しめしけれん。明星の如くなる大宝珠を給ひて左の袖に受けとり候ひし故に、一切経を見候ひしかば、八宗並びに一切経の優劣ほぼ是を知りぬ。

とある。

『善無畏三蔵鈔』は日蓮四十九歳、『清澄寺大衆中』は五十五歳の時の回想であるが、日蓮にとって虚

空蔵菩薩は単に求聞持の本尊として苦業をなつかしむだけでなく、自己の教理の完成に大切な役割りを果たしたと考えられている。『都名所車』『山城名所寺社物語』の編者はこの日蓮の虚空蔵信仰を知っていた上で、法輪寺の虚空蔵信仰とだぶらせたと思わなければならない。

ところで、日蓮の参籠の話を法輪寺と結合させて説明した場合に、それをすなおに受け取る基盤が京都の町にあったのであろうか。『都名所凶会』の大光山本圀寺において、日蓮の伝記をのせて、

幼稚より才賢にて常に虚空蔵を祈る。ある夜の夢に老僧来り、手に明星の如くなる宝珠をささげて授与す。これによりて一を聞いて十を悟れり

と、彼の虚空蔵信仰についてもふれている。京都の町における日蓮宗の動きを考えあわせてみると、法輪寺の日蓮参籠の話が案外真実として受け取られる可能性が強かったとも思える。

日蓮と法輪寺が「虚空蔵」によって結合したことは、以上の考察により納得できるであろう。

さらにもう一つ、日蓮宗が法輪寺と関係する点が見いだせる。それは先にも指摘した正月十三日の虚空蔵の富である。十三日が虚空蔵菩薩の縁日であることはすでに述べてあるが、又一方において、十三日は日蓮上人忌でもある。

『日次紀事』を順にみてゆくと、

正月十三日、日蓮上人忌、正当忌日十月也今日宗門寺院多有説法、本禅寺並本門寺日蓮像開帳

四月十三日、日実上人忌、日蓮宗立本寺開基也

六月十三日、妙蓮寺虫払、後柏原院宸筆法花経八卷殊精絶也

十月十三日、日蓮御影講当日、弘安五年今日寂宗門寺院有説法読一妙満寺所有之紀州道成寺古鐘今

日使参詣人見之

十一月十三日、日像上人忌、康平元年今日寂日蓮法孫而洛陽妙顯寺妙賞寺立本寺等日像派修之  
というように、十三日が日蓮宗と関係の深い日であると思える。

次に、日蓮と左甚五郎の関係を考えてみよう。これは日蓮宗が主に商工人層の間に広まっている事実  
によつて説明がつくと思える。『都名所図会』で左甚五郎の記事をさがしてみると、

本能寺、法華宗にして勝劣派なり。方丈の前の門は聚楽城よりこゝに移す。(彫物花美なり、左甚  
五郎の作とぞ)

具足山妙覚寺、法華宗にして、開基は日実上人なり。(祖師)堂は飛驒の工造立して、恰好比類なし。  
というように、やはり日蓮宗との関連がうかがえる。

七 結び

現在の法輪寺では十一月十三日が漆祖漆器守護祭である。この靈現について<sup>1)</sup>、

文徳天皇第一皇子惟喬親王は我邦に於ける漆器製法の未だ完全ならざるを慨歎し給ひ、当山に参籠  
し本尊に祈誓し、夢に高僧より伝授して漆下地、磨出法、継漆法等を完成し給ふ。爾来漆器製法の守  
護尊として漆器商家並其製造人は、毎月十三日報恩講を設けて本尊を供養し崇信すること現今各地に  
盛大なり。俗に継漆をコクソと称するは虚空蔵漆の転託せしなりと云ふ。

と述べているのである。



真言宗の名刹である法輪寺において、このような職工集団の信仰が定着するためには、虚空蔵信仰をなかだちとした日蓮宗との結合が必要であった。そして、職工集団の参籠と「十三まいり」の成立とを同一基盤の上で論議するだけの資料はもたないとしても、「日蓮と左甚五郎」「工職人の参籠」「十三まいり」を京都の商工人層の成長、ことばを変えれば町衆の形成という視点でとらえると、一つの線上に無理なくならぶように思える。このように考えると、『都名所図会』所載の先にあげた参籠堂に集まる工職人の集団は、やはり日蓮宗の影響を受けた人々と考えるのが妥当であろう。

それでは、職工集団と「十三まいり」の結合点は何であったかということになるが、そのことは次節において更に検討することにした。

#### 註

- (1) 『大日本仏教全書』第八三卷・寺誌部一、鈴木學術財団編、一九七二年刊。三〇〇頁。
- (2) 藺田香融 「嵯峨虚空蔵略縁起―ある密教寺院に関する覚書―」(『関西大学文学論集』五一―二合併号)
- (3) 藺田香融 「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる―」(『南都仏教』第四号)
- (4) 田中久夫 「地蔵信仰の伝播者の問題―『沙石集』『今昔物語集』の世界―」(『日本民俗学』第八二号)
- (5) 『年中行事辞典』には他に、柳津虚空蔵、村松虚空蔵、舞鶴市愛宕山頂の虚空蔵、奈良市旧五ヶ

谷村の虚空蔵の十三まいりをのせている。

- (6)、(8) 『民間風俗年中行事』（早川純三郎編、国書刊行会、一九一六年刊）所収。
- (7) 『都林泉名所図会』（柳原書店、一九七五年刊）。
- (9) 『京城勝覧』の初版は宝永三年（一七〇七）であるが、『新修京都叢書』には再版本が収録されている。初版本では「十三まいり」の記載はないと思われる。
- (10) 『芭蕉文集』（岩波古典文学大系四六、杉浦一郎他校注、岩波書店、一九五九年刊）一〇二頁。
- (11) 大野達之助『日蓮』（人物叢書六、吉川弘文館、一九五八年刊）による。
- (12) 浅井要麟編著『昭和修日蓮聖人遺文全集』上巻（平楽寺書店、一九九三年刊）（初版一九三四年刊）六六一頁。
- (13) 浅井要麟編著『昭和修日蓮聖人遺文全集』下巻（平楽寺書店、一九九三年刊）（初版一九三四年刊）一三四九頁。
- (14) 『虚空蔵法輪寺要誌』（法輪寺刊）七〇八頁による。

## 第二節 十三まいり信仰の伝播

### 一 はじめに

昭和五十一年秋の日本民俗学会年会は、東北の福島市で開催された。この大会に参加したおり、同じ市内にある黒岩山満願寺をおとずれる機会にめぐまれた。

黒岩山満願寺は、現在、臨済宗妙心寺派で俗に黒岩虚空蔵といい、本尊を虚空蔵菩薩とする寺院である<sup>(1)</sup>。この黒岩の虚空蔵に対して、十三歳になった男女が知恵と福をいのる「十三まいり」の行事がおこなわれており、大変興味を覚えたのである。

### 二 黒岩虚空蔵の「十三まいり」と米沢

黒岩虚空蔵の「十三まいり」信仰は、本尊虚空蔵菩薩に十三歳になった男女が知恵と福とをいのる行事である。特に日を定めるのではなく、一年を通して三々五々に参詣している。この黒岩虚空蔵の「十三まいり」は、次の点においてきわだった特色を示していると思われる。

満願寺の方も怪訝な面もちで説明して下さったのだが、この満願寺に「十三まいり」に来る人は地元の福島市ではなく、峠を越えた山形県下の人達、特に米沢市から来る人が多いというのである。そして、米沢の人々がこの満願寺に「十三まいり」にくるようになった理由として、もともと柳津円蔵寺の虚空

(表1・2・1)

## 福島県黒岩虚空蔵参詣者控

(昭和51年1月～9月)

	総数	十三まい	その他	不明
福島県福島市	16	1	9	6
伊達郡伊達町	1	0	1	0
伊達郡梁川町	3	0	0	3
伊達郡桑折町	2	0	1	1
東白川郡棚倉町	1	0	1	0
山形県米沢市	20	11	3	6
東置賜郡高島町	2	2	0	0
新庄市	1	1	0	0
その他	5	** 1	1	3
計	51	16	16	19
*丑寅年厄除・進学受験				
**千葉県柏市				

蔵菩薩に「十三まいり」にいていたのだが、米沢から柳津まで往復するには一泊せねばならなかった。ところが最近、車を利用することによって福島であれば日帰りすることが可能であるので、この黒岩虚空蔵が「十三まいり」の対象として信仰されるようになったという。

さらに、米沢の人々が「十三まいり」をおこなう理由について、かつて京都から織物の技術を米沢に伝えた人々が「十三まいり」をもち伝えたというのである。

以上の満願寺での説明は、同寺に祈願におとずれた参詣者の名簿によつて、よく理解できるのである。

表(1・2・1)は昭和五十一年一月より九月までに、

この寺院をおとずれた人々をその住居地と祈願の内容によつて整理したもので、祈願内容の記入もあつるが、米沢とその周辺に「十三まいり」信仰が濃厚であることは注目される。さらに、米沢からの参詣者で他の祈願をした三名が、いずれも「十三まいり」に付きそつた親が自分の厄除けを祈願していることを考えると、「十三まいり」が米沢及びその周辺に限定されている様子が明確となり、福島市にはもともと存在しなかつたと考えられる。

このように、黒岩虚空蔵満願寺においては、地元の

(表1・2・2)

## 柳津虚空蔵定開帳本数並守札調

(明治29年)

県		本数	守札	平札
福 島	河沼	49	71	910
	大沼	38	65	744
	耶麻	45	70	941
	北会津	49	72	238
	南会津	8	16	107
	信夫	3	9	98
	伊達	2	2	62
	安積	6	23	95
	(小計)	(200)	(328)	(3195)
山 形	南置賜	20	698	209
	東置賜	21	604	324
	西置賜	22	731	321
	(小計)	(63)	(2033)	(854)
新 潟	東蒲原	38	99	577
	北蒲原	3	3	250
	南蒲原	1	1	21
	三嶋	1	1	0
	(小計)	(43)	(104)	(848)
総 計		306	2465	4897

丑寅年生れの人の守本尊としての虚空蔵信仰と、米沢の人たちの「十三まいり」の本尊としての虚空蔵信仰とが共存していることになる。

さて、米沢からの「十三まいり」が、虚空蔵信仰の中でも異質な性格のものであることは、柳津の虚空蔵すなわち霊巖山円蔵寺においても検証することができる。<sup>(2)</sup>

柳津の円蔵寺の「十三まいり」は、西角井正慶編『年中行事辞典』(東京堂出版、昭和三十三年刊)にもとりあげられており、「旧正月一三日の縁日に十三詣りといつて十三歳の子が参詣して開運出世を祈

る。これを十三講ともいう」としてある<sup>(3)</sup>。この寺の明治二十九年の『福島県下永代開扉守札調帳』と『山形・新潟両県下永代定開扉本帳』の報告によつて<sup>(4)</sup>、信仰圏及びその信仰内容が考察しう

る。表（1・2・2）はそれを郡ごとに整理したもので、ここにいう「本数」とは本尊開扉の際の木の祈禱札であり「守札」は「十三まいり」の守り札、「平札」は虚空蔵菩薩の普通の祈禱札である。

ここで注目されるのは、山形県下に「十三まいり」の守り札が多いことである。

### 三 「十三まいり」の成立と展開

前項において、柳津虚空蔵円蔵寺、黒岩虚空蔵満願寺におけるそれぞれの信仰圏の中で、米沢を中心とする山形県南部地域が、隣接地域と異なつて特異な信仰を有していることを説明した。その「十三まいり」が、なぜ米沢周辺に限定された形で存在するかを考えるために、まず「十三まいり」信仰そのものの成立についてふれておきたい。

「十三まいり」は一般に、京都の嵯峨にある法輪寺の虚空蔵に参詣する行事だと考えられている。

『年中行事辞典』においては、

陰曆三月十三日（今は四月十三日）に京都市右京区嵐山中尾下町の法輪寺の本尊虚空蔵菩薩（俗に嵯峨の虚空蔵さんと称し、日本最初の虚空蔵尊という）にまいること。十三日は虚空蔵の縁日であるので、これにちなんで十三歳になった子供が両親に付きそわれて参詣する。虚空蔵は福德、智慧を授けるといい、十三詣を知恵もらいとも呼ぶ。関東の七五三に相当する行事である。

と説明されている。このように「十三まいり」は、虚空蔵菩薩に十三歳になった男女が参詣し、福德と知恵を授けてもらう行事であり、「十三」という数字は、虚空蔵の縁日にちなんでいるようである。人生

儀礼の中で十三歳の年祝いが、虚空蔵求聞持法の本尊である智恵の菩薩と結びつき「十三まいり」という特殊な信仰を形成したのである<sup>(5)</sup>。そして、「十三まいり」が法輪寺の行事としてとらえられていることは、とりもなおさず、「十三まいり」が法輪寺の虚空蔵信仰を背景として成立したことを物語っている。

ここで「十三まいり」成立の背景として、法輪寺の虚空蔵信仰の系譜を簡単にみておこう。法輪寺と虚空蔵菩薩との結びつきは、早くも平安時代後期に成立した『今昔物語集』の中にみいだされる。『今昔物語集』の巻十七は、まさに地蔵菩薩の巻で実に三十二話を集めるのであるが、それに比して一話だけ虚空蔵菩薩の話がある<sup>(6)</sup>。「比叡山僧、依虚空蔵助得智語第卅三」がそれであって、法輪寺の虚空蔵菩薩をとりあげている。この話で注意せられるのは比叡山の若き僧が「常ニ法輪ニ詣デ」虚空蔵菩薩に「才ヲ付ケ、智ヲ令有ヨ」と祈っていた点である。

また、応永二十一年(二四一四)成立の『法輪寺縁起』では、空海の弟子であり太秦広隆寺中興として知られる僧道昌が、この地で「虚空蔵求聞持能満諸願法」を修したとしている<sup>(7)</sup>。求聞持法とは、「聞持」すなわち記憶力を求めて修せられる密教の修法であって、この法により聞持を得ると一度耳にしたことを忘れないとされる<sup>(8)</sup>。『今昔物語集』の記事も、この求聞持法との関係を思わせるもので、法輪寺が求聞持法の道場であったと考えるてもよさそうである。

藤原宗忠の日記である『中右記』の承德二年(一〇九八)五月十九日の条に、

今日晩頭参詣法輪寺(中略)抑往日少年之昔、度々、参詣此堂舎、祈申才学之事  
とあるのは興味深い記事である。

ところが、藤原定家の『明月記』の中では、法輪寺は虚空蔵からはなれて、盛んに地藏会がおこなわれる寺院として登場するようになる<sup>(9)</sup>。そして中世を通じて法輪寺が貴族と結びついていたことは、藤原俊成の『長秋詠藻』の中に「保延五年（一一三九）ばかりの事にや、母の服なりし年法輪寺にしばしばこもりたりける時」の歌があることや<sup>(10)</sup>、西行の『山家集』の中に、「秋のすえに法輪にこもりてよめる」歌数句があることで知られる<sup>(11)</sup>。やがて『菟玖波集抄』には、信昭法師が「正和元年（一一三二）三月、法輪寺の千句に」と書くように<sup>(12)</sup>、連歌の会場としてしばしば登場するようになるのである。

三条西実隆の二十歳から八十歳に及ぶ『実隆公記』の中に散見する法輪寺の記事には、「十三まいり」と結びつく記載はみられない。彼の虚空蔵信仰は、智福とか技芸とかの面ではなく、十三仏信仰の十三回忌の仏として認識されている<sup>(13)</sup>。

応仁の乱をへて、僧恭畏が慶長元年（一五九六）この寺に入ったころには寺運衰えて「堂舎荒蕪し経像毀壞」していたことは『続日本高僧伝』の恭畏伝からおしえられる<sup>(14)</sup>。恭畏は翌慶長二年（一五九七）には日本大勧進の論旨を得て、やがて全国に勧進して堂塔伽藍の復興に力をそそいだ<sup>(15)</sup>。法輪寺では、この恭畏を中興の祖としているのである。

以上のごとく、「十三まいり」成立の背景としての法輪寺をみてきたのであるが、法輪寺の虚空蔵信仰は「十三まいり」のみによって有名なものでは決してないことがわかった。むしろ、法輪寺の虚空蔵信仰が広く知られていた故に<sup>(16)</sup>、また「十三まいり」も他の虚空蔵寺院に受けとめられていったのである。

さて、「十三まいり」の成立時期については、『年中行事辞典』に「起源は比較的新しく、安永二年（一七七三）が始であるという」と指摘している。管見にして、この安永二年成立という点について史料の



裏付けを得ていないのであるが、貝原篤信の選になる『京城勝覧』の天明四年（一七八四）再版本には<sup>17</sup>、法輪寺の項に、

近年、三月十三日、十三歳になる都の男女参詣する事おびただし、是を十三まいりといふ

とあり、寛政十一年（一七九九）に秋里籬島の作になる『都林泉名所図会』の同じく法輪寺の項には<sup>18</sup>、

近年、下嵯峨法輪寺に、三月十三日、十三歳なる男女都鄙より来りて、群集大かたならず。本尊虚空蔵菩薩に智恵を貰ふとて、年々増て来る也。これを十三参といふ。

とある。寛政十二年（一八〇〇）に成立した『年中故事』においては「三月、法輪寺十三参」として<sup>19</sup>、

当本尊虚空蔵菩薩へ男女十三歳の者今日参詣すれば、福德の恵みを授け給ふと、大に群参す、大坂殊に多し。今日境内にて十三品の菓子を売る、参詣の人は是を求めて本尊へ備へて、兎どもへ食わしむ。是の参詣古きことにあらず、四十年余りにて、近年別して盛んなり、本尊十三日の縁日ゆへに云へり。是の寺及近辺嵐山の桜花盛りの折なれば、都鄙の老若大井川の辺にて遊獵し、春色を興ず。いわん方なし。

と書かれるにいたる。

これらの記事から、天明寛政期に法輪寺の「十三まいり」が確立していたことがわかる。そして、『年中故事』にいう「四十年余り」という記載と『年中行事辞典』の「安永二年」とは矛盾しないと考えるよいであろう。

このように近世に、法輪寺において成立した「十三まいり」は、現在その法輪寺を支える最大の行事として盛行されるばかりでなく、ほかに「十三まいり」をおこなう寺院を見い出すほどに成長してい

るのである。

法輪寺以外で「十三まいり」をおこなう所として、『年中行事辞典』では、

福島県河沼郡柳津町、靈巖山円蔵寺（臨濟宗）<sup>(20)</sup>。

茨城県那珂郡東海村村松、真言宗日光寺<sup>(21)</sup>。

京都府舞鶴市の愛宕山頂の虚空蔵菩薩<sup>(22)</sup>。

奈良市（旧五ヶ谷村）の虚空蔵<sup>(23)</sup>。

をあげている。

これらはいずれも、虚空蔵菩薩をまつる所であり、「十三まいり」が今でも虚空蔵菩薩に対する信仰であることがうかがえる。しかし「十三まいり」がすべての虚空蔵寺院にみられるか、ことばを変えれば虚空蔵菩薩の本来的な信仰かといえ、否定的に考えざるを得ない。例えば巖島神社と表裏一体となつて今も信仰の厚い宮島の弥山山頂には、弘法大師の由緒をとく虚空蔵があるのだが<sup>(24)</sup>、ここには「十三まいり」は存在しない。この一例のみならず、全国的にみるとき「十三まいり」行事は『年中行事辞典』の報告が全てではないにしても、むしろ虚空蔵信仰の中にあつて特異なものと考えるべきである。

現在、大阪で「十三まいり」を大きく取りあげているのは、四天王寺に近い太平寺である。その行事については、法輪寺とかわるものではなく、毎年春の縁日には、多数の子供達でにぎわっている。この太平寺の虚空蔵菩薩は、寺では日本三体の虚空蔵であるといい、江戸時代から続く行事として「十三まいり」をPRしている。幕末の嘉永期に成立した『摂津名所図会大成』には、この太平寺について虚空蔵堂として<sup>(25)</sup>、

同所(天王寺)西側太平寺にあり、虚空蔵菩薩を安す参詣間断なし別して三月十三日は十三歳の童子群参して智福を祈るこれを十三参といふ。京師嵯峨の十三参に同じ

とある。この記事中、末尾に「京師嵯峨十三参に同じ」としている点に注意しなければならない。つまり、太平寺の虚空蔵堂の「十三まいり」は、法輪寺の行事を取り入れたものと考えられるのである<sup>(2)6)</sup>。

#### 四 米沢織と織物技術の導入

法輪寺にはじまった「十三まいり」が、どうして柳津の円蔵寺に伝わったかを考えてみると、まず考えられるのは、日本三体の虚空蔵尊とまでいわれるように、ともに古来よりの虚空蔵寺院である点からではないかという指摘である。

しかし、ここに一つの疑問がおこる。

柳津虚空蔵が、法輪寺の「十三まいり」を寺行事として取り入れた場合には、この円蔵寺の信仰圏内に一様に「十三まいり」が行なわれるはずではないか。しかるに、第二項でみたように柳津虚空蔵の「十三まいり」は、米沢を中心とする山形県南部地域に限られているのである。とすると、法輪寺の「十三まいり」が円蔵寺の行事として定着する過程に、米沢という地域に何か特別な要因があつたと考えなければならぬ。こう考える時に、福島市の満願寺での伝承が想起されるのである。

米沢における「十三まいり」信仰を考える手がかりとして、満願寺での伝承すなわち、「米沢の『十三まいり』は、かつて京都から織物技術を伝えた人達が伝えた」とすることを考えなければならない。そ

ここで、米沢織についてみていくことにしたい。

米沢の織物業の成立に関しては、日本の他の絹織物業産地と同様の経緯をたどっている。すなわち、絹織物業成立以前は養蚕業が盛んに行なわれていたのである。上杉氏は関ヶ原戦役で豊臣方についてこゝから会津領（一二〇万石）を没収されて出羽米沢に転封された（三〇万石）。さらに寛文四年（一六六四）四代綱勝が後嗣を定めずに急死したことから、石高は半分の一五万石に減ぜられた。このように石高を減じられたにもかかわらず、家臣団の数はほとんど変わらなかったのも、経済的に窮乏に落ちいったのである。明和四年（一七六七）に十七歳の若さで城主となった鷹山は国内産業の奨励と儉約につとめ、世に名君としてきこえており、養蚕業も鷹山の時に急速に進展したのである（<sup>2</sup>7）。

さて、養蚕業を基盤として米沢にも織物がはじまるのであるが、まず麻織物業の技術が導入されて以後、「横麻」などの試行錯誤のくり返しの中でやがて米沢商人によって絹織物技術が導入されて現在の米沢織が確立していくのである。

絹織物技術の導入年代は、文化元々同四年（一八〇四）（一七〇七）の間と推定されるだけで、はっきりした年代はわからない。それというのも米沢の商人達が、上杉家の御用商人で生糸の取り引きをしていた丹後の山家屋清兵衛の周旋によって、宮崎球六を機織の師匠として招いたもので、藩の雇入れではなかったからである。

宮崎球六は丹後縮の機台の模型を本国より取寄せて織機をつくり、その頃、甲州で織っていた諸糸織を改良し、経緯とも絹糸の諸撚を用い、正紺で織り、これを唐糸織と名づけた。丈夫で風味があり、大いに市場に迎えられたという（<sup>2</sup>8）。

このように、米沢に絹織物技術を伝えたのは丹後の宮崎球六であった。そして、丹後地方は平安時代から「丹後絹」の生産地であったが、近世になって享保年間（一七一六～三五）に西陣から縮緬織の技術を導入して絹織物産地としての地位を確立した。丹後地方への西陣の技術の導入には、加悦村小右衛門、後野村六左衛門、三河内村佐兵衛の三人が加悦谷地方に移植したものと、峯山の絹屋佐平二が同地方に伝えたものとの二系統があるが<sup>29</sup>、いずれにしても米沢の絹織物技術は、西陣から丹後を経由して米沢に至る織物技術の伝播のもとに成立したことになる。

##### 五 絹織物技術と「十三まいり」

米沢という地域に限定された「十三まいり」信仰に注目した中で、これまでの考察を通じ、この信仰が絹織物技術者集団の移住と関連して、米沢に持ち込まれたと考えるにいたった。

そのことは、福島市の黒岩虚空蔵に「十三まいり」が取り入れられていく過程をみる時に、まさに、そのように思えてならないのである。つまり、「十三まいり」を柳津の虚空蔵へいく行事としながらも、やがて自分達の都合で黒岩虚空蔵へいくように変更している。大阪の太平寺では、寺側が積極的に「十三まいり」を寺行事化したように思えるが、黒岩虚空蔵の場合は、寺の行事として成立したのではなくて、信仰を有する人達が、有名な虚空蔵に新たな信仰を付加したのである。柳津の円蔵寺に「十三まいり」がはじまる様子も、この黒岩の場合と同じようなものではなかったろうか。丹後からうつり住んだ絹織物技術者が、自分たちの虚空蔵信仰を、この米沢周辺で最も有名である柳津円蔵寺に寄託していっ

たのである。米沢の近辺には、いくらかも虚空蔵寺院があるにもかかわらず、柳津へ出かけていることが、このことを裏付けている。

それでは、はたして絹織物の技術を有する人達が「十三まいり」の信仰をもっていたのであろうか。それは視点を変えれば、「十三まいり」の背景に、絹織物技術者の虚空蔵信仰があったかということになる。

近世の法輪寺の伝承を検討する中で、前項、表(1・1・1)にみるごとく「十三まいり」の成立と前後して「こもり堂」の記事がみえる<sup>(3)</sup>。これは『都名所図会』の法輪寺の項に、「参籠堂」として<sup>(1)</sup>、

都の工職人この所に籠り、一七日断食し、滝に垢離し、本尊に智福を祈る。近年断食の輩つねに絶え間あらず。

とある。

この話は、『山城名所寺社物語』の法輪寺の項に<sup>(2)</sup>、

日蓮上人も三七日籠り給ひて法花の宗門をひろめ給ふ、ちかくは左の甚五郎百日籠りて霊夢をうけ日本に彫物師の名人といへり則御本尊の御厨子の龍は甚五郎が細工といへり

当寺は智福山とて智恵と福をさづけんとの御せいがん故今も御堂に籠人おほし

と述べているのと密接な関係があるろう。

『都名所図会』でいう工職人は、左甚五郎の話にみられるように、その技術の上達を願って参籠したものと思える。さらに、この法輪寺に日蓮参籠の伝承が存在することは、『都名所図会』の大光山本圃寺で日蓮伝をあげ<sup>(3)</sup>、

幼稚より才賢にて常に虚空蔵を祈る。ある夜の夢に老僧来り、手に明星の如くなる宝珠をささげて授与す。これによりて一を聞いて十を悟れり

とある「日蓮の虚空蔵信仰」が仲立ちとなり<sup>3</sup><sup>4</sup>、法華宗の技術者集団が信仰の対象としていたことを物語っている。とするならば、この都の工職人の中に絹織物技術者が含まれていたと考えることで、やがて「十三まいり」が法輪寺にはじまることも理解できそうである。「十三まいり」が別に衣裳くらべといい、女の子がはじめて振袖を着る時とするのは、西陣織とのつながりを暗示するものではないかと思われる。米沢の「十三まいり」が、絹織物技術者の移住にもなつて伝えられたとする伝承は、信仰の伝播の問題とともに、「十三まいり」そのものの成立にもさかのぼって、興味深いものといわざるを得ないのである。

#### 註

(1) 寺伝によると本尊は行基作と伝えるが、近世以前の当寺については、天台宗で大徳寺と称したことが以外あきらかでない。

(2) 『新編会津風土記』の「別当円蔵寺」の項（雄山閣、昭和四十五年刊、巻四・二七頁）に「虚空蔵堂の東山腰にあり、靈巖山と号す、大同二年本堂」虚空蔵堂」と共に此寺を建立す、法相宗なりしが、至徳年中に徳一の裔孫義乗靈夢の感ありて郭内興徳寺第三世大圭に嗣法し、臨濟宗となる」とある。

(3) 例えば、『飯豊山麓中津川の民俗』（昭和四十六年三月刊、山形県教育委員会、七一頁）に「十三

詣は十三歳になると会津の柳津尊に参詣につれてゆく行事」とあり、「南陽市漆山地区の民俗」(『置賜の民俗』第七・八合併号、置賜民俗学会、昭和五十一年九月刊、七〇頁)に「男の子が十三になると、十三詣りと称して、福島県会津地方の柳津虚空蔵に詣りにゆく」とある。

(4) 佐野賢治「十三参りの成立と展開―特に置賜地方を中心として―」(『我楽苦多』二、東京教育大学物質文化研究会、昭和四十九年十一月)二四頁による。

(5) 十三歳のもつ意味について、坪井洋文「厄年・年祝い」(『日本民俗学大系』第四卷、平凡社、昭和三十四年刊)を参照されたい。また、京都府下の事例については、竹田聴洲『日本の民俗 26 京都』第一法規、昭和四十八年刊(一九三頁に詳しい)、『日本民俗学』八二、日本民俗学会、昭和四十七年七月刊(三一頁に「虚空蔵信仰と地蔵信仰は常に一対として存在し、地蔵信仰が単独で存在しなかったのではないか」と指摘されている。この見解は、速水侑『地蔵信仰』塙書房、昭和五十年刊)にも継承されている。また、東大寺盧舎那仏両脇侍が虚空蔵・如意輪観音である点については、田村寛康「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」(『仏教芸術』一二〇、仏教芸術学会、毎日新聞社、昭和五十三年九月刊)を参照されたい。

(7) 「右寺者、道昌僧都之建立、(略)道昌者、讃岐国香河郡人弘法大師御弟子、俗姓秦氏、(略)天長五年就神護寺僧都弘法大師登灌頂壇受真言大法、然後為修虚空蔵求聞持能滿諸願法尋求勝驗之地、大師数日、於葛井寺今法輪寺可修之、彼山靈瑞至多、勝驗相応之地也、仏徳載于挺、利益遍于四海云々、切同六年参籠百ヶ日、修求聞持法(以下略)」(『大日本仏教全書』昭和四十七年版) 第八三卷、三〇〇頁による)。



- (8) 古代仏教における求聞持法について、藺田香融「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる一―」『南都仏教』四、南都仏教研究会、昭和三十二年刊）を参照されたい。
- (9) 例えば元久二年（一二〇五）三月一日条に、「参法輪寺未時修地藏講」とある。院政期の法輪寺について、藺田香融「嵯峨虚空蔵略縁起―ある密教寺院に関する覚書―」『関西大学文学論集』五卷一・二合併号）に詳しい。
- (10) 『平安鎌倉私家集』（日本古典文学大系八〇、岩波書店）三二六頁による。
- (11) 『山家集・金槐和歌集』（日本古典文学大系二九、岩波書店）九二頁による。
- (12) 『連歌集』（日本古典文学大系三九、岩波書店）九七頁による。
- (13) 延徳二年（一四九〇）十月廿日の条では、故相公羽林三十三回忌の作善目録の第一として、虚空蔵菩薩像一箒を造立する旨あげている。又、永正元年（一五〇四）十月十四日母親の三十三回忌の記載によると、虚空蔵菩薩咒を五千反奉唱している。
- (14) 『大日本仏教全書（昭和六年版）』第一〇四卷、一九六一―七頁による。

- (15) 人吉の旧藩主相倉家のことを記した『求麻外史』寛永三年（一六二六）条（岡井慎吾「恭畏僧正について」『芸文』巻二十の十、昭和四年刊）八〇一頁）に、「夏五月詔嵯峨法輪寺恭畏僧正来本藩宿于願成寺公稀就見之」とあり、彼が九州にも足をのばしたことが知れる。
- (16) 『義演准后日記』慶長十一年（一六〇六一）九月十二日条）『大日本史料』第十二編卷之四、三四〇頁以下）に、「其後法輪寺へ向了、堂一見、広大驚目了」とあり、『慶長日件録』同年十一月六日条（同書、三四五頁）に、「高雄より嵯峨法輪寺へ参九月より開帳也、本尊虚空蔵座像、右手持剣、左手持宝珠、其身尺三尺許也」とある。またこの時期に、奈良斑鳩の法輪寺が、同名寺院の関係から観音を虚空蔵に仕立てたとの見解がある。（上原昭一「虚空蔵菩薩考」『大和文化研究』九巻一号、昭和三十九年一月刊）
- (17) 『新修京都叢書』（光彩社、昭和四十四年刊）巻五、四七八頁による。
- (18) 柳原書店、昭和五十年刊（四七四頁及び五三六頁による）。
- (19) 『民間風俗年中行事』（国書刊行会、大正五年刊）五三八頁による。
- (20) 『新編会津風土記』（前掲）には、「本尊を福満虚空蔵と云、長一尺八寸、空海の作にて安房国清澄と常盤国村松と、当山」の霊像を併て一木三体の作とす」とある。『円蔵寺縁起』『大語園』巻四、五〇九頁所収）も同様に説いている。

(21) 註  
(20) 参照

(22) 『舞鶴市史』には「十三まいり」として（『各説編』、昭和五十年刊、五三一頁）、「児童は十三歳になると、舞鶴（引戸、愛宕山）あるいは由良のコクゾウサン（虚空蔵菩薩）に近親者に付きそわれて参詣することが一般的におこなわれていた」とあり、『加佐郡誌』の「由良ヶ岳」の項には（大正十四年刊、一八三頁）、「山頂には虚空蔵菩薩の祠があつて陰曆三月十三日は十三詣と称して登山参詣する男女が多い」とある。さらに『加悦町誌』には「十三まいり」として（昭和四十九年刊、五〇五頁）、「女の子が十三歳になると娘になった事を祝つて氏神に参る」とある。丹後地方に「十三まいり」が存在することは、私の論をたすける（後述）。

(23) 弘仁寺の本尊虚空蔵菩薩にまいる。

(24) 五来重著『増補・高野聖』（角川書店、昭和五十年刊）九四頁を参照されたい。

(25) 『浪速叢書』第七巻、三一〇頁による。

(26) 元禄十四年（一七〇一）成立の『摂陽群談』では（雄山閣、昭和四十六年刊、二五五頁）、「太

平寺は天王寺町にあり、禅宗曹洞派、加州金沢大乘寺末院也」とあるのみである。

(27) 横山昭男『上杉鷹山』(人物叢書、吉川弘文館、昭和四十三年刊)によった。また、養蚕守護神

としての虚空蔵について、木村博「白鷹山虚空蔵菩薩の信仰について」(『置賜の民俗』第五号、置賜民俗学会、昭和四十七年十二月刊、九八頁以下)、同「養蚕守護神としての虚空蔵菩薩」(『日本民俗学』一〇一、日本民俗学会、昭和五十年九月刊、七〇頁以下)がある。

(28) 吉田義信「山形県蚕糸業史」(『山形県史』本篇六卷、昭和五十年刊、五七七頁以下)によった。

特に第四節「米沢織の成立と蚕糸業の発展」から引用した。

(29) 池田敬正「丹後ちりめん」(『日本産業史大系』巻六、東京大学出版会、昭和三十五年刊、七〇頁以下)によった。

(30) 『新修京都叢書』(二十巻本、光彩社、昭和四四年刊)を中心に、可能な限り法輪寺の伝承をあつめた。それぞれの内容については、拙稿「十三まいりの成立―嵯峨虚空蔵法輪寺について―」(『御影史学論集』三、御影史学研究会、昭和五十一年十月刊、六九頁以下、本論文第一章第一節所収)を参照されたい。

(31) 角川書店、昭和五十一年刊、四三七頁による。

(32) 前掲、『京都叢書』巻二、四七一頁による。

(33) 前掲、一七〇頁による。

(34) 実際『善無畏三蔵鈔』（『昭和新修日蓮聖人遺文全集』上巻六六一頁）には、「幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云く、『日本第一の智者となし給へ』云々。虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給ひて、明星の如くなる智徳の宝珠を授けさせ給ひき、諸宗諸論の失をわきまふる事は虚空蔵菩薩の御利生、本師道善御房の御恩なるべし」とあり、『清澄寺大衆中』（同下巻一三四九頁）にも「生身の虚空蔵菩薩より大知恵を給はりしことありき。『日本第一の智者となしたまへ』と申せしことを不便と思しめしけれん。明星の如くなる大宝珠を給ひて左の袖に受けとり候ひし故に、一切経を見候ひしかば、八宗並びに一切経の優劣ほぼ是を知りぬ」とある。

### 第三節 十三まいり・十三仏・十三塚信仰

#### 一 はじめに

京都の太秦にある広隆寺は、半迦思惟の弥勒菩薩で知られているが、その講堂には、阿弥陀如来の両脇に、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩とがまつられている。この両尊は、『広隆寺内諸堂諸院事』に<sup>(1)</sup>、

虚空蔵菩薩像坐像、高六尺五寸、道昌僧都造之。

地蔵菩薩像坐像、高六尺五寸、道昌僧都造之。

とあることから、広隆寺中興の道昌が、一對として造立したもので、平安期の虚空蔵・地蔵菩薩の信仰を考える時に、重要な意味を持っている<sup>(2)</sup>。

虚空蔵と地蔵は、遠くバラモン教以来、天と地をつかさどることから一對のものとしてさされてきた。道昌造立の広隆寺講堂の虚空蔵・地蔵も、その対偶関係を継承しているのである。ところが、現在では、私達のまわりに、虚空蔵・地蔵を一對として信仰する姿を見ることがない。夏の地蔵盆や、あるいは路傍に立つ姿を通して、地蔵菩薩は最も身近な存在であるにもかかわらず、その横に虚空蔵菩薩を並べて考えることは、まずないといえる。

つまり、平安期以降、虚空蔵・地蔵の信仰は、それぞれ独自の道を歩んで今日に至っているのである。本節では、虚空蔵・地蔵の対偶関係を念頭におきながら、虚空蔵信仰の民俗的側面を考察し、あわせて、平安期以降の虚空蔵信仰の歴史的な変遷にも目を向けてみたい。

## 二 法輪寺の虚空蔵菩薩

広隆寺の中興とされる道昌は、また、景勝の地嵐山の法輪寺の開基としても知られている。『法輪寺縁起』(応永二十一年(一四一四)成立)には<sup>(3)</sup>、

右寺者、道昌僧都之建立、

道昌者、讃岐国香河郡人、弘法大師御弟子、俗姓秦氏、

天長五年(八二八)就神護寺僧都弘法大師登灌頂壇受真言大法、然後為修虚空蔵求聞持能滿諸願法尋求勝驗之地、於葛井寺今法輪寺可修之、

仍同六年(八二九)參籠百ヶ日、修求聞持法、夏同五月比、皓月隱西山之後、明星出東天之暁、  
奉拝明星汲闕伽水之処、

明星天子来頭、虚空蔵菩薩現袖、非画非造、如縫、如鑄、錐経数日其体不滅、尊像嚴然、於是道昌造虚空蔵形像、奉納件影像於彼木像之中、則放神護寺弘法大師供養之、

とあり、空海の弟子である道昌が求聞持法を修したところ、百日目の満願の日に、明星天子が飛び来たって道昌の衣の袖に虚空蔵菩薩の姿となって現われた。その像は縫ったものごとく、のみで彫ったものごとく数日を経ても消えなかった。喜んだ道昌は、衣の袖の姿のままに仏像を造り、その胎内に衣を納め、神護寺において空海から供養を受けた。その虚空蔵菩薩の尊像が、法輪寺の本尊として崇敬されているのである。

ここで道昌が修した求聞持法は、正しくは『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』（開元五年（七一七）善無畏訳、養老二年（七一八）大安寺僧道慈請来一といい、「聞持」すなわち記憶力を求めて修せられ、この法によって聞持を得ると一度耳にしたことを忘れないとされる。古代仏教において、多くの經典を暗記しなければならぬ僧侶を志す者は、まず第一に修すべき法とされたのである<sup>(4)</sup>。

なかでも空海は、『続日本後紀』承和二年（八三五）三月二十一日条に、

十八遊学塊市、時有一沙門、呈示虚空蔵口聞持法、其経説、若人依法読此真言一百万遍、乃得一  
切経法文義暗記、於是信大聖之誠言、

とあり、ある沙門から虚空蔵求聞持法を教えられたことで、政治の道から仏道へと志を変えている。このことは『三教指帰』序文にもある有名な話で、真言密教の世界では空海との関係から虚空蔵菩薩が大切に扱われる<sup>(5)</sup>。道昌もその門下の一員として、法輪寺で求聞持法行なったことになる。

このような記憶力向上を願う法輪寺の虚空蔵菩薩は、やがて才智の仏として、あまねく知れわたっていった。このことは、『今昔物語集』卷十七に、「比叡山僧、依虚空蔵助得智語第卅三」として、志ありといえども学問することのない若き僧が、常に法輪寺に詣で、虚空蔵菩薩に「才ヲ付ケ、智ヲ令有ヨ」と願っていた。しかし、願いをたてるだけで、一向に勉強する様子がない。そこで虚空蔵菩薩は女の身と変じて、この若き僧に学問をすすめた。やがて、その甲斐があつて山内でもやんごとなき学生になつた、という物語があることからわかるのである。

『今昔物語集』卷十七は、まさに地蔵菩薩の巻と言える程で、三十二話の地蔵菩薩の靈験が集められているが、その後第三十三話として一話、虚空蔵菩薩の利益を載せている。このことは、虚空蔵・地



蔵の対偶を意識しているとも考えられよう。また、『今昔物語集』巻十一、「□□建法輪寺語第卅四」は本文が欠文となっているが、不詳の二文字に「道昌」を補い、本文には『法輪寺縁起』と同様の道昌の虚空蔵求聞持法と、法輪寺の本尊についての記事が記されていたと考えられる<sup>(6)</sup>。

このように、法輪寺の虚空蔵菩薩は、虚空蔵信仰の中でもとりわけ有名であったと想像できる。

### 三 十三まいり信仰の成立

法輪寺は現在では、十三歳の男女が、虚空蔵菩薩に智恵と福とを祈願する「十三まいり」の行事で賑わっている。『年中行事辞典』（西角井正慶編・東京堂出版）に、

陰曆三月十三日（今は四月十三日）に京都市右京区嵐山中尾下町の法輪寺の本尊虚空蔵菩薩（俗に嗟峨の虚空蔵さんと称し、日本最初の虚空蔵尊という）にまいること。十三日は虚空蔵の縁日であるので、これにちなんで十三歳になった子供が両親に付きそわれて参詣する。虚空蔵は福德、智恵を授けるといい、十三まいりを知恵もらいとも呼ぶ。

とされている。そこで、法輪寺の十三まいりの信仰圏を知るためにいくつかの事例を示しておこう。

○滋賀県滋賀郡志賀町北小松では、十三歳になるとオバフンドシをもらい、嵐山の虚空蔵へ十三まいりをする<sup>(7)</sup>。

○京都府北桑田郡京北町周山では、男女児とも、十三まいりには、嗟峨の虚空蔵さんへ親が連れていく<sup>(8)</sup>。

○大阪府池田市住吉では、女子が十三歳になると肩あげを取り、六尺帯から初めて本当の帯を買ってやり、京都の嵐山の虚空蔵様に参る<sup>(9)</sup>。

○兵庫県川西市国崎では、十三歳になると、知恵をもらいに京都嵯峨の法輪寺の虚空蔵菩薩におまいりする。参る時は阿呆と賢の子を連れていくと、賢くなるといったり、法輪寺で橋を渡るまでふりむいてはいかんという。この時に叔父・叔母からサガリフンドシといって赤いふんどしを祝つてもらう<sup>(10)</sup>。  
などとあり、地元の京都市にとどまらず、滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県と広い範囲で信仰されていることがわかる。

三月十三日、四月十三日が縁日であるが、その日の前後、特に休日には、晴着に着飾った子供達で境内はあふれんばかりで、願いごとを漢字一文字で書き、祈祷を受けている。また、最近では、七五三との関係からか、秋にも十三まいるの参詣が増えているという。

十三まいるが行なわれる十三歳という年齢は、人の一生で、どのように意識されているのであろうか。次に、簡単に十三歳の人生儀礼での意義を調べてみたい。

○新潟県中魚沼郡津南町大字上郷宮野原では、女子は十三歳になると厄落としのために友達にみかんを一つずつ配る<sup>(11)</sup>。

○福井県三方郡美浜町新庄では、昔は数え年十三歳になると、若者組に加入した。若者組に加入すると、その時から一人前として認められた。加入する時には、酒二升と豆腐一箱(十二丁)を買って持って行き、兄弟の杯を交わす。現在は中学校を卒業するとすぐ加入する<sup>(12)</sup>。

(表1・3・1)

## 十三歳における人生儀礼

	十三 まいり	フン ドシ 祝い	年祝 い	仮親	十三 歳の 祝い	厄年	一人 前	成人	元服	腰巻	初山 参り	子守 り	伊勢 参り	カネ ツケ	へコ 祝い	袴着	入れ 墨	計
北海道																	1	1
宮城			1			1	(1)	(1)										2
秋田									1									1
山形	2		7(2)		1	2	(1)	1		1								14
福島	7		1								1							9
茨城	4					1												5
栃木	3						1	1										5
千葉	1	1																2
東京									1									1
新潟	1		3			4(2)												8
福井							1											1
長野										1								1
愛知		1							1				1					3
三重	1	2												(1)				3
滋賀	3	8(3)																11
京都	4	1																5
大阪	5										2							7
兵庫	1	2		1				1										5
奈良								1										1
鳥取		1		3														4
島根				5														5
岡山	2			3														5
広島				3				1										4
山口		(1)					1			(1)					(1)			1
徳島				1														1
香川					1													1
愛媛				1			1											2
高知		1		1		1	1(1)		1	(1)								5
長崎												1			1	1		3
大分								1										1
鹿児島							1											1
沖縄			2(7)		12			1(1)										15

計	34	17	14	18	14	9	6	7	4	2	3	1	1		1	1	1	133
---	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	-----

\*十三歳を、年祝いであり、かつ一人前とするような場合には、一方を（ ）で示した。  
 <文化庁編『日本民俗地図』Ⅴ「出産・育児解説書」（国土地理協会、1977年刊）による。>

○滋賀県伊香郡余呉村上丹生では、十三歳の正月に男子の場合はオバフンドシ、女子の場合はオバマイカケが母親の里から贈られる。それまで、母親の里からは盆や正月などに贈り物があるが、このオバフンドシ・オバマイカケ以後はなくなる<sup>(3)</sup>。

○岡山県阿哲郡西町野馳では、男女とも数え年で十三歳のとき親類以外の人と親子の縁組を結ぶ。この親をカナ親、子をカナ子という。酒一升をカナ親の家に持って行き杯を交わし、カナ親から男ならふんどし、女なら腰巻をもらい、以後実の親子に準じたつきあいをする。葬式の時、棺は男の子が四人がかつぐが、カナ子は子に準ずる<sup>(4)</sup>。

○沖縄県国頭郡大宜味村謝名城では、十三歳の年祝いは御願立てが中心で、年祝いの翌年はハルヤク<sup>(5)</sup>といい、御願ブトキとして盛大に祝う。などとされ、十三歳前後には、年祝い・厄年・一人前・仮親・フンドシ祝い・元服などとして多様な習俗がみられるが、いずれも大人になるということを意識している。つまり、十三歳が人生儀礼の中で成人への節目とされていることがわかる。

このような十三歳の年祝いが、智恵の仏である虚空蔵菩薩の縁日が十三日であることと結びついて、「十三まいり」という信仰を生み出した。それが法輪寺において成立したことは、道昌の求聞持法や、『今昔物語集』にみられた若き僧の物語が素地となっていたことに間違いはない。とは言うものの、「十三まいり」の行事そのものは、京都の、近世の名物評判記である『開帳花くらべ』（安永二年へ一七七三）刊<sup>(16)</sup>に「嵐山国蔵（虚空蔵を擬人化）、近比は十三の年には、ぜひに此人を見に行かねばならぬやうになったは、きつい仕合」とある記事が、現在のところ、十三まいりを紹介した最初のものである。

『京城勝覧』再版本（一七八四年刊）には（<sup>17</sup>）、

「法輪寺」近年、三月十三日、十三歳になる都の男女参詣する事おびただし、是を十三まいりといふ

とあり、『年中故事』（一八〇〇年刊）では（<sup>18</sup>）、

「三月、法輪寺十三参」当本尊虚空蔵菩薩へ男女十三歳の者今日参詣すれば、福德の恵みを授け給ふと、大に群参す、大坂殊に多し。今日境内にて十三品の菓子を売る、参詣の人は是を求めて本尊へ備へて、児どもへ食わしむ。是の参詣古きことにあらず、四十年余りにて、近年別して盛んなり、本尊十三日の縁日ゆへに云へり。是の寺及近辺嵐山の桜花盛りの折なれば、都郡の老若大井川の辺にて遊獵し、春色を興ず。いわん方なし。

と書かれるにいたる。「十三まいり」は十八世紀後半までに、法輪寺において成立した。

この法輪寺の十三まいりが発展していくのは、京都の工職人層の成長と関係する（<sup>19</sup>）。京都の工職人には法華宗徒が多かったが、日蓮が幼少よりつねに虚空蔵菩薩を祈っていたという伝承があり、日蓮の虚空蔵信仰が真言宗である法輪寺と結びついて町衆の支持を得たのである。

十三まいりの信仰は、やがて各地の虚空蔵寺院に伝わっていく。

大阪では、四天王寺に近い太平寺が、十三参りの寺院として知られている。幕末の嘉永期（一八四八〜五四）に成立した『摂津名所図会大成』には（<sup>20</sup>）、

虚空蔵堂天王寺西側太平寺にあり、虚空蔵菩薩を安す参詣間断なし、別して三月十三日は十三歳の童子群参して智福を祈る。これを十三参といふ。京師嵯峨の十三参に同じ。

とあり、「京師嵯峨の十三参に同じ」とすることから、法輪寺の行事が伝わったことがわかる。

奈良では弘仁寺、神戸では長田神社裏の虚空蔵菩薩に十三参りが行なわれている。

岡山県の、美作地方から備前北部あたりでは<sup>(21)</sup>、

男女の子供が十三歳になると「知恵をもらおう」といって、正月十三日に津山市一宮の黒沢山満願寺、英田郡英田町の真木山長福寺の虚空蔵様につれて参る風習がある。

とされている。

山形県の米沢では、近世末、絹織物に京都の西陣織の技術が導入され、その際、京都から織物職人の移住があった。そして、「十三まいりは、織物の技術を伝えた人々によって京都からもたらされた」と伝承されている。米沢から十三まいりに参詣するのは、会津柳津の円蔵寺であり、最近では福島市の黒岩山満願寺の虚空蔵菩薩にも十三まいりに訪ねる人が増えている。

柳津の虚空蔵菩薩と一木三体の一尊とする茨城県東海村の村松虚空蔵堂も、十三まいりの信仰で有名で<sup>(22)</sup>、十三品の菓子<sup>(23)</sup>の代わりに、福俵という菓子が、縁起物として境内の露店で売られている。

#### 四 十三塚と十三仏信仰について

「十三まいり」といい、十三歳の男女が三月十三日に虚空蔵菩薩に参詣し、十三品の菓子を供えるところのように、十三まいりの行事は「十三」という数字が強く意識されている。京都の近世の名所案内記の一つである『都すゞめ案内者』の中に「こくうぞう十三所まはり」があるように<sup>(24)</sup>、「十三」という

数字は、虚空蔵菩薩と深く結びついて理解されているのである。

ところで、従来、「十三」という数字について、民俗学の立場からは「十三塚」の問題として取りあげられてきた。「十三塚」に注目し、問題として提起したのは、柳田国男である。

柳田は、すでに明治四十三年の『考古界』(八一―一一)に「十三塚」を発表し、全国各地に分布する十三塚について、主として地誌類からその口碑伝承も含めて報告した。また、『石神問答』の中でも、十三塚について言及している。そして、戦後、堀一郎との共著として『十三塚考』(三省堂、昭和二十三年刊)を著わし、その中で、十三塚を埋葬墓あるいは供養塚であるとする説を批判し、もつと積極的な、村落安寧のための修法壇として築造されたと論じた。

堀は同じ『十三塚考』の中で、十三塚の「十三」という数字に注目し、

(一) ①十三の法数 ①十三層塔、②胎藏界十三大院、③十三地仏

(二) 一と十二の数の組合せになる法数①十二宮・十二支・十二獸、②十二光仏、③熊野十二所権現、

④薬師十二神将、⑤不動の十二使者、⑥四胃不動十二天、⑦十二仏

について概説した後に、特に「十三仏」と「十二天曼荼羅」による説を十三塚の起源として最も有力な仮説として検討した。そして、「十三塚の起源を十三仏信仰に求める説は、それが中世民間にも殊に広く分布した事実と、使者の追善が形式を整へた事実とに徴し、且つその伝説との相関に於ても、最も有力な仮説の一つであるやうに見える」と、慎重な表現ではあるが、十三仏信仰をもつて十三塚の起源とする説を妥当とした。

ここでいう十三仏は、『下学集』(一四四四年成立)数量門第十六に<sup>(25)</sup>、

十三仏並十王逆修日之次第

初七日	正月十六日	不動秦広王
二七日	二月廿九日	釈迦初江王
三七日	三月廿五日	文殊宗帝王
四七日	四月十四日	普賢五官王
五七日	五月廿四日	地藏閻魔王
六七日	六月五日	弥勒变成王
七々日	七月八日	薬師泰山王
百箇日	八月十八日	観音平等王
一周忌	九月廿三日	勢至都市王
第三年	十月十五日	阿弥陀転輪王
七年忌	十一月十五日	阿銭仏
十三年	同十一月廿八日	大日
卅三年	十二月十三日	虚空蔵菩薩

とあり、死後の十三度の追善供養に、それぞれ忌日仏をあてたもので、初七日から三十三年忌までを一年間で逆修（死後の追善を生前に行なうこと）するように考えてある。地藏十王にあてた十仏を、さらに発展させたものである。

この十三仏は、十三仏掛軸や十三仏真言として、現在広い範囲で信仰されており、葬送儀礼、年忌供



(表1・3・2)  
十三塚についての伝説

戦死				非業の死					その他					
戦死者	13人	39・他	鎧冑幟	陣地・他	無縁仏	漂流者	餓死者	女性			猫と鼠	大蛇	村境	13軒の家
								13人	13歳	他				
33	27	4	4	3	3	1	2	7	1	8	1	1	2	1
64			7		6			16			5			
71					22					5				
98 (/321例中)														

<中村ひろ子「十三塚の伝説」(『十三塚一現況調査編1』神奈川県立文化研究所調査報告第九集、平凡社、1984年刊、P301による>

養、念仏講、あるいは盆行事の習俗の中で大きな役割を持っている。また、最近では十三仏霊場めぐりが各地に設けられている程である<sup>(26)</sup>。

この十三仏事においても虚空蔵菩薩は、逆修日を十二月十三日とし、十三番目に位置している。それにもまして、三十三回忌の忌日仏として、大日如来を超えた最上の場所を占めることに注目される。

十三仏信仰においても、虚空蔵菩薩は「十三」という数字と結びつくのである。

ところで、十三塚にまつわる伝説は、戦国期に、合戦で戦死した者を供養するために築造したとする

例がはなはだ多い<sup>(27)</sup>。十三仏石碑の造立が戦国期に集中

して見られることと一致し、十三塚と十三仏の関係を考える時に、興味深いことといえる。

また、『蔭涼軒日録』文明十七年(一四八五)七月十四日

の条に、

七鼓以前予往鹿苑奉侍御成。能倫白案内。則御成。

次於御所間北方之東。为上首本尊十三仏御焼香。次開山

御焼香。仏餉飯被立箸。見献米水。次等持院殿宝簾院殿鹿

苑院勝髭院勝定院普広院勝智院慶雲院各御焼香。各被立御

箸。見献米水。

翌十五日条に、

直於御所間御焼香。御水向規式與昨晚同前。

とある。

翌年の同月同日条、つまり文明十八年（一四八六）七月十四日の条に、

次御成干鹿苑院。遂（その足で）御成御所間。一番開山前御焼香。立靈供箸被酒（すすぐ）浄水。

次本尊ナミ仏御焼香。次等持院殿木牌御焼香。立箸被酒水。次宝簾院殿。鹿苑院殿。勝髭院殿。勝

定院殿。普広院殿。勝智院殿。慶雲院殿。各々木牌同前。列諸靈干北西。北方之東為上首也。

とあり、翌十五日条に、

直於御所間。御焼香御水向規式與昨晚同前。

とある。

八代將軍足利義政は、七月十四日、十五日の盆の先祖供養に、金閣寺の御所の間において、開山に焼香すると共に、本尊十三仏にも焼香礼拝することを常としていた。御所の間には、尊氏（等持院殿）をはじめ先祖の位牌が祀られていた。ここでも十三仏は追善供養として、その役割を果たしている。

このように足利將軍家に十三仏信仰があり、換言すれば、十三仏信仰が武士階級によって支持されていたとするならば、十三塚の築造に、多く武将が関係し、あるいは合戦の戦死者の供養のためと伝承されていることが、あながち意味のないこととも、言えないのである。

五 三十日仏名と十齋日

十三まいり、十三仏事を考察する中で、虚空蔵菩薩と「十三」という数字が強く結びつくことがわかった。その際、虚空蔵菩薩の結縁日が十三日であることが、幾度も述べられている。『花園天皇辰記』の正和二年（一一三三）正月十三日条に、

今日精進、毎月事也、依虚空蔵縁日也。

とあることから、虚空蔵菩薩の結縁日が十三日であることが、広く知られていたことがわかる。

そこで、虚空蔵菩薩の結縁日としての「十三」について、いまま少し考えていきたい。

鎌倉時代中期に成立した『拾芥抄』には<sup>(28)</sup>、三十日仏名について、次のような記載がある。

三十日仏名号

一日	定光仏	二日	燃燈仏
三日	多宝仏	四日	阿錢仏
五日	弥勒菩薩	六日	二万燈明仏
七日	三万燈明仏	八日	薬師如来
九日	大通智勝仏	十日	日月燈明仏
十一日	歡喜仏	十二日	難勝如来
十三日	虚空蔵菩薩	十四日	普賢菩薩
十五日	阿弥陀仏	十六日	陀羅尼菩薩
十七日	龍樹菩薩	十八日	觀世音菩薩
十九日	日光菩薩	廿日	月光菩薩

廿一日	無尽意菩薩	廿二日	施無畏菩薩
廿三日	得大勢菩薩	廿四日	地藏菩薩
廿五日	文殊師利菩薩	廿六日	藥上菩薩
廿七日	盧遮那如来	廿八日	大日如来
廿九日	藥王菩薩	卅日	釈迦如来

三十日仏名は、諸仏菩薩の中より三十尊を選び、これを一月三十日に配してある。『虚堂和尚語録』卷十に<sup>(29)</sup>、「毎月念仏之図。戒禪師所編。自初一定光仏為首。三十日。至釈迦世尊。終而復始」とあることから、中国の五代（九〇七〜九六〇）の頃、戒禪師により始められ、我が国でも中世以降普及したとされる。

同じ『拾芥抄』の齋日月部第十三には<sup>(30)</sup>、

十齋日

一八四五八、三四八九十。是略頌也、小月七八九、又云十施日。愚案。以十齋日分十戒。有所思之故也。所謂、

一日	定光仏	不殺生、念此ノ尊除四十劫ノ罪、
八日	藥師如来	不倫盜、此日念此尊、除五十劫ノ罪、
十四日	普賢菩薩	不邪婬、件日念此尊、除五十劫罪、
十五日	阿弥陀如来	不妄語、件日念此尊、除十劫ノ罪、
十八日	觀世音菩薩	不沽（買う）酒、件日念此尊、除九千劫ノ罪、

廿三日 得大勢菩薩 説四衆過、件日念此尊、除一万劫ノ罪、  
廿四日 地藏菩薩 不自讚毀（けなす）他、件日念此尊、除五万劫ノ罪、  
廿八日 砒儘舎那仏 不慳（おしむ）性加殿、件日念此尊、除三万劫ノ罪、  
廿九日 薬王菩薩 不順（怒る）心、不受悔、件日念此尊、除四万劫ノ罪、卅日釈迦如来不語（そしる）三宝、件日念此尊、除五万劫ノ罪、

として、十齋日があげられている。ここには十三日の虚空蔵菩薩は見出せない。

しかし、十齋日の諸仏の結縁日は、三十日仏名とほぼ一致している。そして、源為憲が天禄元年（九七〇）に著した『口遊』には<sup>3(1)</sup>、十齋日については記述されているが、三十日仏名には触れていない。このことは、『口遊』と『拾芥抄』成立の時間的なへだたりの中に、虚空蔵菩薩と十三という数字の結びつきを求めてよいのかも知れない。

さて、ここで注意されるのは、鳥羽上皇の皇后である高陽院（藤原泰子）の十齋日の信仰である<sup>3(2)</sup>。

『兵範記』仁平二年（一一五二）十月十三日の条によると、

十一齋虚空蔵講如例、

とあり、同書、仁平三年（一一五三）六月十三日条にも、

高陽院十一齋虚空蔵講如例、

とあるように、十齋日を信仰し盛んに十齋講を催したことで知られる高陽院は、その十齋日に加えて「十齋」として十三日に、虚空蔵講を行なっているのである。高陽院は、なぜ特に虚空蔵菩薩に帰依し、それを十一齋に加えたのであろうか。この点を考えてみたい。

そもそも十齋日の信仰は、『地藏菩薩本願経』卷上「如来讚嘆品第六」に、

於月一日八日十四日十五日十八日二十三二十四二十八二十九乃至三十日。是諸日等諸罪結集定其輕量。(略)能於是十齋日。对仏菩薩諸賢聖像前読是経一遍。

とあることに基づいている。

『地藏菩薩本願経』(六五二〜七一〇、唐実又難奘訳)は<sup>(3)</sup>、『地藏十輪経』(大乘大集地藏十輪経、六〇二〜四年、玄奘訳)<sup>(4)</sup>とやらんで地藏信仰の根本をなす經典であり、そのことからするに、十齋日の信仰は、地藏信仰の中に位置付けられるものということになる。その『地藏菩薩本願経』の卷末にあたる卷下「嘱累人天品第十三」には、

仏告虚空蔵菩薩。諦聴諦聴吾当為汝分別説之。

若未来世有善男子善女人。見地藏形像及聞此経。乃至読諦香華飲食衣服珍宝布施供養讚嘆贈(あおぎみる)膳。

得二十八種利益。一者天龍護念。(略)二十八者畢寛成仏。復次虚空蔵菩薩。若現在未来天龍鬼神聞地藏名檀地藏形。

或聞地藏本願事行。讚欺歎躋得七種利益。一者速超聖地。(略)七者畢寛成仏。

とあつて、ここでは、地藏菩薩の形像や経を供養すると、人は二十八種の利益を得、天龍鬼神は七種の利益を得て皆やがて成仏できることを、釈迦が虚空蔵菩薩に説いたとされている。

『地藏菩薩本願経』において、上下卷十三品中の、第十三品に虚空蔵菩薩の利益を述べることが、あるいは、『三十日仏名』の十三日に虚空蔵菩薩を置く理由であるのかも知れない。それはともかくとして

も、高陽院の十一斎虚空蔵講は、地藏信仰を基盤とする十斎日の信仰に、虚空蔵・地藏の対偶関係、具體的には『地藏菩薩本願経』巻下第十三で主張される虚空蔵菩薩の利益を根拠として営まれたと考えることができよう。

藤原定家の『明月記』元久二年（一二〇五）三月一日条に、

参法輪、未時（午後二時）修地藏講、

という記事がある。定家はしばしば法輪寺に参詣しているが、法輪寺の本尊である虚空蔵菩薩の前で地藏講を修していることも、以上の考察によつて納得できるのである。

一方、もうひとつの地藏信仰の根本經典である『地藏十輪経』（大乘大集地藏十輪経）では、巻第十に、

世尊（釈迦）告虚空蔵菩薩摩訶薩言。善男子。吾今持此地蔵十輪大記法門。付嘱汝手。汝当受持  
広令流布。

とあり、『地藏十輪経』の流布者として、虚空蔵菩薩の役割をさらに明確に示している。

『地藏菩薩本願経』『地藏十輪経』を検討すると、虚空蔵菩薩と地藏菩薩との関係が、まさに不可分のものであることがよく分かるのである。そして、平安時代の後期、末法思想が貴族階級を中心に広く浸透するに至つて（わが国では一〇五二年から末法の世に入るとされた）、無仏の時代にあつて、なお衆生を救済する仏としての地藏菩薩に対する信仰が飛躍的に発展していくのであるが、同時に、対偶仏としての虚空蔵菩薩を浄土教的な位置におこうとする働きかけも強まるのであつた。そして、このような虚空蔵・地藏の対偶関係を意識しつつ、また虚空蔵菩薩を十三番目の仏とすることが、追善のための年忌供養延長にもなつて十三仏信仰を生み出して行くのである（<sup>3</sup>5）。

ところで、法輪寺の虚空蔵菩薩が、求聞持法の本尊としての才智の仏としての性格に加えて浄土教的な立場からの信仰を集める時期は、もう少しさかのぼることが出来るのである。

それを示すのは、藤原宗忠の『中右記』承德二年（一〇九八）五月十九日条の、次の記事である。

今日晩頭参詣法輪寺、終夜在堂中所祈申有二願、一者、生々世々在々処々得値遇法華経、身従依先世業輪廻六道、深持法華錐一時不敢忘、一者必臨終之時安住正念往生極樂、就中虚空蔵菩薩殊有臨終正念、願深信此事所往詣也、

とあつて、法輪寺の虚空蔵菩薩に厚く臨終正念を願う姿を認めることができる。そして、この記事は続けて、

抑往日少年之昔、度々参詣此堂舎、祈申才学之事、頗少分如相叶、於今日偏止現世之事、只祈往生之願菩薩悲願必垂引誓、

と述べており、十一世紀の末には、すでに貴族階級の中に法輪寺の虚空蔵菩薩に才学を願う、いわば十三まいり信仰の原型がみられることをも教えてくれる。

才学の仏である虚空蔵菩薩が、極楽往生に、特に臨終正念という浄土教的な視点から再評価されていることを如実に示す、この『中右記』の記事は、虚空蔵信仰を考える上で重要な意味を持つのである。

## 六 覚鑿と虚空蔵求聞持法

以上のように、「十三」という数字に導かれながら、才智の仏としての虚空蔵菩薩の信仰である「十三



まいり」、浄土教的な虚空蔵菩薩の信仰である「十三仏事」という二つの面、換言すれば、現世的な虚空蔵信仰と来世的な虚空蔵信仰という二つの性格が、宗忠の時代にまで遡ることを知ったのである。

虚空蔵菩薩の信仰が、求聞持法の本尊として展開したことは、道昌や空海の例をひいて紹介した。その虚空蔵が、末法の世となって浄土教的な役割を果たすことになる。そこには、虚空蔵・地藏の対偶関係が作用したことは否定できない。

しかし、虚空蔵求聞持法は、真言宗にとって秘法ともいうべきものである。

その求聞持法の本尊を、浄土教的に位置づけるためには、虚空蔵信仰を持つ宗教者の積極的な介入なしには、説明しにくいと思われる。そこで、宗忠の時代、つまり白河・堀河・鳥羽という三帝の時代に、虚空蔵信仰の担い手となった宗教者について考えてみたい。

隠岐入道明寂、時棟孫、隠岐守大江安成息也、

以虚空蔵菩薩久為本尊、修求聞持法、即成悉地、

とあり、大江氏の出身である明寂は、虚空蔵菩薩を本尊とし、求聞持法を修することで悉地を得たとされている。明寂は天治年中（一一二四～二五）に没し、その墓所は高野山上一心院谷にある。

この明寂から、求聞持法の秘法を受けたのは覚鑿である。

永久四年（一一一六）丙申、御年二十二歳、彼の明寂上人より、求聞持の秘法を受け給ひ、其年の春初より、冬夕に至るまで、高野の奥院に放て、発しがたき大願を発し給ひ、其法を修行し、偏に無上菩提の為に、甚深広大の自然の智慧を開発せんことを祈請し給ふ（『興教大師行状図記』卷

上）  
37

覚鑿は、のちに興教大師とおくり名され、新義真言宗の宗祖とされるのだが、熱心に虚空蔵求聞持法を修したことで知られている。『高野春秋』では<sup>(38)</sup>、「保安三年（一一二二）壬寅年、秋七月、牟柄榎修求聞持法於奥院道場。得悉地。第九度也。自敝得身通牟」とあるし、覚鑿の『求聞持立願文』は保安三年（一一二二）七月と保安四年（一一二三）九月の二度の分が、現在伝えられている<sup>(39)</sup>。

覚鑿の求聞持法の信仰は、広く知られていたようで、『太平記』の「根来与高野不和ノ事」に、

覚鑿トテ一人ノ上人オハシケリ。一度三密瑜伽ノ道場二人シヨリ、永ク四曼不離ノ行業二不解一  
おこたる一、観法座タケナハニシテ薰修年久シカリケルガ、即身成仏ト乍談、猶有漏ノ身ヲ不替事  
ヲ嘆テ、求聞持ノ法七座迄行フ。

とされている。

この覚鑿は、嘉保二年（一〇九五）仁和寺領の肥前国藤津荘で、伊左平次兼元の子として生まれた。十三歳の時京都に出て、仁和寺の寛助に従い、保安二年（一一二二）には真言広沢流の伝法灌頂を受け、また、真言小野流や台密など密教諸流を遍学した。やがて鳥羽院の絶大な帰依を得て、紀伊国石手荘の施入を受け、高野山に大伝法院を開創した。

『撰集抄』六八の「覚鑿上人ノ事」に、

白河院の、生身の仏をおがみ参らせんとて、七日御いのり侍りけるに、七日にあたる夜の御夢に、  
「あすの何時に、高野の物とて、僧の参り侍らんを拝ませませませ。それぞ、まことの生身の阿弥  
陀にていませんと」と御覧じて、御夢さめさせ給ひにけり。

とあり、どのような人物が現われるのかを心待ちにしていると、「高野の伝法院建立の事を申さんとて」、

覚鑿が訪ねてきた。会ってみると、覚鑿の額から光がさしているのが院の目には見えた。夢の告げはこの事であったのかと不思議に思われ、五箇の庄を施入されたという。

院の庇護のもと、高野山上で大きな勢力となったが故に、覚鑿はやがて山内での反目をかい、紀ノ川沿いの根来の地に去らざるを得なかった。覚鑿は、この根来寺で康治二年（一一四三）十二月十二日示寂したのである。

覚鑿が、鳥羽上皇の後宮である高陽院や周辺の貴族に強い影響力を持ったことは、想像にかたくない。藤原宗忠の『中右記』長承元年（一一三二）十二月七日条に、

晩頭高野正覚房聖人（覚鑿）入来、問光明真言令処、答云大日井阿弥陀呪也、功德甚深不可思議也、真言之中、備五智如来也、是依為持呪、尋問奥義也、問此悟了、被致信心也、

とあることから、宗忠が覚鑿の信奉者の一人であったことがわかるのである。

この記事中、光明真言についての間に、大日と阿弥陀如来の呪である旨を答えている。覚鑿は、その著作である『五輪九字明秘密釈』一卷において<sup>40</sup>、大日如来と阿弥陀とが一体であることを述べ、それまで浄土教を取り入れることのなかった真言宗にあって、浄土教と真言密教をはじめて融合させた功績には大きいものがあるとされている。

しかし、彼の根本はあくまで密教にあった。だからこそ、虚空蔵求聞持法の修法に情熱を傾けたのである。覚鑿が求聞持法の修法で得た体験は、『虚空蔵宝鍵』の中で<sup>41</sup>、

百万遍功現本智於三相十億数力顕性徳於一蝕、深智深信者一念証三密重罪重障人七遍果二巖、不法指講猶招諸尊之冥護、順教修行誰疑一座之現証乎、

と評し、百万遍虚空蔵真言読誦の効はまことにすばらしく、重罪重障の人も、不法の人も、この誦を持すことで諸尊の冥護を受けることが出来ると述べている。

虚空蔵信仰に浄土教的色彩が濃くなる時、そこに虚空蔵求聞持法の熱心な修行者としての覚鑊を見出した。真言宗に浄土教を融合し、新義真言宗の宗祖とされる覚鑊が、自ら著した『地蔵講式』の中で、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩とを同体であると主張したことが<sup>(4)</sup><sup>(3)</sup>、やがて十三仏信仰の成立に大きな影響を及ぼしたことも、また否定できないであろう。

## 七 結語

本稿において、私は、京都の風物詩である「十三まいり」の信仰を取り上げ、虚空蔵菩薩の民俗信仰的な側面を考察した。そして、虚空蔵菩薩と「十三」という数字の結びつきから、十三塚・十三仏の問題にもふれ、十三仏信仰が、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩との対偶関係から生じたと考えた。地蔵信仰が注目された平安末期、『地蔵菩薩本願経』や『地蔵十輪経』が広く知られるとともに、そこで地蔵信仰の管理者ともいえる立場にある虚空蔵が、浄土思潮の観点から評価され、やがて虚空蔵菩薩を大日如来の上におく、十三仏という新たな信仰概念が形成されるのである。

もつとも、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩については、冒頭で紹介した広隆寺講堂の両尊について考えなければならぬ。本稿をまとめている時に、広隆寺の清滝智弘貫主のお話を伺う機会に恵まれた。御教示によると、広隆寺講堂の虚空蔵菩薩・地蔵菩薩は当初より阿弥陀如来の脇侍として造立されたか、あるいは

は、後に、阿弥陀如来の脇侍に据えられたのか定かでないという。ともかく、道昌僧都が虚空蔵菩薩・地蔵菩薩を造立するにいたる背景について、今後検討していきたい。また、本章では、虚空蔵菩薩・地蔵菩薩の対偶関係を地蔵信仰から眺めることに止どまって、虚空蔵信仰からみた地蔵菩薩の役割には触れることがなかった。この点も今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 『大日本仏教全書』（昭和四十七年版）第八三卷、二四三頁。また、貞観十五年（八七三）成立の『広隆寺縁起并資財帳』にも同様の記事がある。
- (2) 久野健「地蔵菩薩像の変遷」（桜井徳太郎編『地蔵信仰』民衆宗教史叢書第十卷所収、雄山閣出版、昭和五十八年刊）を参照のこと。
- (3) 東京大学史料編纂所蔵本。『大日本仏教全書』（昭和四十七年版）八三卷、三〇〇頁。
- (4) 藺田香融「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる―」（『平安仏教の研究』所収、法蔵館、昭和五十六年刊）を参照のこと。
- (5) 田中久夫「地蔵信仰の伝播者の問題―沙石集』『今昔物語集』の世界―」（『仏教民俗と祖先祭祀』所収、神戸女子大学東西文化研究所・永田文昌堂、昭和六十一年刊）。
- (6) 藺田香融「嵯峨虚空蔵略縁起―ある密教寺院に関する覚書―」（『関西大学文学編集』第五卷一・二合併号）を参照のこと。
- (7) 『文化庁編『日本民俗地図』＜「出産・育児解説書」＞（国土地理協会、昭和五十二年刊）。表（1・

3・1) も同じ。

(9) 筆者調査、昭和六十年八月。

(10) 『国崎——一庫ダム水没地区民俗資料緊急調査報告書——』（川西市教育委員会、昭和五十年刊）四九頁

(11) ～(15) 前掲註(7)に同じ。

(16) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本。岩波書店刊『名物評判記集成』に集録。中野三敏著『江戸名物評判記案内』（岩波新書、昭和六十年刊）二一三～六頁を参照のこと。

(17) 『新修京都叢書』第五卷（光彩社、昭和四十四年刊）四七八頁。

(18) 『民間風俗年中行事』（国書刊行会、大正五年刊）五三八頁。

(19) 前掲註(16)『開帳花くらべ』に、「別して職人方のひいきつよく」とある。

(20) 『浪速叢書』第七巻、三一〇頁による。

(21) 『岡山県史・民俗』第一六巻（岡山県、昭和五十八年刊）二六四頁。

(22) 『常陸国水戸領風俗間状答』一『日本庶民生活史料集成』第九巻所収、三一書房、昭和四十四年

刊一に、文化年間（二八〇四〜一七）頃の習俗として「正月十五日、村松といふ所に虚空蔵の縁日にて、遠近群聚す。城下より恵方にあたりたる時ハ別て参詣多し」とあるが、十三まいりは未だ見出せない。

(23) 本論文第一章第一・二節所収。また、法輪寺の中世について、拙稿「虚空蔵信仰の伝播―能登石動山・美濃高賀山・山城法輪寺、本尊の像容を視点として―」（『御影史学論集』第九号、御影史学研究会、昭和五十九年十月刊、本論文第四章第二節所収）を参照のこと。

(24) 「一番ほうりん寺南さが大る川むかひ、二番ほうせんるん北さがしやか堂うしろ、三番くほうりんじうづまさやくし堂うしろ、四番きやう王堂きたの天神のまへ、五番せいわるん北野七本松一條上ル丁、六番わくほうるんでみづ通千本東へ入丁、七番ざうりんじよしや町さわら木町下ル、八番いわかみ寺堀川半町西六角下ノ丁、九番いなばだう松原通からす丸のかど、十番のうまんるん六かくだうの内西北ノ角、十一番ふくしやうじ出水通千本西へ入町、十二番かうだう寺町通竹や町行あたり、十三番ちふくみんよしだ山のうへ、右道のりさがほうりんじよりよしだちふくみんまで三里十三町有」（『新修京都叢書』第三卷、臨川書店、昭和四十四年刊、九九頁）

(25) 岩波文庫本『元和下学集』、一〇九頁。

- (26) 本論文第二章所収の各論文。
- (27) 中村ひろ子「十三塚の伝説」(『十三塚―現況調査編1』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第九集、平凡社、昭和五十九年刊、三〇頁一。表(1・3・2)も同じ。戦国期の築造とする伝承が、全事例の約八割を占めると報告されている。
- (28) 新訂増補『故実叢書』第一三(明治図書出版・吉川弘文館、昭和三十年刊)、四四四頁。
- (29) 『大正新修大蔵経』第四七・諸宗部四(大正一切経刊行会、昭和三年刊)、一〇五九頁。
- (30) 前掲註(28)、四五二〜三頁。
- (31) 『続群書類従』第三二輯上(続群書類従完成会、大正十五年刊)、六七〜八頁。『口遊』の十齋日には地蔵菩薩が含まれないが、地獄での抜苦が主題となっている。
- (32) 桜井徳太郎「高陽院十齋講について」(小葉田淳教授退官記念『国史論集』所収、小葉田淳教授退官記念事業会、昭和四十五年刊)を参照のこと。



- (33) 『大正新修大藏經』 No. 四一二。
- (34) 『大正新修大藏經』 No. 四一一。
- (35) 『花園天皇辰記』元弘二年（一三三二）五月三日条に「世二年追善本説不分明、然而近年為習俗」とある。
- (36) 『往生伝・法華験記』（日本思想大系七、岩波書店、昭和四十九年刊）所収、六九八頁。
- (37) 三浦章夫『興教大師伝記史料全集』第一編、伝記（ピタカ、昭和五十二年復刻版刊）、二〇〇頁。
- (38) 日野西真定編『新校高野春秋編年輯録』（名著出版、昭和五十七年刊）、九〇頁。
- (39) 『興教教大師伝記史料全集』第二編、史料「（ピタカ、昭和五十二年復刻版刊）、五二八～三四頁。
- (40) 『五輪九字明秘密釈』一卷（『大正新修大藏經』No. 二五一四）。

(41) 井上光貞著『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、昭和五十一年刊）第四章第一節（二二）

「覺鑊の運動とその念仏思想」において、「覺鑊は高野山はもちろん、真言宗史のうえでも、初めて浄土教学上のまとまった著作を残した人で、この意味で、天台宗史上の源信に似たような地位にたつ人である」（三五―頁）とし、覺鑊と源信とを比している点、興味深い。また、田中久夫「高野山奥の院納骨の風習の成立過程」（『祖先祭祀の研究』所収、弘文堂、昭和五十三年刊）を参照のこと。

(42) 櫛田良洪著『覺鑊の研究』（吉川弘文館、昭和五十三年刊）、二〇九頁。

(43) 「謂其尊像虚空蔵尊、是懂菩薩之本身、今尊異号也」（『興教大師全集』所収）とされる。速水侑著『地蔵信仰』（塙新書、昭和五十年刊）を参照のこと。

## 付節一 法輪寺と『平家物語』の世界

一

洛西の嵐山は、春の桜、秋の紅葉と、春夏秋冬、訪れる人のたえることのない景勝の地である。この嵯峨野の風物の中心となつてゐる渡月橋は、法輪寺橋ともよばれるように、法輪寺への参詣のために設けられたものである。渡月橋の上に立つて南にむかうと、法輪寺の多宝塔を見ることが出来る。

昔から、旧曆三月十三日（現在は、四月十三日）の前後には、法輪寺に参詣した十三歳の少年少女が、はじめて自身の着物に着飾つて大勢渡月橋を渡ってくる。子供達は、橋を渡りおわるまで、後ろを見ないやうにと言いきかざれている。もし振り返ると、せっかく虚空蔵菩薩から授かつた知恵と福とを返してしまふからである。この行事を「十三まいり」といい、法輪寺が一番賑わう行事であり、また京都の伝統的な信仰の一つでもある。

法輪寺は虚空蔵菩薩を本尊として、古来より貴賤の信仰を集めてきた。縁起によると、弘法大師の御弟子である道昌僧都が、この地で、虚空蔵菩薩の御加護によつて、知恵を授かり仏道の悟りをひらこうと、虚空蔵求聞持法という修法を行った。

さて、道昌が求聞持法を修して、その百日目の結願に、明星がひととき輝きを増して飛び来たり、道昌の衣の袖に縫のごとく、鑄のごとく虚空蔵菩薩の姿となつてあらわれ、数日を経ても消えなかつたという。これこそ、生身の仏だと感激した道昌は、その衣の虚空蔵菩薩の姿通りの木像をつくり、体内に

衣の影像を納め、弘法大師を御導師として開眼の法会を営んだ。

この木像が、法輪寺の本尊として崇敬を集めるのである。このような由緒深い虚空蔵菩薩に、都の人々はこぞって結縁を求めた。藤原宗忠の日記『中右記』（末尾参照）や、藤原定家の『明月記』などによって、その様子を知ることができる。

## 二

「諸行無常・盛者必衰」を基調とした『平家物語』は、源平の争乱と平家一門の没落を描いた叙情詩として知られるが、その中には、いくつもの悲恋が織りこまれている。

ここで『平家物語』の世界から、法輪寺にまつわる二つの物語を紹介することにしたい。

平清盛は、手にした栄華をより確かなものとするために、娘の徳子を高倉天皇のもとに嫁せる。世に建礼門院として知られる人である。高倉天皇が十一歳の少年で一徳子は十七歳の時であるから、まさに、孫を天皇の位につけることを夢みた清盛の政略結婚であった。幾年か経て、徳子は赤子を宿すのであるが、その頃になると、高倉帝の清盛に対する反発が大きなものとなっていた。そんな時、高倉帝の前に、宮廷一の琴の名手で、また大変美しい小督局があらわれ、高倉帝は小督局に熱中していく。小督は清盛のむこの冷泉隆房の愛人であったので、清盛は大いに怒り、ひそかに小督を殺そうとする。そのことを知った小督は、我が身はともかく、高倉帝にも災いが及ぶのをおそれて、こっそりと宮廷を抜けて姿を隠した。

高倉帝は、姿を消した小督を思い心は沈んでしまった。月の美しい夜がめぐってくると、ことさら小督が恋しく思われてならない。高倉帝は、近くにひかえていた源仲国に、小督を探すように命じる。源仲国は笛の名手で、幾度も小督の琴と合奏したことがあった。だからこそ、高倉帝の心の内を察することが出来たのである。しかし、小督局の隠れ住むのは、嵯峨のあたりとしか知れないのである。不安に思いながらも仲国は、馬を嵯峨野へと向ける。

若やと思ひ此処彼処に、駒を駆寄せかけよせて、控へひかへ聞けども、琴弾く人は無かりけり。月にや憧れ出でたまふと、法輪に参れば、琴こそ聞え来にけれ。峯の嵐か松風か、それかあらぬか、尋ねる人の琴の音か、がくそうぶれん樂は何ぞと聞きたれば、夫を想ひて恋ふる名の、「想夫恋」なるぞ嬉しき。（謡曲『小督』）

馬をすすめるうちに、やがて法輪寺に近づいてきた。その時である。かすかに琴の音を聞いたように思った。今日のように美しい月夜であるから、小督も琴をかなでているのではと馬を近づけると、それは夫を思う「燈知蕊」の曲である。小督局に違いない。高倉帝を思つて琴をひくのであろうと、仲国も笛を取り出して、琴に合わせて吹きはじめた。

さて、小督にめぐりあつた源仲国は、高倉帝の思いをつげ、宮廷に連れて帰った。高倉帝の喜びようは大変なものであつたが、一方、清盛の憎しみは大きくなるばかりで、やがて小督局を無理に尼とし、高倉帝から遠ざけてしまった。

高倉天皇の寵愛を受けたが故に、清盛に憎まれた悲劇のヒロイン小督局の物語であつた。江戸時代の京都の名所案内である『山城名跡志』の法輪寺の項によると、

小督塔 伝えて云く、古堂の後にあり、今石仏あり。

とある。現在も、法輪寺の本堂の後ろに一基の石塔があり、小督塔とも、また、高倉天皇追善のための経塚とも伝えている。小督の物語をしのぶ遺跡のひとつである。

### 三

次に紹介する、滝口入道と横笛の恋も、悲しい結末となる。

建礼門院につかえる雑仕に、横笛という容姿の優れた女性があつた。そのころ、権勢をふるっていた清盛の子息重盛の家中に、斎藤滝口時頼という立派な若武者がおり、滝口は女院の屋敷に出かけたおり、横笛を一目見て心を奪われてしまう。思い悩んだあげく、手紙を書いて心の内を訴えたところ、横笛からも、色よい返事をもらうことが出来た。それから幾度か手紙をやりとりし、契も深くなつていったが、幸せは長くは続かなかつた。二人のことが、滝口の父茂頼の耳に入ったからである。茂頼は滝口をよんで厳しく意見するが、滝口が聞き入れるはずはない。とうとう勘当ということになつてしまふ。滝口は、はかない世をなげき、一夜を横笛と共にして、愛用の笛を残していずともなく立ち去つてしまふ。

生年十八の歳、菩提心を発しつつ、嵯峨奥の法輪寺にして出家し、法名を阿浄と名を付て、行澄て居たりけり。（『源平盛衰記』卷三十九）

一方、横笛は、いくら待てども滝口が、姿をみせないのいぶかしく思っていると、風のたよりに、滝口が世を捨てて出家し、嵯峨の法輪寺に住むことを知る。横笛は、滝口の姿を追い求める。

人こそ心強く共、尋て恨んと思ければ、忍て内裏を紛れ出て、法輪寺へぞ尋行。暮行秋の習とて、道芝の露深ければ、夜寒に成ぬ旅衣、重し妻こそ恋しけれ。十市の里の砧の音、よわり終ぬる虫の声、一方ならぬ哀さも、誰ゆへにとぞ悲しみける。都をば日と共に出たれども、また踏なれぬ道なれば、涙に雲夜の空、比彼にぞ迷ける。つづきの里をもとせず、人を咎むる里の犬、声澄程に成てこそ、法輪寺には入にけれ。此寺とは聞たれども、住らん坊は知らざりけり。女其夜は御堂に詣、仏の御前にて通夜しつつ、南無帰命頂礼大聖虚空蔵菩薩あかで別し滝口に今一度と心中に祈念して、礼拝をぞ奉りける。(『源平盛衰記』卷三十九)

そうして、一夜を御堂の内にあかそうと思つていると、どこからともなく、あのなつかしい滝口が「法華経」を唱える声が聞こえてくる。横笛は戸をたたいて、滝口の名をよぶが、滝口は心の乱れることを恐れて、戸を開けようとしなない。横笛は心も体も樵悴し切つて、

山ふかみ思い入ぬる柴の戸の真の道にわれみちびけ  
と読み捨てて、法輪寺に程近い大堰川に身をなげてしまう。

横笛の入水を知った滝口は、川から横笛の変わりをはたてた体をだきあげ、ねんごろに火葬して、その骨を首にかけ高野山に登り、奥の院に卒都婆を立ててその骨を埋め、自分も高野の聖となるのである。

以上のように、『平家物語』の世界でも、悲恋の物語として特に名高い小督局、滝口入道と横笛の物語に、虚空蔵菩薩をつなぐ話はあるが、虚空蔵菩薩のもつ、虚空のように広大な慈悲心にすがって、この嵯峨野の法輪寺に身を寄せたのである。

註

『中右記』承德二年（一〇九八）五月十九日条、「今日晚頭参詣法輪寺、（中略）抑往日少年之昔、度々参詣此堂舎、祈申才学之事、（中略）於今日偏止現世之事、只祈往生之願、菩薩悲願必垂引誓。」

〔参考文献〕

「京都王朝人の哀歎―ふるさと伝説の旅」第八卷（小学館、昭和五十八年四月三〇日刊）。

中村雅俊「十三まいりの成立―嵯峨虚空蔵法輪寺について―」（『御影史学論集』第三号、御影史学研究会、昭和五十一年十月一日刊）。



## 付節二 虚空蔵信仰と十三まいり信仰

一

「十三まいり」とは一般に、京都の嵯峨にある法輪寺の虚空蔵に参詣する行事だと考えられている。西角井正慶編の『年中行事辞典』（東京堂出版）においては、

陰曆三月十三日（今は四月十三日）に京都市右京区嵐山中尾下町の法輪寺の本尊虚空蔵菩薩（俗に嵯峨の虚空蔵さんと称し、日本最初の虚空蔵尊という）にまいること。十三日は虚空蔵の縁日であるので、これにちなんで十三歳になった子供が両親に付きそわれて参詣する。虚空蔵は福德、智慧を授けるといい、十三詣を智慧もらいとも呼ぶ。関東の七五三に相当する行事である。

と説明されている。十三歳前後は、人生儀礼のなかで成人への節目とされており、「烏帽子祝い」や「十カネツケ（鉄漿付け）」などがおこなわれる時期である。その年祝いが知恵と徳の仏である虚空蔵菩薩と結びつき、「十三まいり」という信仰が成立したと思われる。兵庫県川西市国崎では、「十三マイリ、コクゾサンマイリ」として、

十三才になると知恵をもらいに京都市嵯峨の法輪寺の虚空蔵菩薩におまいりをした。参る時は阿呆と賢の子を連れていくと、賢こくなるよといったたり、法輪寺の橋を渡るまでふりむいてはいかんという。この時に叔父・叔母からサガリフンドシといって赤いふんどしを祝ってくれた。

とあり（『国崎』川西市教育委員会）、フンドシワイとの結合がみられる。そして、「十三まいり」が法

法輪寺の行事とされることは、「十三まいり」が法輪寺の虚空蔵信仰を背景として成立したことを物語っている。

二

法輪寺と虚空蔵菩薩の結びつきは、早くも平安時代後期に成立した『今昔物語集』のなかにみいだされる。先に述べたように『今昔物語集』の巻十七は、まさに地蔵菩薩の巻でじつに三十二話を集めるのであるが、それにくらべて一話だけ虚空蔵菩薩の話がある。「比叡山僧、依虚空蔵助得智話第卅三」がそれであって、法輪寺の虚空蔵菩薩をとりあげている。この話で注目すべきなのは、比叡山の若き僧がつねに法輪寺に詣でて虚空蔵菩薩に「オヲ付ケ、智ヲ令有ヨ」と祈った結果、「誠ニヤム事ナキ学生」となりえた点である。

また、応永二十一年（一四一四）成立の『法輪寺縁起』では、空海の弟子であり太秦広隆寺の中興として知られる僧道昌が、法輪寺で「虚空蔵求聞持能満諸願法」を修したとしている。求聞持法とは、「聞持」すなわち記憶力を求めて修せられる密教の修法であって、この法により聞持を得ると、一度耳にしたことを忘れないとされる。『今昔物語集』の記事も、この求聞持法との関係を思わせる。『覚禅鈔』の「求聞持同異説」には、「諸師云。法輪ノ虚空蔵ハ求聞持ノ本尊也。」とあり、また、「道昌僧都、法輪ノ虚空蔵ノ加持カニ依リ。自然智ヲ得テ。位僧都ニ登ル。」とある。

藤原宗忠の日記である『中右記』の承徳二年（一〇九八）五月十九日の条に、

今日晩頭参詣法輪寺（中略）抑往日少年之昔、度々、参詣此堂舎、祈申才学之事とあるのは興味深い記事である。

応仁の乱をへて、僧恭畏が慶長元年（一五九六）、この寺に入ったところには寺運衰えて「堂舎荒蕪し経像毀壞」していたことは『続日本高僧伝』の恭畏伝から教えられる。恭畏は翌慶長二年（一五九七）には日本大勸進の綸旨を得て、やがて全国に勸進して堂塔伽藍の復興に力をそそいだ。法輪寺では、この恭畏を中興の祖としているが、恭畏もまた求聞持法を修したという。

以上のように、「十三まいり」成立の背景としての法輪寺をみたのであるが法輪寺の虚空蔵信仰は求聞持法の系譜をひくものであった。求聞持法の本尊がやがて、「十三まいり」の本尊となることは納得のできることといえよう。しかし、古代・中世の法輪寺には「十三まいり」という信仰はみられなかった。

### 三

さて、「十三まいり」の成立時期について『年中行事辞典』に「起源は比較的新しく、安永二年（一七七三）が始である」と指摘している。しかし管見にして、この安永二年成立という点について史料の裏付けを得ていないのであるが、貝原篤信の撰になる『京城勝覧』の天明四年（一七八四）再版本には、法輪寺の項に、

近年、三月十三日、十三歳になる都の男女参詣する事おびただし、是を十三まいりといふとあり、寛政十一年（一七九九）に秋里離島の作になる『都林泉名所図会』の同じく法輪寺の項には、

近年、下嵯峨法輪寺に、三月十三日、十三歳なる男女都鄙より来りて、群集大かたならず。本尊虚空蔵菩薩に智慧を貰ふとて、年々増て来る也。これを十三参といふとある。

寛政十二年（一八〇〇）に成立した『年中故事』においては「三月、法輪寺十三参」として、当本尊虚空蔵菩薩へ男女十三歳の者今日参詣すれば、福德の恵みを授け給ふと、大に群参す、大坂殊に多し。今日境内にて十三品の菓子売る、参詣の人は是を求めて本尊へ備へて、児どもへ食わしむ。是の参詣古きことにあらず、四十年余りにて、近年別して盛んなり、本尊十三日の縁日ゆへに云へり。是の寺及近辺嵐山の桜花盛りの折なれば、都鄙の老若大井川の辺にて遊獵し、春色を興ず。いわん方なし。

と書かれるにいたる。

『年中故事』のなかに、「十三まいり」がおこなわれるようになって、およそ四十年になるとの記事がみえる。『年中行事辞典』では安永二年（一七七三）がはじめとされており、十年ほどの開きがあるが、ほぼこの時期に成立したことが考えられる。

このように近世、法輪寺において成立した「十三まいり」は、現在その法輪寺をささえる最大の行事として盛行されているばかりでなく、ほかにも「十三まいり」をおこなう寺院をみいだすほどに展開しているのである。法輪寺以外で「十三まいり」をおこなうところとして、『年中行事辞典』では、

福島県河沼郡柳津町、霊巖山円蔵寺（臨濟宗）

茨城県那珂郡東海村村松、真言宗日光寺

京都府舞鶴市の愛宕山頂の虚空蔵菩薩

奈良市（旧五ヶ谷村）の虚空蔵菩薩

をあげている。これらはいずれも、虚空蔵菩薩をまつるところであり、「十三まいり」がいまでも虚空蔵菩薩にたいする信仰であることがうかがえる。しかし「十三まいり」が、すべての虚空蔵寺院にみられるわけではない。

たとえば、鎌倉時代中ごろの成立という『拾芥抄』諸寺部に、

法輪寺 虚空蔵「大井河西」広隆寺末「道昌建立」

石動寺在能登国、虚空蔵、智徳上人、光仁第四草創

とあり、法輪寺とともに、虚空蔵信仰を代表した石動寺、つまり能登石動山天平寺には「十三まいり」をみいだせない（清水宣英「石動山の歴史」、『能登石動山』所収）。また『越登賀三州志』に、

今石動の号は、天正十年（一五八二）能登国石動山の虚空蔵を此の地に遷すを以て也

と、石動山の本社宝満宮より遷したと伝える虚空蔵菩薩像が、北陸本線石動（いするぎ）駅に近い聖泉寺（富山県小矢部市）に安置されているが、ここにも「十三まいり」は存在しないのである。

#### 四

新たな信仰の成立は、それを受けいれ、支持する人びとがいてこそ可能となる。近世という時代のなかで、十三歳の年祝いが知恵もらいという信仰となりえたのは、京都の都市的性格のゆえであった。町

衆の成長、つまり商工人層の活躍によって「祝う」という余裕ができてきたことが、「十三まいり」成立の潜在的な要因となったのである。

それでは、なぜ「十三まいり」信仰が各地に伝播していったのであろうか。たしかに近年になって進学受験ということが意識されるとともに、「十三まいり」を取りいれる虚空蔵寺院はふえる傾向にある。ここでは東北の場合をとりあげて、「十三まいり」信仰の伝播をみていくことにしたい。

福島市にある虚空蔵寺院、黒岩山満願寺の「十三まいり」は、つぎの点に特色をしめしている。

私に説明して下さった寺の方もげんそうに、この満願寺に「十三まいり」にくる人は地元の福島市ではなく、峠を越えた山形県、特に米沢からくる人が多い。もとは柳津円蔵寺の虚空蔵菩薩に「十三まいり」にいったが、米沢から柳津までは一泊せねばならない。そこで最近、車で日帰りできる福島市の満願寺が「十三まいり」の対象として信仰されだしたという。前掲（表1・2・1）に昭和五十一年一月より九月までの祈願の控をしめた。米沢からの参詣でその他の祈願をした者は、いずれも「十三まいり」に付きそった親が自分の厄除けをしたもので、満願寺においては、地元の丑寅年生れの守り本尊としての虚空蔵信仰と、米沢の「十三まいり」の虚空蔵信仰が共存していることになる。同様の共存は『年中行事辞典』にあげられた柳津円蔵寺でもみられる。

法輪寺の「十三まいり」が、柳津円蔵寺の行事となるのを、ともに古来よりの虚空蔵寺院というだけでは不十分である。なぜなら、「十三まいり」が円蔵寺に直接伝えられたとするなら、それが米沢周辺にのみ限定されていることが理解できないからである。法輪寺の「十三まいり」が円蔵寺の行事として定着する過程に、米沢という地域に特別の要因があったと考えなければならぬ。

こう考えるとき、米沢の「十三まいり」が、京都から織物技術者の移住とともにもたらされたと伝承されていることは、一つの問題を提起している。というのは、『京都叢書』などで近世の法輪寺の伝承を検討するなかで、「十三まいり」信仰の成立と前後して、法輪寺に技術者集団の信仰がみられるからである。これは『都名所図会』の法輪寺の項に、「参籠堂」として、

都の工職人この所に籠り、一七日断食し、滝に垢離し、本尊に智福を祈る。近年断食の輩つねに絶え間あらず。

と、工職人の参籠がさかんな様子を伝えている。この話は『山城名所寺社物語』に日蓮と左甚五郎が法輪寺に参籠したとするつぎの話と関連があらう。

日蓮上人も三七日籠り給ひて法花の宗門をひろめ給ふ、ちかくは左の甚五郎百日籠りて霊夢をうけ日本に彫物師の名人といへり当寺は智福山とて智恵と福をさづけんとの御せいがん故今も御堂に籠人おほし

『都名所図会』でいう工職人は、左甚五郎の話にみられるように、その技術の上達を願って参籠したものと思える。また、この法輪寺に日蓮参籠の伝承が存在することは、『都名所図会』の大光山本圀寺で日蓮の伝をあげ、

幼稚より才賢にて常に虚空蔵を祈る。ある夜の夢に老僧来り、手に明星の如くなる宝珠をささげて授与す。これよりして一を聞いて十を悟れり

とある“日蓮の虚空蔵信仰”が仲立ちなあって、法華宗徒と真言宗の法輪寺が結びつく下地のあることをしめしている。

法輪寺には、「十三まいり」信仰が成立したのと同じころ、また技術者集団の信仰があった。そして、米沢では技術者集団が「十三まいり」を伝播したというのである。このことから、ただちに「十三まいり」が技術者集団の信仰とはいえないまでも、密接な関係がうかがえる。「十三まいり」が衣裳くらべといい、女の子がはじめて振袖を着る時とする 것도、西陣織、ひいては織物技術者とのつながりを暗示するものではないかと思える。それをふまえたうえで、技術者集団の虚空蔵信仰を次に考察したい。

## 五

現在、法輪寺では十一月十三日に漆祖漆器守護祭が催され、全国から漆器関係の商人、製造人が集まる。この霊験について、

文徳天皇第一皇子惟喬親王は我邦に於ける漆器製法の未だ完全ならざるを慨歎し給ひ、当山に参籠し本尊に祈誓し、夢に高僧より伝授して漆下地、磨出法、継漆法等を完成し給ふ。爾来漆器製法の守護尊として漆器商家並其製造人は、毎月十三日報恩講を設けて本尊を供養し崇信すること現今各地に盛大なり。

とある（『虚空蔵法輪寺要誌』）。

実際に、海南市黒江では、

古くから塗師屋の間でこくそ祭が行なわれてきた。当日は漆器の守り神と云われている虚空蔵菩薩を祭り職工や親類縁者を招いて酒肴でもてなし一日を過した。



というし（冷水清一『海南漆器史』、金沢市においても、

塗師屋なども十一月十三日にコクソ祭（虚空蔵）なるものを行うと報告されている（小林忠雄「都市の生活感覚と民俗社会」、『都市と民俗研究』所収）。このような塗師の虚空蔵信仰は、たしかに近世の法輪寺にみられた工職人の信仰をひきつぐものであろう。

とはいうものの、技術者集団の信仰は虚空蔵信仰のみではない。大工の聖徳太子信仰や鍛冶屋、鋳物師が旧暦十一月八日におこなうフイゴ祭など多様な信仰が知られている。聖徳太子信仰、フイゴ祭、そしてコクソ祭とそれぞれの職種によって独自の展開をしめしており、その点から、法輪寺にどのような職種の技術者が集まるかは大きな問題となろう。

それはともかくとして、近世の法輪寺に集まった技術者は、『都名所図会』に「都の工職人」とあるように、特定の職種というよりはむしろ、町衆の構成員としての工職人層ととらえるべきである。京都の工職人層が法華宗徒であったことはよく知られているが、このように考えてこそ、法華宗徒と法輪寺との関係が理解できそうである。そして、町衆の支持を受けたからこそ、「十三まいり」もまた法輪寺において成立したと考えるのである。

第二章 十三仏信仰の伝播と受容

## 第一節 十三仏信仰の成立

### 一 はじめに

十三仏信仰については、すでに多くの先学によって検討がくわえられてきている<sup>(1)</sup>。

本章では、特に十三仏の最終三仏が阿銭如来、大日如来、虚空蔵菩薩という密教的な仏で占められている点に注目し、かつ密教の極致ともいえる大日如来をこえて位置する虚空蔵菩薩の意味を通して、十三仏信仰の成立とその背景ということを考えてみたいと思う。

十三仏というものは、経典としては存在せず、十三仏信仰が民間に普及するとともに仏教者でさえも、その説明に窮したようである<sup>(2)</sup>。

藤井正雄編『仏教儀礼辞典』（東京堂出版刊）には次のような説明がある。

不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿銭、大日、虚空蔵をいう。

この十三仏を一幅あるいは三幅にこしらえたのが十三仏の掛軸である。十三仏の掛軸は葬儀のときに靈棺の背後にかけるのが禅宗門系統の古来の習慣となっている<sup>(3)</sup>。死者がでると壇信徒は寺から十三仏の掛軸を借り、葬式、四十九日がサむと、十三仏のお札とともに掛軸も寺に返却するのが例としているが、最近、都会地ではすたれている。

また同書の「板塔婆」の項では、真言宗豊山派の卒塔婆として、

初七日 不動

二七日	釈迦
三七日	文殊
四七日	普賢
五七日	地藏
六七日	弥勒
七七日	薬師
百ケ日	観音
一周忌	勢至
三回忌	阿弥陀
七回忌	阿銭
十三回忌	大日
三十三回忌	虚空蔵

とあり、忌日と結びつけて十三仏が配されている。さらに、高野山真言宗の在家勤行式の第十一として、「十三仏真言」として、

(一) 不動明王 ノウマクサンマンダバザラダンセンダンマカロシヤダソワタヤウンタラタカ  
ンマン

(中略)

(十三) 虚空蔵菩薩 ノウボウアキヤシヤキヤラバヤオンアリキヤマリボリソワカ

と、十三仏の真言が記されている。十三仏は禅宗門系統と真言宗において重要な位置を占めるようである。

## 二 民俗にみる十三仏の機能

現行の民俗における十三仏の役割を次にみていきたい。

群馬県勢多郡大胡町堀越では、葬式中陰の時に、村の戸主全員で組織されている念仏組によって「念仏」がおこなわれる<sup>(4)</sup>。それは、

- ① 「南無阿弥陀仏」
- ② 十三仏 「不動く虚空蔵」
- ③ 「西国三十三番よ、坂東三十三番よ、秩父三十四番の観音念じ申すよ、南無阿弥陀仏」
- ④ 「融通念仏南無阿弥陀仏」
- ⑤ 男、「十王十体南無阿弥陀仏」  
女、「一日、四日、十四日、二十四日のお念仏は……」

## ⑥ 真言陀羅尼

という順に唱える。太鼓、鉦、十三仏掛軸は組の所有であり、供養のあった家で保管して、他で死者が出た場合には、その時にその喪家に道具を引き渡すことになっている。

長野県上高井郡小布施町雁田では<sup>(5)</sup>、葬式中陰の時に在家で、

親類縁者隣組の婦人が十三仏の掛軸をかけ、その前で大念珠を回し念仏する。座中の長老か住職が鉦を叩き音頭をとり「ナムアマミダブツ」を唱え一同唱和する。もっぱら新亡の追善供養に行われている。

また、栃木県河内郡上之川町蓼沼では<sup>(6)</sup>、葬式の時に、在家にて

十三仏を祀り、部落のものが集まって百万遍念珠をくり死者の追善をつとめる。  
という。

滋賀県蒲生郡日野町熊野では<sup>(7)</sup>、葬式に際して、

前日に葬式の準備としてソカダケ、チョーチン、ハタ、十三仏サンの掛軸を用意する。十三仏サンの掛軸はトキ仲間の家が順番に持っているのです、その家から借りてくる。返す時にはお礼として米二升あるいは相応の現金をもつていく。

とされる。

以上みてきたように、十三仏は葬送儀礼と深く関係しているが、これは全国的な習俗である。

ところで、日野町熊野では、別に十三仏講ともいうべきものが存在する<sup>(8)</sup>。それはシルコウとよばれ、熊野とひとつ下の村である平子の、草わけとされる八戸からなるトキナカマによって行われる。

毎年旧霜月四日に、熊野、平子のトキナカマ八戸が当番の家(ヤド、ジョウモト)に集まって行われる。ヤドはヨボシギを受けた順にまわる。午前十一時ごろヤドの家に、昔から伝わる十三仏の掛軸と熊野、平子の死者の法名の入った掛軸を二本並べてかける。この法名の軸は、熊野、平子で死者があればヤドから死者の家に運ばれ、死者の法名が書き加えられて、枕頭にかざられるものであ

る。ヤドはトキナカマが集まる前に十三仏をおまつりし、什器によりお膳を供える。

皆が全部そろうと、両軸を拝して、極く短く念仏を唱える。念仏をあげるのはドウシとよばれるホージョーサンの役目をする人で、ゴジュを受けた人になる。念仏が終ると昼食をとる。以前は本膳で十一、二種の精進料理をツボというチョコクに盛り、一人一人膳をしつらえたが、今は略式である。精進料理も原則となっている。長時間かけて食事をとる。これは特別なことで、普段、あまり長く食事をする人のことを「トキの膳」というほどである。食事が終わる頃に十三仏の前にそなたお膳を各人にまわし、少しずついただく。十三仏に御汁の器物でお茶を供え、皆がお茶をいただく。この食事の後は一切、粒けのあるものは口にせず、茶や水などの流動食しかとらなかつた。粒けを食べると仲間中、餓鬼道へ落とされるといふようなことをいった。

日野町熊野のように、山中深く寺院から遠い村において、十三仏掛軸がトキナカマという草わけの家によって管理されているのは興味深い。これで思い出されるのは、柳田国男が『毛坊主考』で「本朝俗諺志」をひき<sup>(9)</sup>、

飛驒の山中に毛坊主と云ふあり。農業木樵を為すこと常の百姓並なり。遙かの奥山にて出家などは無き処なり。人死したるときは此毛坊主を頼みて弔ふなり。代々譲りの袈裟を掛け鉦打鳴し経念仏してとぶらふこと也。本尊は多くは大津絵の十三仏なり。小さき石地藏もありと云へり。

と、毛坊主の本尊が十三仏であることを指摘していることである。

### 三 石造物としての十三仏

さて、十三仏の成立については古来いろいろな説がなされてきた<sup>(10)</sup>。

一、十王経所説の閻魔の十王の本地仏たる十仏に、後の三仏を加えて、新亡者より三十三年忌までの本尊としたり。

二、慈覚大師が密教の根本原理に依りて娑婆有縁の仏を網羅して創始せり。

三、満米上人が冥土に行きたる時に、此の十三仏が亡者を救はるるを見て其の図を書けり。

四、梅尾明恵上人が夢中に十三仏が雲に乗り来るを感得せり。

五、立川流の大成者文観上人が、其の当時に盛んに崇拝せられつゝある諸仏を集めて作れり。

これら諸説をふまえて、服部清五郎は、『地蔵十王経』にもとづく十仏信仰から、やがて三仏を加える第一の説を妥当とされている。

それは、石造遺品の十三仏を検討する中で<sup>(11)</sup>、初期のものは最終三仏を大日―大日―大日とするからで、代表的なものを示すと、

永和四年	(二三七八)	大日―大日―大日	千葉・羽黒十三仏堂
嘉慶二年	(二三八八)	大日―大日―(破損)	埼玉・金沢寺
応永六年	(二三九九)	大日―大日―大日	東京・清谷寺
応永十四年	(二四〇七)	阿錢―大日―虚空蔵	山口・徳地町
応永二十年	(二四一三)	阿錢―大日―大日	兵庫・塩谷
応永二十一年	(二四一四)	阿錢―大日―虚空蔵	大分・梅遊寺



文安二年	(一四四五)	大日―大日―大日	埼玉・搭峰
文安四年	(一四四七)	阿錢―大日―虚空蔵	東京・多摩町
享徳二年	(一四五三)	大日―大日―虚空蔵	埼玉・東松山

となつている。これ以後造立されたものは、阿錢―大日―虚空蔵という定形化されたものに限られる。

最終三仏についてみると、大日を重ねるのを主としながらも渾然とした時期を経て、やがて阿錢―大日―虚空蔵と十三仏としての完成をみるのである。その際、はじめの十仏の順序は不動から阿弥陀と一定であるので、そのような過程を経て完成する十三仏を、十仏の発展としてとらえることは納得できる。

そして、第十一仏の阿錢、第十二仏の大日、第十三仏の虚空蔵が順に決まっていっただけでなく、混乱した時期のあとで阿錢―大日―虚空蔵に落ちつくことは、最終仏である虚空蔵菩薩に大日如来をこえた意味を見い出したが故ということになろう。

#### 四 文献にみる十三仏

『蔭涼軒日録』文明十八年(一四八六)十二月二十二日条に、

忌日十三仏次第

初七日 不動秦広王

二七日 釈迦初江王

三七日 文殊宗帝王

四七日 普賢五官王  
五七日 地藏閻魔王  
六七日 弥勒變成王  
七々日 薬師泰山王  
百ヶ日 観音平等王  
一周忌 勢至都市王  
第三年 弥陀転輪王  
七周年 阿錢如来  
十三年 大日如来  
三十三年 虚空蔵菩薩

という記事がみられる。同年七月十四日条には、

直可有御成干鹿苑院之由。御返事在之。(略)次本尊十三仏御焼香。  
とあり、鹿苑院内に十三仏が祀られていたことがわかる。

また、一四四四年成立とされる『下学集』の数量門第十六に<sup>(2)</sup>、  
十三仏並十王逆修日之次第<sup>1)</sup>

初七日 正月十六日 不動秦広王  
二七日 二月廿九日 釈迦初江王  
三七日 三月廿五日 文珠宗帝王

四七日	四月十四日	普賢五官王
五七日	五月廿四日	地藏閻魔王
六七日	六月五日	弥勒變成王
七々日	七月八日	薬師泰山王
一百箇日	八月十八日	観音平等王
一周忌	九月廿三日	勢至都市王
第三年	十月十五日	阿弥陀転輪王
七年忌	十一月十五日	阿銭仏
十三年	同十一月廿八日	大日
卅三年	十二月十三日	虚空蔵菩薩

とあり、初七日から三十三年忌までを一年で逆修するようになっていた。

『蔭涼軒日録』文明十八年（一四八六）十二月二十六日条には、逆修の注文について、

御逆修自百ケ日至三十三年。六度之注文。鹿苑院書之供之台覧。其注文云。

御逆修注文三百貫文。

百ケ日陞座。枯香。頓写。餓法。施食。説誠。半齋一七日勤行二百貫文。

一周忌拈香頓写俄法施食説誠半齋。一七日勤行五百貫文。

第三年陞座拈香頓写餓法施食説誠半齋。一七日勤行二百貫文。

七年忌拈香頓写戲法施食説誠半齋。一七日勤行三百貫文。

(表2・1・1)

## 十三仏石造物の造立年と県別分布

年	千葉	埼玉	東京	群馬	奈良	大阪	兵庫	京都	和歌山	三重	山口	大分	計
1360～	1												1
1380～	2	2	1										5
1400～							1				1	1	3
1420～													0
1440～		4	1										5
1460～		4	1	1	1								7
1480～		4	1										5
1500～		1					1	1		1			4
1520～		3			2				1				6
1540～		2			15	8							25
1560～					4	4		1					9
1580～					3	7							10
1600～					2	8							10
1620～						3							3
1640～						2							2
1660～					1	1							2
1680～					1								1
1700～													0
1720～													0
1740～													0
1760～		1											1
計	3	21	4	1	29	33	2	2	1	1	1	1	99

十三年拈香頓写織法  
 施食説誠半齋。一七日  
 勤行五百貫文。  
 三十三年陞座拈香頓  
 写織法施食説誠半齋。  
 一七日勤行。  
 以上武千貫文。此注  
 文供台覧。  
 とある。  
 これらの記事から、  
 十三仏は初七日から三  
 十三年忌まで十三度の  
 逆修の忌日仏として、  
 その逆修が仏教者に注  
 文されていたことがわ  
 かる。石造遺品の中に  
 「為逆修」とされるも

のが多いのは当然といえるし、「一結逆修」は、一結衆の人々によって集められた浄財によって、本願と  
なった仏教者(上人)が逆修の作善をつんだのであろう。

ところで、『親長卿記』文明三年(一四七一)の三月十四日条に、

自今日予逆修初七日持齋也、

という記事がみえる。この逆修が十三仏によっていることは、同四月十四日条に、

持齋也、逆修當一周忌、勢至、所作已前注之、

とあることで知れるが、逆修日は『下学集』の記載とはまったくあわない。三月十五日の二七日の記事  
に、

今日予逆修二七日分也、持齋、女房回目昨日始之、同持齋也、

とあって、女房もまた逆修をはじめている。

さて、同年五月十五日に次のような記事がみえる。

次持齋、自今日又始逆修、已前逆修、自初七日到川三回、如形修之、無為修畢、与奪亡父尊靈分  
祈願了、今又始行之志、為亡母尊靈也、今日為初七日分、秦広王、不動明王、悪行目六、真念仏弔  
千反、光明真言百反、念仏六万反、妙経八卷転読、題号、但寿量品観音経真読、九条錫杖六卷、夕  
方真念仏千反、光明真言百反、不動名号等講之、

さらに、同年八月八日条に、

今日始行予逆修、初七日分也、秦広王、不動明王、所作目六、已前両廻致沙汰、与奪亡父亡母畢、  
とあって、甘露寺親長は自身の逆修にとどまらず亡父、亡母尊靈の為にも十三仏逆修をおこなったので

(表2・1・2)

## 十三仏石造物の造立目的

目的	刻銘	一結	逆修	月待	念仏	齋講	夜念仏	申待	六齋	時講
一結逆修	16	16	16							
一結	14	14								
逆修	8		8							
月待	4			4						
一結念仏	2	2			2					
一結月待	2	2		2						
一結夜念仏	1	1					1			
一一結逆修念仏	1	1	1		1					
一結逆修念仏濟講	1	1	1		1	1				
一結逆修濟講	1	1	1			1				
一結逆修六齋	1	1	1						1	
一結時講	1	1								1
齋講	1					1				
月待逆修	1		1	1						
申待	1							1		
(不明)	44									
計	99	40	29	7	4	3	1	1	1	1

(1) 作善者名が多数連記されている場合、「一結」という銘がなくても一結に加えた。

(2) 不明は、造立目的不明及び未調査を含む。

ある。亡き人への逆修というのは、実は追善とすべきであるが、このような十三仏による逆修の盛行される様子は、『蔭涼軒日録』に十三仏の記事がみられるのとあわせて、十五世紀後半に十三仏信仰が京都の貴族社会に受容されたことが考えられる。

『実隆公記』によると、永正元年(一五〇四)十月十四日、母親の三十三回忌の追善として「新図十三仏尊像一鋪」を奉納している。また、延徳二年(一四九〇)十月廿日の条には、故相公

羽林の三十三回忌の作善目録の第一に、「虚空蔵菩薩像一軀」を造立する旨をあげている。十三仏が追善にも用いられたことを示している。

##### 五 追善・逆修の忌日仏

『親長卿記』文明三年（一四七一）正月九日条に、後花園院の初七日の記事がみえる。

抑初七日御仏、代々先規薬師像云々、然今度被新図不動像、常之儀礼等初七日、不動也、日野亜相違失敗、俄見出奮記、被懸薬師奮像、被尋方々、中院大納言召進之、真光院本尊云々、

とあって、先規とされる薬師と、十三仏逆修の初七日仏である不動との混乱がみられる。

一方、後花園院の仏事は、

初七日 薬師

二七日 弥勒

三七日 千手観音

四七日 地藏

五七日 尺迦

六七日 不動

七七日 阿弥陀

となっており、二月一六日の七七日の条に、

抑奪院御仏事満四十九日也、  
とある。

六十年程おくれて『言継卿記』の天文四年（一五二五）正月廿三日に女院葬礼の記事がみえるが、その追善のための「七々御忌本尊、並御作善次第」は次のようになっている。

初七日	薬師	宿忌調経	當日舍利講式
二七日	弥勒	宿忌論義	當日随行念仏
三七日	千手	宿忌調経	當日施餓鬼
四七日	地藏	宿忌調経	當日二十五三昧
五七日	尺迦	宿忌調経	當日法華頓写
六七日	不動	宿忌論義	當日例時
盡七日	阿弥陀	宿忌随行念仏	當日曼陀羅供

各々の忌日仏における本尊は後花園院の追善と同様であり、皇室の追善仏事は室町期には、これがひとつのパターンとなっている。従って、十三仏信仰は皇室とは関係をもたない所で展開したと考えてよい。

次に、時代をさかのぼって平安時代後期の忌日仏を考えてみたい。

高陽院崩御後の追善仏事を『兵範記』でみてみると、久寿二年（一一五五）十二月二十二日の初七日以下次のとおりである。

初七日 薬師如来



二七日 虚空蔵菩薩  
三七日 文殊菩薩  
四七日 地藏菩薩  
五七日 釈迦如来  
六七日 (記載なし)  
七七日 阿弥陀如来

この忌日仏は、十三仏と関係ないばかりか先にあげた室町期の後花園院の追善忌日仏とも異なっている。二七日に虚空蔵菩薩がおかれていることに注意しておきたい。

同じ『兵範記』の記載の中で、信範の妻が残したあとの追善仏事を取りあげると、嘉応二年(一一七〇)五月十六日を初七日として、

初七日 阿弥陀如来  
二七日 不動明王  
三七日 普賢菩薩  
四七日 地藏菩薩  
五七日 阿弥陀如来  
六七日 弥勒菩薩  
七七日 阿弥陀如来

と、独自の忌日仏を配していることがわかる。初七日、五七日、七七日と三度に阿弥陀を配している

ことが特色といえよう。

次に、藤原宗忠、高陽院、後白河法皇の逆修について忌日仏を比べてみると<sup>1)</sup><sup>3)</sup>、

(藤原宗忠) (高陽院) (後白河法皇)

初七日	阿弥陀	阿弥陀	薬師
二七日	迎接曼陀羅	聖観音	弥勒
三七日	弥勒	薬師	千手観音
四七日	如意輪観音	虚空蔵	地藏
五七日	地藏	釈迦	釈迦
六七日	虚空蔵	普賢	不動
七七日	釈迦	地藏	普賢

となっており、これも十三仏とは一致しない。もともと後白河法皇の逆修の忌日仏は、後花園院の追善忌日仏と、最終七七日が普賢と阿弥陀と異なる以外は同じであり、先例とされたことも考えられる。

さて、平安時代後期の逆修、追善の忌日仏が一定していないことは、日本偽撰とされる『発心因縁十王経』の成立時期と関係をもつ。というのは、不動から阿弥陀にいたるいわゆる十仏は、この経をもつてその起源とされるからである。

中国で成立した『預修十王経』では、地藏を対象として閻魔王と地藏とを同体とする考え方に立つものの、この経では、地藏以外の本地仏は観音をのぞいては非個人的にしか表現されていない。その『預修十王経』をうけて、日本で本地仏としての十仏があてられた『発心因縁十王経』の成立を、鎌倉期と

されることは傾聴すべきである(4<sup>1</sup>)。

## 六 虚空蔵と地藏

『地藏本願経』の「如来讚嘆品」に、毎月の一、八、十四、十五、十八、二十三、二十四、二十八、二十九、三十の十日を、在家の者が身心をつつしんで清浄にたち、自らの行為を反省して八斎戒を守り善事を行なう日とされることから、「十斎日仏」を拝する信仰は『栄華物語』『今昔物語集』の時代ですで行われていた<sup>(5)</sup>。

高陽院の行なった十斎講はよく知られているが、その一例を示すと、

仁平二年(一一五二)

六月一日十斎定光仏講

十月十三日十一斎虚空蔵講

同 三年(一一五三)

四月廿四日十斎地藏講

六月十五日十斎阿弥陀講

六月廿九日十斎釈迦講

というものである。

先に、高陽院追善二七日に虚空蔵菩薩が配されていることを指摘しておいた。十斎日仏の他に、特に

十一齋として虚空蔵を加えていることもあわせて、高陽院の虚空蔵菩薩に対する信仰の大きかったことがうかがえる。

ここに興味深い記事がみえる。それは「中右記」承徳二年（一〇九八）五月十九日の条で、

今日晩頭参詣法輪寺、終夜在堂中祈申有二願、一者、生々世々在々処々得値遇法華經、身縦依先世業輪廻六道、深持法華錐一時不敢忘、一者必臨終之時安住正念往生極樂、就中虚空蔵菩薩殊有臨終正念、願深信此事往詣也、

とあり、藤原宗忠は、法輪寺の虚空蔵菩薩に往生極樂のための臨終正念を願っている。

宗忠は少年時代、この虚空蔵に才学を祈っていた。いまの記事につづけて、

抑住日少年之昔、度々参詣此堂舎、祈申才学之事、頗少分如相叶、於今日偏止現世之事、只祈往生之願、菩薩悲願必垂引誓、

とある。現世利益としての才学を離れて、往生の願いを虚空蔵菩薩に託すという信仰の転換がみられるのである。

法輪寺の虚空蔵菩薩について、十二世紀前半に成立した『今昔物語集』卷十七第三十三話に、「比叡山僧依虚空蔵助得智語」があるので紹介する。

「志と能力とはありながら遊戯に若時を過した叡山の某僧は、法輪寺参詣の帰途、ふと宿った女に牽かれ励まされて、法華經を覚え遂に三年後にはいみじき学僧となり、本意を達すべく三度女の許を訪れたが、ふとまどろんだ夢覚むるや、自らは嵯峨野の真中に裸の儘臥していた。件の女は、虚空蔵菩薩の化身に外ならなかった。」

比叡山の若き僧は「常ニ法輪ニ詣テ」虚空蔵菩薩に「オヲ付ケ、智ヲ令有ヨ」と祈ったのだが、この話は次のように結んでいる。

虚空蔵ノ謀リ給ハムニ、将ニ愚カナラムヤ。虚空蔵経ヲ見奉レバ、「我レヲ愚マム人ノ、命終ラム時ニ臨テ、病ニ責メラレテ、目モ見エズ耳モ聞エズ成テ、仏ヲ念ジ奉ル事無カラムニ、我レ其ノ人ノ父母、妻子ト成テ直シク其ノ傍ニ居テ、念仏ヲ勸メルト」被説タリ。

ここにあげた『中右記』『今昔物語集』の記事は、共に、法輪寺の虚空蔵菩薩を才智、才学の仏としながら、一方で臨終正念の仏という意識がみられる。ここに共通する法輪寺の虚空蔵菩薩とはどのような性格を有するのであろうか。

『都名所図会』の智福山法輪寺の頂に<sup>1)</sup>6、

真言宗にして、本尊は虚空蔵菩薩の坐像なり。(道昌法師の作)脇士は明星天、兩童子なり。(中略)中興の開基は道昌僧都、姓は秦氏にして讚州香川郡の人なり。弘法大師に真言の密法をうけ、虚空蔵求聞持の法を修せんとて、この寺に一百日参籠し給ふ。五月の頃、咬月西山に隠れ、明星東天に出づる時、閻伽水を汲むに光炎頓に耀きて、明星天衣の袖の上に来影し、忽ち虚空蔵菩薩と現はれ給ふ。縫の如く染むるが如く、数日を経るといへどもその体滅せず。これ生身の尊影なりとて、道昌則ち虚空蔵菩薩の像を刻み、袖の像を腹内に収めらる。この時弘法大師を請じて開帳供養し給ふ。これ当寺の本尊なり。

とあり、法輪寺は道昌が虚空蔵求聞持法を修した道場とされている。求聞持法とは「聞持」すなわち記憶力を求めて修せられる密教の修法であって、これに成功すると、一度耳にしたことを忘れないとされ

る<sup>(17)</sup>。従つて、僧侶を志す者が第一に修すべき法として、宗派を問わず広くおこなわれたが、中でも空海が、一沙門からこの法を呈示されたことから仏門に入ったことを機縁として、以後、空海の系譜をひく者に特に熱心に伝えられた。

道昌も、そのような空海門下の一員であつた。鎌倉時代中期成立の『覚禅鈔』所収「求聞持同異説」には<sup>(18)</sup>、「諸師云。法輪ノ虚空蔵ハ求聞持ノ本尊也。」とあり、また、「道昌僧都、法輪ノ虚空蔵ノ加持力ニ依リ。自然智ヲ得テ。位僧都ニ登ル。」とある。

ところで、道昌造立の虚空蔵菩薩と地蔵菩薩が太秦広隆寺の講堂に現存する。

『広隆寺内諸堂諸院事』の大講堂に<sup>(19)</sup>、

虚空蔵菩薩像 坐像、高六尺五寸、道昌僧都造之。

地蔵菩薩像 坐像、高六尺五寸、道昌僧都造之。

とあるのがそれで、虚空蔵と地蔵を対にしている例は他にも見い出せる。『東大寺要録』巻第四に<sup>(20)</sup>、

虚空蔵菩薩像一軀 立高一丈 置彩色爆在講堂

地蔵菩薩像 一軀 立高一丈

右皇后御願以天平十九年二月十五日始作

とあつて光明皇后の発願である。神護寺の五大虚空蔵菩薩像の前で真済が虚空蔵経と十輪経を転読したし、『十輪経略抄』の著者である護命は、「月之上半入深山修虚空蔵法下半在本寺研精宗旨」というように虚空蔵信仰者であつた<sup>(21)</sup>。

虚空蔵と地蔵とは、遠くバラモン教以来、天と地の神として一對のものと考えられてきた。中国を経

て伝えられた古代の日本においても、その関係は密接なものとしてとらえられた。もっとも、古代の日本では、虚空蔵信仰が求聞持法との関係から脚光を浴びていたのに対して、地蔵信仰はいたって低調であつたとされる<sup>(2)</sup>。

それが『今昔物語集』の時代になると、地蔵信仰が、末法思想の流行と浄土教の発展の中で大きくクローズアップされるのである。『今昔物語集』の巻十七は、まさに地蔵菩薩の巻とってよく、実に三十話を集めるのだが、その次におかれるのが、先に紹介した法輪寺の虚空蔵菩薩の話である。このような配列も虚空蔵と地蔵との対偶関係を意識したものであろう。

地蔵信仰が広く普及するにつれて、虚空蔵菩薩のもつ臨終仏としての性格が注目されていった<sup>(3)</sup>。高陽院十一斎虚空蔵講の存在や、宗忠が法輪寺虚空蔵に臨終正念を祈ったこと、さらには『今昔物語集』巻十七の第三十三話「比叡山僧依虚空蔵助得智話」の説話構成がそれを物語る。『明月記』元久二年（一二〇五）三月一日条には、

参法輪、未時修地蔵講、

とあり、法輪寺において虚空蔵に対して地蔵講を営んだ記事と理解されるのである。

## 七 地蔵信仰と十三仏

十王思想も十仏思想も、基本的には地蔵信仰である。十仏の発展として十三仏をとらえるとき、十三仏の最終に虚空蔵がくることは、虚空蔵と地蔵との、前項でみたような対偶関係を考えてみる必要があ

る。

『多聞院日記』天正四年（一五七六）三月二十一日条に、

為十三仏図絵表補供養、於持宝院問講不定、題安養報化、講予、間八延識房、三百文、代米並雜  
氏巾一束、

という記事がみえる。この時期には、石造物として十三仏が造立される一方、このような掛軸としても使用されていた。いま、室町時代成立とされる十三仏掛軸が、奈良の十輪院にある<sup>(24)</sup>。十輪院は、弘安六年（一一八三）成立の一別一『沙石集』巻第七（一七）「仏ノ鼻黒クナシタル事」に、

南都ニ尼公アリケリ。矢田ノ地蔵ヲ年来信ジ奉テ、二心ナク供養恭敬シ、名号ヲ唱ヘケルタビゴ  
トノ始詞ニ、「福智院ノ地蔵モ、十輪院ノ地蔵モ、知足院ノ地蔵モ、マシテ市ノ地蔵ハ思ヒバシヨラ  
セ給候ナ。南無や尼が矢田ノ地蔵大菩薩」ト、唱ヘケリ、

とある、有名な地蔵の寺である。ここにみられる知足院の墓地には「文禄四（一五九五）、英慶逆修」という銘をもつ十三仏石造仏が存在する<sup>(25)</sup>。福智院の地蔵菩薩は光背に十王を配したものとしてみられるが、この寺院には十三仏は伝わらない。また、矢田寺の境内には近世の作と思える十三仏石造仏がみられるのである。

大阪府東大阪市にある浄慶寺の十三仏石造仏は、地蔵立像のまわりに十三仏の種字を配置したものである。このような地蔵立像を中心とした十三仏石造仏の遺品には、

根来寺 和歌山県那賀郡岩出町 天文三年（一五三四）

山本地蔵堂 八尾市

天文十六年（一五四七）



猪田神社横 上野市

天文二十二年（一五五三）

元興寺 奈良市

天文年間

が報告されている。

ところで、『多聞院日記』天正三年（一五七五）には、

正月十三日

知足坊虚空蔵ノ咒在之、出了、

三月十三日

地蔵講於知足坊在之、出了、

とあって、対偶的な扱い方がここにも見い出せるし、さらに同年十二月十五日条には、

為尋憲僧正御弔、十三仏侍従二申付之、中尊カラタ山地蔵大二書之、

とあり、十三仏も地蔵信仰の延長線上にとらえられている。

虚空蔵と地蔵とが一对であるという下地のもとに、十三仏の最終に虚空蔵が定位する。しかしながら、十仏のなかに虚空蔵がふくまれていないことは、鎌倉期には、浄土思潮の中に占める虚空蔵菩薩の位置は地蔵菩薩に比べて格段に低かったことになる。それが十三仏の最終として定位するのは、虚空蔵菩薩の信仰が、室町時代になって再度注目されたことによるのであろう。

## 八 空海と虚空蔵信仰

空海が虚空蔵信仰者であったことは先にふれておいた。『続日本後紀』承和二年（八三五）三月二十一日の条に、空海の伝をあげて、

十八遊学塊市、時有一沙門、呈示虚空蔵□聞持法、其経説、若人依法読此真言一百万遍乃得一切  
経法文義暗記、於是信大聖之誠言、

とある。これは『三教指帰』の序文にもある有名な話であつて、それ故、空海の虚空蔵信仰、特に求聞持法との結びつきは各地に伝承されている。

例えば、『笠置寺縁起』には<sup>(6)</sup>、

第五十二代嵯峨天皇御宇弘仁年中。弘法大師空海。当寺於虚空蔵之宝前求聞持法修之給。新明星  
彼石像指光給。則光跡石陷今在之。明星末代光指給。嚴重之奇瑞也。

とあり、『河内名所図会』の天野山金剛寺三宝院の項には<sup>(7)</sup>、

求聞持堂

西の方、上段の地にあり。本尊虚空蔵菩薩は弘法大師の作也。此堂内、女人結界所。

とあるし、又、『大和名所図会』の虚空蔵寺の項には<sup>(8)</sup>、

『東大寺縁起』に曰く、虚空蔵寺は弘法大師求聞持法勤修の時、明星關伽井にうつり、馱都峯洞に  
湧出して、靈驗揚焉たり。

とある。このような空海と虚空蔵菩薩の結びつきは、枚挙にいとまがない。

ところで、空海の虚空蔵信仰が有名なものであるのと同時に、空海が弥勒下生を待つために高野山奥  
の院に入定したとされることも、また広く知られている。

釈迦入滅ののち、五十六億七千万年後に弥勒菩薩が龍華三会を聞き、その説法を聞くことで成仏できるとというのが弥勒信仰である。空海がそれを聴聞するために入定したとされ、やがて高野山奥の院を龍華三会の地であると、さらに空海が弥勒そのものであるという信仰に転換していく。それにもない、空海のそばにいて弥勒と値遇しようとする人々によって、高野納骨が盛んにおこなわれることは周知のとおりである。

さて、磯長山叡福寺は聖徳太子廟につくられた寺院として知られる。五来重氏は『高野聖』に<sup>(9)</sup>、

これも高野聖、とくに蓮華谷聖の作為とおもわれる浄土思潮の弘法大師作「上宮太子廟参拝記文」なるものがある。これは空海が河内磯長の聖徳太子廟へ参拝したとき、廟窟内からお告げがあったのを、空海が筆録したとったえ、廟窟内の石に刻せられているという。すなわち太子廟の三骨一廟というのは、聖徳太子、同妃、同母の三骨であるが、これは弥陀三尊にあたり、「この廟窟に参詣せん輩は、思念を九品の浄刹に成して、往生を安樂の宝池に遂ぐべし。(以下略)」と書かれている。

この記文の一部は、正安元年(一一九九)成立の『一遍聖絵』に引用されており、鎌倉時代中期すでに空海が浄土思想の中に組みこまれていたことになる。

空海の聖徳太子廟への参拝が、『河内名所図会』では、求聞持法第九十九日目のこととされる。

叡福寺浄土堂同所にあり、本尊は弥陀三尊を安す。弘法大師、神下山高貴寺に於て、一夏安居し、一百日求聞持の法を修し、日々に当山へ一步一礼して拝参し給ふ。第九十九夜に当つて、御廟に音楽聞へ、阿弥陀仏の三尊来迎し給ふ。これを拝写して作らせ給ふ尊像也。太子の御母公と皇太子の

御妃と三聖の御本地仏なり。

とある。

また、求聞持法と空海の入定とが結びつく話がある。伊勢の朝熊山金剛証寺は虚空蔵菩薩を本尊とするのだが<sup>(0)</sup>、『朝熊山縁起』に<sup>(1)</sup>、

天長元年、高祖空海、大和国鳴川善根寺の明星石の上に、求聞持の法を満たしめたまふ。夜の暁に、虚空より童子来りて白さく、「伊勢洲朝熊の嵩に座を示す。明星在らば行必ず成就せん」と云々にあつて、朝熊山は空海の求聞持法の伝承を有する。さらに、

「末世において求聞持の行者は、友の字の閼伽水を汲み、明星水に沐浴せよ。朝熊獄に來り、御本尊に仕へ奉らば、我入定の室を出でて影の如くに離れざれ。不老の妙薬と慈悲法とを与へん」と日ふ。(略)高祖大師の、五十六億七千万歳までこの山に來たまふは、求聞持行者の尽きざる瑚なり。

とあり、求聞持行者のためには、空海が入定の室を出て救済の手をさしのべるといふのである。

さらに、求聞持法により入定した仏教者もある。『大日本地名辞書』志摩国志摩郡の虚空蔵寺には、加茂郷河内に在り、円珠山と号し、本尊(虚空蔵)菩薩は弘法大師の刻と云ふ、本堂の東に飛泉あり、又起雲吐虹の二大石相對す、最勝景の境なり、貞治年間、雲海上人と云僧此に万座の護摩を修し、求聞持法を行ひ、遂に入定したりとぞ。

とされる。

高野山奥の院で求聞持法を修したのは覚證である。「本寺与伝法院相論文書写」に<sup>(2)</sup>、  
保安三年(一一二二)於奥院求聞持法執行悉地現前第九度目

とあり、『高野春秋』にもその記事がみえる<sup>(3)</sup>。空海の入定地で求聞持法を修したとすることは、その真偽はともかく興味深い。

『撰集抄』六八の「覚鑿上人ノ事」では、覚鑿は空海の入定をまねて、本寺の人々のそしりをかい根来に去るとされる。

近此、高野の御山に、覚鑿上人とてやむごとなき聖おはしけり。真言宗を悟りきはめて(略)、弘法和尚の昔のあとを追ひて、伝法院と云所をたて、龍花三会のあかつきを待ちて、入定し給へりけるとかや。

いまま少し引用すると、

かゝるまゝに、本寺の僧徒、あつまりておのおの議するやう、「我朝六十余州には、大師(空海)の外たれか定に入れるはある。中にも、世くだりて、我山にいかなる行徳のある物なりとも、いかでか大師の御まねをしては侍るべき。いざ、伝法院へよせ、かの覚鑿が入定さまさん」と議して、にはかによせにけり。

本寺の僧、入定の所に乱れ入てみるに、不動尊二体おはしましけり。一体は覚鑿の日比の本尊不動にておはします。いま一は、此聖の化したるとおぼゆ。

と、覚鑿を不動尊信仰者としている。ところが時代がくだった『太平記』では<sup>(4)</sup>、彼は虚空蔵信仰者としての面が強調されている。

覚鑿トテ一人ノ上人オハシケリ。一度三密輪伽ノ道場ニ入シヨリ、永四曼不離ノ行業ニ不僻、観法座タケナハニシテ薰修年久シカリケルガ、即身成仏ト乍談、猶有漏ノ身ヲ不替事ヲ歎テ、求聞持

ノ法七座迄行フ。(傍点筆者)

覺鑿が高野山奥の院で求聞持法を修したとされることは、やはり空海の入定を即身成仏としてとらえることで、入定と求聞持法が結びつけられた結果といえよう。ここに、求聞持法は即身成仏のための修法とする見解が示されている。

九、結論―『弘法大師逆修日記事』をめぐって―

『弘法大師全集』に「弘法大師逆修日記事」がおさめられている<sup>(3)5)</sup>。

初七日(正月十六日)秦皇王(本地不動)

無動經云。欲見諸仏士。明王忽出現。頂戴於行者。能令得見之。何況余求事。随持得成就不墮

四惡趣。決定讚妙果。

二七日(二月二十九日)初江王(本地釈迦)

華嚴經云。敬礼天人大覺尊。恒沙福智皆円満。因縁果構成正覺。住寿凝然無去来。

三七日(三月二十五日)五官王(本地文殊)

文殊問般若經云。若称名字。一日一夜。文殊必来。若有宿障。夢中得見。所求円満。

四七日(四月十四日)宗帝王(本地普賢)

華嚴經云。普賢身相如虚空。依身而住非国土。随諸衆生心所欲。爾現普身等一切。

五七日(五月二十四日)閻魔王(本地地藏)

地藏本願經云。現在未來天人衆。吾態勤心付屬汝。以大神通方便力。以大神通方便力。勿令墮在諸惡趣。六七日(六月十五日)變成王(本地弥勒)

弥勒上生經云。一念称名。除却千二百劫生死之罪。有歸依者。於無上道得不退轉。七七日(七月八日)泰山王(本地藥師)

藥師經云。我此名号。一經其耳。衆病悉除。身心安樂。

百箇日(八月十八日)平等王(本地觀音)

諸觀音經云。衆生若聞名。離垢得解脫。或遊戲諸地獄。大悲代受苦。

一周忌(九月二十三日)都帝王(本地勢至)

寶積經云。以智惠光。普照一切。令離三塗得無上力。

第三年(十月十五日)五道轉輪王(本地阿弥陀)

平等覺經云。閻浮檀金以高十丈仏一万三千体千度造供養功德。念仏一遍功德勝。

七年(十一月十五日)阿錢如来

撰真實經云。入東方不動如来三昧。當觀叫字也

十三年(十一月二十八日)大日如来

大日經云。無量俱胝劫。所作衆罪業。見此曼荼羅。消滅尽無余。

三十三年(十二月十三日)虚空蔵

礼三十五仏名經云。唱虚空蔵者。四重五逆之罪悉消滅。三業之過皆除滅。編者曰。右弘法大師逆修日記事一卷。年譜第十二卷引政祝見聞隨身紗載之。今依之。出之。但真偽有疑。

というものである。編者の注のごとく、空海の作とは考えられないが、名古屋宝生院の政祝（永享の頃の人）が著した『見聞隨身鈔』の中に引用されているという。従って、永享（一四三〇年前後）以前に十三仏信仰と空海の逆修とを結びつけて偽作されたと考えられる。

ここにおいて空海と十三仏との結びつきがみえる。

十三仏の最終に虚空蔵菩薩が定位するのは、室町期に再度、虚空蔵信仰が注目された結果であると指摘しておいた。『弘法大師逆修日記事』の存在は、十三仏最終の虚空蔵が、空海との関係であることを推察させるに十分である。

年忌供養が、七年、十三年、三十三年と延長されるにともない、それに対応する忌日仏が要請されてくる。そのようにして登場した十三仏は、十仏の発展として基本的に地藏信仰の延長線上にとらえられるものである。一方、地藏と虚空蔵とは対偶関係にあることから、末法の救世主としての地藏信仰が隆盛する中で、虚空蔵のもつ臨終仏としての性格がうかびあがってくる。しかし、虚空蔵は求聞持法との関係から空海と強く結びついており、それを無視できなかつたのである。そこで空海の虚空蔵信仰と、りこんだ形で『弘法大師逆修日記事』が偽作されたと考えられる。

この『弘法大師逆修日記事』を出発点として、十三仏信仰が展開していくのである。

#### 註

(1) 十三仏信仰に関する主要な論稿として、

服部清五郎『板碑概説』（鳳鳴書院、昭和八年九月刊）所収「十三仏信仰と板碑」



川勝政太郎「十三仏信仰の史的展開」（『大手前女子大学論集』第三号）

佐野賢治「山中他界觀念の表出と虚空蔵信仰―浄土觀の歴史民俗学的一試論」（『日本民俗学』第一〇八号）

植島基行「十三仏について（上・下）」（『金沢文庫研究』第二三四・五号神奈川県立金沢文庫昭和五十年十一月・十二月刊）

望月友善「初期十三仏石碑と年忌供養」（『歴史考古学』第四号昭和五十五年三月刊）がある。本稿はこれらの業績に助けられるところが多い。

（2） 圭室諦成著『葬式仏教』（大法輪閣昭和五十二年十一月刊）の一七一頁以下を参照されたい。

（3） 新義真言宗豊山派の弥高山弥高護国寺悉地院（滋賀県坂田郡伊吹町）の十三仏掛軸は、十三仏一幅、胎藏界種字曼荼羅・弘法大師像一幅、金剛界種字曼荼羅・興教大師像一幅の三幅となっている。

（4） 『民間念仏信仰の研究―資料編―』（昭和四十一年二月刊）四二七頁

（5） 同書七三頁

（6） 同書一九一頁

（7） 『滋賀県蒲生郡日野町熊野第二次調査報告』（南山大学文化人類学研究会村落調査サークル昭和五十四年八月刊）VI―六頁

（8） 同書VII―二〇頁

（9） 『定本柳田国男集』第九卷三三三頁

- (10) 前掲『板碑概説』三一―二頁
- (11) 最近、片岡長治氏が『史跡と美術』に十三仏シリーズとして連載されているのははじめ、十三仏石造物の調査が各地で精力的におこなわれている。ここでは下記の資料を整理して表(二―一―一)、表(二―一―二)を作製した。ひとつの目安とはなろう。
- 川勝政太郎『日本石造美術辞典』(東京堂出版昭和五十三年八月刊)
- 天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志―石造美術―』(三重県郷土資料刊行会昭和四十八年六月刊)
- 『生駒市石造文化財―生駒谷―』(生駒市教育委員会昭和五十二年二月刊)
- 片岡長治「生駒山脈を中心とした十三仏石造遺品について」(『石仏』第三号奈良石造美術研究会綜芸舎昭和四十四年九月)
- 木下密運「中世の念仏講衆」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』一九六九年版元興寺仏教民俗資料研究所昭和四十五年十月刊)
- 註(1)にあげた各論文
- (12) 岩波文庫本『元和本下学集』一〇九頁
- (13) 川勝政太郎「逆修信仰の史的研究」(『大手前女子大学論集』第六号昭和四十七年十一月刊)を参照されたい。
- (14) 速水侑氏は、地蔵信仰』(塙新書昭和五十年十一月刊)の六六頁に「十三世紀なかころに偽作されたのであろうか」と述べられている。
- (15) 望月信享『仏教大辞典』第三卷二二四―九頁

- (16) 『新版都名所図会』(角川書店昭和五十一年一月刊)四三六頁、また、応永二十一年(一四一四)成立の『法輪寺縁起』(『大日本仏教全書(昭和四七年版)』第八三卷三〇〇頁)も同様の説をあげる。
- (17) 求聞持法については、藺田香融「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる―」(『南都仏教』第四号南都仏教研究会昭和三十一年刊)を参照されたい。
- (18) 『覚禅鈔』(『大日本仏教全書』大正五年版)第四八卷(一三三〜一七頁)
- (19) 『大日本仏教全書(昭和四七年版)』第八三卷二四三頁による。
- (20) 『続々群書類従』第十一卷六十六頁
- (21) 田中久夫「地藏信仰伝播者の問題―『沙石集』『今昔物語集』の世界―」(『日本民俗学』第八十二号)二九頁以下
- (22) 速水氏は前掲著七二頁で「平安貴族社会の地藏信仰は、その功德の最大の特徴であるべき六道・地獄抜苦的色彩を十分に發揮できないまま、他の諸尊にくらべて、非常に不振であった」と結論されている。
- (23) 源信の『往生要集』に「『観虚空蔵菩薩仏名経』に阿弥陀仏に至心に礼拝すれば三悪道を離れて後、その国に生まれることができる」とあり、前掲『覚禅鈔』一二七五頁に、「聞名号臨終来到事」として、「虚空蔵経云。聞虚空蔵菩薩名者。臨命已終。唯有微識身心不覺。菩薩来到以知識形教令発心。」とある。
- (24) 『奈良市史美術編』(昭和四十七年三月刊)四九四頁
- (25) 各石十三仏で、うち十一石が確認できている。

- (26) 天文七年(一五三八)卯月二十二日書写(『大日本仏教全書』第一一八卷所収)
- (27) 秋里離島享和元年(一八〇一)編纂
- (28) 秋里離島寛政三年(一七九一)編纂
- (29) 『増補高野聖』(角川書店昭和五十年刊)二二一頁以下
- (30) 朝熊山金剛証寺の虚空蔵信仰については、  
桜井徳太郎「山中他界観の成立と展開―伊勢朝熊山のタケマイリー」(『日本歴史』第二四九号)  
佐野賢治前掲論文を参照されたい。
- (31) 『寺社縁起』(日本思想大系二〇岩波書店昭和五十年十二月刊)七八頁以下永正八年(一五一一)の  
奥書を有す。
- (32) 櫛田良洪著『覚鍍の研究』(吉川弘文館)二〇八頁所収
- (33) 『大日本仏教全書(大正五年版)』九〇頁に、「秋七月。衣柄梱修求聞持法於奥院道場。得悉地。  
第九度也。自舷得身通史」とある。
- (34) 卷十八「高野与根来不和事」
- (35) 『弘法大師全集』第十四卷(吉川弘文館明治四十三年十月刊)所収、先に紹介した「上宮太子廟  
参拝記文」もこの巻におさまる。
- (36) 『逆修日記事』には『下学集』と相異なる点が見られる。

「逆修日記事」 『下学集』

初七日 秦皇王 秦広王

一 四 三  
周 七 七  
忌 日 日

都 宗 五  
帝 帝 官  
王 王 王

都 五 宗  
市 官 帝  
王 王 王

## 第二節 十三仏信仰の伝播

### 一 はじめに―誓願寺とその信仰―

京都の新京極界隈は、映画館などの娯楽施設をはじめ、飲食店、みやげ物店などが密集しており、京都市民や観光客で常に賑わっている。

この新京極一帯がかつては、誓願寺の寺域であった。

浄土宗西山深草派総本山の誓願寺は、天智天皇の発願で賢問子・芥子国父子の作にかかる丈六の阿彌陀如来を本尊として創建したと伝える。本尊の造立に際して春日明神が助力したことから、後世、春日明神作の御本尊として崇敬された。

その後、都が平城京から長岡京へ、さらに平安京にと遷されると、誓願寺もそれにつれて移され、現在の元誓願寺通り（京都市上京区元誓願寺通り小川西入）に七堂伽藍そのままに再現された。

秀吉の時代、天正十三年（一五八五）現在地に再び移転された。

誓願寺の歴史は、火事の罹災とその復興の繰り返しであると言ったことが出来る。応仁の乱以降四度の火災を旧地で経験し、現在地に転じてからも天明・弘化・元治・大正・昭和二年・昭和七年と六度の火災にあっている。しかし、この災難の度に、復興の聲が高鳴り堂舎を再建して今に至っている。

この幾度もの火事の為、本尊仏をはじめ什宝の数々や古文書類の多くを失い、この名刹の歴史には、明らかでない部分も多い。

その様な中で現在伝わっている縁起は、国の文化財に指定され国立京都博物館に寄託中である。この縁起は『大日本仏教全書』に収録されているが<sup>(1)</sup>、その中で「和泉式部」との関係が説かれていることが注意される。

柳田国男は、早くこの点に注目し、「和泉式部の足袋」(『桃太郎の誕生』所収)の中で<sup>(2)</sup>、「和泉式部と京の誓願寺との関係は古い。新旧二つの縁起をはじめとして、謡曲にもこの事を主題としたものがあつて、後に誠心院がなんらかの事情のために、本寺と分立してしまつてからも、なお誓願寺は和泉式部の寺であつた」と述べている。

ここで言う誠心院は誓願寺の南に在り和泉式部寺とも言う。誓願寺が以前、元誓願寺通りに在ったときから隣接し、誓願寺の塔中であつたとも見えている。新京極通りの中程、誓願寺から少し下ると道に面した東側に一間程の格子戸がありその中に大型の宝簾印塔がある。これが和泉式部の墓とされるもので、誠心院墓地の一角にあたる。

和泉式部伝説について、大島建彦は「和泉式部の説話」(『お伽草子と民間文芸』所収)において<sup>(3)</sup>、「和泉式部の名は、さまざまな伝説にもなつて、ほとんど全国にゆきわたつてゐる。たとえば、その誕生を伝える土地だけでも、西は肥前国杵島郡から、東は陸中国和賀郡まで、いくつか数えあげることができる。各地でその詠と伝える腰折れの数々は、たやすくあげつくせないほどである。それらの口碑の分布が、和泉式部の俗伝の語りひろめられたあとを示す」とし、「和泉式部の説話の伝承者として、念仏法門とゆかりの深い漂泊の女性が考えられる。それは比丘尼などと呼ばれるが、巫女にも遊女にも通ずるのである」、「誓願寺と言へば、法然上人の時代から、京洛における有力な念仏道場であつた。そこ

(表2・2・1)

## 名所案内記にあらわれた誓願寺の堂舎

No.	書名	刊行年	図版	本堂・ 本尊	塔	鎮守	紅梅	他の 堂舎	十三 仏堂	その他
1	『京童』	1658	☆(部分)	○	○	○	○			
2	『洛陽名所集』	1659		○						
3	『出来齋京土産』	1677		○	○	○	○			
4	『京師巡覧集』	1679		○	○					
5	『菟芸泥赴』	1684		○	○	○	○	○	◎	
6	『京羽二重』	1685		○						塔頭・末寺
7	『日次記事』	1685								大般若経転読
8	『雍州府志』	1686		○			○			
9	『花洛細見図』	1704-05	☆	○	○	○	○	○	◎	
10	『京内まいり』	1708								寺領十六石九斗
11	『山城名跡志』	1711		○	○	○	○	○	◎	
12	『山城名勝志』	1711		○	○					
13	『都名所車』	1714		○			○			
14	『山城名所寺社物語』	1716-35		○			○			
15	『山城名跡巡行志』	1754		○	○	○		○	◎	
16	『京城勝覧』(再刻)	1784					○			
17	『都名所図会』(再刻)	1786	☆	○	○	○	○	○	◎	

には、念仏に志す女が多く集まっても、話の種を求めていつたらしい。それらの比丘尼の活動については、柳田の『女性と民間伝承』に詳しく説かれていっている。そのほかにも、同じような伝承の中心として、肥前国福泉寺や日向法華岳寺などがあげられる。「諸国の伝承の根拠地は、遊行者の活動によって、たがいに連絡を保っていたと思われ」とまとめられている。

また、「説話の主人公としての和泉式部は、それを伝承した遊行の巫女または遊女の性格をあらわしている。和泉式



部の説話が、時に神詠をともなっているのも、そのような巫女の託宣につながるであろう」と、誓願寺を根拠地として全国に和泉式部の説話を持ち伝えた女性が、託宣活動と関わるといふ重要な指摘している。この点については、後に考えることにしたい。

この項では、京都の誓願寺の略史を見ることが念仏道場としての性格を示し、併せて誓願寺が、和泉式部伝説を全国各地に遊行して持ち歩いた民間宗教者集団―特に女性を中心とする―の一つのセンターの役割を担っていた点とを示した。

誓願寺に関して、もう一点、落語の原点として知られる『醒睡笑』の作者である安楽庵策伝が、この寺の第五十五世住職であったことを付け加えて項を改めたい<sup>(4)</sup>。

## 二 誓願寺の十三仏堂

誓願寺に関して、次のような記載がある。まず、それを紹介してみたい。

### 誓願寺

京極の東、三条の西、本(もと)は油小路の西、武者小路の北に在。慶長の頃、今の地にうつさる。天智天皇の建立、本尊阿弥陀、賢門子・芥小国父子の仏師の作にて、春日大明神力を合せ給へりて春日の作といへり。則、春日を堂前に祝ひまつりて鎮守とす。神前の未開紅、千影万影の珊瑚をみがけり。今の堂は佐々木京極の息女、松の丸殿建られ、三重の塔、十三仏堂、十六羅漢堂、十王堂、後口堂にもあみだを安置す。鐘楼太鼓楼等有。十月五日より十五日迄十夜の念仏を行へり。松

の丸殿は秀吉公の妻也。

一、此寺に清少納言の墓有。少納言の局は、清原元輔のむすめ一条院の皇后宮定子の女房。風流美の人なり。枕草子を作る。文体、紫式部の源氏物語にならひ用られて清紫の二女と世に称す。父兄にわかれて後、阿波国にただよひつゝ尼になれりしを、一条院尋ねめぐませ給ひて都にのぼり、此寺にて終りをとれりと縁起にあり」

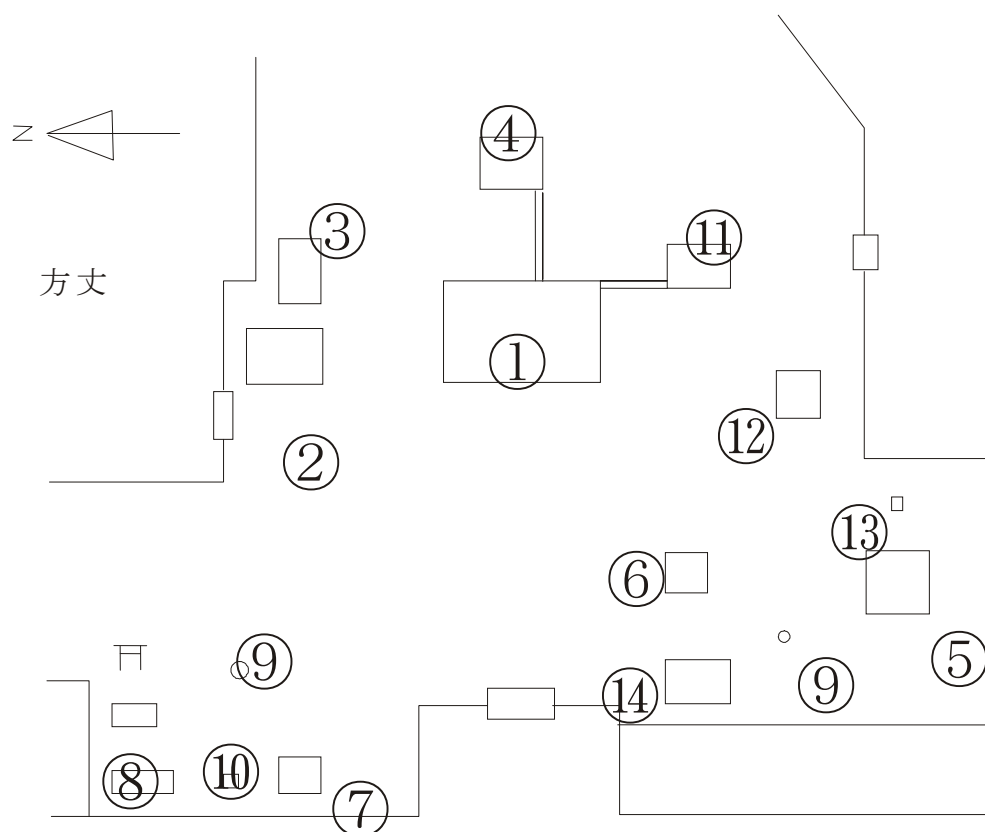
これは、『菟芸泥赴(つぎねふ)』の「誓願寺」の項である(5)。

『菟芸泥赴』は、北村季吟の撰で貞享元年(一六八四)に八卷九冊で刊行された。山城一円の名所旧跡・著名な社寺の由緒来歴を説明している。撰者の北村季吟は古典学者であり、この誓願寺の記述においても清少納言に力が入っている様子が伺える。

京都の町では、近世に入り世の中が落ち着くと共に名所案内を中心とした地誌類が続々と刊行される。その始めは明暦四年(一六五八)の『京童』であるが、『菟芸泥赴』も比較的早い時期の物になる。

此の記事では、誓願寺の由緒を述べると共に境内の堂舎を紹介している。ここで注目されることは、傍線を付した十三仏堂の存在である。

(図 2・2・A) 誓願寺境内図



(2・2・2)  
誓願寺の諸堂名称

堂舎等の番号	名称	堂舎等の番号	名称
1	本堂	8	春日社
2	釈迦堂	9	未開紅
3	十三仏堂	10	檀那塔
4	開山堂	11	鼓楼
5	(記入なし)	12	地藏堂
6	地藏	13	秋岡塔
7	(名称なし)	14	観音

十三仏とその信仰については、以下検討を加えることになるが、十三仏堂の存在はこの時期の京都で他に見いだせないものであり、それが何故この誓願寺に設けられているのかを考えるのが、本稿の目的のひとつである。

さて、誓願寺十三仏堂について、他の史料ではどの様に扱われているか、『新修京都叢書』の諸本から見てみたい。

それを表にしたのが表(2・2・1)である。一覧に示したように、十三仏堂についての記載がみられるのは『菟芸泥赴』の他、『花洛細見図』『山州名跡志』『山城名跡巡行志』『都名所図会』である。このうちの『山城名跡巡行志』は、『菟芸泥赴』と同様に十三仏堂の存在を書き上げるのみである。

そこで次に、境内図の載せられている『花洛細見図』『都名所図会』によって、誓願寺の境内配置を復元した試みが図(二・二・A)で、あくまで概念図ではあるが、位置関係に大きな誤りはないと思われる。『都名所図会』の境内図に付けられている呼び名は次の通りで、『花洛細見図』のものを括弧内に示した。

- ① 本堂
- ② 釈迦堂(十六らかん)
- ③ 十三仏堂(十三ぶつ)
- ④ 開山堂(うしろ堂円光大師)
- ⑤ (やくし)
- ⑥ 地藏(地さう)

⑦ 名称ナシ

⑧ 春日社(ちん守かすが大明神)

⑨ 未開紅(未開紅)

⑩ 檀那塔

⑪ 鼓楼(こしろう)

⑫ 地藏堂(さいの川原)

⑬ 秋岡塔

⑭ くわんのん

これを見ると、誓願寺は、西面する本尊をまつた阿弥陀堂を中心に、裏手(東)に開山堂、本堂からみて右手(北)に方丈・釈迦堂・十三仏堂、左手(南)に鼓楼・地藏堂、三重塔があり、正面門の北には鎮守の春日社が祭られていたことが分かる。

このように、だいたいの位置関係を掴んだ上で、『山州名跡志』の記事を読むと誓願寺の諸堂の性格が良く理解されると思う。

以下の番号①～⑩は、図(2・2・A)の番号と対応している。

○誓願寺 京極三條の南六角通りの東に在り。宗旨 浄土 宗義 西山。

門 西向き。

堂 ①) 同じ。

額 へ当寺再興大施主大相国の北の方佐々木京極の女二世安樂の為也 大覚寺空性法親王の筆。

堂内額 南無阿弥陀仏 一遍上人の筆 へ額の由縁縁起に在り。又謡曲に在り世の知れる所也

本尊 阿弥陀仏 へ座像八尺 厨子に安ず 常に開帳 作賢問子 芥子国両作 天智天皇の勸願にして作所也。春日明神の本地地藏観音每夜化来して刻彫に加助し玉ふ由専貞法師其靈告を得たり。是故に春日明神の作と称す。仏面の内に 天智帝朱書の名号あり。又腹内に五臓六脇の経絡を備作る。靈験等縁起に委し。

脇壇 北 天智帝の展影 へ衣冠座像二尺許 厨子に安ず。同 南 東隱和尚の影 へ座像二尺許 厨子に安ず。

堂の外陣 北 毘沙門天 吉祥天女 善哉童子

同 南 地藏菩薩 右両像の由縁縁起に載る略す。毘沙門天は孝慶が作る所也。慶は洛中に在りて盜賊の長なり。或る時当寺に詣して本尊を拝し。相好の殊勝なるに当て。忽感信發起して思へらく。我れ不善の業をなして渡世す。当来の苦果は何ぞ脱かるべけんや。出家遁世せんにはと。遂に剃髪して名を孝慶と改め。又本尊の前に於いて祈誓すらく。世人貧なるを以て盜人あり。尊容を拝する輩には福を與へ玉へと。便ち福天を以て此の像を作つて安置する所也。へ委縁起に載す

○釈迦堂(②)堂の北 西向きに在り 安ずる所宝冠の釈迦 へ座像一尺五六寸許 脇士 月番長者 善財童子 へ立像一尺二三寸許 脇壇の左右十六羅漢の像を安ずく像二尺許 共に新作

○十三仏堂(③)右堂の東 南向きに在り 十三仏 へ座像二尺余 新作。

開山堂(④)堂の東 西向きに在り法然上人の像 へ座像二尺余 厨子に安ず。

○塔(⑤)三重 堂の午未の間西向きに在り 本尊 薬師仏 へ座像二尺許 作不許 此の像始め江州

法界寺に安ず。当寺策伝上人靈夢に依つてこれを迎え又彼の寺主も同夢を感ず本尊告げて云く京師誓願寺に移居すべしと伽て安置する所也。

○地藏堂(⑥)堂の前 東向きに在り 地藏菩薩(割石の面に彫る、長さ二尺八九寸像一尺許)作不詳此の像始め西陳(ママ)天道の町人家の井中にあり。家主夢みること再三なり。ついに井を探りて此の像あり。然当寺に寄付す。靈驗日に新なり。

○経蔵(⑦)堂の乾 東向きに在り 額法苑(横額)本尊釈迦仏(座像一尺許)脇士 左 迦葉右阿難(立像一尺四五寸)新作 蔵経 黄葉印板。

○鎮守の社(⑧)経蔵の北に在り 鳥居(木柱南向き)拜殿(同)社(同)祭る所春日明神

○未開紅(⑨)堂の前の梅を云う 此花未だ開けずして色至つて深し。故にこれをなずくる盛りの時禁裏に献ず。

○弁慶石 方丈の庭に在り。事は前に載たり。

○檀那塔(⑩)地藏堂の北に在り 五輪の石塔 銘 爵芳院月晃盛久禅定尼 此の号秀吉公の愛女松丸殿の法名也。この人当寺再興の施主今の堂是なり。その時供養の導師大覚寺の空性法親王也又彼の禅尼追福の為に資料を寄せられ。毎歳の春当寺に放て千部経読誦法会あり。(原漢文、◇内は割註。以下同じ)

この『山州名跡志』の記事によつて、誓願寺の境内にある十三仏堂について、

○十三仏堂 右堂(釈迦堂)の東 南向きに在り 十三仏(座像二尺余)新作。

ということを新しく知ることが出来た。

そして、「新作」と云うことを、誓願寺がこの地に移る際に新たに造立されたと言う意味に理解すると、誓願寺十三仏堂は、豊臣秀吉の側室である松の丸の助力により元誓願寺町から新京極の現在地に誓願寺が移された際に、新たに作られた二尺余りの座像の十三仏を祀る堂として、南面して十三仏堂を設けたということになる。

しかし、ここに挙げた堂舎総てが、慶長二年（一五九七）三月十一日の落慶に整っていたのかというところではない。三重塔は『都名所図会』の本文によると、「三重塔は元和三年（一六一七）の草創にして本尊は谷薬師なり」としているからである。十三仏堂については、他の史料で塔のように創建年代が示されていないので、先の「新作」という意味と併せて移転当初からあったと考えてよい。

次に、十三仏堂がいつまで誓願寺にあったのかについては、明治以降に成立した『京都坊日誌』によると（6）、

天明八年（一七八八）京都火災記云。正月晦日未の上刻。寺町四條より北へ焼け登る。火誓願寺之本堂をのこし。西つじ寺中境内焼けて。（中略）亥の中刻。誓願寺本堂には昼より。雨風をしのぎて候もの。おびただしく有之候処。右時刻に西の方より。大きな火の玉。四つ五つ飛来て。堂内に入ると。忽もへ上がり。此の処の死人けが人。数しれず。しかれ共。仏様は朝の内に。川原表へ差し出し申し候に付つゝ、かなくましまし候云云」

とあり、その後、天明の大火により「本堂。三重塔・方丈以下烏有に帰す」（『京都坊日誌』）中で、十三仏堂も焼失し、再建されることのないまま現在に至っていると考えてよさそうである。

そして、この十三仏堂がどのように信仰されていたかを知る手がかりは、この名所案内記の中からは



得られなかった。

現在の誓願寺には十三仏堂はもとより、十三仏の仏像、画像など祀られることもなく、かつての十三仏堂の意味について、誓願寺の中から知る手がかりがないのが現状である<sup>(7)</sup>。

そこで次項では、十三仏とその信仰について歴史的な変遷や、それが民俗社会の中でどのような受容されているかを調べることで、誓願寺十三仏堂の果たした役割を見いだす糸口を探りたいと思う。

### 三 十三仏信仰の成立過程

十三仏という信仰は、仏教の原典によるべきものがなく日本独特のものとして、現行の習俗の中では、十三仏の掛軸や「不動明王」から「虚空蔵菩薩」までの仏名を唱える十三仏真言などとして、葬送儀礼の中や、盆行事、また念仏講などで大きな位置を占めており、人の死とその追善に際し登場している。

近年では、淡路島で始められた十三仏霊場めぐりが評判を呼び、京都・大阪・奈良など各地にこの霊場めぐりが設けられ、大変信仰を集めるといふように、都市民俗として新しい発展を示している<sup>(8)</sup>。

ところで、十三仏に関する文献上の発見は『弘法大師逆修日記事』ということになっている。これについては、拙稿「十三仏信仰の成立―空海の入定と虚空蔵求聞持法―」の中で詳しく検討した<sup>(9)</sup>。

『弘法大師逆修日記事』は『弘法大師全集』の中に収められているが、弘法大師の著作とは考えにくく、後の付会と思われ、だいたい永享ごろ（一四三〇年前後）に成立した薯えられる。このことは、十三仏信仰の成立に弘法大師信仰を持つ人の関与を想定させるのである。

というのは、『地蔵十王経』に基ずく十仏信仰に、七回忌、十三回忌、三十三回忌の三度の忌日仏を追加したのが十三仏信仰であり、その新たに加えられた三仏が、阿銭・大日・虚空蔵という密教的な諸仏であることに注意される。中でも、密教の極致である大日如来を越えた位置に虚空蔵菩薩を置くことは、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩との、天と地との対応関係によるのであり、また、弘法大師・空海が大切にされた虚空蔵求聞持法の修法を入定信仰と結び付けた結果と考えた。

十三仏信仰の成立が、ほぼ一五世紀前半に間違いないことは、文安元年（一四四四）成立の『下学集』の数量門第十六に<sup>(10)</sup>、

十三仏並び十王逆修日之次第

初七日	正月十六日	不動秦広王
二七日	二月二十九日	釈迦初江王
三七日	三月二十五日	文殊宗帝王
四七日	四月十四日	普賢五官王
五七日	五月二十四日	地蔵閻魔王
六七日	六月五日	弥勒変成王
七々日	七月八日	薬師泰山王
百箇日	八月十八日	観音平等王
一周忌	九月二十三日	勢至都市王
第三年	十月十五日	阿弥陀転輪王

七年忌 十一月十五日 阿錢仏

十三年 同十一月二十八日 大日

三十三年 十二月十三日 虚空蔵菩薩

と紹介されていることから裏付けられよう。

ところで、貴族の日記類の中で十三仏の初見というのは、『蔭涼軒日録』のものである。『蔭涼軒日録』  
というのは、鹿苑院すなわち金閣寺の中の蔭涼軒主の日記で、足利將軍家の動向を多く教えてくれるも  
のである。文明十八年（一四八六）七月十四日の条には、

次に鹿苑院に御成り。

その足で（遂）御所間に御成り。一番に開山の前に御焼香。靈供に箸を立て、浄水をすすぐ。次に  
本尊十三仏に御焼香。次に等持院殿の木牌に御焼香。箸を立て、水をすすがる。次に宝簾院殿。鹿  
苑院殿。勝登院殿。勝定院殿。普広院殿。勝智院殿。慶雲院殿。各々の木牌に同前。諸靈は北西に  
列す。北方の東を上首となす也。（原漢文）

とある。

將軍おそらく八代義政とおもわれるが、鹿苑院を訪れたとの記事である。

等持院殿は足利初代將軍尊氏の法名で、以下各將軍の法名が並んでいる。その位牌が部屋の北側に東  
から西にならんでいて、その東北角の一番上座に十三仏画像が、祀られているのである。

このことは、実は、十三仏の記事がこの年だけでなく前年の文明十七年（一四八五）から延徳四年（一四  
九二）まで毎年の七月十四日に見いだせることからわかるのである。

さらに翌十五日は、前日と同前ということで御所の間に御成りがあり、ここでも十三仏、開山、先祖の位牌に供養をほどこしている。このことは、足利將軍家の盆行事の中に、十三仏が位置づけられていることを意味するわけである。

足利將軍家に十三仏信仰がある訳であるから、それが広く武士階級に受け入れられて行ったことは不思議ではない。全国的に十三塚の遺跡があり、そこに武将の伝説が伴うことが多いのも、武士階級に十三仏信仰が流布することと、無関係とは言えないことになる<sup>(1)</sup>。

何より、武将が十三仏信仰を受容する要因は逆修つまり生前に於いて死後の供養をするという点にあったと思われる。明日の命の知れない戦国の武将が十三仏にすがる気持ちはうなずけるのである。

現行習俗では、十三仏は死者の追善のために使用されることが多いようであるが、十三仏信仰が流布する過程には「逆修」という要素が重要であることに注意される。

というのは、中世末を中心に盛んに造立された十三仏石造仏を見る時に、その銘文に、

「逆修人数二十二人」(天文十六年・一五四七、奈良県生駒市里事興山墓地)

「六斎人数十五人逆修講中敬白」(天文二十年・一五五一、奈良県平群町鳴川)

「念仏講人数十八人」(天文二十一年・一五五二、奈良県生駒市西一分)

「念仏百万遍十三度、済講一結衆三十四人、為逆修各敬白」(元龜四年(一五七三、奈良県生駒市大門大福寺)

などとあり、前掲の表(2・1・2)に示したとおり、「一結」と「逆修」というものが十三仏の石造仏と深く結び付くことがわかるのである。

このような十三仏の逆修は、現在まで続く例は知られていないが、大阪府の千早赤阪村水分では「ぎやし講(逆修講)」という名称が近年迄残されていた。十三仏信仰が、逆修信仰からいつ頃、追善本意に変化していくかは、十三仏石造仏の造立と相関関係が有ろうと思われる。つまり江戸時代に入り、社会が落ち着く事が一点と、又幕府による寺請制度の確立のもとでムラの寺院が力を持ち、年忌供養の本尊としての十三仏を強調することに成る事にもよるのである。前掲の表(2・1・1)を見ると、十三仏の石造物の造立が寛文年間(一六六一〜一六七三)頃に衰微の方向に向かうことが理解される。

ところで十三仏石造仏の銘文中に、「六齋人数十五人逆修講中敬白」「念仏百万遍十三度」とあることから、生駒山地周辺の十三仏信仰は六齋念仏や百万遍念仏と密接に関係することは興味深い。

五来重先生の「融通念仏・大念仏および六齋念仏」(『大谷大学研究年報』第十集)は<sup>(2)</sup>、六齋念仏を研究する為の基本的文献であるが、その中で奈良の大安寺の六齋念仏講の場合、盆の最も重要な行事として十四日の晩に村中の盆棚をまわる「棚の内まいり(棚念仏)」に、阪東の歌念仏(三段と四段)の十三仏に「高野のぼり」をくわえる。

その十三仏の歌念仏は、

ほとけのしだいをかたるよ きかれよ

一不動 二釈迦 三文殊 四普賢

ナンマイダーカカカナンマイダンブツ ハー

五地藏 六弥勒 七薬師 八観音

九勢至 十阿弥陀 阿銭 大日 虚空蔵

## ナンマイダーカカカナンマイダンブ

である。

このような六斎念仏と十三仏との関係は、五来の中の論文の中だけでも、奈良県生駒郡安堵村東安堵六斎念仏、和歌山県伊都郡天野村の天野大念仏および六斎念仏、和歌山県伊都郡花園村の花園村六斎念仏、高野町の上湯川六斎講でも見られた。

それらの中で、興味深いのは、花園村の南垣内の阪東十二番で、

よにん（女人かごの後生には薬師をめさるる薬師のほぞんは十三仏二十五の菩薩は手に手を合せて  
迎いにござるよ南無阿弥陀々々々々々

とあって、この唱句を見ていると色々な信仰が混在しており、五来が「融通念仏は一つの宗派でも学派でもなく、一種の宗教運動であった」とするのも、成るほどと首肯できる。

さて、六斎念仏は全国各地に広がって行くが、現在「念仏踊り」の芸能として保存される事が多い。その中でも、愛知県北設楽郡設楽町「田峰の念仏踊り」はよく知られている。

伊東宏の「鎌倉時代の祖先祭祀」（田中久夫編『祖先祭祀の歴史と民俗』所収）によると<sup>13</sup>、この田峰の念仏踊りにも十三仏が関与することがわかる。盆念仏の地言に「十三仏和讃」があり<sup>14</sup>、

一に不動二には釈迦 三には文珠（ママ）四に普賢 五にはお地藏六弥勒 七観音に八薬師 九には勢至十阿弥陀阿錢大日虚空蔵よ これほど尊き弥陀様を 一度唱えぬみな人は、おのおの舌を  
抜きとられ 浮かぶよしゅう（余生）はさらになし。

とある。一般に、七番目に薬師、八番目に観音を置くが、ここでは入れ替わって定位している。

また、現在では見られないようだが盆行事として、

十四日は、夕方日の入るころ、家中そろって墓参りをする。その時墓でたいまつを焚いて帰り、持仏にお参りする。その後、夕食に素麺を食べる。若い衆が日光寺に集まり、ご法楽の念仏を申す。それから十王堂に行つて（今は行かない）、「十三仏」を勤め、そこから新仏のある家へ、勢いよく練り込む。これが「道行き」である。

とされるように、以前は新仏のある家で「はね込み」や「盆念仏」をする前に、十王堂の前で村全体の供養の意味で「十三仏」を唱えていたものと思われる。十王堂は、現在廃絶している。

岡山県真庭郡落合町吉も念仏踊りで有名である。その報告を紹介すると<sup>(15)</sup>、

吉の念仏踊りは、八月十六日（昔は旧暦七月十六日）の夜、町内大字吉、真言宗、今西山法福寺の境内の本堂前で、旧吉村内の二十五戸の「講中」と呼ばれる家の男性だけによつて踊られるもので、地元では「念仏踊り」と言わないで、たんに「念仏」とか「念仏を跳ぶ」と言い慣わしている。

村の古老の伝承では、昔、疫病が流行し、この村でも死者が多かったので、悪霊を払うために、久米郡旭町江原寺あたりから習ってきたものと伝えている。従つて昔は、流行病の時に頼まれて跳びに行つたり、病人のいる家に頼まれて、その門前で跳んだこともあったという。

「読み手」は寺総代の一人がなり、「これから念仏踊りを始める」という言挙げをする。次いで、奉書に書いた巻物を読む。

「奉納この所の御本尊大師大神宮 鎮守総じて日本大小の神祇 今上皇帝宝柞延長国体安穩 父母師長六親眷族乃至法界利益

我昔所造諸悪業 皆由無始貧賤痴 従身口意之所生 一切我今皆懺悔  
光明遍照 十古世界 念仏衆生 撰取不捨 天下泰平 国家安全 五穀成就  
一、不動 二、釈迦 三、文殊 四、普賢 五、地藏 六、弥勒 七、薬師 八、観音 九、勢至  
十、阿弥陀 十一、阿錢 十二、大日 十三、虚空蔵様へ御念仏」

「読み手」は続いて次のように読み上げていく。

「供奉(そなえたてまつる)

当寺御本尊様へ御念仏

当寺御大師様へ御念仏

当寺観音様へ御念仏

当寺寺尾御薬師様へ御念仏

当村辻堂二十二カ所御大師様へ御念仏

当寺第一世祐松様へ御念仏

当寺第二世祐遍松へ御念仏

当寺第三世斎運様へ御念仏

当寺第四世智道様へ御念仏

当寺第五世祐斎様へ御念仏

当寺第六世永賀様へ御念仏

当寺第七世教運様へ御念仏



当寺第八世祐輝様へ御念仏」

以上を「寺念仏」と呼び、一般の村人の念仏奉納と区別している。一般の村人の念仏奉納は、「読み手」が次のように読み、その都度、前記一連の踊りをする。

〈例一〉

「奉供御念仏(は)当町吉野念一志し親仏様ならびに吉野家残らずの仏様へ御念仏」

〈例二〉

「奉供御念仏は旭町江与味子之年志し智芳院真園妙員大姉様ならびに先祖残らずの御仏様ならびに野原の親仏様へ御念仏」

念仏奉納の申し込みが多いときには、念仏踊りはかなり夜遅くまで跳ぶことになる。

とされている。

岡山県指定の無形文化財である「吉の念仏踊り」においても十三仏との密接な関係が認められるのである。

十三仏信仰は、その流布過程に於て念仏信仰それも六斎念仏、融通念仏、百万遍念仏などと融合していったのである。その伝播にあたったのは、「融通念仏の伝播者は中世に多く活躍した念仏聖または勧進聖であろう」と五来先生は述べられている。そして、六斎念仏の一つの系統が浄土宗寺院に伝えられて鉦講念仏になり、京都の誓願寺の十夜念仏となったと指摘されている<sup>(16)</sup>。

念仏道場として注目を集めていた京都の誓願寺に十三仏堂があることは、十分に理由の有ることであった。

誓願寺には色々な信仰要素が集まり、そこを中継点として、また全国に流布していった。そこに十三仏堂が存在することは、十三仏信仰の重要性を示している。

十三仏には、それだけの魅力があるということになる。それは、布教する立場と受容する立場の双方にとってそうであった。このことは、年忌供養の根拠を、宗派を越えて十三仏に求めざるを得なかったことにも表れてくる<sup>(17)</sup>。

ともかく、十三仏信仰が全国的に広く流布するのは、寺院を介在しての教団仏教を通じてではなく、民間宗教家の手に寄って伝播定着したと考えられなければならない。

ここに、京都誓願寺の十三仏堂と念仏信仰との関係が注目される。

それでは、どのように十三仏を唱導していったのか。次項では、十三仏信仰の唱導に使われたと思える大阪平野・長宝寺に蔵される『よみがえりの草紙』・『逆修講縁起』を紹介したい。

#### 四 長宝寺『よみがえりの草紙』と『逆修講縁起』

大阪市の東南に平野という所があり、ここに長宝寺という寺院がある。征夷大將軍として知られる坂上田村麻呂の草創で、その娘で桓武天皇の妃となった春子を開山とする尼寺で名刹として知られる。

平野は、堺と同様、中世の自治都市として知られ、街のまわりに濠をめぐらしていた跡も残っている。

長宝寺は、杭全神社と共に平野郷の中心的存在であった。

ところで、この長宝寺は『よみがえりの草紙』によって有名である。

永享十一年（一四三九）六月六日、心ち大事になり、そこ（底）へおちい（落入）るやうにかな一悲一しく候を、

と、以下、長宝寺の慶心という尼僧が頓死し、閻魔王から地獄の責め苦を見て人々に逆修を勧めよといわれ、地獄を巡った後、蘇生するという話である。死出の山、三途の川と地獄の様子を描写して興味深いものである。

この『よみがえりの草紙』については、井上薫が「坂上氏の長宝寺所蔵よみがえりの草紙」（『横田健一先生還暦記念・日本史論叢』所収）の中で紹介されている（18）。『よみがえりの草紙』の中で、何度も強調されていることは、

此ぎやくしゅう（逆修）、よくよくひろう（披露）して、七日七日ふせ（布施）をか（欠）くへからず。此ぎやくしゅ（逆修）を三十三年をと（遂）けたらん人々ハ、七日七日のほとけたち（仏達）、う（受）けと（取）りうけとりいんたう（引導）したまふへし。

とあるように、逆修つまり生前に死後の供養をすることを勧めることにある。

長宝寺には、また『逆修講縁起』というものを蔵している（19）。これは、閻魔王から勧められた逆修の方法を記したものとされている。ここでは初七日の不動明王から三十三年忌の虚空蔵菩薩まで十三の仏たち、いわゆる十三仏が説かれている。

#### 『逆修講縁起』

摂州平野長宝寺の寺家に、慶心と云比丘尼なり。我、常々伊勢熊野に参、神仏を崇めしが、時ニ永享拾一年（一四三九）六月六日の朝、会行の折節、心地夢の如くして、沈ミいるやうに思ふに、

はや三日三夜の間なり。一百三十六地獄、九品上生も、残りなく拝ミ、十王、十三仏、観音菩薩、おん不動おほせ候は、「なんぢは娑婆にかへし申へし」とあり。不動、閻魔王に被仰候。「慶心を娑婆へかへしたまはり候へ」とあり。閻魔王「なんじ娑婆にかへり、逆修を勧めよ」と被仰て、閻魔王「なんぢに偶を授けん」とあり、一句の偶をうけ、則判給はり候。閻の夜の明くるやうにおもへは、則閻魔王の告のことくし、衆生に逆修を勧め、一年に十三度執り行う物也。三十三年に当たつて供養すへきもの、今始むへし。

正月十六日、初七日、南無大聖不動明王。『こつほうへつ経』に曰く、此日の御齋の功德は、死出の山に登らず、無間地獄に堕ちず、三百万業の罪を滅して、百体の仏を作り供養するに当たるなり。又、十万部の『法花経』を供養するに当たるなり。

二月二十九日、二七日、南無釈迦牟尼仏。『大集経』に曰く、此日の御齋の功德ハ、三途の川を渡す火の車に乗らず、四万の罪を滅ス。七千巻の『一切経』を書供養するに当也。

三月二十五日、三七日、南無文殊師利菩薩。『称讚浄土経』に曰く、此日の御齋の供養ハ、大磐石を負せて、八万四千の毛口毎に釘をうち、鉄の湯を吞せて責むる事のかれて、百日堂を立て、供養するにあたる也。

四月十四日、四七日、南無普賢菩薩。『ひさんまい経』に曰く、此日の御齋の功德ハ、業のはかりを逃れ、阿鼻地獄に堕ちず、三百万業の罪を滅して、三百日堂を立て、仏を供養するにあたる也。

五月二十四日、五七日、南無地藏大菩薩。『淫菓経』に曰く、此日の御齋の功德により、浄破璃の鏡に見ゆる事を逃れ、八万地獄に堕ちず。五万業の罪を滅して、百僧を千人供養するにあたるな

り。

六月五日、六七日、南無弥勒菩薩。『心地観経』に曰く、此日の御斎の功德八剣の山を逃れ、餓鬼道に堕ちす。九万業の罪滅して式百『一切経』を書き供養して、万人の僧を供養する二当也。

七月八日、七々日、南無薬師。『瑠璃光如来経』二日、この日の御斎の功德は、鉄の縄を逃れ、寒池極(地獄)に堕ちす。四十九の骨にかすかいを打ち、舌を抜き、そのとかを逃がるゝ式万業の罪を滅して、三百日卒塔婆を立、一万部の『法花経』を書き供養するにあたる也。

八月十八日、百ヶ日、南無観世音菩薩。『正法念処経』に曰く、此日の御斎の功德ハ、修羅道の苦を逃るゝ畜生道ニ堕ちす。幼いとき離れたる父母に極樂にて逢也。八万劫の罪を滅して、八万四千本の卒度(塔)婆を書き供養するにあたる也。

九月二十三日、一周忌、南無勢至菩薩。『けんきまい十式部経』に曰く、此日御斎の功德に云、悪道を逃れ、血の池に落す。六十万業の罪を滅して、五百日功德湯を焚かせて施す二当也。

十月十五日、第三年、南無阿弥陀仏。『五道転輪聖王経』に曰く、此日御斎の功德ハ、渴の地獄紺屋酒作の地獄に落ちす。十万業の仏を作り、罪滅して、六万日出家を供養して、八万日仏を作り、千里の間に橋を掛け、供養する二あたる也。

十一月四日、七年忌、阿銭如来。此日の御斎の功德は五戒十戒を破る共、此御斎をすれハ、上品上生九品の浄土へ参るへし。三万業の罪を滅して、六万日石経を書き、一千躰の仏を作り、供養するあたる也。

十一月二十八日、十二年、南無大日如来。此御斎の功德ハ、女人八月ニ一度の精進あり。神仏を

汚し僧出家を不浄二成したるとかにより、血の地獄二昼は逆さまに落し、夜ハ腰より下を地獄へ入られて、頭の皮を剥ぎ、舌を抜き、又ハ戸立の地獄に落つる事を逃れ、五千万業の罪を滅して、鐘を百鑄立て、十万人の僧供養する二当也。

十二月十三日、三十三年、南無虚空蔵菩薩。此日の御齋の功德ハ、三世の諸仏、三十五の菩薩、下界の龍神まで供養し、九品の浄土へ参、兜率の内院に往生する事疑ひ無し。十二月十三度目にハ卒塔婆を立て、僧出家を請し、供養する事也。其日ハ五戒十戒をも保ち、堂塔へも参、酒をも飲ス。女人は緒も續まず。物を縫わず。物をも取らず。垢離行水をして、神仏をも拜ミ、悪き事も云わず、一念二々(念)仏申て後世を願ふへし。疑の心を持ってハ、女の現在にて悪しき瘡を搔き、悪しき病を請、来世にて無間地獄に墮る事疑ひ無し。是をよくよく忘れず。念仏申、後世を御願ひ有へきもの也。

南無阿弥陀仏

于今永享十一<乙未>年

長宝寺

六月十八日

いささか長文の引用となったが、以上が『逆修講縁起』の全文である。文意をとり易くする為に、井上の校訂を参考にして、原文でのひらがな表記を必要に応じて漢字に置き換えた。

ここでは、「兜率の内院に往生する事疑ひ無し」というように弥勒信仰の要素も認められるが、文末を

「南無阿弥陀仏」で締めくくっているように阿弥陀信仰・念仏信仰が基調となっていることは否めない。そして、十一月二十八日、十二月十三日の二度に亘って女人救済に付いて述べている。もとより長宝寺は尼寺であり、此の『よみがえりの草紙』・『逆修講縁起』の唱導にあたる人物も女性を考えるのが無難であろう。『よみがえり草紙』の主人公を慶心尼とすることからして、女性との関わりに注意される。このような十三仏信仰を唱導するテキストとして、次に岡山県の事例を紹介したい。

岡山県比婆郡東城長戸宇の栃木一之氏は、『六道十三仏の勸文』を所蔵しておられる<sup>(20)</sup>。これは、貞享五年（一六八八）戊辰正月吉日筆者である。この文書を筆者した栃木山城掾藤原秀久は栃木家五代で、寛文八年（一六六八）に京都の吉田神社から神官の裁許状を受けている。この栃木氏の開祖藤左衛門は、桑名の生まれで永祿年間（一五五八～一五七〇）子の地に山伏として渡ってきたと云う。

#### 『六道十三仏の勸文』

再拜再拜右志を奉る

宵は叡山夜中は熊野

暁は三世の菩薩唱えをぞする

宵に心の澄みけるは皆寺々の除夜の勤行

夜中に心の澄けるは三世内の山壑の法の声

暁心澄けるは皆寺々の後夜の初鐘

夫（それ）三国一の鐘の文に曰く

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂と唱えては

(中略)

夫(それ)日本のなら(習)いには

釈迦の子御子の召され初めしを

巫女法者うけ取はん若(にや)

梓を伏せ六道三夜の道を開け

十三仏の門を開き

諸経文の功力に依って

巫女法者に乗り移り

冥途の物語涙の見参と申すなり

(中略)

初七日は石山を越ゆる秦廣王

本地不動明王

持秘密咒 生々而加護

奉仕修行者 指如薄伽梵々

(中略)

三十三年慈恩王

本地虚空蔵

若人求仏恵 通立菩提心



父母所生身 即證大覺位

夫(それ) 一百六十六地獄に座す御靈

その中に備後の国奴可郡何村の御靈を

何寺之御僧に導かれたる靈べして

何迫の甲子歳木姓大の靈何の小靈神ヨに

生しとりちはなしきせがえまいらせんが為

これは八幡の神主何の太夫

六道三夜の道開け

十三仏の門を開きて導き申すぞ

(以下、地獄巡り、略す)

この『六道十三仏の勸文』では、先に十三仏の諸仏を紹介した後で、地獄巡りをする話の構成をとっている。巫女・法者という民間宗教者の関与が、「梓を伏せて」というように生き生きと語られている。十三仏については、逆修日を省いてある代わりに、十一仏以降の三仏を蓮上王・抜苦王・慈恩王としている点が指摘できる。

この項では、十三仏信仰唱導のテキストにあたる『よみがえりの草紙』『逆修講縁起』と『六道十三仏の勸文』を紹介したが、共に地獄巡りの物語の中で、十三仏信仰とその利益を説いている点に共通するものがあつた。京都の誓願寺に於て、十三仏堂と本堂を挟んだ向こう側(南側)に「さいの川原」(地藏堂)のあるところが思い起こされるのである。そして、長宝寺は尼寺ゆえに女人との関係が強いのは当然と

しても、『六道十三仏の勸文』でも梓巫女との結び付きが見られたのである。

##### 五 まとめ―十三仏信仰の伝播―

本稿では、まず京都誓願寺の十三仏堂に注目し、ついで十三仏信仰の成立について見た後で、それが、中世末から近世にかけて念仏信仰との関係から全国的に広く流布することを知った。それは、共同体の中核としての講（念仏講）に、受容されたのである。従って、当初の十三仏の伝播には、ムラの中の寺院は直接関与することはなかったのである。

現在、ムラの寺院が葬送の諸道具の一つとして十三仏の掛軸を預かる例が多く報告されているが、それは、寛文年間（一六六一―一六七三）以降幕府の寺請制度がいきわたり、ムラの葬送が寺を中心として営まれることと関係する。生駒周辺に集中して見られた十三仏の石造仏造立が低調になる時期とを同じくしていることは先にも触れた。

さて、この項では、本論のまとめとして、十三仏信仰に携わった宗教者の姿を考えてみたい。柳田国男先生は、『毛坊主考』の中で、

本朝俗諺志卷四に曰く、飛驒の山中に毛坊主と云ふあり。農業木樵を為すこと常の百姓並なり。遙かの奥山にて出家などは無き処なり。人死したるときは此の毛坊主を頼みて弔ふなり。代々譲りの袈裟を掛け鉦打ち鳴らし経念仏してとぶらふこと也。（中略）本尊は多くは天津絵の十三仏なり。小さき石地藏もありと云へり。

として、毛坊主の本尊が多くは大津絵の十三仏であったことを紹介している。

『摂津名所図会』巻之九・有馬郡には<sup>(21)</sup>、

興勝寺(高須村にあり。靈龜山と号す) 本尊釈迦仏(当寺開基但称上人は当郷の人なり。壮齡にして仏乘に帰入し、ついに髪を薙りて山居し木実を食とす。世の人木食上人と呼ぶ。後に江府に下向し芝に住し、石像の五智光仏を鑄し木像の十三仏を彫刻してその地に安置せり。今芝大仏といふはこれなり。またその後山州鳴滝山に登り、五智如来十三仏の石像を手造し自影の像も鑄しともに山内に安ず。世人鳴滝の五体仏と称す。上人の影像を奇妙仏と賞じける)

という記事が見られ、但称上人という木食上人が十三仏信仰を有したことが分かる。

九州の直方付近では<sup>(22)</sup>、

宗像郡上西郷村大字内殿に居る「みこうじょう(ミコジョウ)」は、久保田直子とて、本年六十歳ほどの老婆、私(青山氏)が訪ねた時は、靱摺りをしていた。此の家は神理教の教会になっているが、元は農家であつて、現に農業を営み、教会は内職といふ有様である。私は付近の農家で教へてもらつた通りに「仏様の御到来を聴きに参りました」と云つたところ、靱摺りの手をとめ、直ちに私を仏間へ招じ、私の住居と死者の死亡年月日と行年及び姓名を問ひ仏前に蠟燭一本を点じ、線香四本(私の妻が死んで四年目だといふので線香を四本立てたのか聴き漏らした)を立て、先ず初め十三仏の御詠歌とて、左の如き普通に行はれている詠歌とは全く異なるものを中音で唱へた。

一、不動さま

神となり仏となりて水の中、雷火の中に立つは世のため

- 二、釈迦如来さま 大小の年も習は血胸ズを、瑠璃を唱へしこれ之撫ズ
- 三、文珠菩薩さま 普陀洛や居ながらとなう善根を、皆成仏の導きとなる
- 四、普賢菩薩さま としきそう只一人も百合の花、つぎぎにのぼる慈悲な善根
- 五、地藏菩薩さま 善悪もつくりし罪は一心に、ねがへ助くる地藏誓願
- 六、弥勒菩薩さま 世の中はうそいつはりを納めをく、来たる未来は偽りはなし
- 七、薬師如来さま 唱へれば薬の利益かいきある、時節を待てど養生はなし
- 八、観世音菩薩さま 神ほとけよくめも願ひある深き、心をひとつ誠となへよ
- 九、勢至菩薩さま 生れ来てそよしる事と知りながら、後生を願ふ人は少し
- 十、阿弥陀如来さま 父母のそだてし恩も忘れなば、救ふ阿弥陀の網にとまらぬ
- 十一、阿銭如来さま 願ふなら仏と思ふ父母に、後生の元は親に孝行
- 十二、大日如来さま 幼な子よはてしこの子は契りなし、育てし親にあたへとの事
- 十三、虚空蔵菩薩さま 風さそう哀れつれなし燈火の、消えし我が名は面影はなし
- 打ち返し 面影は無いと云へども願ふべし、先の苦楽はあからかにゆく
- 殆ど意味の通ぜぬものがある迄に唱へ崩された詠歌が終ると、両手を撰んで、狐悪きのやうに頻りに貧っていたが、今度は西国三十三番（これは流布のと同じ）の御詠歌を巡礼の口調で唱へ、その終わりに四五回あくびをして仏を招じた。このあくびはほんとに冥府から来たといふやうな陰気な長いものであったが、いよいよ仏が来ると「よう参って来てやんなさったナア、こっちへ近う寄んなさい、今日は緩りお話をしませう」と云ふやうな事から始まって、色々の事を言ったが、

初めから終りまで泣くことばかりであった。仏との話が済んで、仏が帰へるとき前と同じく四五回あくびをして「よう参って来てやんなさった、私はほんとうに嬉しい」と云って、一度泣いて仏は帰り、次で信濃の善光寺の御詠歌を唱へて終わりとなった。料金は一回三十銭から五十銭だといふので五十銭置いて来た。

戦前の巫女の活動を知る貴重な事例である。ここで、仏おろし的手段として十三仏と西国三十三番の御詠歌が使われていた。

巫女が十三仏信仰と関係することは、冒頭の誓願寺について柳田国男が女性の民間宗教者と誓願寺の緒び付きを指摘していることを想起させる。

巫女として、わが国で最も注目されている存在に東北地方のイタコがある<sup>(23)</sup>。

イタコは各々師匠をとって弟子入りをし、三年なり五年なりの年季が終り、いよいよ独立のイタコになるとき「神附(カミツケ)」の式が挙げられる。神附(カミツケ)とは、そのイタコ一代の守り神となつて、即ち呪力の源となるのであるから、イタコとして最も大切な事なのである。その式は神附(カミツケ)するイタコ米俵に馬乗りのやうに跨り、両足の先に神に供へると同じ種々の御馳走を盛った膳(膳には一厘錢三十三個を置く)を踏まへ、師匠始め大勢のイタコがそれを囲って呪文を唱へ、終ると「何神が附いた」と離し立てる。すると大抵は十三仏中の普賢が附いたとか、不動が附いたとか云つて、それが一代の守り神と定る。そうすると、今度はその守り神と結婚する式を行ふのであるが、最近では単に歯を染めるだけで済ましている。

十三仏中では、弥陀と阿錢だけは余り附かぬやうだが、他の仏はいづれも能くイタコに附く。

八戸まちの石橋さだ子は同地方きつての高名なイタコであるが(略)守本尊は普賢菩薩である。

中山太郎の『日本巫女史』の中で、奥州のイタコのカミツケに際し、十三仏中の一仏がつく事例が報告されていた。そこで桜井徳太郎の『日本のシャーマニズム』上巻で<sup>(24)</sup>、他の事例でも十三仏が関係するかを調べたのであるが、そのような例は報告されていなかった。

一人前のイタコになるためのカネツケは苦しい修業の総仕上げであり、一種のトランス状態の中でカミが付くことは、先の『日本巫女史』の報告と同じで、また、神との結婚ということも各地とも共通している部分が多い。カミツケには、「すべての神名、あらゆる仏名」が招霊され、そこでカミツケをおこなう人に、その呪力の根元となる神がつくとされる。その際に、カミツケの当事者やその師匠にあたる人々が日常的に関与する神なり仏なりが、トランス状態の中で示されると考えられる。

その点で桜井先生の報告では、十二支の一代守りが比較的良好よくつく指摘されている<sup>(25)</sup>。十二支の各守護神は仏教の諸仏であって、観音を千手と特定していることを除くとすべて十三仏中に含まれる諸仏で構成されている。

中山先生の報告の事例が八戸であることは先に述べたが、田中久夫・酒向伸行の御教示によると、八戸市の七日盆のイタコマチには、多くのイタコが集まり口寄せをするが床の間に十三仏の掛軸をかけて、それを本尊をするとのことである(昭和四十七年八月七日)。八戸周辺のイタコに十三仏信仰が有ることと、カミツケに十三仏中の一仏がつくとされることとの関係を考えなければならぬ。

イタコが地蔵信仰と密接に結び付くことは恐山のサイの川倉や、川蔵の地蔵堂が口寄せの場であることから容易に理解されるが、十三仏信仰の成立に関してもその根幹に地蔵信仰があったことを第三項

で指摘した。

田中久夫先生の「地蔵・盲僧・小野氏」（『仏教民俗と祖先祭祀』所収）によると<sup>26</sup>、室町時代『平家物語』を語る盲僧集団が、地蔵信仰を有していた事を述べられている。奥州のイタコも盲僧の音曲技術の伝承のもとに成立することは、このような地蔵信仰の系譜の中にも受け継がれているのかも知れない。

京都誓願寺が、民間宗教者のセンターであったことは何度も述べてきた。その中において、盲僧集団がどのように関わりを持つのか興味深い面がある。今後の課題としたいと思う。

#### 註

(1) 『大日本仏教全書』寺誌叢書一（同刊行会、昭和六年刊）に「洛陽誓願寺縁起」「絵詞要略誓願寺縁起上・下」が収録されている。

(2) 角川文庫、昭和四十九年刊、三六八頁。

(3) 民俗民芸双書十二、岩崎美術社、昭和五十八年刊、一二六頁。

(4) 柳田国男「和泉式部の足袋」（『桃太郎の誕生』所収、前掲）には、『醒睡笑』が右の薬師の歌以外に、いくつかの和泉式部の話を載せているのも、偶然ではなかったのである。という理由はその編者の安楽庵策伝こそは、実はこの誓願寺の前住であった。（略）それというのが元来誓願寺が、説話を業とする法師・比丘尼の、出入りする寺であったからかと思う」とある。誓願寺の北側少し離れた場所に、町並みに取り囲まれて誓願寺墓地がある。ここに安楽庵策伝を始め歴代住職の

墓がある。本稿を纏めるために初めて訪れたのであるが、歓楽街のすぐ裏に、このような広大な墓地が在ることに驚いた。現在の新京極一帯が、誓願寺を中心として展開していることが実感される。関山和夫は、策伝を説経師として捉え、『醒睡笑』八巻所収の小咄は、策伝の説経話材のメモの集大成りである」と述べられている（『説経の歴史的研究』法蔵館、昭和四十八年刊、二〇一頁）。

(5) 『新修京都叢書』第十二巻所収（野間光辰編、臨川書店、昭和四十六年刊一、以下本論では臨川書店版二十三巻本の『新修京都叢書』を利用した）。

(6) 『新修京都叢書』所収。

(7) 浄土宗西山深草派『法式集』には、中陰仏事の項に十三仏があげられている（同派教学部長、伊藤玄法先生の御教示による）。

(8) 拙稿「淡路島の巡礼―弘法大師信仰と十三仏霊場―」（『まつり』第三六号、まつり同好会、昭和五十五年十月刊、本論文第二章第四節所収）を参照されたい。

(9) 『御影史学論集』第六号、御影史学研究会、昭和五十五年十月刊、本所第二章第一節所収。また、「隔夜スル法師―十三仏信仰伝播者の問題―」（『仏教と民俗』第一七号、仏教民俗学会、昭和五十六年五月刊、本書第二章第三節所収）も参照されたい。

(10) 岩波文庫本『元和下学集』、一〇九頁。

(11) 十三塚については、別に稿をたてる予定であるが、「虚空蔵信仰と十三参り」（仏教民俗学大系第六巻、仏教年中行事）所収、名著出版、昭和六十一年十月刊、本書第一章第三節所収）でも触



れている。

- (12) 昭和三十二年刊。
- (13) 弘文堂、昭和六十一年刊。
- (14) 『だみねの盆』所収(田峰小学校父母教師会、昭和六十二年刊)。
- (15) 『落合町史』民俗編(落合町、昭和五十五年刊)。
- (16) 前掲『菟芸泥赴』の「誓願寺」の項を参照されたい。
- (17) 圭室諦成先生の『葬式仏教』(大法輪閣、昭和五十二年刊)一七一頁以下に詳しい。
- (18) 横田健一先生還暦記念会、昭和五十一年刊、六六五頁以下。また、橋本直紀先生の「縁起と語り物―十王経と御伽草紙・談義本―」(『国文学解釈と鑑賞』第五一卷四号、至文堂、昭和六十年四月刊)にも紹介されている。長宝寺本『よみがえりの草紙』の奥書には、永正十年(一五一三)筆写とある。
- (19) 井上薫編『長宝寺縁起―よみがえりの草紙・逆修講縁起―』(長宝寺、昭和四十八年刊)による。
- (20) 五来重編、山岳宗教史研究叢書十八巻『修験道史料集Ⅱ西日本篇』(名著出版、昭和五十九年刊)三九〇頁以下所収。八〇六頁の解説も参考とした。
- (21) 『日本名所風俗図会巻十大阪の巻』(角川書店、昭和五十五年刊)三五四頁。
- (22) 中山太郎『日本巫女史』(パルトス社、昭和五年発行・昭和五十九年復刊)七〇〇頁。青山大麓氏の報告。
- (23) 中山前掲書、六七四頁。中道等氏の報告。

- (24) 吉川弘文館、昭和四十九年刊。
- (25) 千手子年、虚空蔵丑年・寅年、文殊卯年、普賢辰年・巳年、勢至午年、大日未年・申年、不動酉年、阿弥陀戌年・亥年(桜井前掲書三七四頁)。
- (26) 神戸女子大学東西文化研究所叢書第△冊、永田文昌堂、昭和六十一年刊。

### 第三節 十三仏信仰の伝播者

#### 一、十三仏信仰の性格

十三仏とは、死者の初七日から三十三年までの十三度の供養に、それぞれの仏を配したものである。藤井正雄編『仏教儀礼辞典』（東京堂出版、昭和五十二年刊）には、

不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿銭、大日、虚空蔵をいう。

この十三仏を一幅あるいは三幅にこしらえたのが十三仏の掛軸である。十三仏の掛軸は葬儀のときに霊棺の背後にかけるのが禅宗門系統の古来の習慣となっている。死者がでると壇信徒は寺から十三仏の掛軸を借り、葬式、四十九日がすむと、十三仏のお礼とともに掛軸も寺に返却するのを例としているが、最近、都会地ではすたれている。

とあって、現行の民俗の中では、十三仏信仰は葬送儀礼の中に位置づけられている。

兵庫県洲本市奥畑（淡路島）では<sup>(1)</sup>、

寺へ死亡を知らせにいった二人が、十三仏の掛軸、ハッソン（八祖）大師の掛軸その他の葬具を借りて帰る。

とされるが、このような例は全国的に枚挙にいとまがない。

十三仏信仰の成立についてはすでに論じてあるが<sup>(2)</sup>、地藏十王経にもとづく十仏信仰の発展と考えられる。年忌供養が、七年、十三年、三十三年と延長される中でそれに対応する阿銭、大日、虚空蔵の

三仏が、不動から阿弥陀にいたる従来の十仏に付け加えられたのである。そして、密教の極致である大日如来をこえて虚空蔵菩薩が最終仏として位置することは、十三仏信仰が虚空蔵信仰としての面を有していることの投影と思われる。

虚空蔵信仰には、求聞持法によつて知恵を祈願する信仰と<sup>(3)</sup>、臨終正念を願う信仰とがある。『中右記』承徳二年(一〇九八)五月十九日の条に、

今日晩頭参詣法輪寺、終夜在堂中祈申有二願、一者、生々世々在々処々得値遇法華経、身縦依先世業輪廻六道、深持法華錐一時不敢忘、一者必臨終之時安住正念往生極樂、就中虚空蔵菩薩殊有臨終正念、願深信此事往詣也、

とあり、藤原宗忠は、法輪寺の虚空蔵菩薩に往生極樂のための臨終正念を願っている。

宗忠は少年時代、この虚空蔵菩薩に才学を祈っていた。いまの記事につづいて、

抑往日少年之昔、度々参詣此堂舎、祈申才学之事、頗少分如相叶、於今日偏止現世之事、只祈往生之願、菩薩悲願必垂引誓、とある。

京都の嵯峨にある法輪寺は、現在、知恵もらいの「十三まいり」の行事で知られている<sup>(4)</sup>。『都名所図会』の智福山法輪寺の項に、

真言宗にして、本尊は虚空蔵菩薩の坐像なり。(道昌法師の作)脇士は明星天、雨宝童子なり。

とあり、本尊を空海の弟子である道昌作としているが、この道昌は『覚禅鈔』(鎌倉時代中期成立)所収「求聞持同異説」に、

諸師云。法輪ノ虚空蔵ハ求聞持ノ本尊也。

道昌僧都、法輪ノ虚空蔵ノ加持カニ依リ。自然智ヲ得テ。位僧都ニ登ル。

とされている。求聞持法の道場であった法輪寺に参詣した宗忠は、現世利益としての才学を離れて、往生の願いを虚空蔵菩薩に託したのである。十三仏信仰の成立には、このような往生の願い、言い換えれば来世的な虚空蔵信仰がその背景となったのである。

ところで、十三仏がひとつのセットとして成立した時期には、死者への追善としてではなく、生者が自らの逆修のために、この十三仏を信仰したことが知られている。

文安元年（一四四四）成立の『下学集』数量門第十六に、

十三仏並十王逆修日之次第

初七日	正月十六日	不動秦広王
二七日	二月廿九日	釈迦初江王
三七日	三月廿五日	文殊宗帝王
四七日	四月十四日	普賢五官王
五七日	五月廿四日	地藏閻魔王
六七日	六月五日	弥勒变成王
七々日	七月八日	薬師泰山王
百箇日	八月十八日	観音平等王
一周忌	九月廿三日	勢至都市王

第三年 十月十五日 阿弥陀転輪王

七年忌 十一月十五日 阿錢仏

十三年同十一月廿八日 大日

卅三年 十二月十三日 虚空蔵菩薩

と、初七日から三十三年忌までを一年で逆修するようになっていた。

『蔭涼軒日録』文明十八年（一四八六）七月十四日条には、

直可有御成干鹿苑院之由。御返事在之。（略）次本尊十三仏御焼香。

とあり、鹿苑院内に十三仏が祀られていたことがわかる。また、同年十二月二十二日条に、「忌日十三仏次第」として初七日の不動から三十三年の虚空蔵菩薩までが示されているし、さらに同二十六日条には、逆修の注文について、

御逆修自百ヶ日至三十三年。六度之注文。

鹿苑院書之供之台覧。其注文云。

御逆修注文三百貫文。

百ヶ日陞座。拈香。頓写。餓法。施食。説誠。半齋一七日勤行二百貫文。

一周忌拈香頓写餓法施食説誠半齋。一七日勤行五百貫文。

第三年陞座拈香頓写戲法施食説誠半齋。一七日勤行二百貫文。

七年忌拈香頓写戲法施食説誠半齋。一七日勤行三百貫文。

十三年拈香頓写織法施食説誠半齋。一七日勤行五百貫文。

三十三年陞座枯香頓写餓法施食説誠半齋。一七日勤行。

以上武千貫文。此注文供台覽。

とあつて、具体的な作善が陞座、拈香、頓写、戲法、施食、説誠、半齋というものであつたことがわかる。

また、『親長卿記』文明三年（一四七一）の三月十四日条に、

自今日予逆修初七日持齋也、

という記事がみえる。この逆修が十三仏によつてゐることは、同年四月十四日条に、

持齋也、逆修當一周忌、勢至、所作已前注之、

とあることで知れるが、逆修日は『下学集』の記載とはまったく異なる。同三月十五日の二七日の記事に、

今日予逆修二七日分也、持齋、女房同自昨日始之、同持齋也、

とあつて、女房もまた逆修をはじめている。

さて、同年五月十五日条に次のような記事がみえる。

次持齋、自今日又始逆修、已前逆修、自初七日到参卅三回、如形修之、無為修畢、与奪亡父尊靈分祈願了、今又始行之志、為亡母尊靈也、今日為初七日分、秦広王不動明王、勤心行目六、真念仏武千反、光明真言百反、念仏六万反、妙経八卷転読、題号、但寿量品觀音経真読、九条錫杖六卷、夕方真念仏千反、光明真言百反、不動名号等講之、

さらに、同年八月八日条に、

今日始行予逆修、初七日分也、奏広王、不動明王、所作目六、已前兩廻致沙汰、与奪亡父亡母畢、とあつて、甘露寺親長は自身の逆修にとどまらず亡父、亡母尊靈の為にも十三仏逆修を行なったのである。亡き人への逆修というのは、実は追善とすべきであるが、このような十三仏による逆修の盛行される様子から、『蔭涼軒日録』に十三仏の記事がみられるのとあわせて、十五世紀後半に十三仏信仰が京都の貴族社会に受容されたことが考えられる。そしてこの時期が、応仁の乱後の混乱した時代であったことは、十三仏信仰の流布と無関係では有り得ない。

一方、南都においても十三仏信仰がみられる。『多聞院日記』天正四年（一五七六）三月二十一日条に、為十三仏凶絵表補供養、於持宝院間講不定、題安養報化、講予、問ハ延識房、三百文、代米並雜昏一束、

同十一年（一五八三）九月八日条には、

於興善院母之弔引上テ年々沙汰之、今日正命日川三年、此間十三仏凶絵供養二講問在之、講予、問者南井坊（略）、

とあつて、三十三年忌の追善に十三仏凶絵の供養をしている。

また、同十三年（一五八五）十二月十一日条には、

十三仏表補慶禪二申付之、トンス且渡之、

同十五日条には、

為尋憲僧正御弔、十三仏侍従二申付之、中尊カラタ山地蔵大二書之、掌善掌悪二人副書之、代七斗四升遣之、表補ハ慶禪二申付之、蓮成院ヨリ弦仙五十給了、



とあり、十三仏信仰の盛んであることがわかる。さらに、同廿九日条には、

先日十三仏ヲ報恩講衆ノ本尊二御寄進トテ送給了、

という記事がみえ、報恩講衆が十三仏を本尊として結縁していたことになり注目されるのである。

以上、『多聞院日記』を通して南都の十三仏信仰を一瞥したが、『大乘院寺社雑事記』には十二仏の記述がないことから、京都と南都では十三仏信仰の受容に一世紀近いひらきが生じている。もともと、それは文献上のことであって、石造物として信貴山仁王門上墓地（奈良県平群町）に現存する十三仏石亀には、

逆修、□□□阿闍梨、文明十一（二四七九）乙亥、七月十二日

の銘があり<sup>(5)</sup>、十五世紀後半すでに、奈良県下に十三仏信仰が存在したことが確認できるのである。

さて、信貴山の周辺には、十三仏石碑が多数みられるのであるが、次項ではそのような十三仏石碑の造立について、特に造立母体となった一結衆に焦点をあてて考察をすすめたい。

## 二 中世の十三仏一結逆修講

十三仏信仰による石造物として、永和四年（一三七八）の千葉県印旛郡印旛村六合宇吉高の羽黒十三仏堂のものが最古とされる。それには、

右意趣者、沙弥道妙並妙一尼、為逆修善根、所奉造立石仏也、依之現必威七分全得之報、当定生九品浄土之台、乃至法界有縁無縁一切衆生平等利益、永和四年初卯月日

とあって、逆修のために造立されたものである。

ところで、十三仏石碑の造立は<sup>(6)</sup>、時代的にみると南北町時代から江戸時代の初期に限定されており、また地域的には、関東の埼玉県と、近畿の大阪府・奈良県に強い偏在がみられるのである。そして表(2・1・1)にあらわれたように、関東と近畿では、関東の方が時代的に先行することが知られている。

十三仏信仰が、初七日から三十三回忌までの十三度の供養に、それぞれ十三の仏をあてていることはすでに述べたが、その十三の仏の中で最終の三仏、つまり七回忌と十三回忌それに三十三回忌にあたる忌日仏には、時代によって変化がある。先に紹介した羽黒十三仏堂のものを含めて、初期には、最終三仏ともに大日としているのであるが、混然とした一時期を経て阿銭閉、大日、虚空蔵と定形化してゆく。

関東の十三仏石碑には、定形化以前のものがふくまれている。十三仏が最終三仏を阿銭、大日、虚空蔵として定形化する時期については、応永十四年(一四〇七)の山口県佐波郡徳地町深谷の十三仏碑に、

三十三虚空蔵、比丘能至

応永十四丁亥二月

とあり、また応永二十一年(一四一四)銘の大分県豊後高田市一畑字畑の梅遊寺にあるものが定形化しているのも、この時期が手がかりとなる。それは京都に十三仏信仰が盛行される半世紀前のことである。

本稿では以下、大阪府・奈良県を中心として展開している十三仏石碑を検討していくが、それらはずべて定形化以後のものである。先述した信貴山上にみられる文明十一年(一四七九)のものが一番古く、それは僧侶の個人逆修のものと考えられるが、それ以後の五十基程の十三仏石碑は一結衆によって造立

されている。例えば、次のような銘文がみられる(7)。

○逆修人数廿二人(奈良県生駒市有里奥山墓地)・天文十六年(一五四七)

○六斎人数十五人逆修講中敬白(同県平群町鳴川千光寺道)・天文二十年(一五五二)

○念仏講人数十八人(同県生駒市西一分道地藏堂)・天文二十一年(一五五二)

○念仏百万遍十三度、濟講一結衆三十四人、為逆修各敬白(同市大門大福寺)・元龜四年(一五七三)

○時講人数十三人敬白(大阪府寝屋川市国守正縁寺)・天正十四年(一五八六)

○為逆修濟講人数名道宝敬白(同府東大阪市東豊浦慈光寺)・天正十九年(一五九一)

○為逆修同行十三人(同府四条畷市南野)・天正二十年(一五九二)

○逆修講人十四五人敬白(同府大東市竜間称迎寺)・慶長十一年(一六〇六)

○念仏講衆(同府枚方市氷室来雲寺)・慶長十六年(一六一一)

○逆修講一結衆高井田村(同府柏原市高井田高井寺)・慶安五年(一六五二)

この他にも、人名が多数連記されているなど一結衆によって造立されたものと考えてよい。

「逆修講中」、「逆修講一結衆」、「時講」、「濟講一結衆」、「念仏講衆」等の違いこそあれ、一結衆が十三仏石碑を造立していることは、村落内に、石造物を造立できる程の結合と経済力がそなわっていたことを意味する(8)。

信貴山上の十三仏石碑が文明十一年(一四七九)であるのを除くと、この地域では天文六年(一五三七)から元和八年(一六二二)にかけての八十五年間、継続して十三仏石碑が造立されている。この時代、天文末年(一五五四頃)には松永久秀が信貴山に城を構えており、永禄三年(一五六〇)に大和の乱れに乘じ

て、信貴山城より出兵してこれを平定して大和へ根をおろす。その際、南都をはじめ長谷寺などを焼き打ちしている。そして天正五年（一五七七）織田信長に攻撃された久秀は、信貴山城で自害することになる。十三仏石碑が造立されたのは、丁度このような戦乱の時期にあたっている。即ち、この地域に十三仏石碑が造立される背景には、京都の貴族社会と同様、混乱した社会情勢が影響していたのである。人々は十三仏信仰による逆修に結縁することで、現世の不安からのがれ来世の安穩を祈ろうとしたのである。

ところで、十三仏石碑が偏在する地域は、大阪府・奈良県を中心としながらも大阪・奈良両府県にまたがる生駒山地の周辺と、かつて興福寺の別所があった京都府の浄瑠璃寺から長谷寺にいたる奈良県の東山中に集中するのである。

そのうち、生駒山地を東西に横切る旧奈良街道を、暗峠から奈良側に下った有里にある輿山墓地には三基の十三仏石碑が存在する<sup>(9)</sup>。輿山墓地は近傍の有里、萩原、藤尾、小平尾、小瀬、大門（以上全戸）、鬼取（村の半数戸）、一分（西一分の七戸）の入会墓地となっている。ここに十三仏石碑が三基もあることから、それらが造立された中世末から近世初頭にかけて十三仏信仰が浸透していたことがわかる。輿山墓地に関する集落に、現行習俗では十三仏信仰を見い出せない。

輿山墓地に関する集落において現在では、融通念仏宗が絶対優位を占めていることは赤田光男氏の詳細な報告で明らかにされている<sup>(10)</sup>。もともと融通念仏宗が教線を伸ばしたのは大阪平野の大念仏寺の大通上人が活躍した元禄時代（一六八八〜一七〇四）以降のことであるので<sup>(11)</sup>、十三仏石碑が造立された中世末に、この地域にどのような信仰が展開していたのかを次にみてゆきたい。

さて、明治二十年代に奈良県知事あてに提出された『寺院什宝帳』の生駒市、三郷町、平群町の分について十三仏と虚空蔵菩薩の所在を検討してみた<sup>1)</sup>。それを次にあげる。

- ① 宝生寺 真言宗醍醐報恩院末（生駒市俵口町）
  - 虚空蔵菩薩木像 壺体宮殿入 但シ座像九寸作者年代未詳
  - 十三仏画像 壺幅 但シ筆者年代未詳
- ② 持聖院 真言宗仁和寺末（三郷町勢野）
  - 十三仏画像 壺幅 但シ筆者及年代未詳
  - 求聞持本尊画像 壺幅 但シ筆者及年代未詳
- ③ 蔵之坊 真言宗醍醐寺末（平群町鳴川 千光寺塔中）
  - 西院流十三仏法 壺冊
  - 新安求聞持次第 四帖壺帙
- ④ 法樂寺 真言宗東大寺末（生駒市高山町）
  - 十三仏 木座像厨子入高廿三寸五分 十三体 作者年代不詳
  - 虚空蔵菩薩 木座像厨子入高サ壺尺 壺体 作者年代不詳
- ⑤ 宝山寺 真言宗西大寺末（生駒市菜畑町）
  - 五大虚空蔵菩薩 源吉里之筆 絹本着色 貳幅
  - 求聞持虚空蔵 湛海比丘之筆 絹本着色 壺幅
  - 唐銅虚空蔵菩薩 座像壺尺作者年代未詳 壺体

掛軸や仏像として明治中期に存在した十三仏の造立年代が明確でないのは残念であるが、十三仏石碑を造立した種々の一結衆は『多聞院日記』にみられたように十三仏掛軸を本尊として結縁していたことが考えられる。おそらく、その信仰のひとつのモニュメントが十三仏石碑であろう。そして右にあげたように十三仏の掛軸、仏像が、多数ある融通念仏宗寺院に全くみられず、すべて真言宗寺院にのみ受け継がれていることから考えると、十三仏信仰は真言宗寺院に受け継がれることができる。さらに換言すれば、十三仏石碑のみられる地域は中世には真言宗地帯であったということができ、十三仏石碑の銘文中に「六齋念仏」「念仏百万遍」とあるような念仏信仰も真言宗の要素が強かったことになる。

四條畷市中野正法寺にある天正十五年（一五九〇）銘の十三仏石碑に、

奉造立十三仏逆修念仏講一結、諸衆八十一人同本願觀海上人

とあって、この本願となっている觀海上人は正法寺の中興であり、現在では浄土宗のこの寺院も觀海上人の活躍した時代には真言宗であったとされるのである（<sup>13</sup>）。

### 三 信貴山と長谷寺の虚空蔵信仰

十三仏石碑が多く分布する生駒山地と奈良県の東山中に注目する時、鎌倉時代成立の『拾介鈔』の諸寺部第九に、

信貴、河内、毗沙門天、明蓮上人、

長谷、大和、十一面「觀音」

(表2-3-1) 興山墓地入会村落の村内寺院の宗派と檀家圏

村	村内寺院	宗派	檀家圏
鬼取	鶴林寺	融通念仏宗	無檀家
大門	大福寺	黄檗宗	無檀家
藤原	石仏寺	融通念仏宗	藤原全戸 鬼取の下越全戸 大門の創 価学会以外の家
萩原	応願寺	融通念仏宗	萩原全戸
小平尾	宝幢寺	融通念仏宗	小平尾北全戸
小瀬	観泉寺	融通念仏宗	小瀬全戸の家
有里	興融寺	融通念仏宗	有里の天理5 創価6 真宗6 以外の大 部分の家
	円福寺	真言宗	無檀家
	竹林寺	律宗	無檀家
一分	無量寺	浄土真宗	東一分の大部分の家
	称名寺	融通念仏宗	西一分全戸と東一分の一部

(赤田論文による)

とあって、信貴山（朝護孫子寺）と長谷寺に注目が集まるのである。この両寺がともに虚空蔵信仰の場であったことは、あまり語られない。

宝暦十一年（一七六一）に、長谷寺の祐蔵が著した『豊山玉石集』の中に、「求聞持靈地事」として、

求聞持靈地事（神鏡広博記第八卷、勢州湧福智山国東寺縁起）

第一、信貴山大和毘沙門 第二、高千穂峯日向千手 第三、竹生島江州弁才天 第四、朝熊岳勢州虚空蔵 第五、湧福智山勢州十一面 第六、鳴川大和十一面 第七、九世戸丹後文殊 第八、大山伯書地蔵 第九、一古投 丹後千手 第十、五台山土州文殊 第十一、足磨山土州如意輪 第十二、岩本寺加賀十一面 第十三、那多寺加賀如意輪 第十四、石動山能登虚空蔵 第十五、日光山下野如意輪 第十六、羽黒山羽州十一面 第十七、神蔵山紀州地蔵 第十八、粉川寺紀州千手 第十九、広川寺河内大日 第二十、損尾寺和泉大日 第二十一、高貴位寺河内十一面 第二十二、舍利山大和伝言是豊山也十一面 第二十三、栗木岩窟越前十一面 第二十四、戸隠山信州十一面 第二十五、岩戸武州千手 第二十六、村松寺常陸虚空蔵 第二十七、清栖山安房虚空蔵

第廿八、恵島相模弁才天 第廿九、玉崎寺奥州千手 第三十、大田寺 豊後地藏 第卅一、蓮台寺  
豊前阿弥陀 第卅二、牛尾山 山城千手 第卅三、石山寺 江州如意輪(傍点筆者)

とあつて、その第一に信貴山があげられ、また第廿二に舍利山とあるのが長谷寺とされているのである。

信貴山の東斜面に福貴という集落があるが、その福貴寺を『和州旧跡幽考』では、

福貴寺は道詮法師の求聞持の法を修せられし寺なり、はじめは法隆寺にして三論をまなびのちに  
は自然慧を得たり、

貞観十八年(八七六)をはりをとる、国は武州の人なり

としている。福貴寺で虚空蔵求聞持法を修した道詮は法隆寺夢殿の復興で知られるが、俗に福貴の道詮  
といわれた。

また、長谷寺の開山とされる徳道上人も<sup>1)</sup>、『長谷寺靈験記』上第二に、

終ニ當山瀧蔵ノ麓ニ籠居シテ求聞持一印ノ法ヲ修セシカバ。同(神亀)四年(七二七)五月十五日ノ  
夜ル明星天子石ノ上ニ降下シテ壇上ニシテ天乱ヲ感得ス。

とされ、やはり求聞持法の修業者として扱われている。信貴山朝護孫子寺の本堂の下に虚空蔵堂があり、  
長谷寺の能満院は虚空蔵菩薩を本尊とし今は寺内学頭の住持する所となっている。ともあれ、両寺の虚  
空蔵信仰は古代以来の伝統を有することになる。そして両寺は共に、中世には興福寺の末として法相と  
真言を兼宗していたことが知られている。

『多聞院日記』天正十年(一五八二)十月十三日条に、

於知足屋求聞持兩人日中飯申付之、一斗六升程ノ入目欺、薬川貝遣之、合七十貝也、



とあり、また同十二年（一五八四）四月十二日条には、

昨夜スミエノヤ火事、瓦ノ屋ニ西京ノ人求聞得（持力）タリ（略）

とあつて、南都興福寺においても求聞持法が修されていた。

前項で、十三仏信仰を真言的なものとみなしたが、十三仏石碑の集中する生駒山地と奈良県の東山中の信仰的な核である信貴山と長谷寺に、中世、興福寺末として法相・真言の世界が展開していたのであつた。そこで次に、虚空蔵信仰を手がかりとして、両寺と十三仏信仰のつながりを検討したい。

#### 四 隔夜スル法師

さて、『多聞院日記』永禄九年（一五六六）五月廿三日条に、「隔夜スル法師」として信貴山で修業した僧が紹介されている。

ナラ、ハセノ隔夜スル法師、南円堂より六道迄つれて雑談之处、彼物ハ当国片岡ノ生レ、信貴山先達ノ所二九歳ヨリ奉公了、奥州柳津虚空蔵ニ一年二百日参籠了、峯へ入事四十一度、京ニテ日十八度の百万返供養、高野大師ト当社トへ片道三日ツツニテ以上十一ヶ年ノ間ニ五百度参詣成就、ナラ、ハセ隔夜今年既ニ三年ニナル間、明年三月ニテ三月可有供養云々、当年四十六歳ニナルト申、抛モ掬モノ事也。

この僧の経歴を整理してみると、

① 九歳で信貴山先達へ奉公

- ② 柳津虚空蔵に一年二百日間参籠
- ③ 峯へ入事四十一度
- ④ 百万返供養を日に十八度
- ⑤ 高野山と奈良とを五百度往復
- ⑥ 奈良と長谷の隔夜修行

とその修行の多様さがわかる。『新編会津風土記』の柳津村虚空蔵堂の記載によると、

大同二年徳一の創立とも云ひ、又慈覚の創立とも云（或説には弘仁三年の建立と云）本尊を福満虚空蔵と云、長一尺八寸、空海の作にて安房国清澄と常陸国村松と、当山の霊像を併て一木三農の作とす

とあり、柳津円蔵寺は日本三体虚空蔵のひとつを祀る寺として虚空蔵信仰のメッカであったといえる。「隔夜スル法師」は虚空蔵信仰者と考えてよく、一年に二百日間の参籠は、おそらく百日間で行なう求聞持法を二度修したのであろう。

ところで、長谷寺奥院の浄阿上人像の胎内銘に（15）、

奉造立長谷寺奥院定和上人

尊像一躰南都長谷寺一千日

隔夜為供養也 憑茲善□二説

号十方檀那法界群生同登党□者也

慶長五年（一六〇〇）□子三月二日

大施主泉州鉢峯供（住力） 養觀敬白

とあつて、隔夜修行者と浄阿上人が関係することがわかる。浄阿上人については、『豊山玉石集』の長谷寺奥院の項に、

むかし浄阿上人とて道心堅固なる遊行派の念仏行者あり、此処に草の庵を結んで露の身を宿し、明れば仏の仏名をとほひ心を西方に傾け、終に人王九十七代光明院御宇暦応二卯年（一三三九）六月二日端座合掌して眠るが如く往生を遂げられけり。曾て手づから自身の壽像を造り置きしかば、是を其草庵の本尊として道心者など往来せり。

とあり、遊行派の念仏行者で西方極樂浄土に往生している。

信貴山で修行し、虚空蔵信仰者である僧が行なつた「ナラ、ハセ隔夜」という修行は念仏信仰と関係するのである。

近世になると隔夜修行者は空也末流の念仏者として定着する。『豊山玉石集』の隔夜堂の項に、

隔夜堂は与喜寺の下にあり洛東六波羅密寺開山空也上人当山に籠り観音の御告に依りて前生に調ひ置き玉ひし大般若経の軸を尋ね玉ひて信心弥増し、南都春日堂より当山へ千日参詣の願を立て、南都に一夜、初瀬に一夜、夜を隔てて宿り、三年三月の間念仏の弘通を祈らせ給ひける其御宿なり。かほどに深き上人の御志なれば大悲者何ぞ納受し給はざらん。心の儘に念仏を弘め給ひけり。夫より隔夜と名づけて春日より初瀬まで上人の跡を続け、千日を限りて往返参詣する者、三、四人づつ今に至るまで絶えず。是又上人守生の志を感じて大悲者擁護をたれ玉ふ故なるべし。春日の側にも此堂有りとぞ云々。

と、長谷寺側の隔夜堂が紹介されている。奈良側については『奈良坊目拙解』客養町に（16）、

隔夜堂一宇 瓦葺在 北側東南廉路傍本尊十一面觀世音一像 金色長谷寺本尊十分ノ一像 当寺ハ興福寺勸修坊支配也長谷寺隔夜修業者三四侶在住而守之毎日二法師詣干泊瀬寺亦両僧長谷飯宿此堂故名隔夜堂矣 空也上人木像一軀安当寺空也上人或号市ノ聖者本朝隔夜道心之開祖伍テ安之也云々

とある。

隔夜僧は高野山や吉野山にもいたらしいが（17）、現在、隔夜堂として残っているのは大阪府太子町の叡福寺門前である。

磯長山叡福寺は聖徳太子廟につくられた寺院として知られる。五来重は「高野聖」の中で（18）、

これも高野聖、とくに蓮華谷聖の作為とおもわれる浄土思潮の引法大師作「上宮太子廟参拝記文」なるものがある。これは空海が河内磯長の聖徳太子廟へ参拝したとき、廟窟内からお告げがあつたのを空海が筆録したとつたえ、廟窟内の石に刻せられているという。すなわち太子廟の三骨一廟というのは、聖徳太子、同妃、同母の三骨であるが、これは弥陀三尊にあたり、「この廟窟に参詣せん輩は、思念を九品の浄利に成して、往生を安楽に遂ぐべし。」とあり、（以下略）

と書かれている。この「記文」の一部は、正安元年（一二九九）成立の『一遍聖絵』に引用されており、鎌倉期すでに空海が浄土的な風潮に組みこまれていたことになる。そして、この空海の聖徳太子廟への参拝が、「河内名所図会』では、求聞持法第九十九日目のこととされる。

#### 叡福寺浄土堂

本尊は弥陀三尊を安す。弘法大師、神下山高貴寺に於て、一夏安居し、一百日求聞持の法を修し、日々に当山へ一步一礼して拝参し給ふ。第九十九夜に当つて、御廟に音楽聞へ、阿弥陀仏の三尊来迎し給ふ。これを拝写して作らせ給ふ尊像也。太子の御母公と皇太子の御妃と三聖の御本地仏なりとある。

空海の虚空藏信仰は、『続日本後紀』承和二年（八三五）三月二十一日条の空海伝に、

十八遊学魂市、時有一沙門、呈示虚空藏□聞持法、

とあり、それは空海が仏門に入る契機をなしたことから『三教指帰』序文にもあつて有名なものである。

『河内名所図会』の叡福寺浄土堂の伝承は、虚空藏求聞持法を弥陀の来迎に値偶するための修行ととられることで、空海の虚空藏信仰と浄土信仰の中に位置づけられた空海とを結びつけている。

このように、虚空藏信仰を包括した形での空海の浄土信仰がみられる叡福寺に隔夜堂があり（19）、また『河内名所図会』からここに十三仏石碑の存在を教えられるのである。十三仏信仰の文献的初見は『弘法大師逆修日記事』であり（20）、十三仏信仰そのものの成立にも、空海に対する信仰が大きな役割を果たしたことが想像できる。

「隔夜スル法師」が『多聞院日記』に登場する永禄九年（一五六六）は、十三仏石碑が盛んに造立された時期である。そして戦乱の中で信貴山、長谷寺を含めて多くの堂舎が灰燼に帰し、その復興のために、あるいは寺院経済そのものの維持の為に勸進僧の力量が問われた時代であつたと考えられる。勸進のためには超人的な修行をつむ僧も必要であつた。「隔夜」という修行を、民衆は畏怖と尊敬の目で見守つたことであらう。

十三仏石碑の分布地域が限定されている点から、それらの地域の核となっている信貴山と長谷寺に注目し、その虚空蔵信仰を媒介として「隔夜スル法師」が十三仏信仰と関係しうることを説明したつもりである。終章では、十三仏信仰の背景となっている来世的な虚空蔵信仰について、やや視点をかえてながめてみたい。

## 五 来世的な虚空蔵信仰

伊勢の朝熊山金剛証寺は虚空蔵信仰の山ということが出来る<sup>(21)</sup>。その『朝熊山縁起』には、

日本三十三箇国の時は、自ら金地と言はず、虚空蔵の慈悲を示す所なり。三十三箇国の時は、伊勢洲朝熊の嵩と云へり。寺号の事は高祖より以前は寺号無し。但、朝熊高嶽の明星堂といへり。吾、この山において求聞持を成就して、東寺の法務と成り証を得たるの故に、金剛証寺と号す。高祖の法の子孫たるもの、一度もこの山を拝せざれば、子孫あるべからず、

とあり、ここでいう高祖は空海のこと、朝熊山が空海の虚空蔵求聞持法の信仰を継承していることがわかる。そして、

大師誓ひて言はく、「末世において求聞持の行者は、鍍の字の關伽水を汲み、明星水に沐浴せよ。

朝熊嶽に來り、御本尊に仕へ奉らば、我入定の室を出でて影の如くに離れざれ。不老の妙薬と慈悲法とを与へん」と曰ふ。

とあり、求聞持行者のためには、空海が入定の室を出て救済の手をさしのべるといっているのである。さらに、

高祖大師の、五十六億七千万歳までこの山に来たまふは、求聞持行者の尽きざる期なり。という記載があることから、『朝熊山縁起』が、まさに来世的な虚空蔵信仰を基調とすることがいえよう。さて、この縁起のはじめの部分に、

天長元年、高祖空海、大和国鳴川善根寺の明星石の上に、求聞持の法を満たしめたまふ。夜の暁に、虚空より童子来りて白さく、「伊勢洲朝熊の嵩に座を示す。明星在らば行必ず成就せん」と云々とあつて、朝熊山の虚空蔵信仰は大和国鳴川から伝来したことになる。大和の鳴川とは、先にあげた「求聞持靈地事」の中に、

六、鳴川 大和 十一面

との記載がみえ虚空蔵求聞持法の道場であつた。大和には鳴川という集落が二ヶ所存在し、平群町にあるものと、現在奈良市に属するが京都府との境界に近い浄瑠璃寺の近辺にあたるそれとである。『朝熊山縁起』にいう鳴川がそのどちらをさすのかは決しがたいが<sup>(22)</sup>、そのいずれも十三仏石碑の分布する地域にあたっている。このことから、十三仏石碑の分布する地域、言い換えれば十三仏信仰圏が、来世的な虚空蔵信仰の成立と密接にかかわっていたことが理解される。

『高野山往生伝』卅二に、

巖実上人。大和国虚空蔵巖之住侶也。(略)其後終焉時到。向弥陀像。備香華。唱名号。安坐而即世。と、虚空蔵信仰者であつて西方浄土に往生した巖実が、長く大和の虚空蔵巖に住んだとされるのは、来世的な虚空蔵信仰と大和を結びつける史料として興味深い。

ところで、同じ『高野山往生伝』に、巖実とともに虚空蔵信仰者としてえがかれているのは明寂であ

る。明寂は、高野山の一心院谷を開いたが、そこで念仏門を学んだ弟子が真言念仏を完成した覚鑿である。<sup>(23)</sup>

覚鑿は『高野春秋』に、

秋七月。鑿柄栖修求聞持法於奥院道場。得悉地。第九度也。自益得身通臭

とあつて高野山奥院で求聞持法を修したという。そして『撰集抄』六八の「覚鑿上人ノ事」では、空海の入定をまねて自らも入定し、そのことで人々のそしりをかけて高野山を下り根来に去るとされている。ところで、信貴山朝護孫子寺の虚空蔵堂前には「覚鑿根来遙拝石」が現存し、『豊山玉石集』の長谷寺聖笈院の項に、

興教大師(覚鑿)自ら負て信貴山朝熊岳など、所所遍歴し玉ふといふ笈を安ず、其中に大師の小像を納む。

とあつて、覚鑿が本稿で考察してきた信貴山と朝熊山に足跡を残したとされている。虚空蔵信仰をもち、空海の入定をまねたとされる覚鑿が信貴山、朝熊山と関係することから、覚鑿の系譜をひく念仏聖が、来世的な虚空蔵信仰の伝播にたずさわったのかという新たな問題が提起されるのだが、それは次の課題とせざるをえない。

註

(1) 井阪康二(共著)『近畿の葬送・墓制』(明玄書房 昭和五十四年刊)の兵庫県の項による。なお、淡路島が十三仏信仰地帯であったことは拙稿「淡路島の巡礼―弘法大師信仰と十三仏霊場―」



- 『まつり』三六号まつり同好会 昭和五十五年十月刊 本書第二章第二節所収)を参照されたい。
- (2) 拙稿「十三仏信仰の成立について―空海の入定と虚空蔵求聞持法―」(『御影史学論集』六 御影史学研究会昭和五十五年十月刊第二章第一節所収)で論じた。また先学の業績として、
- 服部清五郎『板碑概説』(鳳鳴書院昭和八年九月刊)所収「十三仏信仰と板碑」
- 川勝政太郎「十三仏信仰の史的展開」(『大手前女子大学論集』第三号昭和四十四年六月刊)
- 佐野賢治「山中他界観念の表出と虚空蔵信仰―浄土観の歴史民俗学的一試論」(『日本民俗学』第一〇八号昭和五十一年十一月刊)
- 植島基行「十三仏について(上・下)」(『金沢文庫研究』第三二四・五号 神奈川県立金沢文庫昭和五十年十一月・十二月刊)
- 望月友善「初期十三仏碑と年忌供養」(『歴史考古学』第四号歴史考古学研究会昭和五十五年三月刊)などがある。
- (3) 虚空蔵求聞持法については、藪田香融「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる―」(『南都仏教』第四号南都仏教研究会昭和三十二年刊)、西澤龍生「記憶の技法―虚空蔵求聞持法とF・Aイエイツー」(『史境』第一号、歴史人類学会、昭和五十五年九月刊)を参照のこと。
- (4) 法輪寺の「十三まいり」については、本論文第一章所収の各論文を参照されたい。
- (5) 川勝政太郎、日本石造美術辞典』(東京堂出版昭和五十三年八月刊)の一一〇頁による。
- (6) 最近、片岡長治氏が『史跡と美術』に十三仏シリーズとして連載されたのをはじめ、十三仏石碑

の調査が各地で精力的におこなわれている。

- (7) 天岸正男・奥村隆彦『大阪金石志―石造美術―』(三重県郷土資料刊行会 昭和四十八年六月刊) 『生駒市石造文化財―生駒谷―』(生駒市教育委員会 昭和五十二年二月刊)片岡長治「生駒山脈を中心とした十三仏石造遺品について」(『石仏』第三号 奈良石造美術研究会 総芸舎 昭和四十四年九月刊)等を参照した。
- (8) 木下密運「中世の念仏講衆」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』一九六九年版 同研究所 昭和四十五年十月刊)を参照のこと。
- (9) 篠原良吉「奈良県生駒市・興山の種子十三仏板碑」(『歴史考古学』第五号 歴史考古学研究会 昭和五十五年九月刊)による。
- (10) 赤田光男『祭儀習俗の研究』(弘文堂 昭和五十五年四月刊)所収「生駒の葬送儀礼と郷墓単墓制」(第三章第二節)による。
- (11) 塩野芳夫「民俗宗教としての融通念仏と融通念仏宗」(『帝塚山短期大学紀要―人文・社会科学編』第一四号 昭和五十二年三月刊)に「大通老上人略年譜」があげられている。
- (12) 奈良県立図書館蔵。
- (13) 山口博『四条畷市史・歴史編』(昭和四十八年刊)の九六頁以下による。
- (14) 徳道上人について、田中久夫「観音信仰と播磨の法道仙人」(『日本歴史』第三四六号 昭和五十二年三月刊)を参照されたい。
- (15) 奥村邦道「隔夜」(『近畿民俗』第五一号 昭和四十五年九月刊)の一七頁による。

- (16) 隔夜修行は、奈良市中と長谷寺という二点間を往復する。星野英紀氏は「四国遍路における聖地性の特質」(『季刊現代宗教』三 特集「聖地」 春秋社 昭和五十五年七月刊)の中で、四国遍路を「円」という構造としてとらえ分析を試みられた。修行の構造を図形としてとらえる時、隔夜修行の特質が表出する。
- (17) 岸田定雄「隔夜のこと」(『奈良文化論叢』堀井先生停年退官記念会 昭和四十二年十一月刊)を参照のこと。
- (18) 『増補高野聖』(角川書店 昭和五十年刊一二二―一頁以下)。
- (19) 田中久夫『祖先祭祀の研究』(弘文堂 昭和五十三年六月刊)所収「高野山奥の院納骨の風習の成立過程」(第二章第四節)を参照のこと。
- (20) 『弘法大師全集』第十四卷(吉川弘文館 明治四十三年十月刊)所収。なお、前掲の拙稿「十三仏信仰の成立について」に全文を紹介した。
- (21) 朝熊山金剛証寺については、桜井徳太郎「山中他界観の成立と展開―伊勢朝熊山のタケマイリ―」(『日本歴史』第二四九号 昭和四十四年二月刊)
- 児玉允「朝熊山信仰とタケ詣り」(『近畿霊山と修験道』山岳宗教研究叢書十一、名著出版、昭和五十三年十月刊)を参照のこと。
- (22) 『寺社縁起』(日本思想大系二〇 岩波書店)所収の『朝熊山縁起』頭注では、「鳴川生駒郡平群町鳴川のことか。役行者が頭密の行法を修した般若窟がある」とされている。
- (23) 榎田良洪『覚鑿の研究』(吉川弘文館 昭和五十年刊)によるところが大きい。



## 第四節 淡路島の十三仏霊場

### 一 序

瀬戸内海の東をさえぎって横たわる淡路島は、大きさでは佐渡、奄美大島に次ぎ、およそ六〇〇m<sup>2</sup>の面積を有している。この淡路島は、古来より「阿波(淡)」への道として、本州と四国とを結ぶかけ橋として重要な位置を占めてきた。明石と岩屋を結ぶフェリーボートは、二五分で本州と淡路島を結んでいゝる。『続日本後紀』承和十二年(八四五)八月の条に、「淡路国石屋浜與播磨明石浜。始置船井渡子」とある。古代の南海道のコースに、昭和二十九年フェリーボートが開通したことは、同時に就航した福良と四国の鳴門を結ぶフェリーボートと接続して本州と四国との連絡ルートを完成し、淡路島にとって変革への大きなきっかけとなった。

淡路島は、江戸時代を通じて阿波の蜂須賀氏の所領であり、明治四年の廃藩置県では、阿波とともに名東県となった。しかし、明治九年に兵庫県に編入され、戦後の町村合併をへて一市十町として現在にいたっている。

本節では、淡路島における巡礼の歴史と現状を考察し、またそれを通して、この島の宗教的風土の様相をあきらかにしたいと思う。

### 二、淡路島の巡礼とその歴史

淡路島の巡礼には、「淡路西国三十三ヶ所」「淡路四十九薬師」「淡路四国八十八ヶ所」「淡路霊場七福神」「淡路島十三仏霊場」がある。このうち、現在とくに盛んにおこなわれているのは、七福神霊場めぐりと十三仏霊めぐりである。

もつとも、七福神霊場めぐりはおよそ十年、十三仏霊場めぐりは三年前からはじめられた新興巡礼であり、歴史的な面からすれば淡路西国三十三ヶ所の観音霊場が淡路の巡礼の基といえる。

淡路島の西国三十三ヶ所については、「起源は人皇百四代後土御門院の御宇、養宜大土居（現在、三原町養宜）の城主細川淡路守成春、かねて仏法に帰依し文明七年（一四七五）未歳始めて三十三ヶ所の霊場を選び順礼せられてより、世に流布して年々歳々盛んになり」とするのが一般的である<sup>1)</sup>。細川氏は、暦応三年（一二四〇）に細川師氏が長沼氏にかわって守護として淡路に入り、成春は第六代として応仁元年（一四六七）から文明十七年（一四八五）まで淡路守をつとめた。やがて永正四年（一五〇七）に、三好輝長のため細川氏は滅亡する。淡路西国霊場第十一番の神護山安楽寺は、暦応三年（一二四〇）細川師氏によって開かれたが、その詠歌に、

千早振る神も仏も跡たれて処は国のみやこなるらむ

とあることから、安楽寺のある八木が栄えた細川氏の時代に淡路西国三十三ヶ所が開かれたことが知られる。また、淡路西国霊場第十四番の松帆山感応寺の鐘銘に「文明七年御守護源成春」とあり、この年に巡礼がはじめられたのと一致する。

成春は、応仁の乱による死者を供養するために西国霊場を淡路島に開いたとされる。先山千光寺の銅

鐘に永正十六年（一五一九）の追刻銘があり、当国一乱のとき、この鐘がすでに売られていたので、買いかもどして寄進したことが記されているのと、関連するかもしれない。

ところで、安政四年（一八五七）に完成された『味地草』三原郡篇卷一、金屋村東北山観音堂の項に、観音寺本堂の坤にあり。享保十三年（一七二八）の官記に寺境の畝数三畝貢税を収むと。本尊十一面立像長二尺七寸余弘法作と云。

当州観音巡詣第二尊の霊場淡国通記寺院篇巡礼の部にも見へたり。詠歌に云、

父母のめくみ広田の観音寺仏はいかて余所にあるべき

堂の柱に古棧を掲ぐ其の図左に見へたり。

父母のめくみ広田の観音寺 永正十年癸酉丹後衆同内方

○淡州三十三所巡礼二番

願主

秀善

ほとけもいかてよそにあるへき 二月十七日

始之

丹後の下字章不分明。板黒塗にして文字は彫込て白を入れたり。上の穴は貫きて釘へ掛ん為也。此掛札は当州巡礼を秀善と云法師始て発し三十三枚の施主は阿万上本庄城主郷ノ丹後守同内室の附する所を記す欲。或云当国巡詣は中八木府城の時、女僧侶某の始る所也と云。若秀善は女僧の名か。三十三所毎に此掛札あるへけれ共今此寺と上本庄神宮寺のみ存せり。

とある。

この史料では、巡礼の開基を秀善という法師としており、先に紹介した細川成春開基ということの真偽に疑問を投じるし、永正十年（一五一三）と文明七年（一四七五）とは、四十年近い開きがあり、その

開基年代についても確実なことは言えないことになる。江戸時代後期にいたって、すでに混乱が生じていることになる。

さて、同じ掛札が、同書三原郡篇卷三、上本庄村観音寺の項にあげられている。

社境に安す亀甲山慈眼寺吉祥院と号す。本尊は聖観音にして村説に、上古八幡の神像示現ありし時、竜宮より当高影向する処の霊像と云。又昔堂宇造の時の官所に乞ふて良村を賜ふ。享保中の官記に方境の畝数二反五畝官税を収む。周廻の諸樹果伐を止むと也。堂南向当州観音巡詣第九尊の霊場にして詠歌あり。則凶の如き掛頃珍伝す、木地にて文字彫込て白地也。上の穴は通徹して釘に掛け

高影向する処の霊像と云。又昔堂宇造の時の官所に乞ふて良村を賜ふ。享保中の官記に方境の畝数二反五畝官税を収む。周廻の諸樹果伐を止むと也。堂南向当州観音巡詣第九尊の霊場にして詠歌あり。則凶の如き掛頃珍伝す、木地にて文字彫込て白地也。上の穴は通徹して釘に掛けん為也。金屋の観音寺にも此頃あり。往昔は三十三所悉くありしと見へたり。掛續の凶左の如し。

慈の眼のまへに生れ来て 永正十年癸酉 (三字不明)

○淡州三十三所巡礼 九番 願主 秀善

人や仏乃赤子なるらむ 正月十七日 始之

とある。



秀善という人物について知ることが出来ないのは残念であるが、この納められた掛札にある詠歌は、島では細川成春の臣郷丹後守(阿万城主)令室の作と伝えられている。

元禄十年(一六九七)に洲本物部の僧碧湛によって著わされた「淡国通記」には、淡路西国三十三ヶ所の各霊場の由来が紹介されている。

淡国通記第四卷指月亭子撰寺院篇巡礼部○淡路国観音世二巡礼所大凡一切衆生耽着世味。不嘗醍醐。狂走外境難遊本郷。挙手動足吟於有旅程。揚眉瞬目感於仮相幻色。積悪雖過須弥嶺値善塵耳介子許一。淨利声之遠阿鼻為之隣悲哉。眼光葺地向閻羅王前号泣恩田晦前悲。人民将何善縁遊戯彼樂邦乎。幸是花山法皇為度迷途。故令巡礼観音三十三所霊場。爾来諸州皆共効此施設。吾淡州定立此巡礼所也。予因作褐頌三十三首。称赞仏徳分充尊重供養者也。(以下略)

この史料から、おそくとも近世初頭までに淡路西国の各霊場が定まっていたことが知れる。

淡路西国の開基について、これ以上知ることができない。

さて、『味地草』には、淡路薬師四十九所霊場についての記載もみられる。薬師霊場がいつごろからはじめられたかは、いま近世ということしか知りえない。淡路西国三十三ヶ所の巡礼の途次、各所の薬師堂をめぐるのが薬師霊場の姿である。従って薬師霊場のみ巡礼するということはなく、西国霊場とセツトと違ってよい。西国巡礼の盛んになると共に、もうけられたのであろう。

淡路四国八十八ヶ所は、昭和一二年、弘法大師千百年の御遠忌を記念して、新しく登場した。また、七福神霊場と十三仏霊場は先に記したごとく、この十年來のものである。

### 三 巡礼の風俗

淡路島の巡礼は戦前にそのピークがあったと思われる。戦後は寺院経営ということもあって無住の寺院がふえ、霊場めぐりの妙味がうすれたこと。また、交通革命の中で徒歩による巡礼が少なくなったことと、淡路西国三十三ヶ所をおとずれる人は年々少なくなった<sup>(2)</sup>。それに変わって、最近に七福神霊場と、十三仏霊場が登場したといえる。ここでは、戦前の淡路西国霊場にしばってその風俗を紹介してみよう。

昭和十年六月に発行された雑誌『上方』第五四号は、淡路島を特集としているが、そこに寄せられている御原綱男の「淡路順礼」という論稿には、当時の巡礼の風俗があますところなく描かれている。以下、それに助けられるところが多い。

つま折れ笠に紅緒のくび紐、頭髮に載せたう金の手拭、江戸紫の手甲と脚絆、白足袋、藁草履を結ぶ紐の赤も艶めく娘盛りが、荒い紺飛白に中形浴衣を重ね、凛々しくつまを端し折り、肩から斜めにかけて頭陀袋の一樣の装ひに、これのみ色ぢぐに個性を現はした派手な腰巻――

淡路島のことわざに「巡礼せねば嫁取り嫁入りの資格がない」といわれるが、中でも十五、六歳からち二十一、二歳までの未だ婚ぐ前の娘達を中心であったようだ。けだしの色は、若いものは、赤、年寄りには水色であった。

順礼時期は毎年決っており、八十八夜に粃種を蒔いて、蔬菜の種を蒔いて、夏の農事に備え、さて小閑を得た其間をと、時節のよい晩春の幾日かを信心半、行楽半の旅として約十日間を修業の旅

に出るもので、九十七八夜がその出発の日に当たっています。

現在では、巡礼のシーズンは五月一日から十五日までになっている。というのは十五日に洲本市で御詠歌の大会があり、優勝旗の争奪戦などあって大層にぎわう。これにむけて、阪神地方からも多数の参加があり、その人達が霊場をめぐるのが淡路島の年中行事のひとつとなっているのである。ということ、戦前は島の人々の巡礼であったものが、今では島外の人々が中心となっているとも考えられる。

「今年は順礼に出よう」となると、先づお正月頃から用意にかかります。若い娘さんが、人妻が、或は老人がそれぐ面の相孝探しにからます。若曇さんを、膝下から離して他人と共に出すのですから両程なるとそれぐ相当な心配を持つのは妻ですが、そこは信仰中心の行事だけに、万事貴方(大師様)任せと言う霊的心理もあつて案外平気で旅に出す家庭もあります。よい連れが出来ると詠歌の稽古に取りかかります。これは三十三番の詠歌を節付けて謡ふのですから少なきも二十日間多きは四五十日間練習を要します。

淡路島の巡礼の特色として、淡路西国霊場にも弘法大師に対する信仰が基盤とنانていることがあげられる。万事、大師様まかせという背景には、不都合な振舞いがあれば仏罰がくだると固く信ずる程、弘法大師信仰が有力であったといえる。

参拝した霊場ではお詠歌を奉納してお接待(主として白米)を頂戴し、納経の印を貰ふて、次ぎの霊場へ急ぎます。午後の五時になるとその日の宿を求めます。これは善根宿です。(民家が祖先供養のための奉仕宿です)それも大抵は霊場へ順礼者たちのために迎へに来ていて呉れます。

一日の旅塵を落し、先づ其家の仏間に正座して御礼の詠歌をあげます。御詠歌の出来ぬものは真言

を誦唱して其家の祖先の冥福を祈ります。斯くする中に宿では一行のために精進ながら充分の御馳走で夕食を出して呉れる。但し米は昼間各所で頂いた接待米を炊いて貰ふのが、定法なのですが、宿によるとそれも奉仕して呉れる所があります。斯くして三十三所の霊場を巡拝し終り、氏神へ御礼参りし、一行は食事を共にして詠歌の合唱で別れます。これが順礼の解散式と言ふ所です。

御原氏が報告された昭和十年においても、以上述べてきた巡礼の風俗は、おいおい過去のものとなるうとしていたようだ。服装にしてみても、セルの単衣に人絹の帯、下駄ばきに柄の短い絹日傘、手にはハンドバックをもつというように、また、詠歌のかわりに映画の主題かや小唄をうたう者もあらわれたりした。若者たちが自転車で接待米を集め、それを売ったお金でカフェーで酒をのむ。このようなこともあったという。

とはいえ、この時期は巡礼そのものは盛んであり、昭和十二年の弘法大師千百年忌に際し淡路四国八十八ヶ所がもうけられたことも、納得できることといえよう。

#### 四 先山千光寺―淡路西国第一番霊場―

淡路島の巡礼を語るとき、淡路西国霊場の一番である、先山千光寺の信仰を一瞥することは是非とも必要であろう。

千光寺は真言宗の別格本山として、淡路第一の名刹である。その由来について、『淡国通記』には次のような話がある。

縁起云。日本最先出現之山故号先山臭。昔播磨国獵人射大白猪。大身而不被射殺負箭逃走獵人追躍渡淡路海至机浦人先山。洞中大杉葉間發光仰見則所放之矢立千手觀音正胸。而血流臭獵人驚怖拜伏忽拔其箭勘抵弓箭而切髮出家改名寂忍。乃勸四方壇門建精舍名千光寺。此是千手觀音放光故也。

六月十七日從前後修法会。大群雲集名十七会当先山之東北而有關伽水。中古此山院主有聖者見一天童勘此水。間日從何処來哉。天童答日我為書写山性空上人樹間伽水來。院主日何不征于天竺無熱池。天童日無熱池胎藏一界之水也。此是兩部不二法水臭汲去。又役小角有修求聞持処。名御神嶽有大岩窟伊弊諾伊弊冊棲息之靈屈也。当千南嶽而通徹于淡路国之中、一実。委曲千山記此記素文仮名也改之今写干真字臭略之。

寺伝から補うと、開基は延喜元年(九〇一)で、そのころ播磨の国に藤原氏の流れをくむ忠太という獵師がいた。ある日、上野の深山で為篠王(いざさおう)笹がいっぱい生えているという意)という大きな猪を射た。猪は手負いのまま海を渡って淡路島に逃げこみ、先山にある杉の木のはら穴にかくれた。追ってきた忠太が穴をのぞくと、猪の姿はなく千手觀音の胸に矢がささっていた。驚いた忠太は剃髮して名を寂忍と改め、寺を建てて觀音像を祀ったという。

『淡国通記』は、この開基にまつわる話のほかに、姫路の書写山性空上人との関係をとぎ、さらに修験道の祖である役小角が、求聞持を修した岩窟について記している<sup>(3)</sup>。求聞持とは、聞持すなわち記憶力を求めて修せられる密教の修法であつて、正しくは「虚空藏求聞持能滿諸願法」という<sup>(4)</sup>。

先山千光寺の縁起は、淡路島がイザナギ、イザナミによつてつくられた日本最初の島である、いわゆるオノコロ島としての伝承によつて、より多彩なものとなっている。標高こそ論鶴羽山には及ばないが、

先山はその山号ふさわしく淡路島の中心的位置を占める。

千光寺の行事の中で、特に盛大なものに「年越し祭」がある。千光寺はもとより、淡路一国の大祭と行ってさしつかえない。大晦日の早朝から、参詣の人があとをたたないという。高さ四四八メートルの山頂にある千光寺へは、およそ五〇分の山道を登らねばならない。参詣した人は、昼夜ともに寺庭に燃やしてある大焚火の中で、持参した餅を焼いて帰るのである。これを元旦の雑煮として食べると、一年、家内中が健康であると言い伝えられている。参詣の人数は、一万人とも数万人ともいう。

年越祭は元旦の正零時に、金堂で御本尊の開扉に初まるのであるが、此の開扉に際し読経と開扉文の朗話の間に、第一番に拝むのは古来岩屋の漁師講の例になっている。次が由来、沼島等であるが、之れ等の人は内陣にて拝み、一般参詣人は外陣及び堂外から拝むことになっている。<sup>(5)</sup>

岩屋の漁師講が第一に拝するという風習は、淡路が漁業によって栄え、この年越し祭も漁業者の参詣によって開始めされたからだと考えられている。

千光寺はまた、ダンゴ転がしの習俗でも知られる。

人が死んで三十五日目に、縁者がダンゴをたずさえて千光寺にのぼる。本堂裏手にある六角堂の閻魔大王に五つ、六地藏に各一つずつダンゴをそなえたあと、六角堂横の崖から、残りのダンゴをころがすのである。これは餓鬼にそなえるということ、餓鬼がダンゴに気をとられている間に、死者はその横を通りぬけることができるとされる。

死後三十五日目つまり五七日は、閻魔大王の前にひき出される日であり、また十三仏信仰でいえば地藏菩薩の日とされるのである。

五 十三仏霊場と淡路島の十三仏信仰

先山千光寺は、昭和五十二年三月一日に新しくもうけられた淡路十三仏霊場の第一番札所でもある。  
淡路十三仏霊場は次の通りである。

- |      |        |       |
|------|--------|-------|
| 第一番  | 先山千光寺  | 不動明王  |
| 第二番  | 岡山栄福寺  | 釈迦如来  |
| 第三番  | 里深山宝積寺 | 文殊菩薩  |
| 第四番  | 宝樹山万勝寺 | 普賢菩薩  |
| 第五番  | 高見山真観寺 | 地藏菩薩  |
| 第六番  | 松林山春日寺 | 弥勒菩薩  |
| 第七番  | 竜宝山智積寺 | 薬師如来  |
| 第八番  | 和敬山三宝院 | 観世音菩薩 |
| 第九番  | 平見山法華寺 | 勢至菩薩  |
| 第十番  | 潮音山海福寺 | 阿弥陀如来 |
| 第十一番 | 桂光山生福寺 | 阿銭如来  |
| 第十二番 | 清林山潮音寺 | 大日如来  |
| 第十三番 | 竹林山八幡寺 | 虚空蔵菩薩 |

このように、十三仏を霊場めぐりの本尊として配したのは、我が国でも最初の試みといえる<sup>(7)</sup>。

十三仏というものは日本独特のもので、経典としては存在しない。藤井正雄編『仏教儀礼辞典』（東京堂出版刊）には、

不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿銭、大日、虚空蔵をいう。

この十三仏を一幅あるいは三幅にこしらえたのが十三仏の掛軸である。十三仏の掛軸は葬儀のときに霊棺の背後にかけるのが禅宗門系統の古来の習慣となっている。死者がでると壇信徒は寺から十三仏の掛軸を借り、葬式、四十九日がすむと、十三仏のお礼とともに掛軸を寺に返却するのを例としているが、最近、都会地ではすたれている。

とある。このように、葬儀の際に十三仏の掛軸をもちいるのは、淡路島においてはきわめて一般的である。

例えば、十三仏霊場第十三番竹林山八幡寺（津名町志筑）には、「檀用本尊三幅」として、本尊十三仏、龍猛菩薩外三和、弘法大師外三祖の三幅の掛軸があり、葬儀に使われている。また、新高野山遍照院（洲本市）では、主として年忌供養に十三仏の掛軸をもちいるという。洲本市内では、十三仏掛軸一幅であるが、村の方では十三仏を中心に右に弘法大師、左に不動明王の三幅をすえる。

島内の真言、浄土宗寺院は、ほぼ例外なしに十三仏掛軸を所持している。ただ先山千光寺だけは、いわゆる信者寺であって壇家をもたないため、十三仏掛軸を有さないとのことである。

十三仏信仰の成立については本章第一節で論じたが<sup>(9)</sup>、地藏十王経の本地としての十仏に、やがて三仏が加わって十三仏が成立した。その時期であるが、『蔭涼軒日録』文明十八年（一四八六）十二月二十



二日条に、

忌日十三仏次第。

初七日 不動泰庸王、  
二七日 釈迦初江王、  
三七日 文殊宗帝王、  
四七日 普賢五官王、  
五七日 地藏閻魔王、  
六七日 弥勒變成王、  
七々日 薬師泰山王、  
百ヶ日 観音平等王、  
一周忌 勢至都市王、  
第三年 弥陀転輪王、  
七周年 阿銭如来  
十三年 大日如来  
三十三年 虚空蔵菩薩。

という記事がみえる。また、一四四四年成立とされる『下学集』数量門第十六に、「十三仏並十王逆修日  
記事」では、

初七日（正月十六日）秦皇王（本地不動）

(表2-4-1) 淡路島宗派別寺院分布

宗派	洲本市	津名郡	三原郡	合計
法相宗	1	0	0	1
律宗	0	0	1	1
真言宗	28	68	45	141
浄土宗	3	0	12	15
真宗	3	5	4	12
臨濟宗	0	1	0	1
曹洞宗	1	0	0	1
日蓮宗	3	20	4	27
黄蘗宗	0	0	1	1
合計	39	94	67	200

(桜井徳太郎著『民間信仰』172頁による)

無動経云。欲見諸仏士。明王忽出現。頂戴於行者。能令得見之。何況余求事。隨持得成就不墮四惡趣。決定證妙果。

というように、『下学集』にあるのと同様に一年で逆修するようになっていく。二七日から十三年までは省略して、三十三年を記しておく。

三十三年（十二月十三日）虚空蔵

礼三十五仏名経云。唱虚空蔵者。四重五逆之罪悉消滅。三業之過皆除滅。編者曰。右弘法大師逆修日記一卷。年譜第十二卷引政祝見聞隨身鈔載之。今依之。出之。但真偽有疑。

編者の注のごとく、空海の作とは考えられないが、名古屋宝生院の政祝（永享の頃の人）の著『見聞隨身鈔』に引用されているので、永享以前に偽作されたと考えられる。十三仏に関する文献上の発見である。

このように、十五世紀に十三仏が成立したと考えられるが、淡路島においても、『味地草』三原郡篇卷二、飯山寺村熊野権現者の項に、役師堂の礼たに一古碑あり高三尺五寸、横二尺五寸、厚八寸。

とあって、「元龜二年（一五七一）三月二日、念仏講結衆」の字句が読め、多数の作善者の名が列記されている。梵字が不明瞭であるが、十

三仏と考えてよいであろう。

また同書三原郡篇卷一、北方村片寺の項に、又、十三仏の種子及大日経の文一紙珍伝す。其文に云。若人求仏意通達菩提心。所生身速讚文覚位弘法大師。とあることから、淡路島の十三仏信仰は、中世以来の伝統を有することになる<sup>10)</sup>。

以上みてきたように、十三仏霊場が淡路島に登場した背景には、この島に伝統的な十三仏信仰があったことになる。巡礼の目的を、功德を得るためとすれば、逆修の忌日仏としての十三仏が、巡礼の対象となっても矛盾しないと考えられる。

## 六 まとめ―淡路島の宗教的風土―

新たな信仰が成立するためには、その信仰を支持し受け入れる人々と、関与する宗教者双方の要因が一致する必要がある。十三仏霊場が登場するについても、このことはあてはまる。

現実に、無往の寺院ができることで淡路西国三十三ヶ所が、巡礼として機能しなくなっている。高野山での修業から帰って、島の仏教界の新しい担い手となった若い指導者の中から、宗教活動の一翼として巡礼の整備復活をのぞむ声がある。ところが時代の趨勢として、三十三ヶ所のすべてを維持するために、相応の収入を確保することは大変困難である。一方、巡礼する側にたつと、車を使って短かい期日でまわりたいということになるろう。

これが契機となって、新しい霊場が要請された。先山を中心として、主要道路にそって島を一周する

十三仏霊場は、淡路西国霊場にかわる条件をそなえている。

十三仏霊場の背景として、島の十三仏信仰があつたことはすでに述べた。しかし、巡礼と十三仏信仰が結びつく接点は何であつたのか。そこには、弘法大師に対する信仰があつたと思われる。

巡礼と弘法大師信仰については、饒舌は無用であろう。十三仏信仰が、弘法大師信仰としての側面をもつことは、十三仏の文献的初見が「弘法大師逆修日記事」であることにもその一端がうかがえる。島内の史料でも、先にあげた北方村方寺の十三仏の一文に「速讀文覚位弘法大師」とあるし、さらに十三仏の最終仏が虚空蔵菩薩である点に弘法大師信仰が表出している。

空海の虚空蔵信仰は、『続日本後紀』承和二年(八三五)三月二十一日条に、

十八遊学塊市、時有一沙門、呈示虚空蔵□聞持法、其経説、若人依法読此真言一百万遍乃得一切教法文義暗記、於是信大聖之誠言。

とあつて、空海が仏門に帰依する機縁となつたことで、とみに有名である。また、空海は、龍華二会を待つため高野山奥へ入定したとの信仰がある。この空海の虚空蔵信仰と空海の入定が結びついて、やがて奥の院で求聞持法を修する者もあらわれた。十三仏の最終に、密教の極致である大日如来をこえて虚空蔵菩薩が位置するのは、空海との関係といえる<sup>(1)</sup>。

淡路島の弘法大師伝説の一例として、『味地草』三原郡篇卷三、阿万東村大師堂の項に、

中の河山中にあり土生街道の左。堂宇二間四方巽向厨子の内に高さ二尺許亘り三尺余。石の色白鈍にして足跡あり。村説に弘法大師当庭に遊馬ある時石上を踏給ふに忽ち其跡石面に存し是を本尊と称す。

とある。また、同巻、弘川村観音堂の項には、

尊像は弘法大師作と云、享保十二年（一七二七）官所の記に堂地の畝数二畝は貢調を免除す。堂内に弘法大師を安す。灘二十一所大師巡詣第十尊の靈場にして詠歌に云、

前の世の罪は残らず弘川一心不乱御名をとへて

とあり、吉野村關伽水大師堂の項には、

阿弥陀堂の背海浜にして靈水あり昔常光寺の兄水になせりとも云。密祖堂は文政七年、一八二四）八月始めて灘二十一所巡詣の靈場を安置して当尊は第十七尊也詠歌に云、

身口意のいくその垢を關伽水に洗ひ落せば即菩提心

とある。灘というのは、島の南海岸一帯であり、そこに弘法大師靈場の巡詣というものが存在したことが知れる。

このように、弘法大師にまつわる信仰は枚挙にいとまがない<sup>12)</sup>。淡路島に弘法大師信仰が濃厚なことは、実は真言一皿一宗の圧倒的優位と相関関係にある。桜井徳太郎は、村落における仏教寺院の機能を論じられた中で、淡路島を「いうならば、まさしく真言宗地帯である」とされた<sup>13)</sup>。全島寺院数二〇〇ヶ寺のうち、真言宗寺院が一四一ヶ寺を占めており、実に約七割にあたる。多くの八幡神社の別当寺として、歴史的な重みも大きいものがあつた。

淡路島は真言の島である。先山千光寺の住職であつた和田性海が、高野山金剛峰寺管長をつとめたように、高野山との関係が大きなウェイトを占める。実際、紀州の加太を経由して、高野山と淡路島とは空間的にも近い存在である。

『紀伊続風土記』加太村（小堂八宇能満堂）の項に、

淡路島の前山の尾崎にあり、本尊虚空蔵菩薩定朝の作といふ。役行者像あり最古物なり。此堂は文明年間淡路の僧十穀覚乗の建立する所、淡島神社の本地仏とす。

とあり、同じく「紀伊国名所図会」では、

粟島明神の八代より北なる鳥居の丘にあり、本尊虚空蔵菩薩、定朝の作。脇士毘沙門天、役行者の作、同不動明王、弘法大師の作。此堂は往年文明の頃、覚乗沙門是を建立す。本尊を伝来の虚空蔵といふ。

とあつて、紀州加太の淡路神社の本地仏に関して、淡路島の十穀聖の活躍が知られる。

淡路島の信仰は、巡礼にしても十三仏信仰にしても、淡路島と高野山との結びつきから生じた宗教的風土の中で展開したのである。

#### 参考文献

- 『淡国通記』（北中電蔵による謄写版再刻本、昭和五年刊）
- 『味地草』（三原郡教育会による謄写版再刻本、大正十三年刊）
- 『淡路島の民俗』（和歌森太郎編、吉川弘文館、昭和三十九年刊）
- 『兵庫のふるさと散歩淡路編』（和田邦平監修、21世紀ひょうご創造協会昭和五十三年刊）

#### 註

(1) 百楽荘主人「淡路三十三所と四十九薬師順礼」(『上方』五四、上方郷土研究会、昭和十年六月刊)

(2) 竹田信一「巡礼雑感」(『淡路の文化』二、淡路の文化社、昭和五十五年三月刊)に、「数年前に島内の霊場巡りを思いたち、やっと昨夏でほとんど巡り終えた。近年淡路巡礼は、急速にすたれつつあり、特に若者の姿は、全く見られなくなっている。(中略)無住の霊場が多く、その存在さえも、地元の人に忘れられつつある所が多いことである。折角訪ねようとしても、その場所がはつきりわからなかったり、訪れても荒れていたり、お堂に鍵がかかっていて、身近かに拝むことができなかったりする。納経ももらえないとなると、訪れる人が少なくなるのも当然であろう」とある。

(3) 淡路島の修験道については、松岡実「修験と大峯行者」(『淡路島の民俗』所収)と、田中久夫『歴史の山一〇〇選』(秋田書店昭和四十九年刊)の諭鶴羽山の項を参照されたい。

(4) 『味地草』三原郡篇卷三の社家村覚住寺の項に、「求聞持堂(虚空蔵)」の記載がみえる。

(5) 和田性海「先山の越年祭其の他」(前掲『上方』五四)

(6) 第八番霊場の観世音菩薩、第十番霊場の阿弥陀如来については従来からの本尊を十三仏霊場の本尊とし、他の霊場については、それぞれの本尊を新しくお祀りした。

(7) 昭和五十四年十一月、大阪市内に「おおさか十三仏霊場」が発足した。十三仏霊場めぐりの反響の大きさがうかがえる。

(8) 井阪康二(共著)『近畿の葬制・墓制』(明玄書房、昭和五十四年刊)に、洲本市奥畑の葬制に

ついて詳細な報告がある。ここでも十三仏掛軸がもちいられる。

(9) 拙稿「十三仏信仰の成立について―空海の入定と虚空蔵求聞持法―」(『御影史学論集』六、御影史学研究会、昭和五十五年九月刊、本論文第二章第一節)

(10) 快樂院(南淡町賀集野田)蔵の「御流祖父母灌頂大事」の中にも、十三仏の各忌日仏が示されている。(前掲松岡論文所収)

(11) 詳細は前掲拙稿を参照されたい。

(12) 「巡遷大師」という行事が、普門寺(津名町塩尾)をはじめ十三ヶ寺によって行われている。

例年六月十五日(現在では七月十五日前後の日曜)の弘法大師の誕生日に、順に大師像を次の寺院に送る。昨年一年は大照寺であずかり、今年は普門寺が受けついで。また、遍照院の月夜大師堂について、西海賢二「木食上人と淡路―木食観正の宗教活動をめぐって」(前掲『淡路の文化』二)に詳しい。

(13) 桜井徳太郎『民間信仰』(塙選書、塙書房 昭和四十一年刊)の第三章「村落寺院の信仰的機能―仏教と民間信仰―」で淡路島を取り上げておられる。



## 第五節 石巻の中世板碑にみる十三仏信仰

### 一、石巻市多福院の中世板碑

仙台駅からJRの仙石線の快速電車で、途中、松島の景勝の地を経て、およそ一時間で石巻に到着する。

旧北上川の河口に位置する石巻市は、現在は巨大な製紙工場に代表される工業都市であると共に、水揚げ量では全国屈指の漁業基地でもある。

近世の石巻は、東まわり航路の重要な港として知られ、俗謡に「三十五反の帆を巻きあげて、行くよ仙台石巻」と読み込まれていることでもよく知られるところである。

そして、芭蕉の「奥の細道」には「平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など、聞伝へて、人跡稀に、雉兔藪薨（ちとそうぎょう）の往かふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ、こがね花咲とよみて奉たる、金花山、海上に見わたし、数百の廻船、入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞけたり、思ひがけず、斯る所にも来れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし、漸、まどしけき小家に、一夜をあかす」とあり、ここにも往時の賑わいが察せられる。

石巻は外洋である東まわり航路と、ヒラタという船による北上川の河川交通との結接点として重要な交通の要衝であり、従って古来より政治的、軍事的にも拠点としての役割をになって来たのである。

この石巻市の旧北上川左岸に位置する多福院に、八十八基を数える中世板碑があり、これらは一括し

(第2・5・1)

石巻市多福院の中世板碑群

<年号主尊造立目的銘文>

#	造立年		主尊	造立目的	銘文(抄)	付記	
1	1275	建治元年		剥離	往生	極楽	
2	1278	弘安元年		阿弥陀	不明		
3	1283	弘安六年		阿弥陀	往生	往生	
4	1284	弘安七年		阿弥陀	往生	往生極楽	
5	1286	弘安九年		阿弥陀	不明		
6	1293	正応六年		大日胎	往生	阿弥陀仏、往生	
7	1294	永仁二年		大日胎	往生	往生極楽	砂岩
8	1295	永仁三年		弥勒	五七日	南無阿弥陀仏、悲母為三十五日	
9	1299	正安元年		剥離	往生	辻王丸、往生極楽	
10	1303	嘉元元年		欠損	善根	善根	
11	1303	嘉元元年		大日金	成仏	大日如来形像衆生成仏、四十余人講衆	
12	1307	徳治二年		地藏	不明	法衆	下欠
13	1308	徳治三年		釈迦	逆修	為禪宣比丘尼、逆修	
14	1331	元徳三年	△	地藏	三年忌	安養寺殿大禪定門第三周	
15	1332	正慶元年	△	大日金	五七日	有蓮沙弥相当五七日忌	砂岩
16	1338	延元三年	○	欠損	三年忌	悲母妙心幽儀第三年	
17	1338	延元三年	○	阿弥陀	五七日	先考幽儀相当五七日忌、往生極楽	
18	1339	延元四年	○	阿弥陀	菩提	奉為吉野先帝菩提也	
19	1340	延元五年	○	大日金	逆修	逆修善根往生浄土故也	
20	1342	興国三年	○	大日金	五七日	遠州平清口五七日忌	
21	1343	興国四年	○	大日胎	五七日	蓮阿五七日之辰景	
22	1349	貞和五年	△	欠損	百日忌	先妣明宗禪尼一百ケ日滅罪	
23	1365	貞治四年	△	大日金	十三年忌	慈父慈蓮禪門一十三廻所修也	
24	1370	応安三年	△	阿弥陀	五七日	過去聖靈三十五日忌日	
25	1374	応安七年	△	勢至	一周忌	先考仙阿聖靈一週忌小善	
26	1374	応安七年	△	勢至	一周忌	高福前住恵海律師一周忌	
27	1377	永和三年	△	勢至	一周忌	覺性禪門一週忌之辰	
28	1377	永和三年	△	剥離	不明		欠損
29	1381	康暦三年	△	観音	百日忌	哲掉律師一百ケ日忌辰	
30	1384	永徳四年	△	勢至	一周忌	妙戒禪尼一週忌辰也	
31	1386	至徳三年	△	地藏	不明		下欠
32	1387	至徳四年	△	地藏	七分全得	七分全得	
33	1387	至徳四年	△	五輪塔	成仏	衆生成仏、九品浄利	下欠

て石巻市の指定文化財第一号にあげられている。  
 多福院は禅宗の古刹として、四百年程の歴史を有するものであるが、現存する板碑群と多福院とは直接には結び付かないのである。

多福院について、藩選の地誌である『観聞志』には、「海門駅東南、有古刹、曰日輪山多福寺、背有青山、山下有古石墳、高五尺、広二尺余、其半腹、題曰吉野先帝御墓、右旁有延元五年、左畔霜月十四日

文字、相伝、天皇  
 訃至于奥州、親王  
 親臣慘怛之余、所  
 建之陵墓也」とあ  
 り、また『封内記』  
 には「多福院、号  
 月光山阿弥陀峰、  
 不詳何人開山、旧  
 号日輪寺、元亀元  
 年八月、盛岩和尚  
 中興、改号多福院、  
 寺内有吉野先帝靈

碑、且記弘安応永延元等之年号古碑多矣」と紹介されている。

二多福院板碑群の概観

東側に牧山の崖がせまる多福院の境内には、中世板碑群と若干の近世の板碑、そして多数の近世以降

43	1397	応永四年		十三仏	逆修	牧山住僧伝灯大阿闍梨位刑部頼禪六十八才為逆修敬白砂岩	
44	1398	応永五年		阿弥陀	菩提	妙性禪尼頓証菩提	
45	1398	応永五年		不動	七分全得	不動護摩一千座為小比丘惠本七分全得	
46	1400	応永七年		不詳	三年忌	当宗禪師第三年忌	
47	1400	応永七年		虚空蔵	三三年忌	悲母幽儀三十三回忌景	
48	1400	応永七年		虚空蔵	三三年忌	為籠峯寺前任恩礼和尚三十三週忌景	
49	1400	応永七年		阿弥陀	七分全得	妙善禪尼七分全得	
50	1401	応永八年		勢至	一周忌	大日如来、蓮昇大禪定門一周忌追善	
51	1401	応永八年		地藏	十三年忌	道性禪門十三年忌	
52	1401	応永八年		大日金	三三年忌	為智西禪尼三十三廻之忌景	
53	1401	応永八年		虚空蔵	三三年忌	理道禪門三十三年忌景	
54	1402	応永九年		観音	百日忌	當善光禪尼七々日百ケ日忌景	
55	1402	応永九年		大日金	逆修	妙禪尼為七分全得、逆修善根	
56	1402	応□□年		阿弥陀	七分全得	道吉禪□七分全得	壬年
57	1403	応永十年		虚空蔵	三三年忌	高福前住励公相当三十三年	
58	1406	応永十三年		剥離	百日忌	本阿禪門一百ケ日忌景	
59	1412	応永十九年		虚空蔵	三三年忌	酬了周禪門三十三年忌、為追善頓証菩提指南	
60	1413	応永二十年		不詳	三三年忌	喜繼大禪定尼三十三回忌	
61	1416	応永二三年		大日胎	十三年忌	道阿禪門十三年忌景	
62	1417	応永二四年		阿弥陀	逆修	見性禪尼逆修追善	
63	1418	応永二五年		大日胎	七年忌	妙性禪尼七年忌	
64	1421	応永二八年		大日金	逆修	性春禪門逆修	
65	1422	応永二九年		阿錢	七年忌	喜阿禪門七年忌	
66	1430	永亨二年		欠損	百日忌	牧山別当禪良阿闍梨一百ケ日忌	
67	1431	永亨三年		地藏	七分全得	重海禪尼七分全得忌辰	
68	1432	永亨四年		阿弥陀	三三年忌	蓮昇大禪定門三十三年忌	
69	1433	永亨五年		虚空蔵	三三年忌	重戒大姉逆修作善、此者三十三廻辰忌	
70	1433	永亨五年		十三仏	七分全得	当寺第十持東岩大和尚七分全得十三尊位	
71	1434	永亨六年		大日金	三三年忌	三十三回忌	下欠
72	1435	永亨七年		欠損	不明	善光寺前住祐清律師、忌辰	
73	1436	永亨八年		阿錢	七年忌	浄賢禪門七年忌辰	
74	1439	永亨十一年		大日胎	菩提	祐清律師願主証大菩提	
75	1442	嘉吉二年		地藏	現世安穩	一結之諸衆現世安穩後生善処、(人名多数)	
76	1445	文安二年		剥離	十五年忌	妙清大禪定尼十五年忌	

87			大日金	不明	花仙禪門	
<破損塔婆>						
88			阿弥陀	不明		
89			不詳	不明		
90			破損	不明		
91			破損	不明	(正徳五の追刻)	
92			地藏	不明		
93			破損	不明	皆是阿弥陀	

の墓碑がある。

表(2・5・1)には、多福院の中世板碑群を年号を追って、主尊、造立目的、銘文の一部、付記を記してある。石巻市の指定では、八十八基となっているが、その後発見されたものなどを含めて、勝倉元吉郎「石巻市多福院及び周辺板碑群」(『歴史考古学』第二六号)によって九十三基について記載してある。横軸は二十年毎にいられてあり、これは以下の考察と対応させた区分となっている。

造立年の○印は北朝年号であること、△印は南朝の年号であることを示している。主尊の項目にある大日胎は胎藏界大日如来を示し、大日金は金剛界大日如来を示しているが、統計の際は一括して大日如来として扱った。次に、造立目的の項目には、銘文の中から判断して最も強調されている点を選んで取り上げた。銘文の項目には、前記の造立目的を選ぶ根拠となった部分を重点的に抜きだしてある。付記の項目は、この多福院の板碑のほとんどが地元の石巻市井内で産する砂質粘板岩、通称稲井石であるので、それ以外の材質の際に示した。

さて、造立された年は、最も早い建治元年(一二七五)から、下って延徳四年(一四九二)に至る。それを二十年ごとに区切った造立数を第二表とした。一二六〇年から一三七九年までは、二十年単位で二から七基が建てられ、一三八〇年からの二十年間では十七基と急に増加している。そして次の一四〇〇年からの二十年間に十八基造立され、これが二十年間を単位とした最多である。そして、次の一四二〇年からの二

(第2・5・2)

石巻市多福院の中世板碑群

年別造立数・主尊

	造立数	大日	阿弥陀	地藏	虚空蔵	勢至	観音	十三仏	阿銭	弥勒	釈迦	五輪塔	不動	薬師	不詳 破損
1260～	2		1												1
1280～	7	2	3							1					1
1300～	4	1		1							1				1
1320～	5	1	2	1											1
1340～	4	3													1
1360～	6	1	1			3									1
1380～	17	1	3	6		1	1	1				1	1		2
1400～	18	4	3	1	5	1	1								3
1420～	11	3	1	1	1			1	2						2
1440～	2			1											1
1460～	0														
1480～	2														2
不明	15	2	1	1			1							1	9
計	93	18	15	12	6	5	3	2	2	1	1	1	1	1	25

注 五輪塔は、板碑に五輪塔を線刻。

十年間には十一基となり、その後は一四四〇年以降激減しているのである。

主尊については、左から多い順に並べて有るが、胎蔵界・金剛界をあわせた大日如来が十八基と最も多く、造立年もほぼ全ての時期にわたっている。次に多くみられるのは、阿弥陀如来で十五基を数える。

これもほぼ全時期を通じて建てられている。三番目の多いのは地藏菩薩で、十二基であるが、この地藏菩薩の造立年には偏りが見られ、一三八〇年からの二十一年間に半数がかたまっている。これら大日如来、阿弥陀如来、地藏菩薩が各々十基をこえている。

次に六基みられるのが、本稿で注目して取り上げる虚空蔵菩薩で、この造立年には強い偏りがあり、一四〇〇年からの二十一年間に五基、続いて一四二〇年から一基と集中した時期に造立されているのである。

勢至菩薩は五基あり、一三六〇年か

(表2・5・3)

## 石巻市多福院の中世板碑群

	造立目的												
	造立数	五七日	百日忌	一周忌	二年忌	三年忌	七年忌	十三年忌	十五年忌	三十三年忌	往生成仏など	逆修・七分全得	不明
1260～	2										1		1
1280～	7	1									5		1
1300～	4										2	1	1
1320～	5	2				2					1		
1340～	4	2	1									1	
1360～	6	1		3				1					1
1380～	17	3	2	1	1		1				2	6	1
1400～	18		2	1		1	1	2		7		4	
1420～	11		1				2			3	1	3	1
1440～	2								1		1		
1460～	0												
1480～	2						1						1
不明	15										5	2	8
計	93	9	6	5	1	3	5	3	1	10	18	17	15

注 往生・成仏などは、往生・成仏・善根・菩提・現世安穩。

らの二十年間に三基集中している。次に観音菩薩が三基、十三仏が二基、阿銭如来が二基となり、これ

らは板碑の造立が全体として盛んだった一三八〇年以降の六十年間にまとまっている。

弥勒菩薩、釈迦如来、板碑に五輪塔を線刻したもの、不動明王、薬師如来が、それぞれ一基あり、総数としては九十三基となる。

次に、造立目的を、造立年ごとに集計したものを表(2・5・3)として示してある。

この表(2・5・3)では、造立目的としての造立数が多い順に並べるのでは

(表2・5・4)

## 石巻市多福院の中世板碑群

主尊と造立目的

	造立数	五七日	百日忌	一周忌	二年忌	三年忌	七年忌	十三年忌	十五年忌	三十年忌	往生・成仏など	逆修・七分全得	不明
大日	18	3			1		1	②		2	5	3	1
阿弥陀	15	2								1	4	5	3
地藏	12	③				1		1			1	3	3
虚空蔵	6									⑥			
勢至	5			⑤									
観音	3		②								1		
十三仏	2											2	
阿銭	2						②						
弥勒	1	1											
釈迦	1											1	
五輪塔	1										1		
不動	1											1	
薬師	1										1		
不詳・破損	25		4			2	2		1	1	5	2	8
計	93	9	6	5	1	3	5	3	1	10	18	17	15

注 ○数字は、十三仏の忌日仏と一致。  
 五輪塔は、板碑に五輪塔を線刻。  
 往生・成仏などは、往生・成仏・善根・菩提・現世安穩。

なく、まず追善供養の年忌としてのものを並べて、その後往生、成仏、善根、現世安穩をあげ、その後逆修、七分全得をあげてある。七分全得は、生前に自身の死後の供養を積み、その功徳の全てを

自身で受け得ることが出来るという信仰からきているので、逆修と同じ欄に集めてある。さて、集計の上で造立目的として最も多い事例は、往生、成仏などの十八基となる。それとほぼ同数の十七基が、逆修、七分全得となっている。しかし、五七日から三十三年忌に至る年忌供養のための造立は、総数として四十五基となり、石巻市多福院の中世板碑群の過半数を占めていることに留意しなければならない。

(表 2・5・5)

葛西氏系図

代	名前	法名	職名	大槻文彦による補注
1	清重	定蓮	葛西三郎 右兵衛尉 壱岐守	『吾妻鏡』治承四年条他
2	清親	清蓮	葛西壱岐守 左衛門尉 伯耆守	『同』安貞二年二月条他
3	清時	行蓮	葛西四郎左衛門 伯耆前司	『同』天福二年七月条他
4	清経	経蓮	葛西伯耆 三郎左衛門尉	『同』建長四年十一月条
5	清宗	明蓮	葛西伊豆守	『中尊寺正応元年文書』
6	清貞	円蓮	葛西武蔵守	『白河文書』延元三年条
7	良清	蓮阿	葛西備前守	
8	満良	蓮昇	葛西陸奥守	案ずるに満良 満清 二代 将軍 義満の一字を受けたるか
9	満清	良蓮	葛西備前守	
10	持重	法蓮	葛西播磨守	将軍義持の一字を受けたるか
11	信重	会蓮	葛西孫三郎	
12	満重	照蓮	葛西陸奥守	『余目記録』云
13	宗清	誠蓮	葛西武蔵守 実 伊達成宗公子 為婿養子	『伊達累系』永正十七年
14	晴重	祝蓮	葛西陸奥守	
15	晴胤	律蓮可梁	葛西三郎 左京大夫	『伊達累系』

吉田東伍『増補大日本地名辞書』P524による

多福院の板碑群に、虚空蔵菩薩の種字であるタラークが六基存在することは、石巻市文化財審議委員である佐藤雄一が「次に（注目すべき点は）室町時代にタラークが六基集中していることである。他の種字が各時代にわたってばらつきをみせているのに、タラークのみが室町時代に集中しているのは注意しなければならぬ現象であろう」（『石巻市文化財だより』第四号、多福院特集）と指摘されているように、注目に値するところである。

筆者は、従来より虚空蔵菩薩に関する民間信仰に関心をもってきたのであるが（拙著『虚空蔵信仰の研究』）、この多福院の虚空蔵菩薩の種字板碑は、その造立された時期や造立の目的などがはっきりしており、その数も六基とまとまっている点



など、虚空蔵信仰を考える上で見逃せない存在であると言えるのである。

ここで、わが国の虚空蔵信仰について概観しておく必要があるかと思われる。

虚空蔵菩薩は、古代仏教において「虚空蔵求聞持法」の本尊として信仰をあつめた。求聞持（ぐもんじ）法は、聞持すなわち記憶力を求めて行う修法で、多くの経典を暗記する必要のあつた僧侶をめざすものにとつて、この法は宗派によらず、まず第一に修すべき法であつた。

この求聞持の信仰は、現在の虚空蔵信仰にも生きており、京都の嵐山の法輪寺を中心に行われる「十三まいり」は、男女十三歳になつたものが虚空蔵菩薩に知恵をもらう行事として、たいそう盛んに行われていることから伺えるのである。

さて、虚空蔵菩薩はその名に示されるように、虚空すなわち天をつかさどる。そして、地をつかさどる地藏菩薩と対偶関係にあり、一對のものとしてまつられるのである。その例として、京都の太秦広隆寺講堂の虚空蔵菩薩、地藏菩薩が一對として造立され現存していることがよく知られている。

平安時代後半、末法の世が近づくに至り、無仏の時代の仏として地藏菩薩が注目をあつめるようになり、それを受けて、虚空蔵菩薩も浄土教の中に位置づけられ、記憶力という現世利益から往生極楽の臨終正念という来世的な信仰をもつようになる。それが体系として成熟した形が十三仏信仰であると、私は考えている。

十三仏とは、死後の追善供養の忌日仏に初七日に不動明王、以下二七日に釈迦如来、三七日に文殊菩薩、四七日に普賢菩薩、五七日に地藏菩薩、六七日に弥勒菩薩、七七日に薬師如来、百ヶ日に観音菩薩、一周忌に勢至菩薩、三回忌に阿弥陀如来、七回忌に阿銭如来、十三回忌に大日如来、そして最終三十三

回忌に虚空蔵菩薩をあてている。

文安元年（一四四四年）成立の『下学集』数量門第十六には次のようにある。

十三仏並び十王逆修日之次第

初七日	正月十六日	不動秦広王
二七日	二月二十九日	釈迦初江王
三七日	三月二十五日	文殊宗帝王
四七日	四月十四日	普賢五官王
五七日	五月二十四日	地藏閻魔王
六七日	六月五日	弥勒変成王
七々日	七月八日	薬師泰山王
百箇日	八月十八日	観音平等王
一周忌	九月二十三日	勢至都市王
第三年	十月十五日	阿弥陀転輪王
七年	十一月十五日	阿銭仏
十三年	同十一月二十八日	大日
三十三年	十二月十三日	虚空蔵菩薩

この史料は十三仏成立の時期を検討する目安となる。また、十三仏の文献的な初見は『弘法大師逆修日記事』（永享ころ成立、一四三〇年前後）とされるが、十三仏信仰の成立時期については、まだ明か

ない点が多いといわざるを得ないのである。

岩波書店から刊行された『仏教辞典』は「十三仏」の項を立てているが、それによると「死者の追善供養のために初七日から始まる七七日、百か日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌の十三仏事それぞれにわりあてられた仏・菩薩をいう。最初から順に不動、釈迦、文殊、普賢、地蔵、弥勒、薬師、観音、勢至、阿弥陀、阿銭、大日、虚空蔵である。中国の十王思想から発展してきたもので、いずれも冥王の本地仏とされる。地蔵十王経にはじめの十仏事のみが説かれるが、日本では中世以降にあとの三仏事が加わり、十三仏信仰が成立した。なお、中世以降の成立といっても、良季撰『普通唱導集』（一二九七—一三〇二年頃成立）に十王十仏だけをあげて七回忌以降に触れず、たまたま十三回忌を取り上げながら何のしるすところもないことから、当時は十三仏信仰が未成立または一般化していなかったと思われる」とある。

また同書の「年忌」の項目には、「中世になって三十三回忌まで行われることになったが、通常はこの年忌を弔い上げと称して、それ以後は仏事をしない。また南北朝期の前後から五十回忌・百回忌がはじめられたが、これらの法事を遠忌といって、それ以前の年忌と区別することがある。」「七回忌・十三回忌・三十三回忌に追善供養する風は、わが国の中世になってははじめられた（十三仏事）。ここに、日本の祖先崇拜の一つの特色が見られる」とされているのである。

十三仏信仰はあまねく各地に普遍し、現在の葬式仏教に大きな位置を占めているのである。

#### 四 タラーク（虚空蔵菩薩の種字）板碑について

さて、石巻市多福院のタラーク（虚空蔵菩薩の種字）板碑に目を向け、それぞれの板碑にみられる銘文の全文を示すことにする。

# 4 7 応永七年（一四〇〇）六月

「悲母幽儀三十三回忌景」

# 4 8 応永七年（一四〇〇）十一月八日

「籠峯寺前任恩礼和尚三十三週忌景」

# 5 3 応永八年（一四〇一）六月

「理道禅門三十三年忌景」

# 5 7 応永十年（一四〇三）十月

「高福前住励公相当三十三年」

# 5 9 応永十九年（一四〇三）十一月二日

「酬了周禅門三十三年忌」

# 6 9 永享五年（一四三三）二月

「大姉逆修作善資糧

此者三十三廻辰忌」

以上の六基であるが、一四〇〇年と一四〇三年にそれぞれ二基が造立されているのをはじめ、その造立年が一時期に集中していることは先に指摘した所である。それに加えて、そのすべてが三十三回忌を造立の目的としていることが特筆されるべき点であろう。

表(2・5・4)は、板碑に刻まれた主尊と造立目的の相関を示すことを目的に作成したものであり、○印は十三仏信仰の忌日仏と一致するものである。二年忌と十五年忌は十三仏信仰にはない忌日であるが、便宜上欄をならべておいた。

大日如来は、十三仏信仰では十三年忌の忌日仏とされるが、この多福院の板碑群では、十三回忌にあたるものは二基にとどまり、先に造立年が各時期にまたがるのと同様、造立目的も全般にわたっているとの印象を受ける。阿弥陀如来については、十三仏信仰では三年忌にあたるが、ここでは、その例は一基も存在しない。どちらかといえば特定の追善供養ではなく、往生や逆修などに用いられている。追善供養としては、五七日と三十三年忌に各一基あらわれている。

次に、地藏菩薩であるが、これは五七日にあてられる十三仏信仰と一致するものが三基ある。しかし地藏菩薩の板碑全体から見ると四分の一の比率にとどまるのである。

さて虚空蔵菩薩については、その六基の全てが十三仏信仰と一致する三十三回忌で占められている点で、いままでみた大日如来、阿弥陀如来、地藏菩薩と異なっており、大きな特色となっている。このように、十三仏信仰の忌日仏との一致が顕著なものは、次の勢至菩薩の一周忌、また数は少ないが阿銭如来があげられる。勢至菩薩と阿・如来については、その関係が相互に完全に十三仏信仰と一致しているのを見ることが出来る。

## 五 奥州葛西氏と多福院板碑群

多福院の中世板碑群の大きな特色と言えることに、板碑の銘文に登場する法名が、特定の歴史上の人物と比定されている点を数えることが出来る。

興国四年（一三四三）造立で大日如来を主尊とする板碑（#21）にあらわれる「蓮阿」が、奥州葛西氏の第七代当主である葛西良清と考えられているのである。

奥州葛西氏は源頼朝の奥州平定に功があったとして、この石巻周辺に領地を与えられ、その後中世を通じて権勢を振るい、やがて天正年間に至って戦国の抗争の中で滅亡したのである。南北朝期には、始めは南朝につきそのために多福院の板碑にも南朝の年号が散見されるのであろう。やがて北朝に組することになり、足利義満から一字をうけて葛西満良と名乗ったとされている。

角川書店刊の『日本史辞典』の「葛西清重」の項目によって奥州葛西氏について一瞥しておきたい。

「生没年不詳、鎌倉初期の御家人、兵衛尉・壱岐守。幕府創業の功臣の一人、下総葛西荘を本拠とする平氏の一族、通称三郎、一一八九（文治五年）年源頼朝の奥州征伐に従軍、のち奥州総奉行に補任された。頼朝死後も北条氏に信任され、侍所の重臣として活躍」とされ、さらに同書の「葛西氏」の項目には、「かつさいし」とも読む、下総葛西荘よりおこる。清重の時、源頼朝の奥州征伐に従い、陸奥に所領を得て大族となる。南北朝時代にははじめ南朝方、のち北朝方となり、戦国時代、伊達氏より継嗣晴胤を迎えた。晴胤の子晴信は一五九〇（天正十八）豊臣秀吉の小田原征伐に遅参し、陸奥葛西七郡を

没収され、秀吉の軍に抗戦して滅亡」とある。

さて、奥州葛西氏の第八代当主で足利義満から一字を受けたとされる満良は、その法名を「蓮昇」とする。

一四〇一年造立の勢至菩薩板碑（#50）が、この蓮昇の一周忌追善のものと目されるものである。さらに、永享四年（一四三二）の阿弥陀如来板碑（#68）が、同じく蓮昇の三十三年忌のものとされている。

これらの人名の比定は、奥州葛西氏に関する史料が乏しいことにも由縁して、あくまでも有力な仮説としか言いえないが、少なくとも多福院の中世板碑群が、この時代に板碑を造立する経済力ということと背景として考えることでも、奥州葛西氏一族との関係が十分に想定出来る場所である。

#### 六、足利將軍家の十三仏信仰

奥州葛西氏が、はじめは南朝方につき途中で北朝方に加わったことはすでに述べた。足利氏との関係を深めたことが、多福院の板碑群にも年号の変化として如実に表れている。そして、多福院にある虚空蔵菩薩の種字であるタラクの板碑が、すべて三十三回忌のものであることが、足利氏と葛西氏の結びつきを別な側面から示していると推察でき興味深いのである。

その点を考えるために、京都の貴族や僧侶が書き残した日記類の中から十三仏信仰に関する記事を探してみたい。その初見は『蔭涼軒日録』の中の記載であると考えられ、『蔭涼軒日録』は鹿苑院すなわち

相国寺の中の蔭涼軒主の日記で、足利將軍家の動向を多く教えてくれるものでもある。

その文明十八年（一四八六）七月十四日条には次のようである。「次に鹿苑院に御成り。遂（その足で）御所間に御成り。一番に開山の前に御焼香。靈供に箸を立て、浄水をすすぐ。次に本尊十三仏に御焼香。次に等持院殿の木牌に御焼香。箸を立て、水をすすがる。次に宝篋院殿。鹿苑院殿。勝鬘院殿。勝定院殿。普広院殿。勝智院殿。慶雲院殿。各々の木牌に同前。諸靈は北西に列す。北方の東を上首となす也」

（原漢文）

足利將軍第九代の義尚が、盆の供養に鹿苑院を訪れたとの記事である。

等持院殿は足利初代將軍尊氏の法名で、以下各將軍の法名が並んでいる。その位牌が部屋の北側に東から西にならんでいて、その東北角の一番上座に十三仏画像がまつられているのである。

このことは、十三仏に関する記事がこの年だけでなく前年の文明十七年（一四八五）から延徳四年（一四九二）まで毎年の七月十四日に見いだせることからわかることである。さらに翌十五日は、「前日と同前」ということで御所間に御成があり、ここでも十三仏、開山、先祖の位牌に供養をほどこしている。このことは、足利將軍家の盆行事の中に、十三仏信仰が重要な意味を持っていたことを意味するのである。

多福院に三十三回忌のタラク（虚空蔵菩薩の種字）板碑が出現する時期から見れば、文明年間というのは幾分か時代が下がることになるが、足利將軍家に十三仏信仰が展開していたことを知り得るのである。このように、足利氏と奥州葛西氏が共通して十三仏信仰を有する意義は大きいと言わねばならない。



七 十三仏信仰における最終三仏について

多福院の中世板碑群、中でも虚空蔵菩薩の種字であるタラークを主尊とするものに関心をもって検討してきたのであるが、ここで十三仏信仰の最終三仏について考えてみたい。

いままで述べてきたように、いわゆる十三仏信仰では最終三仏は阿銭如来、大日如来、虚空蔵菩薩であるが、その成立過程においては最終三仏を大日如来、大日如来、大日如来と重ねることを主としながらも、不定な時期を経て、やがて阿銭如来、大日如来、虚空蔵菩薩という三尊へと定型化していくとされているのである。

その事を説明するために、十三仏として報告されている石造品について、その初期段階のものを並べてみて最終の三仏をあげると次のようになる。

永和四年（一三八七）

— 大日如来—大日如来—大日如来

千葉県・羽黒十三仏堂

嘉慶二年（一三八八）

— 大日如来—大日如来—（破損）

埼玉県・金沢寺

応永六年（一三九九）

— 大日如来—大日如来—大日如来

東京都・清谷寺

応永十四年（一四〇七）

一 阿錢如来—大日如来—虚空蔵菩薩

山口県・徳地町

応永二十年（一四一三）

一 阿錢如来—大日如来—大日如来

兵庫県・塩谷

応永二十一年（一四一四）

一 阿錢如来—大日如来—虚空蔵菩薩

大分県・梅遊寺

文安二年（一四四五）

一 大日如来—大日如来—大日如来

埼玉県・塔峰

文安四年（一四四七）

一 阿錢如来—大日如来—虚空蔵菩薩

東京都・多摩町

享徳二年（一四五三）

一 大日如来—大日如来—虚空蔵菩薩

埼玉県・東松山

ここに示した例からも分かるように、石巻市の多福院板碑群のうちで三十三回忌をその造立目的として虚空蔵菩薩の種字であるタラークを主尊とする板碑の造立が集中する一四〇〇年からの数ヶ年というのは、未だ十三仏信仰の最終三仏が不定な時期にあたることになる。

まさにその時期に多福院の板碑群にあつては、三十三回忌という十三仏信仰の最終年忌とかかわって虚空蔵菩薩の種字であるタラークを主尊とする板碑が集中して造立されているのである。このことは、

十三仏信仰の最終三仏の形成過程が服部清道氏の『板碑概説』以来言われているように、大日如来を三度重ねるのを主としながらも最終三仏が不定な時期を経てやがて阿銭如来、大日如来、虚空蔵菩薩と定型化するとの従来の定説といえる考え方に、疑問をさしはさむ余地をもうけているように思える。

最終三仏に大日如来を重ねる事例は、十三仏信仰の前段階ではあるかも知れないし、また、その意味あいも十三仏信仰に反映されたことも十分に考えられるが、十三仏信仰そのものは当初から、虚空蔵菩薩を最終仏として形成されたとする視点もあわせて主張されなければならない。

以上、雑駁な考察ではあるが、少なくとも石巻市多福院の中世板碑群が、単に一地方の問題にとどまらず、十三仏信仰の定義にまで波及する大きな問題を呈示していることは言えそうである。

虚空蔵信仰という観点からの問題提起であるので、全般的な面からの説明に不十分な点が多いかと思われるが、十三仏信仰の成立期に、各種の主尊があらわれる中で、当初より虚空蔵菩薩を頂点とするものに特別重要な意味があったことを仮説として提示し得たのではないかと思う。もとより、この点について今後より綿密な考察が必要であることは云うまでもない。

### 第三章

### 漆器業における虚空蔵信仰の伝播と受容

## 第一節 漆器業の虚空蔵信仰

### 一 はじめに

我が国の伝統産業にあつて、長い歴史を誇り最も著名なるものの一つとして、漆器業をあげることができる。(黒川、一九七六、三一三～三九〇)

その漆器業には、虚空蔵菩薩に対する信仰がみられる。本稿では、この十数年にわたって各地の漆器産地をフィールドワークしてきた報告をもとにして、その歴史的背景と技術伝播に関する伝承との関係について若干の考察を加えることにしたい。

### 二、漆器産地の虚空蔵信仰

#### (1) 静岡漆器

静岡市の漆器業界や、また漆と関係の深い下駄職の業界の団体が、隣接する焼津市にある著名な虚空蔵寺院である弘徳院に参詣し、その記念写真などを扁額として奉納している。業界が隆盛だった戦前のことで、現在では参詣はとだえている。

静岡漆器の起源については、徳川家光が浅間神社を造営したことと結び付けられている。「静岡市の特産品として家具、鏡台、漆器などがあるが、これは浅間神社の造営と関係がある。寛永年間(一六二

四（四四）に家光が浅間神社の造営にあたって、社殿を金銀でちりばめ、髹漆をほどこしてかざるため各地から名工たちをあつめたが、これらの漆工の一部が工事終了後、静岡に永住して、土地の人びとに漆工技術を教えたもの。これが駿河漆器の発祥と伝えられるが、その後、駿河漆器は参勤交代の諸大名などによって全国にひろめられた。幕末の開港直後はとくに漆器が重要な輸出品となり、横浜には駿河商人による漆器の販売所がつけられた」（静岡県、一九七八、一四二）とされる。

吉田東伍の『地名辞書』には、

静岡は安倍山中より産する竹良質なるを以て、昔より単純なる竹細工ありしが、寛永正保（一六二四（四八））のころ賤機山に浅間社を造営するにあたり、髹漆を使用せしにより、一時江戸の髹工この地にとゞまり、竹細工の籠類に春慶塗を施す、其後漸々進歩し、青貝を漆器に嵌入するものいれたり、嘉永三年（一八五〇）、米国船の豆州下田に泊するにあたり、之に販売を試み、大に其賞翫を得て、漆器貿易の端緒を開き、横浜の貿易港となるや、幕府より若干の地を割与せられて、駿府町人拝領地と称し、漆器商店をいだしたり、爾後寄木塗の如きも静岡の特色として外人に賞翫せらる、明治四五年（一九一二）までは其産額一年七、八万円なりしに、今日其産額三〇万円の上にいづといふ。（『日本工業史』（吉田、一九七二、九七二）とある。

静岡漆器は開国という時代の流れに乗って、海外でも注目をされ、輸出に貢献したのである。しかし、大量生産による品質の低下もあって、輸出は戦後急速に衰えていく<sup>(1)</sup>。

しかし、これが地場産業へ残した功績は大きいものがあり、「浅間神社の造営時に始まるといわれる

漆器は、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会に出品入賞して以来輸出が伸展し、その技術を応用した下駄、鏡台、針箱、雛具、玩具などの生産も発展した。なかでも静岡下駄は全国にその名を高めた。これらは現在のサンダル、家具、雛具、プラモデルなどに引き継がれ、当市発展の一翼を担った」（角川、一九八二、一〇三四）とされている。

さて、焼津市の東方、静岡市との境界となる日本坂トンネルの手前に、浜当目という集落がある。文字どおり海岸に面し、海からすぐに小高い山となっている。弘徳院はその山の麓にあり、山上には奥の院がある。「虚空蔵山の山頂には、虚空蔵さん、の愛称で市民にしたしまれている香集寺がある。この寺は平安初期に弘法大師によって開基されたと伝えられており、例祭日にはダルマ市がたつて、県内各地からの多数の参詣者を集めている」（静岡県、一九七八、一五七）とあるが、かつて山上にあった香集寺は廃絶し、今では麓の弘徳院が虚空蔵菩薩を本尊として祀っている。この弘徳院は、ダルマ市が名高く、二月一三日の送りダルマ、三月一三日の迎えダルマは焼津周辺から大勢の参拝客で賑わうのである。

前掲『地名辞書』には、「駿河（静岡）志太郡当目（タウメ・タウベ）又遠目に作る、今石脇、方之上、野秋、花沢などと合せて、東益津村と改む、瀬戸川の河口北岸にして、岡当目、浜当目の二に分つ、古書にタウベとよみたり。当目山は海岸に屹峙し、山勢雄奇なり、虚空蔵菩薩を安置する堂宇あり。（略）一書に虚空蔵堂を以て郡閉の旧祠と云へり」（吉田、一九七二、九五六）とある。

焼津港はカツオの水揚げ漁港として有名であり、ビキニ環礁で被爆し亡くなった第五福竜丸の久保山愛吉氏は浜当目の出身であり、その墓は弘徳院の境内にある。

## (2) 黒江漆器

和歌山県海南市の黒江は、現在、有数の漆器産地を形成している。生産の効率化のために郊外に漆器団地を設け、近代的な設備を取り入れている。また、旧来の黒江の街には、低い二階をもつ古くからの家並みが多く残っている。

この黒江にある和歌山県漆器商工業協同組合の敷地内に、虚空蔵菩薩が祭祀されている。この虚空蔵菩薩は、「一般漆器の関係者の崇信の厚い佛様で漆器の佛様として従来は漆器事務所内に奉祠してゐたが昨年（昭和五年）一九三〇（）新たに木像を刻み東山保養庵に遷し祠る」（和歌山県、一九三一、一四一）とある。

東山保養庵は浄土宗鎮西派で、「當庵の地は、往古は石像地蔵尊を安置せるのみのささやかなものであつたのを、三〇年前、片山由平氏その所有の地を奉納してから、其地に二〇坪の堂宇を建立して永正寺の教会所となり、縣庁及本山の認可を得て成立した。昨年（昭和五年）一九三〇（）一〇月従前黒江漆器事務所に安置してゐました虚空蔵尊を遷奉した。此の庵は常に尼僧を以て事務を司つてゐる。毎年地蔵尊虚空蔵尊の会式が行はれる」（和歌山県、一九三一、一三八〜一三九）とされる。

もと漆器事務所に祀つてあつた虚空蔵菩薩を、新たに木像に刻んで東山保養庵に遷じ、さらに昭和三年（一九五六）小祠を建てて漆器組合の敷地内に戻し現在に至っている。

その祭祀は「刻苧祭として黒江の漆器業者に於て、毎年一月一日一般其業を休みて祝意を表するの慣例がある。蓋し鍛冶職の鞆祭の類であろう」（海南市、一九四二、一七六）とある。

また、こくそ祭りについては、



「黒江の漆器業者の間では、昔から陰暦十一月一三日に『こくそ祭』を営んで来た。漆器業者と云つても、それは主として板物、即ち膳や重箱の製造に従事する者の仲間に限られてゐたのであるが、此の日、俗に漆器の祖と傳へられる虚空蔵菩薩を祭り、職工、徒弟、木地製造者、親戚関係を招いて馳走を拵へ、和氣霽々の中に一日を過すのである。

此の『こくそ祭』は何時頃より行はれるやうになつたか解らないが、大阪の漆器業者の間でも古くから行つてゐたといふから、或は文政年中（一八一八〜三〇）、小川屋長兵衛が大阪から堅地、板物、膳盆等の製造の秘を採り、大阪の職人を傭入れた折、それが傳へられたのではないかと想像せられる。陰暦十一月一三日は虚空蔵のお祭日であるが、『こくそ祭』が果して、最初から虚空蔵菩薩の祭であつたか否かといふことにも疑ふべき余地がある。漆器業者の間で『こくそ』と云へば『刻苧』『粉糞』などゝ書き、椽の木を削つて粉にはたいて密な篩でふるひ、漆と糊とを合せ、それに布粉を混ぜたもので、膳の瑕や割目などを塞ぐに用ひられる料で、この『こくそ』が虚空蔵に附会せられたものである。夫れは兎も角、今は太陽暦の十二月一五日を以て漆器組合事務所及び東山の庵で香花を供へて虚空蔵菩薩を祭り、親方は酒肴を職人に振舞つて、この日を楽しく遊ぶことになつてゐる」（海南市、一九四二、一六九〜一七〇）

ともされている。

### （3）長浜仏壇

滋賀県の長浜市では、漆に關係の深い仏壇製造に係わる人たちが、同市内にある知善院の虚空蔵堂に

集まり祭祀を行っている。また、一同が揃って京都嵐山の法輪寺に参詣する習わしもある（中村、一九九三、一七〇〜二〇）。

長浜は秀吉ゆかりの城下町として、また湖北の交通の要衝として発展した所で、曳山祭りでも知られた長浜八幡宮や長浜御坊の大通寺などの由緒ある寺社の多い所でもある。

宝生山知善院も、秀吉公の木像がまつられており、長浜六瓢箪めぐりの一寺院として訪れる人が多い。この知善院の境内に虚空蔵堂があり、法輪寺の御分身である虚空蔵菩薩のお軸を祀っている。小堂ではあるが最近改築され、厚く信仰されていることがうかがえる。

この虚空蔵堂は知善院そのものが営むのではなく、地元の仏壇製造、いわゆる「浜仏壇」の関係者で組織された浜仏壇工芸会が奉賛している<sup>(2)</sup>。

浜仏壇工芸会には、仏壇製造にかかわる木地師・塗師などの職人と販売業者が参加しており、製造工程の従事者数は四〇人、年生産額は九八億円とされている。その職能からみた構成は木地、塗師、宮殿、飾り金具、蒔絵、金箔、彫刻師で、仏壇は七人の職人がよらないと完成しないという<sup>(3)</sup>。

浜仏壇は昭和五九年二月に、滋賀県の伝統工芸品としての指定を受けている。

さて、知善院の虚空蔵菩薩と浜仏壇との関係については、現在、浜仏壇工芸会の代表をつとめる宮川勝廣氏の祖父である政太郎氏が世話役を務めていた頃に、二、三人の講員で京都の法輪寺に詣っていた。やがて、法輪寺からお軸の御本尊をいただいて来て、知善院の境内地を借りて虚空蔵堂を建立したという。その時期は、およそ明治の中頃のことと思われる。

今でも毎年五月の一〇日頃までに、法輪寺に工芸会の職人一四名がそろって欠かさずに参詣を行って

いる。

虚空蔵堂の祭りは、春三月一五日、秋十一月一五日におこなわれ、知善院の住職により物故者の供養を行うことを主として催され、その後皆で会食をする。また、知善院の千日講の行事がある八月の九日、一〇日も虚空蔵堂の祭りとしている。

浜仏檀の歴史には、明らかでないことも多く、『坂田郡志』には、

「長浜仏檀、長浜町藤岡和泉の家代々仏檀を製作し、長浜仏檀の一新機軸を出す。子孫今に其の業を襲ふ」（滋賀県、一九七一、六一三）

とされるが、現在の浜仏檀との関係を聞き取ることは出来ない。

また、現在では長浜市に編入されている常喜村についての記述で、

「常喜仏檀、近江国筒井職頭之事、西黒田村大字常喜に於ては古来仏檀の製作盛にして、常喜椀と共に地方の名産なり。其の由来詳ならざれども、古へより近江国筒井職として、諸役を免除せられし事、元龜三年の執達に見ゆ。其の全盛時代には三十余戸の多き製作家ありて盛なる物産なりしも、今は当時全盛の面影絶えてなし、元龜の執達に、

諸国轆轤師、杓子師、塗物師、引物師等、其職相勤之族、末代無相違可進退旨定訖、故以 代代為器質基本。兼亦諸役可免許、全公役可相勤之由、依天氣執達如件。

元龜三年（一五七二）十一月十一日 左大弁兼成（花押）

小野宮社務」

（滋賀県、一九七一、六一二～六一三）

とあり、いわゆる木地屋文書と関係づけられており、この地が木工技術と古くから関わってきたことが推察される<sup>(4)</sup>。

#### (4) 山中漆器

石川県江沼郡山中町は、北陸の名湯である山中温泉でとみに名高いが、また古くからの漆器産地でもある。

塗師屋祭りについて、「十一月一日、東山にある虚空蔵菩薩を祭り、業を休み、『牡丹餅』を作ってお祝いをする」(山中、一九七四、二〇五)とある<sup>(5)</sup>。

また、漆器組合の変遷について、

「温泉組合に、その前身として薬師信仰を中心とする十三日講や八日講があったように、漆器組合にもその前身らしいものはあった。まず、惟喬親王の随臣の子孫と称する木地屋仲間が、綸旨の威力をたのみ、特権維持のため結束していたのは、古代中世風の流儀であったが、藩政期以後になると山中の木地屋たちは木地屋講と称する講を結び、一二月九日には山祭を行っていた。また塗師屋では漆技の守護仏として、虚空蔵菩薩を中心とする塗師屋講を結び、いずれも月々定日に寄合っていたようである」(若林、一九五九、四一〇)

とされる。

#### (5) 金沢漆器

石川県の県庁所在都市である金沢市にも漆器業がみられ、昭和七年（一九三二）に刊行された『昔の金沢』には、

「十一月、コクソ祭・稲荷祭、一日にはコクソ祭（虚空蔵菩薩か）と称へ塗師屋では輔祭同様に置酒祭祀を行ひ、晦日は稲荷祭で赤飯を炊き氷見鯖の焼物、油揚、蕪汁を調へて神に献供するが現時は殆ど廃然した」（氏家、一九三二）とある。

#### （6） 輪島漆器

同じく石川県の輪島市は、高級漆器として重宝されている輪島塗を産出し、また日展などに入選する秀作を多く出すことで知られている<sup>(6)</sup>。

輪島市の漆器会館には、輪島漆器商工業協同組合所蔵の虚空蔵菩薩像が祭祀されており、その厨子の銘には次のようにある。

「漆器守護神虚空蔵菩薩能登国輪島町ニ往古ヨリ安置アリシモ明治四十三年同町大火ノ際ニ焼失セシヲ以テ當寺本尊ノ御分身壺体ヲ同町漆器商組合ニ懇請ニ依リ寄贈スル者也

明治四十四年六月吉日

京都嵯峨嵐山法輪寺住職 少僧正 服部賢成

京都市堀川佛光寺北入 大佛師 田中豊治 拜刻」

輪島では、明治四三年（一九一〇）四月一六日に大火があり、大きな損害を被った。この際、漆器業者

が信仰していた重蔵宮の虚空蔵菩薩の小祠も消失したため、輪島の町と漆器業の復興を祈念する意味から、本町の小西庄五郎と大工次太郎が世話人となり、五〇円ずつ、合わせて二、一〇〇円の寄付を集めた。そして京都の法輪寺から、本尊である虚空蔵菩薩の分身をわけて貰ったのである。この時、法輪寺から、虚空蔵菩薩の掛け軸を三軸受け、その一軸は漆器組合に、他の二軸はそれぞれ世話人が譲り受けたという。組合の分は漆器会館に現存し、他の二軸の内一軸も現存しているという<sup>(7)</sup>。

輪島漆器に関しては、一九七七年に、輪島塗技術保存会が国の重要無形文化財、「輪島塗用具および製品」三、八〇四点が国の重要有形民俗文化財にそれぞれ指定されている。

そして、輪島塗の特色について『能登志徴』は<sup>(8)</sup>、

「輪島漆器、輪島の産物なる朱椀は、輪島沖塗朱椀とて其名高く、魚津椀などゝ違ひて、木地堅く朱の色宜くして上品なり。寶曆一四年（一七六四）調書にも、名物の類。輪島村塗物。と載たり」とあり、続けて

「北国巡杖記に、能州鳳至郡輪島といふ処あり。北陸の船着にて数戸建並び、旅客米魚の売買日夜をいはず、栄民甚しき処也。此処の産物家毎に素麵を製す。又家具弁當ぬりものをいとなむに、夏日大船に木地をしとど積いれ、職人等かの船に数日の糧を貯へ、遙の沖中に碇をおろし、数多塗物を掬らふなり。大海蒼波のうへに、一塵あらねばほんのりと出来あがり、心のまゝに不凡事名器をなせり。これを沖塗といへり。されば盒子盃の類ひ、投ぐるにきづかひなく堅固なり。しかも一日に数百壺の漆を費すとなり。いにしへより今に絶ず、諸国へも聞えて名高きうつはものなり。『沖ぬりや渠等が喰ふ沖なます』北巫」（輪島市、一九七三、六〇〜六一）

とされている。

### 三 法輪寺と工職人の虚空蔵信仰

#### (1) 法輪寺の虚空蔵菩薩

京都の嵐山を代表する風景に、大堰川に架かる渡月橋を思い浮かべる人も多いであろう。この渡月橋は、かつては法輪寺橋と呼ばれ洛中から法輪寺に参詣するために設けられていたのである。

長浜の浜仏檀工芸会は毎年、法輪寺に参詣するという。そして、輪島では明治四三年に起こった大火で消失した虚空蔵菩薩に代わる仏像を、京都の法輪寺からその分身を授かって祭祀することとした。

漆器業と深く関わる法輪寺では、現在、漆器祭りが行われている。その法輪寺の沿革と本尊である虚空蔵菩薩の利益について、見てみることにしたい(中村、一九八七)。

法輪寺は、秦氏の出身であり空海の高弟である道昌僧正の建立で、日本三体随一の虚空蔵菩薩の霊場として名高い。

『法輪寺縁起』(応永二一年>一四一四<成立)によると、道昌は空海の弟子で、この地で虚空蔵求聞持法を修したところ、百日目の満願の日に、明星天子が飛び来たって道昌の衣の袖に虚空蔵菩薩の姿となつて現われた。その像は縫ったもののごとく、鑿で彫ったもののごとく数日を経ても消えなかった。喜んだ道昌は、衣の袖の姿のままに仏像を造り、その胎内に衣を納め、神護寺において空海から供養を受けた。その虚空蔵菩薩の尊像が、法輪寺の本尊として崇敬されているのである。

この法輪寺の、本尊虚空蔵菩薩は秘仏であるために、間近に拝することは出来ないが、法輪寺様式と呼べる独特の像容であることが知られている。それは一五世紀末に成立した『白宝口抄』に「法輪の虚空蔵は、左に如意宝を持ち、右に宝剣を執る也」とあるように、左上手にじかに如意宝珠を置き、右手には宝剣を持ち、両脇に明星天子と雨宝童子を従えた姿である。

現在、法輪寺は京都十三仏霊場の第十三番虚空蔵菩薩の札所であり、又、丑寅歳生まれの一代守護としても知られている。本堂の前に、牛と虎の石像が神社の狛犬の様に、一対に置かれている。

平安後期に成立した『今昔物語集』巻一七第三三話に、「比叡山の僧が虚空蔵の助けに依りて智を得た話」が紹介されている。志しはあれども、遊びたわぶれて学問することのなかった若い僧に、虚空蔵菩薩は女の身に変じて学問を勧め、若い僧はそのおかげでやがて山内第一の学僧になったという物語である。

このように、虚空蔵菩薩の利益に注目が集まり、僧侶ばかりでなく平安時代の貴族も、虚空蔵菩薩に厚く信仰を寄せるようになる。

中御門右大臣の藤原宗忠は、彼の日記である『中右記』に「今日晩頭に法輪寺に参詣す。往日、少年の昔、度々この堂舎に参詣し、才学のことを祈り申した」（承徳二年>一〇九八<五月一九日条）と書き記している。

現在の法輪寺を代表するのは「十三参り」の信仰である<sup>(9)</sup>。一三歳になった男女が虚空蔵菩薩に福と智慧を祈るもので、もとは境内で一三種の菓子売り、参詣人はこれを買って虚空蔵菩薩にそなえ、後これを持ち帰って家中のものに食べさせたという。また渡月橋を渡りおわるまでに振り返ると、授かつ



た智恵を返してしまおうといって振り返らない風は今でも守られている。現在は四月一三日が大祭であるが、従来は旧暦の三月一三日であった。(中村、一九八六、三五六〜三六一)

そして「十三参り」は、今では、各地の虚空蔵寺院で行われ、さらに子供の成長を祈る年祝いの行事として、広く一般化している。

## (2) 法輪寺の漆器祭り

法輪寺では、以前より一月一三日に漆器祭りが年中行事として行われている。午前一一時に、まずご住職が本尊虚空蔵菩薩と漆の結びつきを説き、漆祖とされる虚空蔵菩薩への報恩と業界の更なる発展を願う祈願文を読み上げ、続いて伴僧ともども虚空蔵関係の經典が読経され、参列者が焼香する。

この漆器祭りは、関係の業界からの参加はもちろん、一般にも多くの参詣があり、法会のあと、本堂内で狂言が奉納されるのが習わしとなっている<sup>(11)</sup>。

この漆器祭りに参列した漆関係の業者は、その後、会食の席を設け親睦を深める場ともなっているのである<sup>(12)</sup>。この漆器祭りも、一月一三日が「漆の日」となり、境内に幟が幾本もあげられ、益々盛大に執り行われるようになってきている。

さて、法輪寺の虚空蔵菩薩と漆器の結びつきを、昭和一二年(一九三七)に刊行された『虚空蔵法輪寺要誌』では、

「漆器製法の守護、文徳天皇第一皇子惟喬親王は我邦に於ける漆器製法の未だ完全ならざるを慨歎し給ひ、當山に参籠し本尊に祈誓し、夢に高僧より傳授して漆下地、磨出法、継漆法等を完成し給ふ。

爾來漆器製法の守護尊として漆器商家並其製造人は、毎月一三日報恩講を設けて本尊を供養し崇信すること現今各地に盛大なり。俗に継漆をコクソと称するは虚空蔵漆の転訛せしなりと云ふ、亦以て漆器製法の守護尊たるを知るべし」としてゐる。

この『法輪寺要誌』が、本尊虚空蔵菩薩の「靈験」として、

- 其一 漆器製法の守護
- 其二 工芸技術の守護
- 其三 十三詣りの旨趣
- 其四 利家卿と桂昌院
- 其他 古今道俗の靈験

というように、靈験の第一に「漆器製法の守護」をあげていることは、注目されることである。

このような漆器業と法輪寺の結びつきは、いつまで遡れるかについては、これ以前の史料を見いだせないでいる。長浜での伝承や輪島の虚空蔵菩薩像の銘文などからすれば、明治期にまで遡ることは間違いないであろう。

### (3) 工職人の虚空蔵信仰

さて、近世の法輪寺を支えていたのは、京都の町衆であったらしい。

十三参り信仰も、それが俗に衣装比べといわれ、女子はこの日から四つ身の着物から本身の着物を着

る時とされており、参詣には形ばかり肩を摘んだ振袖を着て来て、家に戻ると肩上げを取ることが行われている。このことから伺えるように、その信仰の成立には絹織物技術者を中心とした、都の工職人の虚空蔵信仰が関与していたと考えられる(一三)。(中村、一九八七、二一四～四一)

法輪寺と、工職人の結びつきを示す近世の史料の幾つかを、検討してみたい。

近世に流行した名物評判記の一つで、京都の有名な寺院の開帳を、歌舞伎役者に擬人化し番付にした『開帳花くらべ』(安永二年>一七七三<刊)には、

「上上吉、嵐山国蔵、さて、此御人程、めきめきと出世をなされた御人は御座りませぬ。まして職人方のひいきつよく、殊に近頃は十三の年には、ぜひに此人を見に行ねばなりぬようになったは、きつい御仕合。それに此度も幟の数取此人にとどめをさし満した」とある。

上上吉と上位にランクされた嵐山国蔵(虚空蔵を擬人化)こと法輪寺が、「職人方のひいきつよく」その信仰を集めていることがわかる。またこの記事は、「十三参り」の初見ともされる史料としても注目されるのである(一四)。(中野、一九八五、二二三～二二七)

さて、次に『都名所図会』(天明六年>一七八六<刊)をあげてみると、「法輪寺参籠堂、都の工職人この所に籠り、一七日断食し、滝に垢離し、本尊に智福を祈る。近年断食の輩つねに絶え間あらず」とされる。

また、日光東照宮の眠り猫で知られた左甚五郎が、法輪寺の虚空蔵菩薩に願を掛けて日本第一の彫物師となったという話が、すでに江戸時代に法輪寺の伝承となっていた。

このように、法輪寺は西陣の絹織物関係の技術者だけでなく、広く都の工職人がその技術の向上を祈願して参籠し、本尊である虚空蔵菩薩の利益を求めていたのである。左甚五郎の伝承が生まれるように、工職人には木工技術者の姿もあったであろうし、また漆器とも無縁とは考え得ないのである。

現在の法輪寺をみても、漆器守護として各地の漆器業関係者が信仰を寄せるだけでなく、一二月八日の針供養の行事を通して和裁関係者が参詣するなど、技芸との結び付きが強い。そして、境内にある電々宮は電気・電波関係の有力企業が護持しているのである（『日本経済新聞』昭和六年（一九八六）四月一日朝刊「春秋」欄）。伝統産業から最先端のエレクトロニクスまで、実に幅広い分野の技術とのつながりを、法輪寺は、本尊である虚空蔵菩薩の利益として関わりをもつのである。

#### 四、根来塗伝承と根来寺

##### （１）輪島重蔵宮と能登石動山

ここでもう一度、輪島漆器の系譜について考えてみたい。明治四三年（一九一〇）の大火からの復興を祈願して、法輪寺虚空蔵菩薩のご分身を祭祀することになった経緯は先に述べた。

この像の銘文にもあったように、輪島では、大火以前から虚空蔵菩薩を信仰したとされ、伝承として、重蔵宮に虚空蔵の小祠があったとされている<sup>（15）</sup>。

重蔵宮は、輪島市に鎮座する重蔵神社のことで、これは輪島を代表する神社である。

『能登志徴』には、

「輪島重蔵宮社蔵、文明八年（一四七六）九月七尾畠山家へ出たる河井寺社申状に、抑奉重蔵権現申候者。云々。彼神開闢始。鷗□草葺不合尊御子。自神武天皇以来。仁王十代宗廟。崇神天皇御代新造候。次被寄田地候事。垂仁天皇御代御寄進候由承及候。既彼御神者。為一宮氣多分身。鳳至一郡惣社に而御座候也。」

次致修理同舎之事。一、三間四面重蔵宮本社御殿。並八社王子。同四十間拝殿。同二十間之講堂。並樂屋。薬師堂。並二王堂。（鎮守拝殿。）馬場。薬師堂。弥勒堂。同諏訪宮。鐘楼堂。鳥居。以上堂宮棟数二十二。（此外坊三。此内鳥居破滅。是は十穀ことに勸進に與下也。）とあり、神仏混淆であることは知れるが、虚空蔵堂についてはふれていない。

さて、重蔵宮はそれらの仏堂とは別に、神宮寺が存在していたことが考えられる。同じく『能登志徴』に「河井寺廢寺跡 河井町」として、

「重蔵宮所蔵、文明八年（一四七六）七尾畠山家への申状に、謹言上候。河井寺社申状。抑奉重蔵権現申候者云々と記し、次社役之事とて、年中の恒例の神事を載せたる中に、正月朔日御祝御供備之。河井寺社役。（略）書尾の連署に、神林寺院主性慶・観音寺別當性珍・榮宗寺性鑠・神主信榮、各判。とあり。（略）是皆重蔵宮の社僧にて、惣号をば河井寺といひたるなるべし。能登誌に、昔は七堂伽藍の地にて、其比は数坊ありて、今近郷宅田村・杉平村等に多く地名と成て残れり。天正（一五七三）九二の比まで神林寺・西園寺・佛□寺・観音寺杯とて尚多かりしが、利家卿此辺を通り給ひし時、石動山門派にて無禮の事ありし故に、焼払ひ寺院悉く破却せられ、今寺の廢跡地名に残れりといへり。按ずるに、破却し給ふ事いまた古書に見えざりしかど、天正九年（一五八一）比の事なるべし」

とある。

重蔵宮の神宮寺である河井寺は、天正九年（一五八一）に前田利家によって取り壊されたとされている。その原因となったのが、石動山衆徒の非礼にあるということは、河井寺が、中世において勢力を誇った石動山天平寺の配下にあり、石動山の勢力を押さえ込む為の策謀の一つとして、前田家がこの河井寺に圧力をかけたことが推察される。

石動山は、能登半島の中央に位置し、往時は三百六十坊を有したとされるが、現在では伊須流岐比古神社として存在し、天平寺は廃絶して国の史跡として整備がおこなわれている。

石動山天平寺は、中世末から近世初頭にかけて成立した「古縁起」「新縁起」が今に伝わっている。そして、本尊を虚空蔵菩薩とすることは、すでに鎌倉時代中期の『拾芥抄、諸寺部第九』に、

「石動寺（ユスルキ イシユルキ）在能登国、虚空蔵、智徳上人、光仁第四草創」とある時期にまで、さかのぼることが出来るのである。（桜井、一九七三、三九〇四三 鹿島町、一九八六、四〇〇四七・四九〇五四）

能登石動山は、中世の虚空蔵信仰のひとつの拠点であったと考えることが出来よう。

輪島の重蔵神社に大火以前、虚空蔵の小祠があったとする伝承は、重蔵神社と石動山の関係からして十分に想像できるものである。

（２）根来塗伝承―輪島・黒江・薩摩―

さて、輪島塗の起源について、次のような伝承がある。「応永年間（一三九四―一四二八）土人福蔵

ナル者アリテ、紀州根来ヨリ伝習シ来リ、尔后追々盛業ニ至ルト云フ」（輪島市、一九七三、三九四）すなわち、輪島の漆器製造には、紀州の根来からの技術者の移住があり、技術の伝播があったと主張しているのである。

紀州の根来とは、根来寺を指すと考えられ、根来寺は、根来塗と称される独特の漆器で名高いのである（一六）。（松田権、一九六四、一三〇～一三五）

根来寺は、根来衆とよばれる武装集団をもち、いち早く鉄砲を戦術に取り入れるなど（一七）、中世には大きな勢力を有していた（一八）。秀吉によって攻撃され、学僧は京都や奈良に移り、根来の地には、戦火を免れた堂塔がわずかに残されたにすぎない。最近、発掘調査が進展し往時の様子が明らかにされている（一九）。（松田毅、一九七七、一五三～一六八）

根来から漆器技術の伝播については、輪島だけでなく黒江でも、その沿革を「黒江漆器の起因は根来塗の傳來せしものにて、天正一三年（一五八五）根来寺の廃亡と共に其の漆は僧徒と共に諸方に離散し」（海南市、一九四二、一四九）としている。

また、遠く薩摩に転じて薩摩塗に影響を与えたともいう点を、次に考えてみたいと思う（二〇）。

柳田國男の『史料としての伝説』に、

『三暁菴隨筆』の上巻には、大隅根占の漆器製造が、本来紀州根来に学んだものであることを説くついでに、またこんなことを記している。かつて肥後の八代の放生会の時にかの地に行き掛り、宿の亭主が料理を出したが、その器は根来手筋の黒椀であったから、珍しいと思つて出て来た亭主に問うと、これは八代から二三里の奥に一村あつてこの椀を作るが、元は根来山から出た者で、今にその子

孫が続けて作っていると言う話であった云々。こうして近世に漆器原料の新たなる需要が起こつたするならば、五箇山中の木地製造も、同じ郡だけにこれと関係があつたかも知れぬ」(柳田、一九八九、三〇五)

とある。

柳田のひいた『三暎庵随筆』には(21)、

「一、根来椀之事 御国へ根来椀と申候て有之候は、根来山破却以後根来之者共田代根占へ参居候田代よりは能米出候に付居住候て椀を作り候由根来之正真は朱椀を紙にて拭ひ候へば紙に朱付候由右之段於京都に咄聞候由に候先年上京の節肥後八代放生会之内行掛り宿亭主より料理を出候に根来手筋の黒椀にて候故珍敷見置後に酒など出し亭主も出候に付先きの椀を尋候へば八代より二三里奥へ一村有之右椀を作り候本は根来山之者参居候て椀を作り候其子孫にて椀を作り候由咄いたし候、左候へば方々国々へ参り居たると見候由」(三暎庵、一九〇八、九)

とあるが、薩摩漆器は早く衰退し現在に伝わらないのが残念である。

### (3) 薩摩坊津一乘院

さて薩摩半島の西海岸にある坊津は、古代より遣唐使船の出発地として歴史に登場し、とりわけ唐招提寺の鑑真和尚が苦難の末、天平勝宝六年(七五四)年に、坊津の秋目に至ったことはよく知られている。

室町時代以来、島津氏の中国貿易・琉球貿易の根拠地となった。特に一五世紀以後、遣明船の発航地



なつて繁栄。筑前博多津・伊勢安濃津とともに日本三津の一に数えられた<sup>(22)</sup>。江戸時代には外国貿易港としての地位を長崎に奪われて衰退し、わずかに漁港としてその生命を保ち今日に及んでいる。

吉田東伍の『地名辞書』の坊津の項には、坊津の地名の起源について、

「地理纂考云、坊津の名は此地の龍巖寺一乗院の僧坊より起る、海東諸国記には、房津に作り、そもそも此津の皇国西南の極、洋海の辺陲にして、絶域に対望す、因て昔時支那西洋の通商互市する者、此の津に輻輳せしを、慶長年中、長崎を以て諸夷来朝の湊と定められしより、繁華地を払ふ、龍巖寺一乗院は真言宗の淨刹にして、前は海に向い後ろは山を帯び、登臨奇絶なり」とあり、この地が、一乗院という真言宗の寺院を中心として栄えたことを述べている。

『坊津町郷土誌』には、「坊津の歴史は、まず一乗院に始まり、そして一乗院の歴史とともに終始する。一乗院あつての坊津である」とし、坊津と一乗院との関係がいかに大きいかを思わせる。(坊津町、一九六九、三〇)

江戸時代の地誌である『三国名勝図会』には、坊泊(薩摩国河辺郡)の仏寺の項に、

「西海金剛峯、如意珠山、龍巖寺、一乗院(地頭館より子の方、二町余)坊津村にあり、京師御室仁和寺の末にして真言宗なり、本尊虚空蔵菩薩(座像、定朝作、脇侍金剛力士同作)開山百済国日羅、中興開山成圓法師、當寺の由来記等を按ずるに、敏達天皇十二年、百済国の日羅、来て名山靈嶺くつを遍歴し、此地に坊舎仏閣を营造し、上の坊・中の坊・下の坊といふ、てづから阿弥陀像三軀を刻みて、三坊に安置し、龍巖寺を号す、尋て敏達天皇推古天皇の御願寺となる、爾来盛衰一ならず、長承三年(一一三四)、癸丑、十一月三日、鳥羽上皇院宣を下し、當院を以て紀州根来寺の別院とし、西海の本寺と

す、又上皇の御願寺として、如意珠山一乗院の勅号を賜ふ」

とあるように、坊津一乗院は紀州根来寺の西海の本寺とされるのである（23）。

藩政時代においても、一乗院は藩内着座門主祈願寺八ヶ寺の一つとして、真言宗広沢流百二十カ寺の末寺を支配する、新義真言宗の大本山であった。一乗院は、鹿児島の大乗院および大興院とともに、真言宗の三大寺院と称せられた。

このように、海外貿易の富を背景に栄えた一乗院も、坊津の貿易港としての地位が長崎に奪われ、また薩摩藩内の全ての寺院が一時的にしろ廃された、明治初年の廃仏毀釈の嵐の中で崩壊し姿を消して仕舞った（24）。

廃仏毀釈により完全に宗教活動を停止した一乗院の境内跡は、現在、坊津小学校の敷地となっている。その裏山には、歴代住職の壮大な墓地群があり、校門横に残されている石造の仁王像と共に、わずかにかつての繁栄の跡をとどめている。（坊津町、一九七二、九〇二二）

坊津町内のアカンコ坂は、かつてのメインストリートであり、そこに残るタラーク（虚空蔵菩薩の梵字）を刻した供養塔は、大永六年（一五二六）一月三日の銘があり、建立の趣旨は伝えられていないが、海外交易の全盛時代に、この地に虚空蔵信仰が確実に展開していた事を雄弁に物語っている。この供養塔の存在は、史料の少ない中世の後半の坊津を探る、貴重な証左である。

タラークが、虚空蔵菩薩の梵字であることから伺えるように、坊津一乗院は中世に遡って本尊を虚空蔵菩薩としていたのである。そして、『三国名勝図会』には「旧記には、往古は本山紀州根来寺傳法院・西海龍巖寺一乗院・関東本寺摩尼珠山明星院（一に遍照院に作る）真言新義の学徒を総督し、諸寺

に紀綱たること、鼎足の如しといへ」とあり、紀州根来寺の影響が濃いことが伺われる。また、坊津一乗院の由来によると、天正一三年（一五八五）紀州根来寺が豊臣秀吉によって焼き亡ぼされた時、根来寺の覚因法師らが根来寺の宝物を抱いて当院を頼って逃れ来たと言われている。

ともかくも、薩摩塗に関与したとされる根来寺の漆器技術者が、坊津一乗院を頼って身を転じたことも考えてみる必要がある。

#### （4）覚鑿と紀州根来寺

根来寺は、覚鑿上人が新義真言宗の本山として開いたもので、天正一三年（一五八五）豊臣秀吉に依って焼討ちさ

れて焼亡した。その学僧は京都の智積院と奈良の長谷寺に身を寄せ、智積院は新義真言宗智山派本山、長谷寺は同豊山派本山として、新しく出発したのである。

その後、根来寺は智山派・豊山派からは独立した単立寺院として、慶長年間（一五九六～一六一五）に浅野氏によって再興された。大師堂、多宝塔は戦火をまぬがれ、多宝塔は永正一二年（一五一五）再建のもので、現存中最大の多宝塔として貴重なものである。（根来寺、一九八七、四四八～四五〇）

さて、紀州の本寺である根来寺の本尊といえは大日如来であり、高野山を追われて根来の地に移り、ここに新義真言宗を開き興教大師覚鑿は不動尊信仰者であったと考えられる。そしてまた覚鑿は、空海の重んじた虚空蔵菩薩をも特に大切にしたいと考えたのである。

そのことは、破却以前の堂塔の構成にも示されているように思える。「往古堂塔大概」（『紀伊国名

所図会』文化九年>一八一二<)をまとめてみると、以下のようになる(25)。

(一)大伝法院

大塔(本尊 大日如来)

大師堂 不動堂 経蔵 阿弥陀堂 鐘楼 中門 穀屋 湯屋

(二)密厳院

鍾鑽不動堂(本尊 不動明王)

楼門 求聞持堂 多宝塔 経蔵 地藏堂 春日社 拝殿 鐘楼 穀屋 毘沙門堂 天満天神

(三)円明寺

御影堂(中尊 覚鑿御影)

三部権現 伊太曾社 御蔵 鐘楼 楼門

(四)豊福寺

豊福寺(本尊 虚空蔵菩薩)

薬師堂 千手堂 鐘楼 中門 地藏堂 開山堂 久社大明神社 拝殿 宝塔 荒神社

(五)小谷(堂舎は略す、以下同じ)

(六)菩提谷

(七)大谷

(八)蓮華谷《虚空蔵堂》

(九)西谷

(一〇) 菖蒲谷

(一一) 三岡 《求聞持堂》

(一二) 前山

このように、中世根来寺は、大伝法院、密厳院、円明寺、豊福寺を中心にして広大な範囲に堂塔が展開しており、大日如来、不動明王、覚鑿御影、虚空蔵菩薩が信仰の中核として礼拝されていたと推察できる。

さて、虚空蔵菩薩を本尊とする豊福寺については、『紀伊国名所図会』（卷之六之下）に次のような伝承がある。

「一乗山根来寺大伝法院（根来山にあり。宗旨真言新義）堀川院（人皇七十三代）の御宇寛治年中、修験行者根来坊といふ人あり（根来坊は伊勢のくにの人なり）。密宗の一寺造立つの志願ありて、那智山の滝に籠ること一千日、屢ば祈念せし夜の夢に、根来山は密教相応の霊地なり、一院を草建すべしとをしえたまふと告あれば、すなわちこの地にきたりて、行者堂のかたわらに一宇を建立し、豊福寺と号し、本尊虚空蔵菩薩を安置す。後に興教大師覚鑿上人、当山に來りて法幢をたて、法雷をとどろかす」

として、豊福寺が覚鑿以前から根来の地にあったとする。

覚鑿は、空海の虚空蔵求聞持法に対する信仰を継承したのである。虚空蔵求聞持法は、虚空蔵菩薩を本尊仏とする

密教的な修法で、聞持すなわち記憶力を求めて修せられる。そして、この法によって聞持を得ると一度

聞いたことを忘れないとされるのである。

古代仏教においては、多くの経典を暗記しなければならぬ学僧を志す者が、まず第一に修すべき法とされ、宗派に拘らず熱心に行われた。

中でも空海は、ある沙門からこの虚空蔵求聞持法を示された事で、仏門を志す機縁となった。この話は、空海の著作である『三教指帰』序文にあつて有名なものである。これを受けて以後、この求聞持法は空海門下によって大切に扱われ、やがて真言宗の秘法ともいふべき位置を占めるようになった。

覚鑿も、空海の系譜のなかで求聞持法を修したのであるが、特に熱心で『太平記』卷一八「高野与根来不和事」には、「覚鑿トテ一人ノ上人才ハシケリ。一度三密瑜伽ノ道場ニ入シヨリ、永四曼不離ノ行業ニ不懈、觀法座タケナハニシテ薰修年久シカリケルガ、即身成仏ト乍談、猶有漏ノ身ヲ不替事ヲ歎テ、求聞持ノ法七座迄行フ」と、虚空蔵求聞持法を七度行ったとされるほどである。

これには、いささか伝説的な誇張が込められているが、保安二年（一一二一）、醍醐理性院において賢覚法眼に灌頂をうけ、また求聞持法も伝授されたというように、とりわけて求聞持法に力を注いだ事は事実である。（根来寺、一九九二、四四三～四四四）

そのことを裏付けるように、密厳院境内に方五間の求聞持堂があり、また大門の北にある三岡にも方三間の求聞持堂の存在が記録されている。

このように、根来寺は虚空蔵信仰の充満した寺院でもあったことになる。薩摩坊津の一乗院が、根来寺の西海の別院として虚空蔵菩薩を本尊とすることも故なしとしないところである。

そして、薩摩塗と一乗院を結びつけて考えるのと同様に、輪島に根来塗伝承があることは、能登石動

山と根来寺に何かしらの関係があったことを、暗示するものであるのかも知れない。しかし、この点については今後の課題とせざるを得ないのである。

## 五 まとめ

各地の漆器産地で、虚空蔵菩薩に対する信仰が見られる事例を紹介したなかで、まず、現在では京都の法輪寺を中心にして信仰が展開し、それが一月一三日を「漆の日」と定めたように、全国的な広がりを見せていることを知った。

法輪寺には、近世から職人がその技術の向上を願って参籠する習慣があり、「十三参り」という町衆の虚空蔵信仰を形成したことに、今日の漆寺としての法輪寺の背景があることになる。

さらに、漆器の一つのブランドといえる「根来塗」が、高い技術力を有した根来寺を象徴する存在であることに着目し、根来寺の崩壊によって、その技術者が移住し、その技術が各地に伝播したと伝承されることになった点を検討した。

その根来塗技術の伝播伝承に、虚空蔵信仰がオーバーラップするという観点に立てば、虚空蔵菩薩への信仰と技術との接点は、すでに根来寺において、中世という時期にその素地が認識されていたことにもなる。

根来寺は、その卓越した技術力が軍事的な脅威となり、それ故に壊滅的に破壊され、史料も散逸し明らかでない点が多い。根来塗伝承の検討が、そのような根来寺の未だ明らかにされない一面を考える端

緒に結びつくのかも知れない。

現代の視点からすると、信仰と技術は、一見結びつきを想像しにくいだが、「心」と「技」に置き換えて見れば、それには不分離な一面があることも、また領けるところがある。虚空蔵菩薩を信仰する利益としての知恵は、「自然智」と呼ばれ、自らが生来持っている才能を遺憾なく発揮することが出来る知恵だと説かれている。(中村、一九八九、五三〇五四)

法輪寺の虚空蔵菩薩が、道昌僧正のもとに明星が来臨して虚空蔵菩薩の姿を示したとされていることは、先述した通りである。このように金星の異称である明星は、虚空蔵菩薩の垂迹として扱われることが多い。その明星に、「万人がその徳・技能を仰ぐほどの人をたとえていう語」(新村、一九六九、二一三七)という意味が込められることになるのである。

それにしても、古代の法輪寺が、道昌僧正がそうであったように渡来技術者集団である秦氏と深く結んでいることは興味深い。虚空蔵信仰と技術の結びつきには、まだまだ未知なることが多いように考えられるのである。

一

#### 註

(1) 沢口悟一は、静岡漆器について「価格の低廉を欲して実質の堅牢を等閑視したる結果と、製作期間の短縮に外ならない。しかし粗製濫造の悪評もここより発生する」(沢口、一九六六、九〇)と述べている。

(2) 浜仏檀工芸会の構成は次の通りである。括弧内は職人の名前。



- ① 仏壇仏具本店 石久仏具店
- ② 塗師 井上塗師店(樋口)
- ③ 仏壇部 宇根屋仏壇部
- ④ 塗師 金沢ぬしや(金沢)
- ⑤ 鋳師 金泉堂(辻)
- ⑥ 木地師 高田仏壇(高田)
- ⑦ 塗師 辻仏壇店(辻)
- ⑧ 塗師 中川仏壇店(中川)
- ⑨ 塗師 長浜仏壇疋田(疋田)
- ⑩ 塗師 疋田仏壇工芸(疋田)
- ⑪ 鋳師 広田鋳店(広田)
- ⑫ 蒔絵師 蒔治(川瀬)
- ⑬ 蒔絵師 蒔治(下司)
- ⑭ 塗師 宮川浜仏壇店(宮川)
- ⑮ 塗師 渡辺仏壇店(渡辺)

この内、⑦の辻仏壇店が伊香郡高島町、⑧の中川仏壇店が東浅井郡びわ町である他は全て長浜市内にある。

(3) 七種の分業という点は、彦根仏壇という七職を思いおこさせる。『滋賀県百科事典』(一九八四、

大和書房)では、浜仏檀については項を立てていないが、彦根仏檀については「(彦根仏檀)の起源には諸説があるが、江戸中期すでに彦根藩の庇護をうけ、京都・名古屋とともに古い塗り仏檀の産地として、その名が高かった。仏檀づくりは俗に『仏檀七職』といわれ、木地師・宮殿師・彫刻師・塗師・箔押師・鍔金具師・蒔絵師と、実に多くの下職の結集によってつくられる。その七職からあつまってくる部品を組み立てて、金具を打ち、障子を張り、琢をかけて仕上げるのが仏檀問屋である。彦根仏檀は、農村向けのもが多い。浜檀(長浜仏檀)よりは小さく、京檀(京都仏檀)よりも大型で、高級品は別として泥絵の盛り上り蒔絵などを特色とする」とある。

(4)木地屋・漆器業と虚空蔵菩薩の関係について、橋本鉄男は昭和三〇年代に、東北の川連の漆器業者を調査した際、その下請けの木地屋の作業所に貼られていた、

商売繁盛 総本山

漆祖漆器商工業守護神祈攸

生産発展 虚空蔵法輪寺

という護符に注目した。この護符は、京都の嵐山にある法輪寺から出されたものである(橋本、一九九三、五四)。

(5)東山神社について、『山中町史』には「山中町ホ一五八ノ一にある。非公認社。祭神は惟喬親王、西宮大神宮、虚空蔵菩薩。この神社の由緒はもっとも新しい。山中の木地屋沢出万吉が、明治三一年(一八九八)に越前国南条郡大河内村に商用で出かけたとき、同地の無格社大河内神社の祭神が惟喬親王で、木地屋五郎右衛門が山祭を行っていたが、親王が木地挽きの創始者として山祭の

祭神であることを聞き、さらにそれは五郎右衛門の祖先が近江国から移住したとき同地に勧請したということを知った。そこで万吉はさらに木地挽業の発祥地といわれる近江国愛知郡東小椋村大字君ガ畑に出かけてその事情を調査したが、帰郷後親王に対する報恩反始のため、自費を投じて親王の石像を建立し奉祀したのがはじめである。その除幕式は明治四一年（一九〇八）一月九日であったが、台石には旧大聖寺藩主前田利幽の揮毫にかかる『紀年漆器祖先碑』の文字が刻まれている。大正一二年（一九二三）に附近に四坪の祠を建設し、西宮大神宮及び医王寺に安置されていた漆器技術の守り仏虚空蔵菩薩とを合祀し、東山神社と称した。要するに温泉業者の医王寺や長谷部神社に対し、漆器業者の独自の神仏をつくりあげ、これに航海の守護神から商売の神様に転じたエビス様を配したもので、結構崇拜者も多いわけである。昭和二一年（一九四六）の大雪のため社殿が倒壊したので、全町民の奉仕により現在地を整地し、大聖寺町松緑寺の旧祠を移築、一月に完成遷座した。祭礼、漆器祭五月九日、商工祭ならびに塗師祭一月一三日、エビス講一月二〇日」（若林、一九五九、五二〇～五二一）とある。

(6) 輪島塗について「石川県輪島市で産出する漆器。室町中期、紀伊根来の僧の伝授に始まると伝えられ、江戸中期には特産物として他領に輸出、全国に販路をもった。販路拡大には椀講・大黒講を組織した。下塗に特殊な地粉を用いた堅牢なもので、生産工程は木地ごしらえから上塗まで一五工程に分かれ、完成までには七五回以上の手数を要し、年一回の生産が限度だった。輪島塗の日用品生産は今日まで続いている」（高柳、一九七四、一〇二〇）とされる。

(7) 筆者調査（一九八〇）。当時、輪島漆器商工業協同組合専務理事であった故川口俊雄氏談。

(8) 森田柿園（一八一九〜一九〇八）の遺稿をまとめたもの。

(9) 一三歳は人生儀礼の中で成人への節目とされており、全国的に、年祝い・厄年・一人前・仮親・フンドシ祝い・元服などとして多様な習俗がみられる。このような一三歳の年祝いが、智恵の仏である法輪寺の虚空蔵菩薩と結びついて十三参りという信仰を生み出した。十三参りの起源は、少年が虚空蔵菩薩に智恵を願うということからすれば、『中右記』の宗忠の時代に遡ることになるわけだが、現在のような習俗として盛んに行われるように成ったのは、後述するように江戸時代に入ってからである。

(10) 天神祭りで有名な、大阪天満宮でも「七五三」とならんで「十三参り」の祈祷を行っている。

(11) 一九九〇年十一月一日には、「柿山伏」「練り膏薬」が演じられた。

(12) 一九八一年の法輪寺漆器祭りへの、漆器業界からの参加者名簿をあげておく。

「漆祖 虚空蔵菩薩奉賛式 出席者 昭和五六年（一九八一）十一月一日

株佐藤喜代松商店、株井助商店、葛川工業株、堤茂、加藤小兵衛商店、鹿田漆店、鳴神株京都支店、佐々木喬、西陣機織工業株（以上、京都府）

日興塗料株、鳴神吾一、戸田祐利、旬山嘉商店、天野博介、株斉藤漆店、畠山宗太郎、株水田漆店、斉藤株式会社（以上、大阪府）

三木倉漆店、中常漆工芸株、田島漆店（以上、和歌山県）

河野善一（福井県）

岡秀男、高野漆行、加藤漆塗料店、塚田宗一漆店、沢幸漆店（以上、石川県）

大場商店、藤田そとい（以上、富山県）

小谷与一、加藤益漆店（以上、名古屋市）

阪治（東京都）

藤田芳江（東北地方）」

(13) 山形県の米沢では、近世末、絹織物に京都の西陣織の技術が導入され、その際、京都から織物技術者の移住があった。そして「十三参りは、織物の技術を伝えた人々によつて京都からもたらされた」と伝承されている。

(14) 「十三参り」という呼称の初見は、寛政十一年（一七九九）に刊行された『都林泉名所図会』に、「近年、下嵯峨法輪寺に、三月十三日、十三歳なる男女都鄙より来たりて、群集大かたならず。本尊虚空蔵菩薩に智慧を貰うとて、年々に増えて来る也。これを十三参りという」とある記事と考えられている。

(15) 前掲、筆者調査（一九八〇）。

(16) 沢口は輪島漆器の起源について「応永年間（一三九四、一四二九）紀州根来寺の僧輪島の重蓮寺に來たり同寺所用の家具類を製造したるに始まる」（沢口、一九六六）としており、輪島への根来塗技術の伝播に関する伝承には、複数の伝承が存在することがわかる。沢口は、続けて「重蓮寺は嵯峨天皇の勅命により空海が一本松付近に建立したる大寺院なりと伝えられている。また輪島市の県社重蔵神社は遠く崇神天皇の勅命により神殿が造られ、本殿は永仁四年（一二九六）鳳至郡の地頭職長谷部有連の建立である。棟札には『奉建立重蔵宮参間御宝殿老宇永仁四年丙申十

月十四日巳酉棟上卯時、五ヶ地頭造立之地頭左衛門尉長谷部朝臣有連、同信経、同信長、同政信、同信景「順至地頭」。また文明八年（一四七六）には神保式部尉光保講堂を建造し棟札には『奉建立重蔵宮之講堂尅宇重蔵座主観音寺住持沙門金資快、干時文明八年丙申歲陸月六日巳剋棟上地頭神保式部尉光保同藤原朝臣温井備中守俊宗代官温井彦右衛門為宗同江口四郎兵衛尉信能、番匠重蔵大工衛門次郎藤栄、鳳至与次郎吉久、小工塗師三郎次郎定吉鍛冶大工河合法円』。この塗師三郎次郎定吉は輪島の漆工として文献に伝わる最古である。次に輪島漆器の生命とも称すべき地粉の発見には神秘的伝説がある。重蔵神社蔵書によれば寛文年間（一六六一、七三）大神の神託があり、『土器殿の辺りより土を取り焼きて調合し用うべしと』、里人は神託に従いこれを造り用いしに堅牢にして他国産の漆器に勝れり」（沢口、一九六六）とする。

根来塗は耐久性があり、岐阜県の白山長滝神社の「延年」行事では、今も伝来の根来塗瓶子が使われているなどの例がある（筆者調査）。しかし根来塗の遺品の中で、根来寺との関係を明らかに出来る品は極めて少ない。その意味で、茨城県の六地藏寺に伝わる足付盥の底裏銘に「六蔵寺二對内、細工根来寺重宗、本願法印惠範」とあり、惠範の止住した永正二年（一五〇五）から天文七年（一五三八）頃と時代を特定できる例は貴重である（河田、一九八五、二九四）。また、鹿島神宮の木造狛犬（茨城県指定文化財）の胎内銘には「紀州根来、平之内正信作之、元和五（未巳）年（一六一九）月吉日」とあり、根来寺が木工にも巧みな技術者を擁していたことが知れる（同神宮宝物館）。

(17) 根来寺が最も勢いを誇ったのは、いわゆる根来衆が活躍した南北朝以後、特に戦国時代であった。

鉄砲伝来以後、いちはやくこれを取入れ、鉄砲隊を組織したことはよく知られている。

日本への鉄砲の伝来は、天文一二年（一五四三）種子島に來航したポルトガル船によるものとされる。この鉄砲伝来に関しては、南浦文之著『鉄砲記』によることが多い。それには「於此之時。紀州根来寺有杉坊某公者。不遠千里。欲求我鉄砲」とあり、これが根来寺にいち早く鉄砲が伝来した由来である。（宇田川、一九九〇、二〇四）

林 真治の「根来寺僧兵抄」には、「根来寺僧兵四人の旗頭の一人杉之坊の実兄津田堅物算長が種子島で技術を修得して、翌天文一三年（一五四四）帰国、根来山の門前町に住む鍛工芝辻清右衛門を指導して和製鉄砲の製造に取り組んだのが内地における鉄砲の始まりであるが、この時点ではまだ満足できる段階にまで至っていなかったようである。『紀伊続風土記』では根来寺から二キロばかり西南の岩出町金屋をその製作地に模しているが、根来寺のすぐ近くの岩出町森に「鍛冶垣内」という古い小字名がありここも有力な候補地と考えられる」とある。

『鉄砲記』には「不遠千里。欲求我鉄砲。」とされているが、鉄砲伝来の天文一二年（一五四三）から約二〇年遡った大永六年（一五二六）に、薩摩坊津にタラーク（虚空蔵菩薩の梵字）の供養塔が建てられていることに注意しなければならない。つまり、この時期は根来寺が最も活況を呈したと同時に、根来寺の西海の別院として坊津一乗院も隆盛の極みにあったと考えねばならない。種子島にもたらされた鉄砲の威力は、まず坊津一乗院の知るところとなったであろう。（中村、一九八八、三三〇三四）

(18) 「イエズス会日本年報・一五八五年一〇月一日（天正一三年閏八月八日）付、長崎発、バードレ・

ルイス・フロイスよりイエズス会総会長に贈りし書翰の數節」には次のようにある。

「第三の宗派は、根来 (Nengros) と称する坊主のそれで、彼等は初め高野の坊主等と一緒にであったが、後分離して自ら他の宗派を建てた、この坊主等は日本の他の宗派と著しく異った点を有する、すなわちその職業は絶えず戦に従事することで、宗規として毎日矢を作ることにし、多く作った者が多く用ゐられる、彼等は俗人の兵士の如き服装をなし、絹の着物 (Quimoes) を着し、富裕である故剣及び短剣には金の飾を付し、衣服は俗人と異なるところがない、ただし頭髪は背の半に達するまで長く延ばして結んでおり、容貌は甚だ傲慢醜悪で、その仕へる主人が誰であるかを示してゐる、日本の諸侯が都附近の国において戦う時は、この坊主等を雇備する、彼等は甚だ戦争に巧で、常に練習し、火繩銃及び弓矢に達してゐる、彼等はヨーロッパにおけるドイツ人の如く、よい待遇を与へる者とことを共にする、その住居及び寺院は他に優れ、日本の坊主の中で最も立派に鍍金したまた装飾したものである、彼等の生活の醜悪なことは、寺院及び住宅の立派なのに正比例してゐる、彼等が戦に赴かず寺院の在る時は、他の坊主等と同じく偶像を祭る式を行ひ、参拝のため同所に来る客を好遇し、二、三日間は無料で食物を供する、坊主の数は八千乃至一万で、そのほかに彼等に仕へる僕達がある、彼等の大部分は下賤の者及び市民の子弟の脱奔者、ならびに卑しい悪徒である、併し根来となれば名誉を受け、その両親の身分も賤しいことも、従前の生活の低劣のことも、影響がない、彼等は紀伊国において大なる所領を有し、これによって自給してゐる」 (和歌山市、一九七七、一二二三〜一二二四)

(19) 伊藤正敏は「現在和歌山県教育委員会の手で根来寺遺跡の発掘調査が進められているが、三千坊



と言われた子院の遺構がきわめてよく残っており、仏教遺物のみでなく油屋・漆職人の家の遺構も残存し、根来寺が世俗的に広汎な活動をしていた一大商業都市であったことがわかってきた」（伊藤、一九九一、三六）とする。

(20) 沢口は「応仁の乱（一四六七）後根来寺の僧徒等は兵仗を帯して掠奪し、或は暴動の挙あるをもつて豊臣秀吉これを制したるも応ぜざりしかば、遂に天正一三年（一五八五）兵を發し寺院を焼きこれを掃蕩した。生存の僧徒等は四方に離散して中には漆工の技に長じたる者もあり、遠く九州に走りたるものは薩摩椀を製作し、或は会津・輪島に、近くは奈良吉野等に逃れて漆工に従事した」とする。

(21) 三暎庵静隱（木村探元）述、橋口瓢隱記、宝暦一二年（一七六二）閏四月日刊、『薩藩叢書』に「三暎庵主談話」として所収。

(22) 三個の津を「薩摩の坊津、筑前の博多津、伊勢の安濃津。また、坊津、博多津、和泉の堺津」（高柳、一九七四、一三二二）とする。

(23) 『三国名勝図会』は、続けて中興の成圓法師の事績を上げる。いささか長文になるが坊津一乘院の史料的な裏付けとして重要なので引用する。

「其後星霜を経て、寺院漸く衰へ、或は断へ、或は続く、成圓法師なる者あり、延文二年（一三五七）、丁酉の歳、當院を再建して、中興第一祖となる、成圓法師は、素日野少將良成といふ、其父日野中納言某、鹿籠硫黄崎に配流す、良成京師より来り、父を省て、坊津に駐留せり、遂に発心して、此津西光寺住持日成律師に従て出家し、四度瑜伽を修す、既にして京師に上り、仁和寺常

瑜伽院御室一品入道寛性法親王に従て、廣澤派の真言秘法を傳て、印可を受く、時に法親王虚空藏大士の像を成圓に賜ふれ、當寺の本尊にて、福德の本尊なり、(虚空藏菩薩は、南方寶部の尊にて、福德富貴を主どる、大日經疏曰、虚空藏者如虚空不可破壞、一切無勝者、藏者如人有大寶藏、施所欲者自在取之、不受貧乏、如来虚空之藏、亦復如是、一切利樂衆生、事皆從中出、無量法寶自在、而無窮竭相、名虚空藏也、云云、理趣經、虚空藏章云、修行者若入此曼荼羅、令人現生所求、一切富貴階位悉得、滅一切貧窮業障云々、愍念貧窮、常行忠施、三輪清淨心無慳悋、當興等虚空三摩地相應、不久獲得虚空藏菩薩自云云、宿曜經、儀軌虚空藏條云、若人欲求福智當歸依此菩薩云々虚空藏は、かゝる三摩地の尊なる故、法親王の賜ひなるべし) 既にして足利大將軍尊氏に謁して、寺院の再建を請ふ、文和三年(一二三四)、春、願書を京師に上る、傳奏して許可を受く、邦君齡岳公、有司に命じて、當寺を經營す、延文二年(一二五七)、功を畢れるなり、是より密教を相承す」

とし、次に、第四世の頼世法印の事績に続く、

「第四世頼俊法印、聡敏博達を以て称せらる、高野根来に遊て、教相の玄旨を究む、又南都東南院に至て、俱舎・法相を肆ふ、又根来寺学頭快憲僧都に隨て、廣澤派の秘法を受く、後又仁和寺智恵門院宥和尚に隨て、廣澤の密法を問ふ、和尚頼俊を器とし、授るに自宗肝心密法淵源を以てし、一流附法の弟子とす、尋て經典四十函、及び仏像・道具等を與ふ、且告て曰、汝速に国に歸て、密教を弘宣し、邦家を鎮護せやと、於是應永十五年(二四〇八)、根来寺を辭して、當寺に歸る、所得の仏像・經典等を寶藏す、是より當寺の密法一新せり(後略)」

さらに、天文一四年（一五四五）後奈良天皇が、一乗院を勅願寺とし西海金剛峯寺の勅額を賜うた記事を載せている。

(24) この薩摩では廃仏毀釈が徹底して行われ、明治二年（一八六九）一二月、旧藩主島津氏との関係で最後まで残された、福昌寺、大乘寺、一乗院、昭倍院、宝満寺、専修寺も廃することに決まり、藩内一寺をも残さず一掃された。

(25) 『紀伊続風土記』にも、

「根来寺（一乗山大傳法院）真言宗新義無本寺、禁殺生、根来寺の疆域 周回凡四里許中央平坦の地、東西長く南北短し、伽藍其間に連亘して区域を四つに分つ、西にあるを圓明寺境内とす大門の良位三町許にあり、其良に接する者を豊福寺境内とす、豊福寺の東に連なる者を大傳法院境内とす、傳法院の巽に接する者を密厳院境内とす、其他東に菩提谷關伽井谷鼓谷あり、北に小谷あり、西に西蓮華谷三岡等あり、南に前山あり堂舎子院其間に充付して伽藍の数凡て七十余宇子院凡て九十余宇院此古堂舎の大略なり、天正の兵火に悉焼亡して其遺るもの大塔大師堂のみなり」とある。

## 第二節 浜仏壇にみる虚空蔵信仰

### 一 川連漆器の法輪寺護符

橋本鉄男の近著『漂泊の山民―木地屋の世界―』（一九九三年三月、白水社刊）に、橋本が昭和三〇年代に東北の川連の漆器業者を調査した際に、その下請けの木地屋の作業所に貼られている護符に目をとめられたことが記載されている。

この護符は京都の嵐山にある法輪寺から出されたもので、

商売繁盛 総本山

漆祖漆器商工業守護神祈攸

生産発展 虚空蔵法輪寺

とある。

橋本先生は、この護符を手がかりに「漆祖伝承覚書」と題して木地屋・漆器業の始祖伝承について考察を加えておられる。

この論文は、はじめ『年報・木地屋とろくろ』第二号（一九九二年一二月）に発表されたもので、このことが『近畿民俗通信』第十号に今井敬潤氏によって紹介されたおり、私は早速に橋本に電話をして、その年報を送っていただいた。

というのも、筆者は大学を卒業したあと御影史学研究会で田中久夫から民俗学のご指導を受けるよう

になって以来、虚空蔵菩薩とその信仰をテーマとして研究を続けており、特に嵯峨の法輪寺については虚空蔵信仰にまつわる民間信仰として最大の行事である「十三まいり」との関係からも、最も関心をもってきたのである。

それで、東北の川連に法輪寺虚空蔵の護符があるところのご指摘にとっても驚ろかされたのである。

このような機縁から、橋本先生の主宰される木地屋とろくろ研究所の年報へ執筆する機会を与えていただいた。ここでは、滋賀県長浜の仏壇を例として、木地屋・塗師と法輪寺・虚空蔵菩薩の関係を少しく考えて見たいと思うのである。

## 二 長浜知善院の虚空蔵堂

長浜は秀吉ゆかりの城下町として、また湖北の交通の要衝として発展した所で、曳山祭りでも知られた長浜八幡宮や長浜御坊の大通寺などの由緒ある寺社の多い所でもある。

宝生山知善院も、秀吉公の木像がまつられており、長浜六瓢箪めぐりの一寺院として訪れる人が多い。この知善院の境内に虚空蔵堂があり、法輪寺の御分身である虚空蔵菩薩のお軸をまつっている。小堂ではあるが最近改築され、厚く信仰されていることがうかがえる。

この虚空蔵堂は知善院そのものが営むのではなく、地元の伝統的工芸品である仏壇製造、いわゆる「浜仏壇」、の関係者が奉賛しているのである。

長浜は伝統産業の多い土地柄で、現在見られるものとして、長浜ビロード、網織紬、鼻緒、ろくろ工

芸品、和ろうそく、そして浜仏壇をあげることが出来る（『全国伝統的工芸品総覧』平成四年版による）。  
浜仏壇は昭和五九年二月に滋賀県の伝統工芸品としての指定を受けている。

もともと、長浜の伝統産業というところ「浜縮緬」を思い浮かべることが多いようである。柳宗悦著『仕事の本』（岩波文庫）では、「（滋賀県の）産業としては織物が最も栄えました。「浜縮緬」だとか「近江麻布」だとか「高島縮」だとかよく聞えた名であります。浜縮緬は湖北の長浜を中心とし、麻布や蚊帳は湖東の各部落で出来、高島縮は湖西の今津地方の産であります。これらのものは民衆の生活に深く入りました。」としている。

『毛吹草』（岩波文庫）で近世の諸国物産をみると、近江の長浜については「長浜糸」とあるのみである。

### 三 浜仏壇と虚空蔵信仰

さて、知善院の虚空蔵菩薩と浜仏壇との関係について、中心になってお世話をされている宮川勝廣さんにお話を聞くことが出来た。

宮川さんは、浜仏壇の塗師として三代目にあたり、四代目にあたるご子息を後継者として共に仕事をし、浜仏壇工芸会の代表をつとめておられる。

浜仏壇工芸会には、仏壇製造にかかわる木地師・塗師などの職人と販売業者が参加しており、その職能からみた構成は次のようである。

- ① 仏壇仏具本店 石久仏具店
- ② 塗師 井上塗師店(樋口)
- ③ 仏壇部 宇根屋仏壇部
- ④ 塗師 金沢ぬしや(金沢)
- ⑤ 鋳師 金泉堂(辻)
- ⑥ 木地師 高田仏壇(高田)
- ⑦ 塗師 辻仏壇店(辻)
- ⑧ 塗師 中川仏壇店(中川)
- ⑨ 塗師 長浜仏壇疋田(疋田)
- ⑩ 塗師 疋田仏壇工芸(疋田)
- ⑪ 鋳師 広田鋳店(広田)
- ⑫ 蒔絵師 蒔治(川瀬)
- ⑬ 蒔絵師 蒔治(下司)
- ⑭ 塗師 宮川浜仏壇店(宮川)
- ⑮ 塗師 渡辺仏壇店(渡辺)

となる。(同工芸会の資料による、括弧内は職人の名前)

この内、⑦の辻仏壇店が伊香郡高島町、⑧の中川仏壇店が東浅井郡びわ町である他は全て長浜市内にある。先にあげた『総覧』によると、生産品は浜仏壇及び浜仏具、従事者数は四十人、年生産額は九十

八億円とされている。

宮川さんのお話によると、祖父の政太郎さんが初代にあたる訳だが、その政太郎さんの頃、二、三人の講員で京都の法輪寺にまいつっていた。そして、法輪寺からお軸の御本尊をいただいて来て、知善院の境内地を借りて虚空蔵堂を建立したという。その時期は、宮川さんの父である二代目が明治二八年の生まれなので、その時分、明治の中ごろのことと思われる。

法輪寺には、今でも工芸会の職人十四名がそろって毎年五月の中旬、十日までに詣っている。五月に詣るのはずっと以前からで、おそらく祖父の時代からのことであろうという。

虚空蔵堂の祭りは、春三月十五日、秋十一月十五日におこなわれ、知善院の住職により物故者の供養を行うことを主として催され、その後、皆で会食をする。また、知善院の千日講の行事がある八月の九日、十日も虚空蔵堂の祭りとしている。

今では講員にも代替わりをしている者が多く、又年輩の方でも比較的新しく講に参加されたこともあって、古いことを知っている人が少なくなっているとのことである。

さて、仏壇は七人の職人がよらないと完成しないという。それは木地、塗師（ぬりし）、宮殿（やね）、飾り金具、蒔絵、金箔、彫刻師である。それだけ工程が多く、分業化しているということが想像できる。

宮川さんのお話で、明治の中期に長浜の仏壇業に一つの画期があったらしいことが想像できる。そして、虚空蔵堂の祭りが物故者の供養が中心であることは、同業者組合としての意識が強いことを思わせる。また、そのことは仏壇が七人の職人の手を経なければ完成しないという分業形態を持つことを前提としているのである。



ところで、七種の分業という点は、彦根仏壇という七職を思いおこさせる。

『滋賀県百科事典』（一九八四年七月、大和書房刊）では、浜仏壇については項を立てていないが、彦根仏壇については橋本先生がご担当になって次のように記されている。「（彦根仏壇）の起源には諸説があるが、江戸中期すでに彦根藩の庇護をうけ、京都・名古屋とともに古い塗り仏壇の産地として、その名が高かった。仏壇づくりは俗に「仏壇七職」といわれ、木地師・宮殿師・彫刻師・塗師・箔押師・鍔金具師・蒔絵師と、実に多くの下職の結集によってつくられる。その七職からあつまってくる部品を組み立てて、金具を打ち、障子を張り、琢をかけて仕上げるのが仏壇問屋である。彦根仏壇は、農村向けのものが多い。浜壇（長浜仏壇）よりは小さく、京壇（京都仏壇）よりも大型で、高級品は別として泥絵の盛り上り蒔絵などを特色とする」とある。

浜仏壇を考える場合に、彦根仏壇さらに京仏壇との関係も見逃せないようである。

ともかくも、長浜の知善院の境内にある虚空蔵菩薩は、明治以降のものであるようだが、長浜の仏壇製作については近世にさかのぼった史料を見いだすことが出来る。

#### 四 近世の浜仏壇

『改訂 近江国坂田郡志』（昭和四六年六月、名著出版復刊）の彫刻の項に、現在では長浜市に編入されている常喜について、

#### 常喜仏壇

### 近江国筒井職頭之事

西黒田村大字常喜に於ては古来仏壇の製作盛にして、常喜椀と共に地方の名産なり。其の由来詳ならざれども、古へより近江 国筒井職として、諸役を免除せられし事、元龜三年の執達に見ゆ。其の全盛時代には三十余戸の多き製作家ありて盛なる物産なりしも、今は当時全盛の面影絶えてなし。元龜の執達に、

諸国轆轤師、杓子師、塗物師、引物師等、其職相勤之族、末代無相違可進退旨定也、故以代代為器質基本。兼亦諸役可免許、全公役可相勤之由、依天氣執達如件。

元龜三年十一月十一日

左大弁兼成（花押）

小野宮社務

とある。

また、同じく彫刻の項に長浜仏壇については、

### 長浜仏壇

長浜町藤岡和泉の家代々仏壇を製作し、長浜仏壇の一新機軸を出す。子孫今に其の業を襲ふ。

この記事を見ることが出来る。

浜仏壇が近世からの伝統をもち、又、君ヶ畑との関連を主張することは興味深い。明治中期に、長浜の知善院に法輪寺から虚空蔵菩薩を勧請し、現在の浜仏壇の隆盛の基礎を築いた宮川政太郎という人物の、技術の系譜を知りたいところである。

橋本は、「漆祖伝承覚書」（『漂泊の山民』第一部第四章）を次のように締めくくっている。「この

一文はもともと近江日野谷の木地職Ⅱ塗師屋の小野宮とその王子を中心とした漆祖伝承と、諸国の木地職Ⅱ塗師屋の虚空蔵を中心とした漆祖伝承の相互連関性を明かにできればとのひそかな意図をもって試みたが、残念ながら今はまだごらんのように舌足らずのまままで終始した。「覚書」としたのも、文字通りそのためである。」

実のところ、この論文は漆器業の虚空蔵信仰を木地屋の世界にまで広げるといふ大きな展望を示されているのである。長浜の仏壇ひとつを取り上げてみても、その展望のいかに的確であるかが理解されるところである。

## 第四章

### 山と海における虚空蔵信仰の伝播と受容

## 第一節 白山にみる虚空蔵信仰

虚空蔵信仰を歴史地理学の視点からとらえるとき、地名というものを手がかりとして、虚空蔵信仰の伝播や受容を考察できるのではないかと考えた。今日まで、「十三まいり」や「十三仏信仰」など、虚空蔵信仰から展開した民間信仰を検討し、その信仰の成立や伝播について主として仏教民俗学の立場から検討してきた。

これに加えて、虚空蔵信仰を全国的なレベルで出来るだけ悉皆的に扱うために、地名を通しての虚空蔵信仰の研究によって、従来の研究を補い、また新しい課題を見いだせるのではないかと考えた訳である。

全国的なレベルで地名を検討しようとした場合、吉田東五の地名辞書や、最近、角川書店と平凡社から刊行された県別の地名辞書を利用する事が出来る。また、国土地理院の地形図上に現れた地名についてはデータ・ブックによって簡単に検索する事が可能である。しかし、悉皆的に見ようとすると、やはり地名の基本である小字地名を検討する必要があるかと思われる。幸い、すでに全巻が刊行された角川書店の『日本地名大辞典』では、三九の都府県で小字一覧が収録されている。それを使って、全国でおよそ一八〇万あると思われる小字地名を検索し、二一一例の虚空蔵関係地名を拾い出すことが出来た。

このことについては、本論文序論第二節で詳述しており、本節は、虚空蔵信仰を考える作業の中で、福井県勝山市に小字名として「虚空蔵」が、まとまって存在することを手がかりとした個別的な研究の

成果である。

勝山市は、福井県の東方にあたり、県庁のある福井市からは、京福電鉄の勝山本線が結んでおり、およそ一時間の行程である。市街地をぬけると、九頭龍川に沿う区間が長く、途中、永平寺への支線が分かれている。

一 平泉寺の虚空蔵地名

勝山市域の虚空蔵地名は、次の七例である。

勝山市下毛屋下虚空蔵（筆者注 山字）

勝山市下毛屋上虚空蔵（同）

勝山市下高島虚空蔵（同）

勝山市北市虚空蔵（同）

勝山市猪野虚空蔵（同）

勝山市平泉寺上虚空蔵

勝山市平泉寺下虚空蔵

福井県下の小字一覧では、虚空蔵地名は、この勝山市域のものしか見いだすことができない。

『勝山市史』には、各集落ごとに小字の一覧とその地図を取り上げている。それによると、これらの小字のうち、平泉寺地区の虚空蔵のみが耕作地である田の字名で、他の地区のものはいずれもが山字とさ

れて集落から外れた飛び地とされている。

平泉寺地区の上虚空蔵・下虚空蔵という田の背後にあたる山の中腹に、虚空蔵菩薩を祀る小祠がある。ここは、現在は下毛屋の地所となっている。一メートル四方の祠で、最近まで三体の石仏が祀られていたというが、今では台座や残欠しか残されていない。そして、この虚空蔵菩薩の由来を書いた説明板がかけられている。

説明板の内容は、次のようなものである。

#### 虚空蔵（四至内）

当時、平泉寺の境内は「四至内」と呼ばれていた。虚空蔵はそのうちの一つで、丑寅に位置している。巽の荒神岩、未申の禅師王子、乾の比島観音をもって境界とした。これを結べば四周の一边それぞれ一里をこえ、この中に猪野、猪野毛屋、下毛屋、北市、若猪野、上高島、下高島のいわゆる四至七カ村を包含し、広大な境内をもっていた。

平成五年九月二十五日

この説明板には、四至内七カ村という表現がみられる。昔の平泉寺村とこの四至内七カ村とは、虚空蔵菩薩の祠のある北谷山の入会をめぐって、近世以来、争っていた。

それについて『平泉寺史要』は次のように記している。<sup>(1)</sup>

天保十四年三月、北谷山（大師山）虚空蔵境内に生存せる杉、目通り二丈四五尺廻りの古木を當村九兵衛の後家とみが、先代より虚空蔵菩薩を信仰し、堂宇等をも支配し来りしとの事由により、勝手に売払伐倒したるより発端し、四至内七ヶ村よりは當村庄屋へ故障の申込を為せり、本件のみ

ならば、或は九兵衛の個人関係なりしならんも、時恰も四至内村の者共平泉寺地内の荒畑に生存の雑木五十本斗りを盗伐せしにより、遂に地境論を併発し、両事件を一括して訴訟となりして下濟仰付られ、其の結果は左の如く事済みとなれり。「平泉寺文書△一三七、上△三二五、上△三二七」

一、九兵衛が虚空蔵様を信仰するは任意なるも、境内木は双方共に伐採致間敷事。

一、境界論は双方進退仕来来通り村役人立会相改め、向後年々四月中双方立会見分可敷事。

一、九兵衛の伐採木は取扱人貰受、双方申分無之事。

この一件について『平泉寺文書』によつて、いまま少し検討を加えることにしたい。

『平泉寺文書・下一三七』、天保一四卯（一八四三）年三月、「四至内山境並虚空蔵宮の木伐採論、濟口証文」にその記事がおさめられている。<sup>(2)</sup>

まず、四至内七ヶ村の言い分を見てみたい。

御入國以前ヨリ安置され候、同山虚空蔵平、往古ヨリ生立有之候目通凡貳丈四五尺廻之古木伐倒、挽杣共大勢罷在候段秣苺取候へ共申聞候間、

私共進退北谷山虚空蔵平之大杉、右とみが源兵衛工賣渡候由

北谷山虚空蔵ハとみ屋敷内氏神虚空蔵本社之趣にて、社木賣渡候旨相答候

とみニ承候處、北谷山虚空蔵ハ居屋敷氏神本社にて進退いたし候ニ付、賣木致候旨申聞候ニ付、

北谷山ハ私共七ヶ村入會進退山ニ付、古木猥ニ賣渡候段とみニ心得違為辨木品相渡候様懸合候

次に、平泉寺村方の言い分は、次のようである。

右北谷山之内虚空蔵社ハ往古ヨリ當村九兵衛進退いたし、社破損零落之節ハ同人方にて社木を以



修覆造営いたし候儀ハ古例ニ付、去寅五月中社及大破候間後家とみ為修覆右境内之杉伐木いたし候この両者の訴えに対して下された裁定は、次の通りである。

一、七ヶ村入會北谷山と平泉寺村分北谷田畑境筋之儀、是迄双方進退仕来通り御吟味前於國許双方村役人立會相改候境筋之通相心得、尤向後不将無之様、年々四月中双方村役人立會可到見分事

一、虚空蔵宮之儀は、平泉寺村九兵衛信仰勝手を以、宮造営修覆いたし候儀、同人可為心持次第事

一、右境内ニ有之候立木は、以来共双方一切伐木致間敷事組北谷山之内、枯木折木等有之節ハ、入會七ヶ村立會相改無甲乙右村々ニて引取可申事

一、右境内下草之儀は、在来通四至内七ヶ村より刈取申事

一、右境内之杉木、去寅平泉寺村九兵衛伐木之儀ハ、扱人貰受、双方聊無申分熟談内済仕

この資料では、北谷山虚空蔵平が四至内七ヶ村の入り会いであるにもかかわらず、虚空蔵宮は平泉寺村の九兵衛が信仰していたことがわかる。最近まで、九兵衛の末裔である平泉寺地区の中村氏が、この祠のお守りをしていたという。

また平泉寺村に、戦前には、虚空蔵講があつたことが『平泉寺史要』の記事に見いだせる。(3)

四至内七ヶ村の「四至」とは、白山信仰の拠点である平泉寺そのものの四至であるわけである。下毛屋など七ヶ村の入り会いであつた北谷山も、現在は分割され、虚空蔵の地名が数箇所に分かれることになつた訳である。

平泉寺の四至虚空蔵は、元禄年間の絵図にも描かれており、天正二年（一五七四）四月十四日、一向一揆によって壊滅する以前の、六千坊を擁したという白山越前馬場としての平泉寺の隆盛期に遡ること

が出来るようである。この四至虚空蔵に導かれて、白山周辺の、特に越前側の虚空蔵信仰について少し考えてみることにしたいと思う。

## 二 白山信仰圏の虚空像菩薩

白山信仰圏の虚空蔵菩薩といえ、岐阜県白鳥町の石徹白の虚空蔵菩薩が思い浮かぶ。白山登山口にあたる石徹白は、白山信仰にとって重要な地点で、白山中居神社がおかれ、また全国に白山信仰を広めた御師の住む村でもあった。ここの大師堂に鎌倉時代の金銅仏である虚空蔵菩薩がまつられ、国の重要文化財となっている。

また、地理的に白山と隔たりはあるが、岐阜県の高賀山と石川県の能登半島にある石動山は、ともに鎌倉時代に隆盛をきわめた虚空蔵信仰の拠点であり、それぞれ独立した信仰ではあるが、白山信仰と密接な交流があったと考えられている。

このように、白山の周辺に虚空蔵信仰を見いだすことが出来るわけであるが、とはいっても、白山信仰そのものにおける虚空蔵信仰について、従来、必ずしも注目されていたわけではない。それは、一面において、白山信仰を構成する三馬場、すなわち越前馬場、加賀馬場、美濃馬場のうち、白山開創に深く関係する泰澄が、越前に生まれたとされることに象徴されるように、白山の正面であると主張し、大きな影響力を握っていた越前側に、虚空蔵信仰の拠点が知られていなかったからでもあるといえよう<sup>(4)</sup>。越前馬場である平泉寺の四至の一つに、虚空蔵菩薩が祀られていることは、見落としてはならない、

手がかりを与えてくれているのかも知れない。

白山信仰を考える根本史料のひとつに『白山之記』をあげることが出来る。その原型は、平安末期の一二世紀中頃に遡ることが出来ると考えられている。<sup>(5)</sup>

『白山之記』

白山之記云

加賀国石川郡味智郷有一名山、号白山、其山頂名禪定、住有徳大明神、即号正一位白山妙理大菩薩、其本地十一面観自在菩薩、

北並峙高峰、其頂住大明神、号高祖太男知、阿弥陀如来垂迹也、

南去数十里、有高山、其山頂住大明神、号別山大行事、是大山地神也、聖観音垂迹也、

即彼山泰澄大師奉行願給也、

その内容は、白山の開基が泰澄であること、また山頂にいわゆる白山三社として、最高峰である二七〇二mの御前に十一面観音、大汝に阿弥陀如来、別山に聖観音を祀ると主張している。

そして、加賀側の登山道沿いの諸社をあげて、尾添の加宝社について、

次有宝社、名加宝、虚空蔵菩薩垂迹也、次大河上、以大繩兩岸給付之、構轆轤、乘人渡之、名葛籠渡、自是中宮分也(略)

と記している。尾添の加宝社は、虚空蔵菩薩の垂迹であると、すでに『白山之記』に取り上げられているのである。<sup>(6)</sup> <sup>(7)</sup>

尾添は、現在石川県尾口村に属し、加宝社も加宝神社として存続している。

先に紹介した平泉寺の元禄年間の絵図に、境内社の一つとして加宝社の名が見えることを併せて考える時に、平泉寺の虚空蔵地名は、白山における虚空蔵信仰の意味を問い直す、機縁になろうかと思われるのである<sup>(8)</sup>。

### 三 大滝神社神宮堂の虚空蔵菩薩

さて、このように白山信仰における虚空蔵菩薩の意味を問い直すとき、大滝神社・神宮堂の虚空蔵菩薩像の存在が注目されるのである。

大滝神社は、武生市の東方、福井県今立町にある。平泉寺とも深く関わり、同様に織田時代に焼き払われて宝物・記録の多くを失っている。白山三社を祀る社殿は、江戸期、天保年間の再建で、国の重要文化財に指定されている。裏山の権現山頂に奥の宮があり、祭礼には、御輿の神幸が行われる<sup>(9)</sup>。

虚空蔵菩薩を祀る神宮堂は、大滝神社の現在の境内ではなく、やや離れた大滝地区にある。といつても、この地区の寺院は、かつては大滝神社の僧坊であったと伝承され、神宮堂も大滝神社との関係を考えるのが妥当であるとされている。神宮堂には、現在、虚空蔵菩薩を中尊として阿弥陀・薬師を加えた三尊が祀られている。

神宮堂の虚空蔵菩薩について、『福井県史』をとりあげてみたい。

神宮堂の木造虚空蔵菩薩坐像は、像高四九・三センチ、檜の一枚から彫り、内ぐりはない。両手先（前膊の天衣の懸かる部位から先）、全身の漆箔や頭髮の群青彩は後補である。

図4・1・1

### 白山周辺地図

#### 白山三馬場と登山道



像は、首をやや前に出し、両肩を引いて胸を大きく張り、胴を強くしぼって、厚味のある膝を堅く組んで坐る姿で、やや重たげな頭部、頬の引き締まる面長の顔、瞳をこらす厳しい表情をもつ。(略)本像の表現は、やや硬さは認められるものの、堅実である。肉身にまとう衣の襷は、補修のためやや浅く、鈍くなっているが、天衣はその縁をしのぎ立てたり、途中で反転させるなど、原状をうかがわせるものがある。なお、平安時代初期の密教菩薩像では天衣を懸けないのが常態で、先に挙げた白毫寺像が天衣を懸けているのは、むしろ古例を採用した異色

作とすべきであろう。

このように眺めると、本像は先に挙げた奈良の木心乾漆坐像の系譜に連なるもので、その製作は九世紀の半ばあるいはそれよりやや以前に上げて考えられよう。本像の教義的な意義や図像、それがなぜ国府に近い今立町大滝の地に伝えられたかについては後章（大滝寺の項）に譲るが、越前古代の仏教美術のあり方や水準を想像する上で重要な一遺品といえよう。（略）

白山信仰の寺社、大滝寺の遺品のうち最も注目される大滝・神宮堂の木造虚空蔵菩薩坐像が白山信仰とどうつながりを持つかはつきりしていない。本像は大滝神社の門前、大滝の大滝川沿いの小高い場所にある神宮堂という小堂に安置されている。この神宮堂は文政一三年（一八三〇）の「大滝権現明細帳」に「神郷堂 本尊虚空 蔵菩薩 右外ニ離れ在之候」とあるのに当たり、さらにそれ以前は、延享五年（一七四八）の「大滝児大権現御影開帳記」に天正三年の滅亡以前からの摂社の一つとして「虚空蔵」とみえるものがそれであると思われる。

神宮堂には中央に虚空蔵菩薩、その左右に薬師如来・阿弥陀如来が三尊形式で安置されているが、いずれも平安時代後期の、それぞれ作風を異にする作である。（略）

要点は、その製作が九世紀の半ば、あるいはそれよりやや以前に上げて考えられ、かつ中央において製作されていること。この虚空蔵菩薩像が、白山信仰の寺社である大滝寺の遺品として最も注目されるのだが、白山信仰とどうつながりを持つかはつきりしていないということかと思われる。

いまこの神宮堂は、三田村氏をはじめ一二軒によって保持されており、七月一三日に祭礼が行われている。今立の名を全国的なものとしている越前和紙の生産に、三田村氏一族は大きな力を持っていた。

かつて戦乱の時代に、大滝神社が襲撃を受けたとき、三田村惣左エ門氏の前庭に虚空蔵菩薩を隠し、後日掘り起こし、現在の堂に祭祀しているのだと伝承されている。

#### 四 法輪寺様式虚空蔵菩薩

大滝神社の虚空蔵菩薩は、右手に宝剣をもち、左手に直接宝珠をもつ坐像である。平泉寺四至虚空蔵菩薩の姿、また尾添加宝社の虚空蔵菩薩の姿をいま知ることが出来ないのは残念であるが、石徹白大師堂の虚空蔵菩薩は同様の様式を示している。

そして、先にふれた、美濃高賀山と能登石動山においても、同様な像容をとっているのである。

この右手に宝剣を持ち、左手に直接宝珠を持つ虚空蔵菩薩の像容は、『白宝口抄』に<sup>10</sup>、

秘蔵記云。虚空蔵菩薩肉色。左手持開敷蓮花。上在如意珠玉寶。右手持寶劍（略）又法輪虚空蔵。

左持如意寶。右執寶劍也。

とあるように、法輪寺様式である特別な像容なのである。

法輪寺は、京都の嵐山にあり日本三虚空蔵のひとつとして、虚空蔵信仰の最も重要な寺院である。現在も、「十三まいり」という男女十三才になったものが、虚空蔵菩薩に知恵と福を祈る行事が行われ、賑わっている。法輪寺の本尊虚空蔵のお姿は秘仏であり拝することが出来ないのであるが、戦国期、慶長年間の記録や、現在法輪寺の護符などの資料は、まさに法輪寺様式の像容である。

法輪寺本尊の虚空蔵菩薩は、「法輪寺縁起」によると、次のような由来を説くものである。

『法輪寺縁起』(11)

右寺者。道昌僧都之建立。勝驗無双之靈地也。明星留光於當山砌。虚空蔵現於禪衣袖以降。居諸推移。(略)

道昌者。讚岐国香河郡人。弘法大師御弟子。俗姓秦氏。(略)延暦十八年(七九九)己卯三月八日誕生。(略)天長五(割注 淳和天皇十年内五年也)年(八二八)戊申就神護寺僧都(割注 弘法大師)登灌頂壇受真言大法。(割注 年卅)。然後為修虚空蔵求聞持能滿諸願法尋求勝驗之地。大師教曰。於葛井寺(割注 今法輪寺)可修之。彼山靈瑞至多。(略)

仍同六年(割注 己酉)(八二九)參籠百箇日。修求聞持法。夏同五月之比。皓月隱西山之後。明星出東天之暎。奉拜明星汲闕伽水之處。光炎頓耀。宛如電光。恠而見之。明星天子來頭。虚空蔵菩薩現袖。非画非造。如縫。如鑄。雖經數日其體不滅。尊像儼然。異香芬馥。是則生身御體。奇特靈像也。誰緩欽仰之誠。於是道昌造虚空蔵形像。奉納件影像於彼木像之中。則於神護寺弘法大師供養之。(略)

空海の弟子である道昌が、虚空蔵菩薩を本尊とする求聞持法を修したところその百日目の満願の日に、虚空蔵菩薩が明星となって空から下り、道昌の衣の袖に縫ったように、鑄こんだようになった。喜んだ道昌は、衣の袖の虚空蔵菩薩の姿どおりの仏像をつくり、その胎内に衣の袖をおさめ、師である空海を導師とし神護寺において開眼供養をしたというのである。

この『法輪寺縁起』によるなら、道昌の衣の袖に出現した虚空蔵菩薩は、それまで知られていない像容であったことになる。というのが、道昌が求聞持法の本尊として信仰した虚空蔵菩薩とは、違った像容であったからこそ、その衣の袖をモデルとしたのであって、求聞持法の本尊である虚空蔵菩薩と同じ



であるなら、ことさら衣の姿にこだわらず、儀規どおりのものを造ればよいからである。

『白宝口抄』の記事は、このことをふまえると、よく理解される。法輪寺様式の虚空蔵菩薩は、法輪寺と道昌の系譜を継承するものと、理解する必要があると思われる。ともかくも、大滝神宮堂の虚空蔵菩薩が九世紀の中央作とするならば、法輪寺様式の現在知られる最古の作例である。

道昌の奇瑞によって出現した法輪寺の本尊である虚空蔵菩薩が、道昌の師である空海によって、神護寺において開眼供養を行なったと、先に紹介した。神護寺は、五大虚空蔵菩薩という、虚空蔵信仰のまた別な特徴的な一面を主張することで知られている。

神護寺があり、法輪寺の位置する嵯峨の奥山にもあたる愛宕山は、比叡山をしのいで京都の町から望める第一の高峰である。

このようにみると、古代仏教において愛宕山は、虚空蔵信仰と深く結びついた所だと考えることも出来ようかと思える。この愛宕山の開創縁起に、

愛宕山 或阿太子

サレバ役ノ小角ガ泰澄ト伴ヒテ。雲ヲワケシハ（略）（12）

というように、白山を開いた越の泰澄の事績が語られることは（13）、法輪寺様式虚空蔵菩薩と白山信仰との結びつきの中でこそ、理解されていくのかも知れない。（14）（15）

註

(1) 福井県大野郡平泉寺村、昭和五年一〇月刊、三八七頁。

(2) 参考のために『平泉寺文書・一三七』の全文を以下に記すことにする。傍線・引用者。

【平泉寺文書・一三七】

天保一四卯（一八四三）年三月

「四至内山境並虚空蔵宮木伐採論済口証文」

差上申済口証文之事

越前国大野郡和解のししの村が色くけ村賞前村役人壮大着た志村昌や小左衣文外ふた人より堂郡平泉寺村昌や五郎右衛門外貳拾人江相懸り不法出入去寅十月中

阿部伊勢守様江奉出訴當卯正月廿五日御差日御尊判頂戴相付候處相手方ヨリモ返答書差上御吟味中之處懸合之上熟談内済仕候趣意左ニ奉申上候

一右出入訴訟方ヨリ申立候は若猪野村外三ヶ村ハ、青山大和守、下毛屋村外貳村ハ小笠原土用犬丸、右両領主役場エ、北谷山秣御年貢米上納仕、同山エ入會致薪秣苧取田畑肥ニ致し来候處、同山エは、私共村々ヨリ手遠ニ付、相手方ニて、近年彌増長新開致し、秣不足ニ相成、田畑及違作候ニ付、新開之分荒搔散候様懸合中、去寅五月中、私共村々之者共、北谷入會エ秣苧取ニ罷越候處、  
↓御入國以前ヨリ安置され候、同山虚空蔵平、往古ヨリ生立有之候目通凡貳丈四五尺廻之古木伐倒、挽杣共大勢罷在候段秣苧取候へ共申聞候間、私共村々役人登山致し見候處、板貫ニ挽割居候間職人ニ承候得は、比嶋村源兵衛と申もの、平泉寺村九兵衛後家とみヨリ買受候由ニて、源兵衛ヨリ被相頼候旨申ニ付、差留置、とみ組相手五郎右衛門方エ罷越、

私共進退北谷山虚空蔵平之大杉、右とみが源兵衛エ賣渡候由ニて伐木いたし候趣、取調呉候様懸

合候處、五郎右衛門初村役人共ハ、一向不存儀ニ付、相對掛合可致旨申聞候得共、女儀之事故取調之儀相頼候處、とみ呼寄懸合候得共、

北谷山虚空蔵ハとみ屋敷内氏神虚空蔵本社之趣ニて、社木賣渡候旨相答候ニ付、篤卜相糺村役人共ヨリ可及挨拶候間十五日迄日延致呉候様申ニ付任、其意相待罷在候處、五郎右衛門外貳人罷越、

とみニ承候處、北谷山虚空蔵ハ居屋敷氏神本社ニて進退いたし候ニ付、賣木致候旨申聞候ニ付、北谷山ハ私共七ヶ村入會進退山ニ付、古木猥ニ賣渡候段とみニ心得違為辨木品相渡候様懸合候處とみエ申問候上ニて挨拶可仕旨ニて立帰り其儘挨拶無之候間尚懸合候得共等閑置候間伐木エハ番人附置懸合候得共、彌不法申募リ、殊ニ新開發いたし秣及不足田畑相続方ニ抱候旨申立、既ニ小左衛門外壹人ヨリハ、私共出府跡ニて去寅九月中猪野村八郎右衛門ヨリ別紙一札差入候程之儀之旨御吟味中申立且相手平泉寺ニて者、同村並訴訟方七ヶ村共、往古松平越前守様御領分之砌ヨリ訴訟方七ヶ村ハ北谷山エ入會、當村之儀者、経ヶ嶽奥かう地ヨリ三ツ頭迄薪秣田肥等刈取、就中正保宝曆之度々御檢地有之村高三千石余之内、字北谷川向北谷山裾通り貳百石余之御田所當村進退之古田御水帳ニも顯然相分リ、中々以谷合平地を見立新開切発仕候場所ニてハ、曾以無御座、

虚空蔵社ハ往古ヨリ當村九兵衛進退いたし、社破損零落之節ハ同人方ニて社木を以修覆造営いたし候儀ハ古例ニ付、去寅五月中社及大破候間後家とみ為修覆右境内之杉伐木いたし候儀を、訴訟方之もの共女子と悔リ難題申掛候、而已ならず、同六月十四日訴訟方七ヶ村之もの共大勢罷越、平泉寺村進退荒畑之立木五拾本余理不尽ニ伐倒逃去候上、同七月中訴訟方若猪野村百姓與次兵衛

儀、右北谷山裾通り當村御田所エ立入秣刈取田畑相荒候ニ付人馬共取押早速領主役場エ申出、大和守様御役場エ御懸合中、訴訟人小左衛門我意ニ募御訴訟申上候由ニて出府後双方御役場御掛合之上與次兵衛儀ハ人馬共相返し遣候次第ニて訴訟方之もの兎角右御田地可奪取存意を以種々好斗取巧品々乱妨相働私共愚味柔弱ト見掠乍恐、慶長年中越前中納言様御一領以來之儀、長文ニ書並候得共、更ニ取留候儀無之、玄成院腰杯ト無跡形儀を申立奉出訴候段、逸々偽ニて訴訟方村々一到ニ無之小左衛門一己之好斗ヨリ企候出入眼前事實相分リ候儀付同人出立跡ニて扱人立入夫々御水帳エ引合、場所見分いたし、境立仕無申分熟談相整議定為取替、村々連印之書面持之訴答村々惣代出府仕候處取早

御尊判頂戴之跡、途中行違ニ相成候間無余儀御差日待罷在候處、猶又小左衛門出府同人一己之我意強勢ニ任せ、村々一同納得ニて相整候内済破廢いたし、當村御高辻之場所可奪取巧何共難渋至極仕候間、國許ニおいて内済議定之通被 仰付度段其外品々答上御吟味之處、懸合之上左之通対段仕候

〔筆者注：以下は裁定〕

一、七ヶ村入會北谷山と平泉寺村分北谷田畑境筋之儀、是迄双方進退仕来通り御吟味前於國許双方村役人立會相改候境筋之通相心得、尤向後不將無之様、年々四月中双方村役人立會可到見分事

一、虚空藏宮之儀は、平泉寺村九兵衛信仰勝手を以、宮造營修覆いたし候儀、同人可為心持次第

一、右境内ニ有之候立木は、以来共双方一切伐木致間敷事組北谷山之内、枯木折木等有之節ハ、

入會七ヶ村立會相改無甲乙右村々にて引取可申事

一、右境内下草之儀は、在来通四至内七ヶ村より刈取申事

一、右境内之杉木、去寅平泉寺村九兵衛伐木之儀ハ、扱人貰受、双方聊無申分熟談内済仕、偏ニ御威光を難有仕合奉存候然ル上者、右一件ニ付重て御願筋毛頭無御座候依之為後證連印済口證文差上申處如件

天保十四卯年（一八四三）三月

青木大和守領分

越前國大野郡

若猪野村

北市村

上高嶋村

下高島村

訴訟人 右四ヶ村 「筆者注…★は四至内七ヶ村」

小前村役人惣代

右 北市村庄屋

小左衛門

同 若猪野村同

吉兵衛

小笠原土用犬丸領分

同國同郡

下毛屋村

猪野村

猪野毛屋村

★ ★ ★

右三ヶ村

小前村役人惣代

右猪野村同

八郎右衛門

同

同領分

同國同郡

平泉寺村庄屋

五郎右衛門

同清七

九兵衛後家 とみ

長百姓 三右衛門

同 助右衛門

同	同	同	同	百姓	御朱印地 玄成院門前	庄屋	字 横江	惣代	長百姓	庄屋	字 岡	惣代	長百姓	庄屋	同村之内字 赤尾	同	惣代
八兵衛	仁右衛門	仁六	武兵衛	仙右衛門		惣右衛門		甚右衛門	與七郎	忠右衛門		市郎兵衛	藤七郎	斎右衛門	瀬左衛門		平次郎

右拾九人惣代兼

右

平泉寺村

相手

庄屋

八右衛門

同

同

治右衛門

御評定所

前書之通済口證文

御評定所エ奉差上候ニ付向後違論無之コト双方為取替置候處仍如件  
右

小左衛門

黒印

吉兵衛

黒印

八郎右衛門

黒印

八右衛門

黒印

治右衛門

黒印

(裏面) 継目十六ヶ所ニ黒印各五顆アリ

(3) 「大字平泉寺には他の大字に見ること能はざる観音講二、薬師講一、地藏講三、天神講一、白山講一、伊勢講二、善光寺講二、虚空蔵講二、太子講二あり、尚和讚講、真宗教社等二十を数ふる講会あり、古来平泉寺は天台宗に属し、檀信徒あるを以って、之等に依りて企てられ、真宗の人



も参加し、少きは六七名、多きも四十名に過ぎざる講員と、基金として拾円乃至五拾円を有し、事業としては冬季間一回講員の自宅を輪番に会場となし、仏像を揚げて読経したる後飲食を為し、雑談を交へて散会するを例とす、此の基金は飲食の為に設けられ、信仰の目的たる諸堂の維持、又は参拝の旅費を作らんとするにもあらず、説教講話を聞かんとせせず、仏事なりと号して一日の遊惰に耽るのみ、而して此の数多き講会中には、牛首を懸げて馬肉を売るの輩もありと聞く。」（『平泉寺史要』九一五頁。傍線・引用者）

(4)白山信仰が、越前、加賀、美濃に広く展開することは、登山口であり信仰の拠り所である馬場がこの三国に置かれたことから容易に理解できる。しかし、橋本征治先生からご指摘をいただいたように、白山への登山道は、越前側（富山県）、飛騨側（岐阜県）から通じているのである。これら越前、飛騨の白山信仰あるいは虚空蔵信仰の展開にも十分に注意を払う必要がある。越前側については、能登の石動山関係の虚空蔵信仰が展開していることは知られているが、白山麓については未だ資料に巡り会うことが出来ない。

飛騨については杉本壽『木地師制度の研究 第一卷』の第二章「飛騨国の木地師制度」第一八節「長者屋敷と虚空蔵大菩薩」として次のような記事がある。

「山之村虚空蔵山の由来についても、漆器神と飛騨木地師とのつながりが認められるようである。元和年間（一六一五）に三ヶ年にわたる冷害がつづき、大凶作のため餓死者が続出したので荒城郡高原郷の神岡村や山ノ村など七ヶ村の領民たちが、大野郡高山天神山城主たる従五位下金森出雲守重頼に年貢米や諸賦役の免除方を嘆願した。そのおり梶屋市蔵なる人が、京都嵐山の虚空

蔵寺から虚空蔵大菩薩の分霊をお受けしてきて四海を臨む虚空蔵山に祀り、毎年農休み日や孟蘭盆（陰暦七月十五日）に凶作除を祈願するようになった。爾来凶歳を迎えることがなかったが、春雨など長く霽れざる時には夕刻より虚空蔵山に籠って天候の快復を祈り豊作を願うのである。寒冷の山ノ村地方の文政十二年（一八二九）代村々の状況は、森茂村が高五十五石八斗一合、家数二十六軒・人数百五十人。伊西村は高二十六石二斗五升、家数十八軒・人数六十八人という状況で過疎農村の現状に照し合せば実に賑わっていたことがわかる。しかし一千米の高原の山村で、このような戸口を維持することは経済的にも困難なことであり、石高もまた少なくはないことが知られる。氏神は白山神社であるが、同社記によると文治年間（一一八五〜九〇）の記録があるから、かなり昔からの開発地であり天正年間（一五七三〜）には領主江馬輝盛が廻村して御社を再建しているのである。」（清文堂出版、昭和四九年刊、四六〇頁）

山之村虚空蔵山は現在、鉾山で知られた神岡町にあたり、白山よりはかなり東に位置している。そして、この虚空蔵山は木地師との関係で祀られたと主張され、京都嵐山の法輪寺との関係を説いている。したがって、これをただちに白山信仰のものとするのが出来ないのは当然であるが、この近隣の氏神がおしなべて白山神社であることを考えると、やはり興味深い存在である。

(5) 『白山之記』

白山之記云

加賀国石川郡味智郷有一名山、号白山、其山頂名禅定、住有徳大明神、即号正一位白山妙理大菩薩、其本地十一面觀自在菩薩、建立一間一面宝殿、安置五尺金銅像、殿前繫一尺八寸鰐口、依末

代聖人請禪頂法皇御願也、又立長一丈錫杖、同讚同御願、東有社、号兒宮、如意輪垂迹也、西有一社、別山本宮也、

北並峙高峰、其頂住大明神、号高祖太男知、阿弥陀如来垂迹也、建立一間一面宝殿、安置五尺金銅像、其前立一丈錫杖、末代如前、繫一尺八寸鰐口、願主越前国足羽住証意、

南去数十里、有高山、其山頂住大明神、号別山大行事、是大山地神也、聖觀音垂迹也、有一間一面宝殿、安置五尺金銅像、殿前立錫杖、末代如前、繫一尺八寸鰐口、香呂一枝、如前証意、此名白山三御山御在所、

後一少高山名劍御山是麓有池水、号翠池、適得其水嘗之、延齡方也、大山傍有玉殿、翠池權現出生給也、西有小社、別山本宮也、奉讓權現、南山渡給也、池西有深谷、雪積未曾消滅、是名千歲谷、谷南名龍尾、其麓泰澄大師行通跡、雖經四百有余歲、其跡不生草木、聖跡新也、若是雖大師入滅後、常行給、凡眼不及歟、

即彼山泰澄大師奉行顯給也、池上一岡、云稻倉峯、或云大師縛石、又有一峯、云皮籠峯、凡案山為躰、不異震旦五台山、五台大聖文殊栖宅地、白山觀音サ夕利益砌也、一度踐清涼峯者、必預文殊利益、一度白山攀類、不疑觀音、冥助者歟、

(略)

次有宝社、名加宝、虚空藏菩薩垂迹也、次大河上、以大繩兩岸給付之、搆轆轤、乘人渡之、名葛籠渡、

字五自是中宮分也(略)

(6)井上鋭夫は「白山への道」で、尾添について、ここから奥が神域であり女人が立ち入ることができなかつたとしている。「中宮は大汝峰を真正面に望む遙拝所であり、また尾添川を渡って白山の山中に入る基地でもある。かつては尾添川の兩岸に大縄を結びつけ、ろくろを利用して川を渡る「葛籠渡」があつた。ここからみそぎ場である祓川を越えて尾根に達するところに、「練行之輩」が集集して精進勤行する「檜新宮」（日新宮）がある。この宝殿は二つあつて、それぞれ「大行事」と「太男知禅師権現」をまつているから、これこそは自由本来の地神と見るべきものであり、この檜の神木こそは入山者の行場の位置を示すものであつた。中宮の対岸の尾添の加宝宮は、虚空蔵菩薩の垂迹とされ、社後に洞窟をもち、現在も檜材一木造りの平安末ごろの十<sup>一</sup>面観音立像や十<sup>一</sup>面観音坐像のある懸仏などがある。やはり尾添の地神が、白山の王子となつたものである。この加宝宮から神域つまり修練場になるため、女性は中宮までしか登ることができなかつた。

この宮（引用者注・中宮）には、入山修行を終えた行人たちがおさめた文明十六年（一四八四）と十七年の行人札がある。これは一種の白山聖域での参籠札であつて、行人は遍照金剛と称し、修行の基地は虫が尾社で、百余日も山中で修行している。行人の年齢は二十歳の若さから七十六歳の高齢に達するものまで見られ、修行の場所としては、当峰・二の峯・三の峯などが記されている。大汝峰から別山を経て、岐阜県と福井県との県境まで縦走し踏破しているようである。中宮とは、二の宮のことで、本宮につぐ重要な存在であつた。往時は幾多の僧兵と坊を擁し、『白山記』の著者隆巖も中宮の長吏であつた。だがここは女堂のいみをもっているので、祭神は大己

貴神（大黒天）ではあるが、根本の本地は如意輪観音とされている。しかしのちには白山三所権現をまつるとされたので、現在の神殿のなかには、大黒天・鬼子母神・神像のほか、阿弥陀如来・十一面観音・聖観音つまり大汝峰・御前岳・別山の本地仏が安置されている。本来の宮は現在の神社の背後の高台にあったらしい。しかるに加賀側からは大汝峰は遠望できるが、別山はとうていみることができない。つまり白山三所権現というのは、美濃や越前からの登拝者の考え出したものである。したがって越前の麻生津（福井市）で生れ、越知山で修行したという泰澄が、加賀でも美濃でも、白山を開いたと信ぜられたように、この地方の白山信仰には越前からの圧倒的な影響があるし、その結果として中宮もまた白山三所権現を奉祀することによって社格を向上できたと考えられる。」（傍線・引用者 下出積與編、民衆宗教史叢書第一八巻『白山信仰』所収、雄山閣出版、昭和六一年五月刊、九六頁）

(7) 井上の論考にみられる中宮の文明年間の「行人札」を発見したのは下出積與である。「わたしは（引用者注…下出積與）加賀馬場の禅定道であった手取川支流の尾添川中流域を調査した昭和三十六年の晩秋、吉野谷村中宮で社家の由緒をもつ家で、表面を蒲鉾状に削った木札を二枚発見した（現在、筥笠中宮蔵）。文明十六年（一四八四）と同十七年の二枚とも陰刻の銘文に行人とあるので、苦しまぎれに「行人札」と仮りに名づけて発表したためか（同年十二月二日『朝日新聞』）、以後の諸書もこの称をとっている（文化庁『白山を中心とする文化財』、桜井甚一『石川県銘文集成』中世金石文編）。しかし、正確には修験者の「参籠札」というべきであった。この機会に訂正しておく。さて、その文明十六年のには、表面のみに陰刻して、

天 歳次 甲辰 三峯行人遍照金剛弥勒財得房五十九 仙秀乘音房廿七

当峯行人遍照金剛栄賀財玉房七々 遍 利澄南養房廿五百

虫尾 文明十六年曆 当峯行人遍照金剛宗乘実房卅七 当 通盛西城房廿二 日数

当峯行人遍照金剛栄鎮円鏡房六七 金 盛賀明林房二十余

等 六月下旬 二峯行人遍照金剛覚実禅経房五<sup>(十カ)</sup><sub>八<sup>(カ)</sup>七</sub> 盛鎮禅密房廿三

盛朝慶禅房廿六

とあり、これよりやや小形の文明十七年の表の陰刻した銘文は、

天 三峯行人遍金亮海地藏院五十 行 什運文琳坊卅二 栄乘玉坊廿三

長喜地明坊五八 重祐乘養坊三七 百

虫尾 文明十七年乙巳五月中旬当峯秀経宝乘坊 日数

永経乘藏坊卅七 乘宗三輪坊四五 余

□ 当峯行人遍金盛澄玉聖坊五八二人 円心千藏坊廿七 盛等経舜坊廿二

であり、表面には「本貴玉聖坊」との墨書があるだけである。この両札ともに中心標識としている

「虫尾」とは、加賀馬場や越前馬場のいずれの禅定道からも少し離れている牛首川と手取川本流

と尾添川の合流点より上流の異称の流に上流にあった虫ガ尾社（昭和九年の大洪水で流失）のこと

で、ここをベースにして百余日間山中に籠もって修行したのであろう。「三峯」は御前峰・大汝

峰・別山（小白山）の白山三峰を、「二峯」は御前峰とおそらく大汝峰を、そして「当峯」は御

前峰をさすものと考えられる。文明十六年の財得房弥勒等十一人と同十七年の宝乘坊秀経以下の

十一人は、いずれも百余日の入峰練行を終え下山した六月下旬と五月中旬に、それぞれ参籠札を中宮三社の中心である筭笠中宮に納めたのであろう。そして、この参籠札に現れるこれらの二十二人の行人は、みな「遍照金剛」と称している。おそらくこれは、真言系すなわち当山派の修験者であったことを示すものと思われるが、これは白山の三馬場がいずれも天台別院であっただけに、留意すべきであろう。」（傍線：引用者。下出積與『白山の歴史―神と人とその時代―』北国新聞社、一九九九・五刊、一一七頁。白山信仰に関する最新の著作である本書を、富沢霊岸先生から頂戴したことが、この小論を考えるひとつの契機となった。引用文中ではなはだ失礼ではあるが、感謝の意を表したい。）

(8) 「白山平泉寺の中世における四至には『靈応山平泉寺大縁起』によると、「良の峰には虚空蔵、巽の峯には荒神、乾の峯には比嶋観音、坤の峰には禅師王子」の四神が「平泉寺の四天王」として鎮座し、それぞれの間、即ち「当山四方の行程」は「各一里を隔つ」とある。

その四至内における境内諸施設として、次のやうなものが当社蔵の屏風仕立ての『白山天嶺并当寺絵図』（図柄は天正以前、筆は元禄期の馬場信武筆。）によって知られる。この図の「当寺絵図」即ち「中宮平泉寺絵図」の部分にみられる諸建造物などに関する表記は左の通りである。

#### 霊山

劔宮 白山本道 三宮 三宮鐘楼

祇園 西蓮院 荒神・石 諏訪八幡 拝殿 大師堂 新三昧堂 一切経蔵 葛城明神 金劔 別

山 若宮八幡 稲 荷 玉泉坊 林禅坊 弁財天 賢聖院 大鐘 法花堂 薩摩堂 明王院

熊野 神明社 稻荷社 如法堂 虚・空・蔵 不動堂 楠廟 納経所 大御前 越南知 加・宝 三十  
 三間拝殿 三峯  
 只州宮 大塔 常行堂 南大門 神明 胎坂 大覚院 木曾宮 御供所 十一面観音 弥勒堂  
 池尾明神 大師 堂 弁財天 隠桜 合坂 地藏 閼伽水 観音堂 薬師堂 金坂 春日明神  
 構口門 貴布祢 禅・師・王・子 箱渡  
 大講堂 廻榔 金燈籠 御供水 閼伽水 佐那嶽 石大橋 惣門 地藏坊 花王院  
 多宝塔 平泉 影向石 勅額下乘仁王門 判官釜 今天神 鐘楼 摩多羅神 勸学堂 如法  
 堂 正観音 結神 大師堂 東尋坊 天神  
 明光院 今宮拝殿 今宮鐘 伊勢両宮 今宮塔 鎮守宮 拜殿 蔵王権現 十王堂 優婆堂  
 松尾三昧 金札 下馬大橋 児宮 日御前 和芳堂 大師母君御廟

(略)

中心の五社の中で特に大御前（本殿）と別山社と越南知社の三社を「白山三所権現」と呼ぶ。そ  
 してその両横の金剣・加・宝・二社と本殿後方の三宮、並びに佐羅社の計四社を加へた七社が「白山  
 中宮七社」と呼ばれた。これ以外の今天神・祇園社・春日明神など計四十一社をあはせて、当社  
 境内の社数総計は四十八社であった。『靈応山平泉寺縁起』によると、それ以外の諸堂諸坊を含  
 めて「一山都計神宮四十八社、三十六堂、僧舎三百余院なり。」と記してゐる。

これらの外に、南谷三千六百坊、北谷二千四百坊があったと『白山天嶺并当寺絵図』に記されて  
 る。近年、勝山市教育委員会が南谷の坊跡の発掘を行ったことにより、天正の焼失以前には多



くの坊（同絵図の記載によるところの南北両谷あわせて六千坊の立証は難しいとしても）が存在してゐたといふことが判明した。」（傍点・引用者）

また、貞享二年（一六八五）に成立した『越前地理指南』の平泉寺の項によると、

一 平泉寺

児権現 日ノ御前 人宿り 大橋 貴布祢 金ノ札昔此所ニ金ヲ埋札ヲ立タル由 鎮守宮 今  
宮 地藏 閼伽水 拝殿 千体仏 下馬 結ノ神躰石神木杉 泰澄和尚石塔 弁財天 池尾  
神明 撞鐘伊達秀衡寄進 開山堂泰 澄自像自作 義経釜跡 愛宕堂 平泉の内ニアリ影  
向石 泰澄初て登山の時向此池ニ懇祈の節白山権現此石ニ影向シ給し由 閼伽水 御供水 辻燈  
籠 講堂慶長八年三位源秀康公御建立 拝殿

金剣

別山

本社

奉納所

大己貴

加宝

楠石塔

虚・空・蔵・三宮 荒神石 剣ノ宮

良 虚・空・蔵・四至山の内 巽 荒神石

四天

坤 禅師王子下荒井村 乾 観音比嶋村

とあり、平泉寺には、四至虚空蔵、加宝社とはまた別に、虚空蔵を祭祀する堂があったことが知られる。

- (9) 大滝寺が白山信仰と関係することについて、『福井県史通史編二 中世』には次のようにある。
- 「白山系寺院にはこの（引用者注 平泉寺）ほかに、丹生郡大谷寺、今立郡大滝寺・長泉寺、坂井郡豊原寺・千手寺などがあつた。なかでも豊原寺衆徒は僧兵として勇名を馳せており、平泉寺とともに越前を代表する大寺である。織田信長の焼打ちや明治期の神仏分離の影響もあつて現在は廃寺となつているが、平泉寺と同様、故地には厩大な寺坊跡が残されている。十五世紀中ごろに成立したと考えられる「白山豊原寺縁起」によれば、寛喜元年（一二二九）豊原寺は延暦寺と本末関係を結んで妙法院門跡領となつている。従来は園城寺や興福寺とも宗教的交流があつたが、以後は山僧（延暦寺の僧）を学頭に迎えて天台宗への純化を図つたという。また嘉暦元年（一三二六）と至徳二年（一三八五）には平泉寺と相論となり、いずれが本寺であるかを争つたが、最終的に豊原寺の主張が裁許されたという。」（福井県 編集・発行、平成六年三月刊、一一五六頁）
- (10) 『大正新修大蔵経』図像第六卷・四一〇頁、虚空蔵法・形像異説事。
- (11) 『大日本仏教全書』第一一七卷・寺誌叢書、二四三頁
- (12) 『京師巡覧集』（『新修京都叢書』第一一卷）二二三頁
- (13) 泰澄関係の寺院が、滋賀県から京都府の南山城にかけて見られる。その一部を次にあげるが、滋賀県北部の真言宗寺院はほとんどが新義真言宗に属している。このことについては、今後さらに検討を加えたいと考えている。

寺号	所在	宗派	泰澄との関係伝承・仏像
岩間寺 (正法寺)	滋賀県大津市石山内畑町	真言宗	養老六年泰澄開基、千手千眼観音
法蔵寺	滋賀県大津市石山内畑町	浄土宗	養老年間泰澄開基、阿弥陀如来
弥高護国寺 (悉地院)	滋賀県坂田郡伊吹町弥高	真言宗	養老年間泰澄開基又は役小角開基・ 泰澄中興、大日如来
上平寺 (杉本坊)	滋賀県坂田郡伊吹町上平寺	真言宗	泰澄開基
小谷寺	滋賀県東浅井郡湖北町伊部	真言宗	神龜五年泰澄開基、大日如来
渡岸寺 (光眼寺)	滋賀県伊香郡高月町渡岸寺	真宗大谷派	天平八年泰澄作十一面観音
大崎寺	滋賀県高島郡マキノ町海津	真言宗	大宝二年泰澄開基、十一面千手観音
宗正寺	滋賀県高島郡マキノ町海津	真言宗	大宝二年泰澄開基、十一面観音
仲仙寺	滋賀県高島郡マキノ町浦	真言宗	泰澄作十一面千手観音、
金胎寺	京都府相楽郡和束町原山	真言宗	白鳳四年役小角開基、養老六年泰澄 再興
神童寺	京都府相楽郡山城町神童子	真言宗	白鳳年間役小角再建、泰澄寄宿、
蔵王権現			

大道寺 京都府綴喜郡宇治田原町立川（廃寺）天平勝宝八年泰澄建立、

（『福井県史通史編一 原始・古代』福井県 編集・発行、平成五年三月刊、八九四頁によった）

(14) 『福井県史通史編一 原始・古代』には、白山信仰を、天台宗の影響だけで考えることへの危惧が述べられており、空海の系譜をひく虚空蔵信仰の展開にとっても参考とすべきだと考えている。

「白山の信仰を中央の宗派との関係で考える場合、その中心寺院である平泉寺が天台宗寺院であり、『伝記』（『泰澄和尚伝記』）も天台僧の浄蔵の口授をもとにしているなどのことから、『伝記』の性格に天台宗の影響を強く意識する見解も見受けられる。しかし、一概にそう言いきってしまつてよいものかどうか、いささか疑念が抱かれるのは、伝に登場する道昭が日本における法相宗の祖と崇められる人物で、また玄昉も法相宗の僧であつたという事実である。（略）もし仮に、天台宗の僧がことさら泰澄と道昭・玄昉といった法相宗の高僧とを結びつけた伝記を著述したとすれば、それは一体いかなる意図のもとでなされた作為ということになるのであるだろうか。

今一つ指摘しておきたいのは、先に述べたように南山城の寺院に泰澄との関係が多く見受けられるが、この地域は興福寺の影響が非常に強かつた地域であり、また金胎寺・大道寺など行場として発展した山岳寺院は、天台系でなく真言系の寺院であつたことである。むしろ、このあたりの行場は役小角を開基とするものが多く、この小角の住した葛城山はのち真言系の修験の行場とされたことから、これらの寺院も真言系の寺院であつて不思議はないのであるが、最澄とは逆に南都の諸宗派と融合する姿勢をとつた空海が存在を考慮すれば、やはり泰澄の伝は一概に天台宗との関係で形成されたものとはいえないことになるのである。」（福井県 編集・発行、平成五年

三月刊、八九六頁)

(15) 五来重は「高野山の山岳信仰」(山岳宗教史叢書三)のなかで、次のように述べている。「『元亨釈書』のしるすところでは、孝徳朝(六四五〜六五四)に法道仙人が播磨の法華山寺で、金剛摩尼法を修したといい、越の泰澄は天平八年(七三六)の天下疱瘡の勅によって、十一面観音法を修したという。これらはいかなる史料によつて記したのか不明であるが、長寛元年(一一六三)成立の『白山之記』では、すでに白山山頂には密教の十一面観音がまつられ、養老三年(七一九)に御託宣があつたというから、このころ泰澄が白山を開創したものと推定してあやまりはない。ところで白山は大御前峯と大汝峯(越南知事)と別山の三山から成り、越前、加賀、美濃の三方馬場から登山する。泰澄は白山開創前は越前の越知山の行者であつたから、九頭竜川を遡つて白山登頂をこころみたとすれば、当然石徹白からのぼつたにちがいない。この石徹白には中居神社とともに泰澄をまつる開山堂があり、その本地仏は虚空蔵菩薩である。この事実はなんら文献にないけれども、泰澄が密教の虚空蔵求聞持法の行者であつたことを推定される。

この開山堂のある石徹白のちに美濃側から白山登山する基地となつたが、これは石徹白から桧峠を越えれば長良川水系となり、美濃平野にむかつて開けてゆくからである。この長良川水系の白山信仰圏にも虚空蔵菩薩の信仰がつよいのは、泰澄の本地を虚空蔵とする信仰があつたことをもものがたるものである。(略)

真言の密教の日本伝来は、一大学生(引用者注・空海)が、虚空蔵求聞持法にふれたことにはじまる。その求聞持法がいつから日本に入っていたかが問題ではあるが、私はすくなくとも泰澄が

白山を開創する前から、この法を修していたとおもう。」（一四頁）  
石徹白大師堂の虚空蔵菩薩を泰澄の本地仏ととらえることは、氏が言うように必ずしも史料的な裏付けは十分でないまでも、傾聴すべき見解であるといえよう。

## 第二節 虚空蔵信仰の伝播

### 一、能登石動山の虚空蔵信仰

筆者は、虚空蔵信仰を通して、日本の仏教民俗の一側面を理解しようと考え、まず「十三まいり」という男女が十三歳になると、虚空蔵菩薩に知恵と福とを願う行事に注目し、それを虚空蔵信仰の近世的な展開であると論じた<sup>(1)</sup>。また、十三仏事の年忌供養における最終三十三年忌の忌日仏である虚空蔵菩薩を、阿弥陀・大日を越えたところにすえられている点に注目して、空海の入定説と空海の虚空蔵求聞持法の信仰が結びつけられたとの推論をもち、これを時代的には中世後半の虚空蔵信仰の展開であると位置づけた<sup>(2)</sup>。

本稿では、中世前半、すなわち鎌倉時代における虚空蔵信仰の展開の様相について、若干の考察を加えていきたい。そして、藺田香融がすでに論じておられる古代仏教における虚空蔵信仰との相異について考える、一つの試石としたいと思う<sup>(3)</sup>。

さて、各地に存在する虚空蔵寺院をたずねて、その歴史と現在の信仰を調査することは、文献による資料収集とともに、私の研究にとって不可欠なことである。現実に虚空蔵信仰にたずさわり、それを守り、育てている人と会いお話をうかがうことで、書物の知識だけでは理解しえない、虚空蔵信仰の広がりや奥深さをお伝えられることが多いのである。

そのような気持ちから訪ねた能登の石動山で、石動山信仰の最後の守り手である西尾さんと出会

い、かつての坊舎の一室で石動山の歴史を伺った時には、筆者の眼前に、石動山隆盛の様がよみがえるようであった。

石動山は、能登国と越中国の境をなす山なみの中にあり、標高は五百メートル程にすぎないが、漁民が網を入れる際の目印とする「山だめ」に使われるなど、特に富山湾側の海上から見た場合、突出した姿が目立っているのである。

この石動山に、かつて三百六十坊、およそ三千人の僧侶が生活していたことは、今では、想像するところが難しくなっている。というのも、石動山は、南北朝期と戦国期に戦火にあい、古代中世の資料のほとんどを失なっているのに加えて、明治の神仏分離の際に、ある者は山をおり、ある者は神職となるなど、一山離散し、宝物類も散逸して多くを残さないからである。

しかし、この石動山が著名であったことは、鎌倉時代中期成立の『拾介鈔』諸寺部に、

石動寺 在能登国 虚空蔵 智徳上人

光仁第四草創

とあることから知られ、中世における虚空蔵信仰を考える場合に、その一大拠点として、今までに多くの論稿が、石動山に関して発表されてきている。ここでは、清水宣英をはじめとした先学の業績によって、石動山の虚空蔵信仰について一瞥しておきたい<sup>(4)</sup>。

石動山には『旧縁起』と称されるものと、新縁起』と称されるものとの二本の縁起書が伝わっている。いずれも書写は近世初期であるが、『旧縁起』については、最近、京都の勸修寺文書の中から同様の縁起書が見つかったことで、成立は中世にさかのぼることが裏付けられた<sup>(5)</sup>。一方の『新縁起』は加賀前田



家の依頼で林羅山が執筆したもので、『元亨釈書』等の記事を中心とした、いわば林羅山による石動山信仰の研究書という性格の強いものである。

石動山『旧縁起』には、この山が方道仙人によって開基されたこと。誉津別皇子が口がきけなかったのを、方道仙人の加持力によって治癒したこと。太朝大師が虚空蔵頭巾の法を修したことなどが記されている。もとより縁起に記載された記事と史実とを混同することは危険であるが、そのような縁起の中に、史料のとぼしい石動山の歴史が秘められていることも、また見のがせない。

田中久夫には「能登方道仙人と十一面観音信仰」の論稿があり、その中で、法道仙人開基伝承の寺院が集中する播磨地方と、この能登の地を結びつける要因として海上交通を考えられる<sup>(6)</sup>。

開基伝承はさておき、石動山が中世においては虚空蔵信仰を中心として盛んな宗教活動を行っていたことは、南北朝期の合戦の舞台となって打撃をうけたにもかかわらず、いち早く復興を成しとげていることにも示されている。江戸時代になると前田家の祈祷所として寺禄五十石があたえられる。神仏分離がこの石動山に致命的な影響をもたらしたことは先に述べたが、それでも戦前までは、いくつかの坊が細々と宗教活動にたずさわっていた。しかしそれも、今では山内にとどまるのは西尾さんと一人になり、西尾さんも八十六歳と高齢なために、冬の積雪期には金沢市内の子供さんの家で過ごし、夏の間だけ、山上で生活しておられるのである。もつとも、山上には県有林の伐採などに従事している戦後入植した数家族が生活しているが、それらの人々も山をおりる者はあっても、新しく登ってくる者はないのが現状である。

石動山に西尾さんとさんを訪ねることになった直接の動機は、西尾家に蔵される石動山護符に心を

ひかれたからである。

〈西尾さと家の護符〉

① 伊須流岐比古太神祈薦護符

伊須流岐比古太神 石動山

御祈禱之牌 西尾菊式藤原高光

② 地藏菩薩護符

高光

(地藏菩薩立像) 石動山天平寺

印施

ここに藤原高光という人物が記載されている。

藤原高光とあることから、私は、藤原師輔の八男で、比叡山に遁世し、のちに多武峯に住んだことから多武峯少将と呼ばれた高光のことを思い起こした。その三十六歌仙の一人である藤原高光であるなら、古来、著名な歌人がしばしばそうであるように、物語・伝説の主人公として、石動山に関係しているのではと思ったのである。

西尾家は、もと延命院という僧坊であった。この延命院は石動山を総括する、天平寺の管長を出すことのできる五か坊のうちの一坊であった。石動山内の各坊は、それぞれ仕事を分担していたので、西尾家のすぐ上にかつてあった花王院という坊は花作りをその職としていたし、他にもそれぞれ決まっていた、警察のような仕事をする坊もあった。その中で、延命院は、薬草作りを教える、大学のような性格

を持つ坊であった。それは明治にまで引き継がれており、大部屋に机を並べて、下の村から登ってきた子供達が寝起きを共にしながら菓草について学んだという。今も土蔵の中には、その教科書となった書物がたくさん残っているという。

西尾さとしさんのお話の中から、私は石動山について多くの知識を得ることができた。しかし、私が想像していた高光という人物に関する伝承というものは、ここでは聞くことができなかった。というのも、この高光はごく最近に実在した人物で、大正十年に七十歳で亡くなった、西尾さとしさんの養父にあたる西尾菊式と同一人物だというのである。

〈西尾家過去帳〉

阿闍梨法印高光和尚

大正十年二月十六日 享年七十歳

西尾菊式という人が、藤原高光とも名のついていたことについて、さとしさんは、西尾菊式は親が付けた名であり、高光(さとしさんはコウコウと呼ぶ)は寺からもらった名で、子供が生まれると代々高光と付けたいらしいことを説明して下さった。養父である高光和尚の後、早い時期に宗教活動から遠ざかったので詳しくはわからなくなってしまったのは残念であるが、石動(イスルギ)の名のもとになった「動寺石」に石垣をめぐらしたのが、この高光和尚が天平寺住職の時であり、石垣の銘文に高光和尚の名が残っているという。また高光和尚の墓は、太朝大師の墓のすぐ近くにあることを聞くことができた。

この項では、西尾さとしさんの出会いを中心として、石動山が中世虚空蔵信仰の山として有名であったことと、その一山を代表する天平寺住職に、時代こそぞい分と遅れるが、藤原高光という人物があり、

その人物が西尾菊式という名の他に僧名として高光和尚と名のついていたこと、その高光という名が世襲であったらしいことを述べてきた。

そこで次項では、藤原高光という人物が開基伝承の主人公として登場し、なおかつ中世以来の虚空蔵信仰の山として知られる美濃の高賀山に目をむけていきたいと思う。

## 二、美濃高賀山の虚空蔵信仰

岐阜から、長良川沿いの快適な国道を北上する特急バスはやがて郡上八幡に至るのだが、その少し手前に美並村がある。ここから、長良川にそそぎこむ支流である粥川にそって道を西へ進むと、谷の一番奥まったところに星宮神社が鎮座している。

この星宮神社は、かつて高賀六社といわれた高賀山信仰の一社であり<sup>(7)</sup>、御神体を虚空蔵菩薩とする。というのも、明治までは粥川寺であったものが神仏分離の折、神社として存続されたからである。星宮神社の川をはさんだ向かい側の一角が「高光屋敷」があったといわれる場所である。

この高賀山も、古代中世の資料が乏しいのであるが、五来重先生の監修になる『美並村史』の発刊によって、その信仰の全体像がようやく明るかにされた。高賀山信仰には、『美並村史』に紹介されているように、近世初期に筆写された縁起が幾本か伝わっており、そこに藤原高光がこの地に住む妖鬼を退治したとの伝承がのせられている。

妖鬼の悪業に困惑していたこの地の人々は、時の都の帝に妖鬼退治を願い出たところ、帝は藤原高光

という人物を差しむかわされた。高光はさっそく妖鬼退治にかかるが、姿を変え、また居所を次々と変えるので、なかなか追い込んで退治することができなかつた。そこで高光が幼少からの念持仏であった虚空蔵菩薩に願を掛けたところ、やがてその利益が現われ無事に退治することできたというのである。

高光について、これを藤原師輔の八男であると考えたいところであるが、『多武峯略記』にみられる高光伝は、鬼退治の話とは無縁であり、また彼にただちに虚空蔵信仰をみい出すこともできないのである。

この高賀山が中世、虚空蔵信仰の山であったことは、多く残された懸仏によつてあきららかである。

〈懸仏御正躰の数〉

	星宮社	高賀社	新宮社
虚空蔵菩薩	一七	三一	一五一
薬師如来	九	三四	二九
阿弥陀如来	五	一一	五
十一面観音菩薩	四	一八	一二
地藏菩薩	〇	〇	一二
普賢菩薩	〇	一	六
千手観音菩薩	〇	〇	七
聖観音菩薩	三	〇	〇
不動明王	〇	一	一
如意輪観音菩薩	〇	一	〇

大日如来	○	一	一
毘沙門天王	○	○	一

また、銘文のあるものが幾面かあるので、それも紹介しておこう。

〈懸仏御正躰の銘文〉

① 星宮神社蔵・虚空蔵菩薩懸仏

延文二年（二三五七）丁酉八月□□二日

願主河□口賢

② 高賀神社蔵・虚空蔵菩薩懸仏

奉施入西高賀御宝前御本地大満虚空蔵菩薩御正躰一躰

（略）嘉禎三年（一一三七）丁酉正月廿八日勸進淨尊

③ 新宮神社蔵・虚空蔵菩薩懸仏

奉鋳頭高賀山権現御正躰虚空蔵菩薩形像一躰金銅鏡面

正嘉元年（一二五七）丁巳十二月十四日大勸進聖人慶西

このように、中世盛んな高賀山の虚空蔵信仰も近世に入ると衰退のきざしが現われ、やがて明治の神仏分離で一山としての機能は崩壊し、わずかに各村落の氏神的な存在として谷ごとに切り離なされて存続して現在に至っている。

数年前、丁度、夜通し郡上踊りが盛んに行なわれていた夏の一日であったが、星宮神社から峠を越えて新宮神社に至る林道を歩いたことがある。ようやく、峠を越え、下り道にさしかかったころから、に

わかには黒い雲が流れだし、ポツポツと雨が降り出してきた。傘の用意もない私達は、ころげるように山を降り、新宮の村にどりついて、その一軒の家に飛び込んで、夕立ちをどうにかやり過ごすことができた。

そのお宅には、全く偶然からお世話をかけたのであったが、実は山田宏氏といい、ここには藤原高光のもう一つの伝説が伝えられているのである。そのことは、『郡上郡史』に、

猿丸大夫ノ出生地其出生地ハ那比新宮、山田小右衛門（現戸主山田末吉）ナリトノ一伝アリ、確ナル証拠トテハ無ケレ共言と伝へニ依レバ天曆ノ昔、藤原高光公高賀山妖鬼退治ノ後新宮山田小右衛門方ニ滞在中其家ノ娘某（或ハ名おあき）高光公ノ胤ヲ宿シ其出生セシ子が即チ猿丸大夫ナリト、

とあり、また大島健彦が、山田宏氏のお父さんから聞きとられたものを、詳細に報告している（8）。

さて、藤原高光の開基伝承を持つ高賀山が、中世の虚空蔵信仰の一方の拠点であることを論じてきた。この高賀山と、前項でふれた能登の石動山とは、藤原高光という人物が登場するという細い糸だけに関係するのでは、決してない。むしろ高賀山と石動山は、共に、その本尊とするところの虚空蔵菩薩が、儀軌にない特異な像容である点にこそ、最も重要な共通性が表出しているのである。

その虚空蔵菩薩の像容というのは、右手に宝剣を持ち、左手に直接宝珠を持つ像容である。現在、石動山上の伊須流岐比古神社に本地仏として祀られる虚空蔵菩薩（近世初期作）をはじめ、かつて天平寺の本尊であり、戦国期の荒山合戦の際に難を逃れて今石動（富山県小矢部市）に移され、その後同地の真宗聖泉寺の客仏となっている室町期作の虚空蔵菩薩もその像容となっている。一方、高賀山においても、星宮神社の本地仏をはじめ、先に銘文を紹介した一郡の懸仏も、この像容である。

さて、このような像容の特異性に早く注目したのは佐和隆研で、「高賀山信仰の美術」の論稿の中で<sup>(9)</sup>、この問題を扱われ、伊勢朝熊山金剛証寺の宝蔵に、一面、この像容を示す懸仏が存在することから、伊勢朝熊山で修業した修験者が、伊勢信仰との関係を持つ虚空蔵信仰を流布するために、新たな像容を創出し、それが高賀山にも流布したのではないかと考察した。

実際、伊勢朝熊山も虚空蔵信仰の山として著名であるので、高賀山、石動山との交流があることは十分考えられる。しかし、佐和の論をそのまま継承した上で、それを石動山にまで発展させ、伊勢朝熊山↓高賀山↓石動山という信仰伝播ルートとして考えた佐野賢治の論稿は<sup>(10)</sup>、その信仰を雨乞いということから説明するのであるが、近世以降はいざ知らず、中世において、このような伝播ルートを主張することは、冒険であると言いたいようがない。

そのことを私が確信としていただくようになったのは、昭和五十九年四月に、桑名にある徳蓮寺の本尊開張を拝観する機会を得たからである。この徳蓮寺は、佐野が、伊勢朝熊山↓高賀山の信仰伝播ルートの中で、中間点として大垣の金生山明星輪寺と共にあげられている寺院である。そこで次項では桑名の徳蓮寺の本尊開帳について記述することで、伊勢朝熊山↓高賀山という信仰伝播ルートを設定することの矛盾点を考えていきたいと思う。

### 三、徳蓮寺の本尊開帳と伊勢朝熊山

昭和五十九年四月八日、桑名の徳蓮寺の本尊である虚空蔵菩薩の開帳を拝観する機会を得た。この徳



蓮寺では七年ごとに本尊を開帳し、今年は丁度、弘法大師の入定千百五十年忌にあたることから特に盛大に行なわれたのである。

この徳蓮寺の本尊である虚空蔵菩薩は、大地震のために土中に埋もれていたが、今も「光田」という地名の残る田が、夜、不思議と光を発することから掘り出されて、本堂に祀られることになったという。その際、虚空蔵菩薩を守護するように多数のウナギ、ナマズが取り囲んでいたもので、以後、土地の人達は、ウナギ、ナマズを虚空蔵菩薩の使者と考え、今も本堂に多数のウナギ、ナマズの絵馬があがっている。

また、徳蓮寺の本尊は、弘法大師が修業中一木から三体作った虚空蔵菩薩のうちの一体であるとの伝承が残り、一体は大垣の北方、赤坂の金生山明星輪寺に、一体は徳蓮寺に、そして一体が伊勢朝熊山金剛証寺のそれぞれ本尊となったという。

徳蓮寺は中手の部分から作られたので、中ぐされして、今では金生山、朝熊山と比べて参拝者もすくないが、かつて近鉄線（桑名く養老く大垣）が開通するまでは、門前に参拝客のため茶店が二軒あり、それが十分繁昌する程の参拝客があったという。それは主に、多度神社の参拝と結びついていた。また、七年毎の開帳には多くの露店が出て賑わったという。今ではそういう光景こそ過去のものとなったが、近郷からきれいに着飾った稚児さんが、母親に手を引かれ百人を越える稚児行列を行ない、虚空蔵菩薩が地域に根ざした厚い信仰を有していることを教えられたのである。

さて、本尊の像容であるか、この徳蓮寺の虚空蔵菩薩は石動山、高賀山の像容とは異なるものであった。すなわち右手をさげ与願印とし左手をあげるお姿であった。

伊勢朝熊山金剛証寺の本尊虚空蔵菩薩も秘仏であって、朝熊山と伊勢神宮との関係から、伊勢神宮の遷宮の翌年に本尊開帳が行なわれるのが例となっており、これを式年御開帳と呼んでいる。従って二十一年に一度のことであって、最近では、昭和四十九年に御開帳の法会が営まれた。幸い、その昭和四十九年の式年御開帳の様子を川口素道が報告しているので、その記事から朝熊山の本尊について知ることができる<sup>(11)</sup>。

虚空蔵菩薩は五仏の宝冠を載き、結伽踏座せられ、左手に白蓮華をお持ちになり、右手は與諸願印といつて、掌を仰ぎ五指を訂べて下に向けています。

このように、伊勢朝熊山、桑名徳蓮寺は共に本尊虚空蔵菩薩の像容が石動山、高賀山の像容とは異なるものであった。その本尊像容が異なることからして、特に、石動山、高賀山の像容が特異であることに視点を据えるならば、伊勢朝熊山と高賀山、石動山との関係は、比較して小さいと考えるざるを得ない。ましてや、一方的に伊勢朝熊山↓高賀山↓石動山という信仰伝播のルートを設定することは、あまりに短絡的なものであると考えざるを得ないのである。

以上のように、私は、まず能登の石動山の虚空蔵信仰についてふれ、次に美濃の高賀山の虚空蔵信仰を取りあげ、その共通点として、特異な像容の虚空蔵菩薩が本尊となっている点と、わずかなつながりではあるが藤原高光という人物についても考察を加えたのである。そして、従来いわれてきた伊勢朝熊山と高賀山、石動山の関係について、共に虚空蔵信仰であることから生ずる信仰の伝播、交流はあえて否定するものではないながらも、伊勢朝熊山←高賀山・石動山という虚空蔵信仰の本質的な部分での信仰伝播ルートの設定について、それぞれの本尊とする虚空蔵菩薩の像容が異なる点、中でも、石動山、

高賀山が特異な像容であるにもかからわず、伊勢朝熊山、又、その朝熊山との関係が深い徳蓮寺の本尊像容が異なる点から、否定的な見解を持つに至った。

それでは、石動山、高賀山の虚空蔵信仰は、その二山だけの独立した信仰であるのか、あるいは、やはりいずれかの虚空蔵信仰の流れをくむと考えるべきであるのか、問題として残されることになる。そこで次項では、目を転じて、虚空蔵信仰の京都における拠点である嵯峨の法輪寺の、本尊虚空蔵菩薩の像容について眺めることで、問題解決の糸口を見出したいと思う。

#### 四、法輪寺の本尊像容について

京都の法輪寺は「今昔物語集」巻十七第三十三話に紹介されるように、古来より虚空蔵信仰の寺院として知られてきた。中でも「十三まいり」の行事は、この法輪寺によって開始され、やがて各地の虚空蔵寺院にその習俗が流布していくことがらしても、いかに法輪寺が虚空蔵信仰の中で大きな役割を持つかを理解して頂けると思う。

この項では、法輪寺の虚空蔵菩薩の像容に絞って考察してみたい。

まず、取りあげるのは『覚禅抄』『求聞持同異説』の項目である。そこには、凶像と共に、法輪寺の虚空蔵菩薩について次のような記載がある。

右像相叶秘蔵記ノ凶。彼ノ文ニ云。肉色。

左手持開敷蓮花。上有如意珠玉宝。右手ニ持宝剣花。

諸師云。法輪ノ虚空蔵ハ求聞持ノ本尊也。

即ち画像也。実蔵ノ凶集二載之ヲ。尊実ノ云ク。有茎蓮花ニ坐シ給フ。云々

実任ノ云。道昌僧都ノ本尊也。北山修行之間。安置之。云々

すなわち、右手に宝剣を持ち、左手に蓮花を持ちその上に宝珠が載るといふ像容である。ここにある道昌は、法輪寺の開基とされる人で、一方で太秦広隆寺の中興としても知られるのである。『都名所凶会』の智福山法輪寺の項に、

真言宗にして、本尊は虚空蔵菩薩の坐像なり。(道昌法師の作)(中略)

道昌僧都、姓は秦氏にして讃州香川郡の人なり。弘法大師に真言の密法をうけ、虚空蔵求聞持の法を修せんとて、この寺に一百日参籠し給ふ。五月の頃、咬月西山に隠れ、明星東天に出づる時、閻伽水を汲むに光炎頓に耀きて、明星天衣の袖の上に来影し、忽ち虚空蔵菩薩と現はれ給ふ。縫の如く染むるが如く、数月を経るといへどもその体滅せず。これ生身の尊影なりとて、道昌則ち虚空蔵菩薩の像を刻み、袖の像を腹内に収めらる。この時弘法大師を請じて開帳供養し給ふ。これ当寺の本尊なり。

とあり、法輪寺の本尊虚空蔵菩薩は、弘法大師の弟子である道昌にゆかりのものとされるのである。『覚禅抄』には、また「道昌僧都、法輪ノ虚空蔵ノ加持カニ依リ。自然智ヲ得テ。位僧都ニ登ル」とも書かれている。

鎌倉時代中期の成立の『覚禅抄』によって、古代の法輪寺の本尊について知ることが出来たのであるが、『覚禅抄』以降については、法輪寺の本尊虚空蔵菩薩の像容がはっきり記される資料は少ない。例え

ば、『碧山日録』応永二年（一四六八）九月十六日条に、

法徒虚空蔵像徒愛宕山

客云、七日西峨之乱、天龍、臨川、宝瞳及諸房寺、一時灰虚、先是、栖霞院之釈迦像、移徒愛宕山、乃堂又有化火自焼也、莫知像之所在者也、法輪虚空蔵像、為兵卒所移而現在慧蜂三聖寺云。

という記事が見え、応仁の乱によって法輪寺の虚空蔵菩薩が持ち出されていることはわかるが、その像容については知ることが出来ないのである。

さて、応仁の乱で荒廢した法輪寺を興するのは恭畏僧都である。彼は後陽成天皇の編旨を得て、都都に勸進して堂舎を復興していく。やがて、恭畏の偉業によって再興した法輪寺において、大法会が営まれた。『慶長日件録』慶長十一年（一六〇六）九月十三条に、

十三日、是ヨリ先キ、僧恭畏、山城嵯峨法輪寺ヲ再建ス、是日落供養アリ、とみえる。同じ『慶長日件録』の同年十一月六日条には、

贗首座令同心、高尾より嵯峨法輪寺へ参、九月より開帳也、本尊虚空蔵座像、右手持劍、左手には持宝珠、其身尺三尺許也、次松尾へ参詣、

とある。

この記事によって知られる法輪寺の虚空蔵菩薩は、左手に蓮華を持つとする『覚禅抄』にいう像容とは異なるものであり、先に述べてきた石動山、高賀山の像容、すなわち右手に宝劍、左手に直接宝珠を持つ像容と一致するのである。この『慶長日件録』の記事は大変興味深いものといわざるを得ない。そして現在、秘仏となっている法輪寺の本尊虚空蔵菩薩も、御住職藤本哲也師のお話と配られているお札

から、右手に宝剣を持ち左手に直接宝珠を持つ像容であることが知られるのである。

また、明治初期、法輪寺から能登の輪島に虚空蔵菩薩の画像が譲られており、そこには法輪寺の印も認められるのであるが、その掛図の虚空蔵菩薩もまた、同じ像容なのである。

このように、京都の法輪寺においては古代においては『覚禪抄』記載の道昌の虚空蔵菩薩が信仰され、近世初期以降は石動山、高賀山と同じ特異とされる像容が信仰されて現在に至っているのである。それでは、中世における法輪寺は、そのどちらの像容を持って本尊としていたのであるのか。それについて『白宝口抄』の「虚空蔵法」を資料としてあげてみたい。

形像異説事（虚空蔵法）

大日経一云。於龍方當輩虚空蔵。勤勇被白衣。持刀生焰光

大日経三云。龍方虚空蔵白色白衣。身有光焰。以諸理路莊嚴。手持謁伽。

（中略）

已上文右手不分明也

秘蔵記云。虚空蔵菩薩肉色。左手持開敷蓮花。上在如意珠玉珠。右手持宝剣。

高雄曼荼羅図像如記。宝珠宝剣皆有火焰。頭上著五仏宝冠也。

又、法輪虚空蔵。左持如意宝。右執宝剣也。

（中略）

已上文右皆宝珠也。今道場觀之尊二尤相異也

（後略）

この『白宝口抄』は、その奥付が延徳三年（一四九一）十月十七日となっている。

「虚空蔵法」形像異説事では、虚空蔵菩薩の像容について、大日経、疏、青龍軌中、秘蔵記、理趣釈、撰真实経、念論結護、観虚空蔵菩薩経、虚空蔵経、虚空蔵神呪経、楡祇経疏引経をひいて差異を解説しているのが、特に一例だけ寺院名をあげて、

法輪虚空蔵。左持如意宝。右執宝剣也。

としていることは、その前段に紹介する秘蔵記の像容が道昌僧都の虚空蔵菩薩に一致しているのと比して、右手宝剣、左手に直接宝珠を持つ像容が、虚空蔵菩薩の中でも、特異であることの証明であると同時に、その像容が法輪寺によって代表されるものであることを、この『白宝口抄』の資料から理解できるのである。

つまり、石動山、高賀山の虚空蔵菩薩は、実は、法輪寺式の特異な像容であるということも、『白宝口抄』をみる限り出来るのである。

##### 五 『如意虚空蔵経』と『扇流』

石動山、高賀山の特異な像容の虚空蔵菩薩が、法輪寺式と呼べるものであることを知ったのであるが、それでは、はたして法輪寺と石動山との間に、信仰の伝播、交流が存在したのであるか。この項では、その点について、一、二の考察を加えてみたい。

『大日本史料』の栄西の卒伝に<sup>12)</sup>、『如意虚空蔵経』（『如意虚空蔵菩薩陀羅尼経』）についての記事

がある。それによると、

(奥書)

建保五年(一一二七)丑丁六月八日、大宋国大龍寺沙門良超弟子善覚法師、持来此経流布我朝、彼善覚云、日本采西僧正、受求聞持法於良超、得大悉地矣、

午時文永十年(一一七三) 酉葵九月十三日

願主下総国千葉庄堀寵住人沙門道人

奉彫此経 於法輪寺 祈二世三有牟

とあつて、この経が日本に伝わったいきさつと、また法輪寺において開板されたことが知られる。

この『如意虚空蔵経』は、日本において創作されたいわゆる偽経と考えられており、『大正大蔵経』には収められていない。いま刊本としては『大正統蔵経』の中で見ることが出来るのである。『大日本史料』には経文部分が省略されているが、『統蔵経』のものと、同一であると考えられる。

そこで、山岸共の考察を借りて、『如意虚空蔵経』の内容を整理してみると次のようになる<sup>(13)</sup>。

①虚空蔵菩薩が西方香集世界から釈迦を助けるために娑婆世界に来て、無怖畏のダラニを説いたこと。

②虚空蔵菩薩が衆生を済度を済度するため、仏身形、菩薩身形、居士身形、宰官身形、童男童女形、鳥畜形、明星形など種々の形に現われること。

③虚空蔵菩薩の呪(ダラニ)。

④虚空蔵菩薩が一切衆生の願いにしたがう故に、仏は能満諸願大慈大悲虚空蔵菩薩と名づけたこと。



虚空蔵菩薩の呪を持する者のために偶を説いたこと。偶の内容は、仏が八万大士、八十億菩薩、十羅刹女、十二神将毘沙門二十八部、八大龍王、三光天をつかわしてこの経を持する者を護るというものである。

⑤呪を持することの利益。人から愛敬を受けるには呪を日に三十五遍唱えよというように、回数や日数が具体的に示されている。

⑥虚空蔵菩薩は余の菩薩にまさり、天冠に三十五仏を有することから、この像を拝するものは三世十方諸仏を拝するに等しいこと。

さて、この『如意虚空蔵経』の中世における開板について、法輪寺以外で現在知られている例が、一例だけ存在する。それは他ならぬ能登石動山においてみられるのである。現在では、石動山を離れて、手取川沿いの鶴来町の桜井家に蔵されるものがそれである。それには、

(奥書)

建保五年丑丁六月八日、大宋国大龍寺沙門良超弟子善覚法師、持来此経流布我朝、彼善覚云、日本荣西僧正、受求聞持法於良超、得大悉地矣

難値受生、適遇宝光尊之出生、為報広恩開此経、炬範弥倍神明威力、成就二世之悉地、兼為資四恩、且為法界、廻向志趣如斯、

文和二年(一一三三)歳次癸巳 正月十三日

勸進沙門石動山、武林坊重胤大願主同山仏蔵坊賢海

とある。先にあげた法輪寺開板のものと前半部、すなわちこの経が日本にもたらされる経緯についての

部分は全く同文となっているのである。この『如意虚空蔵経』の存在によって、法輪寺と能登石動山が信仰面において共通したものを有していたことが、十分納得できるのである。

『如意虚空蔵経』についてはこの位にして、次に、再び藤原高光について、ここで触れなければならぬ。高光が多武峯少将と称されたことはすでに述べた。この高光は多武峯にほど近い長谷寺において、一つの伝説の主人公として語り継がれている。『長谷寺靈験記』下第十五に、

村上天皇御宇に高光少将ト申シ八九條ノ左丞相師輔第八息。(略)當寺二籠リテ我レニ堅固ノ道心ヲ発サシメ。一略一法名ヲバ如覺トゾ申シケル。後ニハ大和国多武峯二住シテ修行シケルニ。室ナリケル人少将ノ行方ヲシラズ。イミジク歎テ観音バカリゾ此レヲバ哀ミ給フベキト當寺二七日籠リテ少将ノ在所ヲ我レニ知ラシメタマヘト心ヲ致テ申シケルニ。愚シキ夢ヲ見テ下向シケル程ニ。泊瀬川ト倉橋川トノ落合二河合ト云フ所ニシガラミノ有ケルニ扇流レカ、リタリ。是レヲ取りテ見レバ少将ノ扇ナリ。(略)扇流ト云フ是レニテゾ侍リケル。

とあるのがそれである。ここに書かれている様に、突然、姿を隠した高光少将を、追い求める女房は、長谷寺の十一面観音に願をかけ、やがてその利益で、上流から流れて来た高光の扇を見つけることで再会をはたし、二人して仏道を極めることが出来たとするのである。この話を長谷寺では「扇流し」の物語として伝えている。

「扇流し」という物語を、『室町時代物語大成』で見ると、わずかに一本だけが伝えられている(14)。それには、高光という名はなく、ただ少将とだけ記されており、物語の内容も、姿を消すのは女房であり、そのゆくえを少将が訪ね歩くという形をとっている。そして、

みむろたに、たうのみね、まつのかたを、ふしおがみ、さが(嵯峨)のほうりんじ(法輪寺)の、こくうぎうに、こもり給ひて、ふくちえんまんの御くわんを、たのもしく我はひとへに、ゆくゑもしらす、なりゆき給へる、ひめきみに、めぐりあはせて、たひ給へて、ふかくきせいを、かけ給ひ、それよりも、いつくとも、しらぬかたへそ、たつねゆき給ひける。

ここに、川かみより、人の手なれたるあふき(扇)の、なかれけるを、とりあげて見給ふに、にほひふかく、うつくしきゑなと有、まことに、よしあるふせいあり、ものをかきたるを見給へは、つらしとも、思はぬ我を、ともすれば、あふきの風に、おとろかすらん

とあるように、長谷寺の十一面観音の利益によるのではなく、嵯峨法輪寺の虚空蔵菩薩の利益によつて、流れ来たる扇を見つけ、再会をはたすのである。

高光という名こそ伏せられているが、この「扇流し」物語が法輪寺に結びつけられてくる背景に、法輪寺と美濃高賀山、そして石動山を結ぶ流れというものがあることを、無視することは出来ないであろう。

## 六 結語

本節では、第一項で能登石動山の虚空蔵信仰、第二項で美濃高賀山の虚空蔵信仰をながめ、第三項においては、石動山、高賀山の信仰が、従来考えられてきた伊勢朝熊山からの伝播とは考えにくいことを、本尊の像容を視点として指摘した。第四項では、京都の法輪寺に目をむけ、その虚空蔵菩薩の像容が古

代と中世の間で変化している点と、中世以降現在に至る像容が、石動山、高賀山の虚空蔵菩薩と完全に一致することを述べた。そして第五項で、法輪寺と石動山、高賀山との関係について若干の考察を試みたのである。

もとより十分とは言えないまでも、山岳宗教の中に展開する虚空蔵信仰について、その系譜について推論する方法を示し得たと考えている。本章第一節において論究した白山信仰とも密接に関係し、また京都の法輪寺が糸口となつてゐるなど、京都奈良という都のおかれた地から近江を経て北陸に向かう虚空蔵信仰の動線が提起できそうである。さらにこの道筋はさらに北を指向するように見えるが、義経が平泉を目指した逸話からも想起できるように、文化伝播の重要な道筋に虚空蔵信仰が展開したことは、間違いなさそうである。

次節では、山岳から海洋に目を転じて海上交通と虚空蔵信仰の繋がりを眺めることにするが、山岳と海洋は決して個々別々に意味を持つのではなく、互いに影響しながら補完的に機能している面を見逃してはならない。山岳の道は一見交通の障壁として感じられるが、最短の行程で往復できるという特徴を有している。海上の道は風という条件に左右されるが大量かつ重量物の移動に適するという特徴を指摘できるであろう。

北陸においても白山を頂点とする山岳の道と、北前船あるいはそれ以前から活発であった日本海の水運の両面に、虚空蔵信仰が関係を持つことが明らかにしたいと思うのである。

- (1) 本論文第一章所収の各論文。
- (2) 本論文第二章所収の各論文。
- (3) 藺田香融「古代仏教における山林修業とその意義―特に自然智宗をめぐる―」（『南都仏教』第四号、南都仏教研究会、昭和三十二年刊）。この論文は、先生の論文集『平安仏教の研究』にも収録されている。
- (4) 清水宣英「石動山の歴史」（『能登石動山』、北国出版社、昭和四十八年三月刊）
- (5) 橋本芳雄「石動山と法道仙人説話」（『歴史手帖』第十一卷五号、名著出版、昭和五十八年五月刊）
- (6) 田中久夫「能登方道仙人と十一面観音信仰」（『御影史学論集』第六号、昭和五十五年十月刊）この論文は、民衆宗教史叢書『観音信仰』にも収録されている。
- (7) 高賀信仰に関する六社（『美並村史・通史編上』）  
 （縁起の寺社名）（現在の名称）（現在地）
- |          |        |         |
|----------|--------|---------|
| 高賀山星宮粥川寺 | ・ 星宮神社 | ・ 美並村粥川 |
| 〃 巖新宮寺   | ・ 新宮神社 | ・ 八幡町那比 |
| 〃 本宮寺    | ・ 本宮神社 | 〃       |
| 〃 蓮華峯寺   | ・ 高賀神社 | ・ 洞戸村高賀 |
| 〃 滝の宮    | ・ 滝神社  | ・ 美濃市乙狩 |
| 〃 蔵王権現   | ・ 金峯神社 | ・ 〃 片知  |
- (8) 大島建彦「奥美濃の猿丸大夫伝説」（『西郊民俗』第八六・八七号）

- (9) 佐和隆研 「高賀山信仰の美術」 (『仏教芸術』第八一号)
- (10) 佐野賢治 「高賀山と虚空蔵信仰」 (『白山・立山と北陸修験道』、名著出版、昭和五十二年九月刊)
- (11) 『虚空蔵信仰への道しるべ』 (朝熊岳金剛証寺、昭和四十九年一月刊)
- (12) 『大日本史料』第四編之十三、六九〇頁以下
- (13) 山岸共 「中世能登石動山の虚空蔵信仰」 (『石川郷土史学会々誌』第十四号、昭和五十六年十二月刊)
- (14) 「扇ながし」 (『室町時代物語大成』第三卷) 延宝七年松会刊本、国会図書館蔵

### 第三節 海上交通と虚空蔵信仰

#### 一 はじめに

薩摩の坊津は、伊勢の安濃津や筑前博多の那の津と並んで、日本三津の一つに数えられている。また、奈良の唐招提寺を開いた鑑真が、苦難の渡海を経て上陸した地点としてもあまねく知られている。

遣唐使船の寄港地として栄えた時代、廻船式目制定への関与、日明貿易、琉球交易、また倭寇の根拠地としても名を馳せた<sup>(1)</sup>。近世にいたり、鎖国政策によって長崎に通商の窓口が移った後でも、島津藩の密貿易によって莫大な富がもたらされた。江戸時代の中頃の、いわゆる「享保（一七一六～三六）の唐物崩れ」によって、密貿易が徹底した取り締まりをうけると、坊津は漁業基地としての営みに活路を見いだし今日にいたっている。

坊津が、このようなエピソードに事欠かないことは、海上交通の要衝に位置する重要な港湾として、特に海外との往来の拠点としての役割を、長く果たしてきたことを雄弁に物語っている。

この坊津に、大永六年（一五二六）に建立された、虚空蔵菩薩の種字であるタラークを刻した供養碑が現存している。本稿では、この供養碑を手がかりとして、他ならない坊津に中世末の虚空蔵種字碑が存在する意味を模索することで、海上交通と虚空蔵信仰との結びつきを考える糸口としたい。

#### 二 坊津の概要

坊津は、薩摩半島南部の西海岸に位置し、現在の鹿児島県川辺郡坊津町の町域とほぼ一致している。五二キロメートルも及ぶリアス式海岸で、湾が入り組み天然の良港を形成している。背後には、すぐに山がせまり平地はきわめて乏しい。

坊津町は、北から秋目、久志、泊、坊の四つの地区から構成されており、かつてはそれぞれが浦を成していた<sup>(2)</sup>。

北端にあたる秋目は、鑑真の上陸地として知られるが、南流する秋目川に沿った谷あいには集落があり、九玉神社、正法寺（浄土真宗本願寺派）がある。山地に自生するソテツは国の天然記念物に指定されている。西方海上の沖秋目島はビロウが自生していたことから枇榔島とも呼ばれている。同地区は大浦町を挟んで坊津町の飛地になっている。

『三国名勝図会』（以下『図会』とよぶ）は、秋目について次のように記している。

秋目港 秋目村にあり、此港南より入たる海湾なり、周廻凡そ七町余、港口の東には、島嶼相連り、其西岸には、素麺崎といへる巖背突出す、故に湾内港となる、然れども深きこと僅に四尋にして、風濤高く、大船の安泊を得ずとぞ（五代・橋口、一九八二、七六九）

久志は、主として半農半漁の地域で、坊津町にあるわずかな田地のほとんどが当地にある。ここに町役場があり、また九玉神社がある。北側寄りを久志川が西流する。港近くに広泉寺（浄土真宗本願寺派）がある。久志湾の南側にある博多浦は、昔貿易港として栄えた港で唐人町跡や唐人墓があり、町並みは条里になっている。その奥まった所に淳厚寺（浄土真宗本願寺派）がある。



『図会』には、

久志港 久志村にあり、此港西より東に入たる海湾にて、内外の二港を分つ、内港の周廻凡そ三十五町、内港の口に当り、北岸よりは、宮崎といへる岩觜、長さ四町許突出し、其南岸よりは、小島二ツ接連し、港口を捍蔽す、港口の横幅四五町あり、港裏の北浜を、今村浜といひ、南岸を博多浦といふ、是を内港とす、又内港の口より八町許海口に当り、大岩觜左右より突出して稍相向ひ、亦海口を捍蔽す、北岸にあるを立目崎といひ、南岸にあるを網代といふ、立目崎の内を馬込浦と号す、網代の辺は群魚の聚集する所にして、漁釣に利ありとぞ、是を外港とす、二層の港内、共に舟の安泊に便にして、実に天然の良港なり、往古は海外の諸蕃爰に来て交易をなし、今も唐土の舟舶漂着の時も、泊繋の所とせり（五代・橋口、一九八二、七六八）

とある。

泊は町の南部にあり、漁業を主とする泊地区と、農業を主とする清原地区に分かれる。泊川が清原地区を西流して海に注ぐ。泊地区は北西に丸木浦、南に荒所浦、中央に泊浦がある。南側の小泊に九玉神社があり、小泊は沿岸漁業の中心地でもある。荒所浦の沖合ではハマチなどの養殖をしている。泊川が上がった所に撰光寺（浄土真宗本願寺派）がある。

泊港について『図会』は、

泊村にあり、唐港の支港なり、唐港の海口と一にして、西尾の山觜其中に隔たり、両港を分つ、此港の西北岸より、港内の西南へ、大巖觜鋭出すること五町許、丸木崎といふ、丸木崎の東西共に大湾をなす、其西湾を丸木浦といふ、（割註 丸木浦の西の半は久志に属す）、丸木浦の西大海の

方は、久志の地觜西北より東南に突出し、(觜長さ四町許)、其觜端の海上大礁小嶼断続相連りて、(相連ること四町許)、海上を捍蔽す、故に丸木浦湾形をなして安なる入江なり、入七八町、闊(ひろ)さ六町許あり、且海口に近くして、舟舶の出入に便なる故、琉球諸島に下る者、多く停泊して風を待といふ、丸木崎の東湾を泊浦といひ、其渚を泊浜といふ、村落ありて、人烟頗る多し、泊浦入四五町、闊さ拾町許、然れども海浅くして、大船を繋ぎがたし、泊浦の東南に山觜あり、陸地より、西北海中に尖出すること一町許、宮崎といふ、此觜ある故、泊浦は湾をなす(五代・橋口、一九八二、七〇六)と記載している。

坊は町の最南部にあたり、坊津町の政治・経済の中心地で、かつての遣唐使船の寄港地として栄えた地域である。坊地区と栗野地区に分かれる。坊地区は一〇集落からなり、西に港が開けるほかは山が海岸に迫る。竜巖寺(浄土真宗本願寺派)や近衛信輔公居跡などがある。北東には、僧日羅が建立したと伝える県史跡の一乗院跡(現、坊泊小学校)があり、室町時代以降の上人墓や仁王像が残る。西方の白糖方(はつとほ)は、宝永五年(一七〇八)イタリア人の耶蘇会士シドッチを一時幽閉した所で、その近くには、文化五年(一八〇八)港口で沈没した中国船の乗員を葬った広大寺跡がある。北隣の泊地区との境界にあった津口番所の跡地に町立歴史民俗資料館がある。港の南側がかつての貿易船が出入りした浦で、その時代のメインストリートであったアカンコ坂(関伽講坂)に本稿で注目するところの大永年間の虚空蔵種字供養碑がある。この他にも、道元禅師と入宋しようとした明全の墓と伝えるものなど史跡が多い。また港の中央突出した所に八坂神社がある。現在、港はカツオ漁業の基地となっている。東部の栗

野地区は枕崎市と接する農業地域で、南の海岸部に赤水大竜権現社がある。

『図会』には、坊を坊津港として次の記載がみられる。

此地の総略、層岡疊山、三面に環り、其内に海湾ありて、港となる、港口は西に向ふ、東に入て、更に南に転り、下浜深浦の湾曲窮処に至て、十有二町、港口の闊さ、三町四十間余、港の周廻三十町余、港中海水の深さ、卅六尋より四十余尋に至る、港口窄狭にして、入遠く、中広く回岸連り抱きて、唯西一方を缺き、大瀛に接して、一の内海の如し（五代・橋口、一九八二、六八二）

このように坊津は、河川が湾に注ぐわずかな平地に集落があり、それぞれの集落は地勢によって隔たつた存在であることが知られる。秋目、久志、泊、坊は、それぞれ浦として独立しつつ互いに補完しており、そのことが坊津に繁栄をもたらした一因とも考えられるのである。

### 三 大永六年の虚空蔵種字碑

坊津に海外交易の跡を示す遺跡が幾つもあることを見てきたが、坊のアカンコ坂にある虚空蔵菩薩の種字であるタラークを刻んだ供養碑は、その紀年銘が大永六年と中世にまで遡り、それが坊津の隆盛を反映したものとする時、虚空蔵信仰そのものを考える上でも大変注目されるのである。

『坊津町郷土誌』には、

大永の供養塔（坊） 町内には供養塔が多い。最も古いのが、坊関伽壺坂（アカンコ坂）の大永六年（二五二六）一二月三日建立のもので、虚空蔵の梵字を印刻し年号と施主僧都某の名がある。

この塔が何を供養したものかわからないが、当時足利時代で倭寇の勢が盛んなころである。坊津はこの海賊貿易者たちの根拠地であり、他国の倭寇もここを利用したのである。大正一一年来坊の徳富蘇峰は、この塔をみて「坊津の盛んなりし大永の昔を偲ばしる唯一の史料」だと語った（坊津町、一九六九、五二八）。

とある。

徳富蘇峰は、本名を徳富猪一郎といい、歴史家であり、また国民新聞社長でもあった。大正一一年五月二日に坊津を訪れ、近世史の史料蒐集を行ったとされる（坊津町、一九七二、八八五）。

この虚空蔵種字碑について考えるために、すでに述べてきたことと重複するが、ここで虚空蔵信仰について簡単に整理しておく必要がある<sup>(3)</sup>。

虚空蔵菩薩は、その名が示しているように虚空のように広大無辺な智慧と富を象徴する密教的な菩薩である。「十三参り」と称して、男女十三才になったものが虚空蔵菩薩に詣でて智慧と福とを祈る行事は、今でも京都の法輪寺をはじめ各地で盛んに行われている。

また虚空をつかさどる虚空蔵菩薩は、相対する地をつかさどる地藏菩薩と一對のものとされる。そのような例として、京都の太秦広隆寺の講堂に阿弥陀如来の脇侍として祀られる虚空蔵菩薩・地藏菩薩像は、平安時代のものとされ現存する最も古い作例である。

虚空蔵菩薩は、虚空蔵求聞持法という記憶力を求める修法の本尊として注目された。虚空蔵求聞持法によって「聞持」を得ると一度聞いたことを忘れないとされ、これは膨大な教典を暗記しなければならぬ僧侶を志す者にとって、まず第一に修すべき法として、宗派を問わず熱心に行われたのである。

虚空蔵求聞持法は宗派を超えて行われたが、中でも空海は、この虚空蔵菩薩との出会いが彼を仏門に導く経緯となったことから特に熱心に信仰を寄せた。やがて、その系譜に連なる人々の中で虚空蔵菩薩は特別な存在として扱われ、虚空蔵求聞持法は、いわば真言宗の秘法といふべきものとなるのである。時代が下り、末法の世が永承七年（一〇五二）に始まると考える末法思想が流布する中で、無仏の時代にあつてなお衆生を救済する菩薩として、地藏菩薩がにわかに脚光を集めることになる。

浄土思想の高まりは、地藏菩薩の対偶仏である虚空蔵菩薩に、往生極楽のための臨終正念を約束する菩薩としての役割をもたせ、初七日の不動から始まって忌日ごとに十三の仏を並べ、その最終三十三回忌の本尊として虚空蔵菩薩をおく十三仏信仰にまで発展していくことになる。

石仏としての虚空蔵菩薩碑は、阿弥陀如来や釈迦如来また地藏菩薩などの種字や像容を刻した供養碑に比べて、その造立は数量的にははるかに及ばない。しかし近年、各地で報告される石造文化財の中に虚空蔵種字碑も見いだすことが出来る。中でも宮城県石巻市の多福院墓地にある板碑群には、虚空蔵種字碑としてはまとまった六例があり特筆されるのである（中村、一九九四、一三三～一三四）。

その銘文は次のようである。

- (一) # 四七   応永七年（一四〇〇）  六月  「悲母幽儀三十三回忌景」
- (二) # 四八   応永七年（一四〇〇）  十一月八日  「篋峯寺前任恩礼和尚三十三週忌景」
- (三) # 五三   応永八年（一四〇一）  六月  「理道禅門三十三年忌景」
- (四) # 五七   応永一〇年（一四〇三）  一〇月  「高福前住励公相当三十三年」
- (五) # 五九   応永一九年（一四一二）  十一月二日  「酬了周禅門三十三年忌」

(六) # 六九 永享五年(一四三三) 二月

「大姉逆修作善資糧

此者三十三廻辰忌」

いずれもが、虚空蔵菩薩を三十三回忌の忌日仏とする十三仏信仰との関連で造立されていることがわかる。

坊津の虚空蔵種字碑は、時代的にも石巻の多福院墓地のものとは隔たっており、また十三仏信仰と結びつく伝承をともなっていない。その持つ意味については、さらに別な角度から検討することで明らかにする必要がある。

#### 四 海上交通と虚空蔵菩薩

ここでは、坊津の虚空蔵種字碑を考えるために、海上交通との関係で祀られた虚空蔵菩薩について取り上げてみたい。そのような観点からまず思い至るのは、四国の室戸岬にある最御崎寺が虚空蔵菩薩を本尊とすることである。四国八十八ヶ所の札所として訪れる人が多いが、また難所を控えた海上交通の要とも見ることが出来るように思える。さらに、幾つかの事例を示してみたい。

##### (1) 目井津の虚空蔵堂

九州の東海岸、宮崎県の油津に近い南那珂郡南郷町にある目井津港の北側に虚空蔵島がある。周囲はおよそ六五〇mの陸けい島である。飢肥藩主であった伊東裕慶が、寛永三年(一六二六)に母松寿院の菩

提と海上安全の祈願とを兼ねて建立したという虚空蔵堂があり、周辺の石碑には大漁を祈念したものが  
多い。また島内にはアコウ・ビロウなどの亜熱帯植物群が繁茂しており、国の天然記念物に指定されて  
いる。旧六月一二・一三日には祭礼があり「虚空蔵さんの祭り」として近在から多数の参拝客があり賑  
わいを見せている<sup>(4)</sup>。

目井津港は今日漁港として整備されており、虚空蔵堂には、豊漁と漁の安全を願う漁師やその家族が  
厚い信仰を寄せている。

この虚空蔵堂は同地の真言宗西明寺の奥の院であり、西明寺はもと禅宗で延命寺と称して伊東日向守  
代々の祈願所であったという。明治維新に廃寺となり、時の住職瑞泉の長子は周鐘に従い仏門にはいり  
西明寺一世となるとされる。

飢肥藩主の伊東裕慶は島津氏とも関係が深く、虚空蔵堂建立の主旨には興味を惹かれるところである  
が、廃寺のおり記録の一切を失っていて定かな史料を見いだせないのは残念である。

## (2) 秋田土崎湊の虚空蔵堂

秋田市の少し北にあたる土崎湊は、かつて秋田藩の藩米の積出港として北前船が出入りする港として  
賑わった。今も幾棟か残る蔵跡からも、その規模の大きさが伺い知れる。ここの虚空蔵堂には、かつて  
港の夜間の目印のために高灯籠が立てられていたという。現在も旧雄物川に面してその虚空蔵堂があり、  
夏の祭礼には大蠟燭をたてる行事を引き継いでいるのである<sup>(5)</sup>。

(3) 能登半島・鈴の岬の虚空蔵

能登半島の最先端にある狼煙岬には現在燈台が設置されて航行の安全に寄与しているが、以前は鈴の岬といい、虚空蔵菩薩が祀られていたという。荒天には松明を炊き沖を行く船に位置を知らせたという。『能登志徴』には、

鈴ヶ嶽 今山伏山と称す。寶曆一四年(一七六四)調書に、狼煙村山伏山。但鈴ヶ嶽とも唱ふ。三崎社記に、高倉神鎮座地珠洲ヶ嶽。或称山伏山。と見えたり。三州名蹟誌に、三崎開關の時分、兩社権現牝牡の鹿に乗り當所へ渡海ましゝゝ、天より持ち降り給ひし鈴をば投げ給へるに、此山へ落ち止る。依て此所に影向成らせ給ふとかや。故に鈴ヶ嶽・鈴の岬と云。珠洲郡といふも此縁なりといへり。(略)

寶永元年(一七〇四)一覽記に、鈴ヶ嶽へ登る。此山をかう波山とも、山伏山とも云よし。山上に虚空蔵の小堂ありといへり。今按ずるに、虚空蔵の小堂とは、今いふ鈴奥社なるべし。抑此山は高倉彦大神の鎮座す神山にて、いにしへより樵人の入る事を禁じ、もし一枝にても樵る時は、必ず神の崇あるべしといひ傳へし故、雜木古木茂り覆ひ、實に神さびたる神山にて、殊に北海五十里のはてなる出崎の高山なりし故に、渡海舟の見當となる名山なりけり。(森田)

とあり、狼煙村の背後に鈴ヶ嶽また山伏山ともいう山があり、そこに虚空蔵菩薩を祀る小堂があつたという。この山は海上五十里から渡海の目当てになるとされる。さらに続けて、

鈴奥神社 鈴ヶ嶽の絶頂に小社を置けり。今鈴奥大明神と称す。但しみだりに登山する事を禁ぜり。此は神靈の鎮座る神山なりし故に、鈴奥社とはいへり。(略)



能登誌に、三崎の山伏山は、此国五十里のゆきどまり北のはてにある高山にて、頂に須々嶽奥之神社鎮座し給ふ。渡海の船難風に遭う時、此神に祈れば必ず此山上に炎見ゆる。故に是を目當として難を遁るゝ事多しといへり（森田）。

また一説として、

山伏山（略）又一説には、義経の御内常陸坊海尊、此処にて義経に別れて仙人となり、此山に住て山伏の姿にて折々見えし故に、此名ありとも。又一説には、昔三崎大社なりし時、衆徒多く此山の腰にありけるより、山伏山といふとも、又或は渡海して見るに、山伏の頭巾着しが許多見ゆる故に然いへるとも、傳説まちゝなり。（略）

寶永元年（一七〇四）の能登記行に、狼煙村に至て鈴ヶ嶽へ登る。此山をかう波山とも、山伏山とも云へるよし。山上に虚空蔵の小堂あり。山の麓に舟目當の火燈所あり。則金剛崎の上なりとあり。いま按ずるに、かう波山てふ山名、今は絶たりけむ。又虚空蔵の小堂とは、所謂鈴奥社なるべし。そのかみ俗にかゝる名を呼びたりけむ。

狼煙山 山伏山の一名。（略）（森田）

とされるのである。山の麓にあった火燈所はまさに燈台であり、秋田土崎湊の高灯籠とも結びつき興味深いところである。

#### （4）焼津・浜当目の虚空蔵堂

焼津の北東に位置する浜当目の海岸には、ひとときわ目をひくように小山が海に迫っている。この山上

にかつて香集寺（香信楽寺）があり虚空蔵菩薩が祀られ、航海安全の三大虚空蔵菩薩と称されていた。今では、山上の香集寺は廃寺になり堂跡だけが残り、本尊は麓の弘徳院に移されているが、祭礼には御輿を山上まで担ぎ上げる行事が続いて行われている。

『駿国雑志』には、次のように記述されている<sup>(6)</sup>。

香信楽寺 益津郡濱當目村に有り。當目山と号す。曹洞。同郡野秋村弘徳院末。御朱印寺領二石。一に香集寺と称す。傳云。當寺は弘法大師の草創也。本尊虚空蔵菩薩。聖徳太子作。脇に不動毘沙門二天有り。本堂、鐘楼、仁王門、穴地藏、秋葉社等有り。云云。又云。當目山虚空蔵は、弘法大師草創也。云云。或云。那閑神社古宮の地也。云云。伊勢浅間嶽、伊豆の御崎、當目、是を日本三虚空蔵と称して、海上往来の舟の目當とす。云云。（阿部、一九四五、七六九）

また弘徳院については、

弘徳院 益津郡野秋村に有り。恵日山と号す。曹洞。同郡坂本村林叟院末。御朱印三石。開山祖堂岱越和尚、本尊釈迦如来。（阿部、一九四五、七六九）

とある。

當目はまさに船の目当ての意味合いを持つと考えられ、明確に海上交通と関係づけられている。さらに伊勢の朝熊山金剛証寺（浅間嶽）と伊豆の御崎と合わせて「是を日本三虚空蔵と称して、海上往来の舟の目當とす」とされるのである。伊豆の御崎は伊豆半島最南端の石廊崎を指すと考えるのが妥当と思えるが、その周辺に虚空蔵菩薩を見いだせないでいる。

五 一乗院とその信仰―坊津の宗教的背景―

海上交通と関係する虚空蔵菩薩について、幾つかの事例を検討してきた。次に、坊津において虚空蔵種字碑を建立するに至る、宗教的背景がどのようなかを知る必要がある。

坊津の、現在の社寺の状況についてはすでに概観した。しかし、鹿児島県は明治維新の排仏毀釈が徹底して行なわれ、一時期にしる県内に寺院が全くなく、また僧侶も皆無の時期があったとされるほどである。従って、現在の社寺からだけでは、近世やさらに遡った姿を知ることが甚だ難しい。そこで再び、藩の事業として編纂された『三国名勝図会』を有力な手がかりにすることにしたい。『図会』に記述がある坊津の社寺は次のようである。

(一) 神社

(名称)

(所在)

(祭神等)

九玉大明神社

秋目

猿田彦命

九玉大明神社

久志

猿田彦命

今峯拾二所権現社

久志

(神体石)

九玉神社 (九玉大明神社)

泊

猿田彦大神

神社については、近世末と現在とほぼ同じ状況にあると言えよう。

(二) 寺院

(名称)

(所在)(宗派)

(本尊)

仏徳山正法寺	秋目	曹洞	阿弥陀如来
古寶山東泉寺	久志	曹洞	薬師如来
寶龜山阿弥陀寺安養院	久志	真言	地藏菩薩
無量寿山西勝寺大智院	泊	真言	阿弥陀如来
東海山海印寺	泊	臨濟	釈迦如来
海室山清水院法光寺	泊	時宗	阿弥陀三尊
西海金剛峯如意珠山龍巖寺一乘院	坊	真言	虚空蔵菩薩
清月山廣大寺	坊	臨濟	観音菩薩
栄末山興禪寺	坊	曹洞	

寺院については、真言宗、禅宗、時宗と多彩なであり、現在の寺院が一樣に浄土真宗であるのと際だた違いをみせた。そして、現在では廃寺となりその姿を遺跡として留めるに過ぎない。

さて、これら社寺の中で、藩政時代に飛び抜けて大きな勢力を持っていたのは、坊の龍巖寺一乘院である。一乘院は、坊津の地名の由来ともなっており、敏達天皇一二年（五八三）に百済の僧日羅が当地に来朝し、上の坊・中の坊・下の坊の坊舎仏閣を造営して、三坊に自ら阿弥陀像三体を彫刻し龍巖寺と称したと伝えられている。

吉田東伍は『大日本地名辞書』で、

地理纂考云、坊津の名は此地の龍巖寺一乘院の僧坊より起こる、海東諸国記には、房津に作れり、そもそも此津の皇国西南の極、洋海の辺陲にして、絶域に対望す、因て昔時支那西洋の通商互市す

る者、此の津に輻輳せしを、慶長年中、長崎を以て諸夷来朝の湊と定められしより、繁華地を払ふ。龍巖寺一乗院は真言宗の淨刹にして、前は海に向い後ろは山を帯び、登臨奇絶なり

(吉田、一九七一)

としている。

一乗院の創建の年代および開山については伝説の域を脱していない。その後、敏達・推古両天皇の御願所となったとされるが、これも確証はないとされている。とはいえ『坊津町郷土誌』が「坊津の歴史は、まず一乗院に始まり、そして一乗院の歴史とともに終始する。一乗院あつての坊津である」と述べているのも、あながち誇張な表現とはいえないほどに、坊津の中で一乗院の占める位置が大きいことは否定しがたいところである<sup>(7)</sup>。

『図会』には一乗院の絵図があげられているが、これは文化年間(一八〇四〜一八一八)の様子と大差がないことが知られており、また正確さにも定評がある<sup>(8)</sup>。近年、あくまで一区画ではあるが発掘調査も行なわれ、絵図との整合性が確認されてきている<sup>(9)</sup>。

百済僧日羅が阿弥陀如来を安置したという龍巖寺一乗院が、『図会』では本尊を虚空蔵菩薩としている。その経緯を今少し『図会』の記事で読みとることにしたい。

『図会』には一乗院について、次のような記載がある。

西海金剛峯、如意珠山、龍巖寺、一乗院(地頭館より子の方<sup>△</sup>二町余<sup>▽</sup>)坊津村にあり、京師御室仁和寺の末にして真言宗なり、本尊虚空蔵菩薩、(座像、定朝作、脇侍金剛力士同作)開山百済国日羅、中興開山成圓法師、當寺の由来記等を按ずるに、敏達天皇十二年(五八三)、百済国の日羅、来

て名山靈嶺を遍歴し、此地に坊舎仏閣を營造し、上の坊・中の坊・下の坊といふ、手づから阿弥陀像三軀を刻みて、三坊に安置し、龍巖寺と号す、尋て敏達天皇推古天皇の御願寺となる、爾來盛衰一ならず、長承三年（一一三四）、癸丑、十一月三日、鳥羽上皇院宣を下し、當院を以て紀州根來寺の別院とし、西海の本寺とす、又上皇の御願所として、如意珠山一乘院の勅号を賜ふ、  
続けて、中興の成圓法師の事績として、

其後星霜を経て、寺院漸く衰へ、或は断へ、或は続く、成圓法師なる者あり、延文二年（一一五七）、丁酉の歳、當院を再建して、中興第一祖となる、成圓法師は、素（もと）日野少將良成といふ、其父日野中納言某、鹿籠疏黄崎に配流す、良成京師より來り、父を省て、坊津に駐留せり、遂に発心して、此津西光寺住持日成律師に従て出家し、四度瑜伽を修す、既にして京師に上り、仁和寺常瑜伽院御室一品入道寛性法親王に従て、廣澤派の真言秘法を傳て、印可を受く、時に法親王虚空藏大士の像を成圓に賜ふて、當寺の本尊にて、福德の本尊なり、（虚空藏菩薩は、南方寶部の尊にて、福德富貴を主どる、大日經疏曰、虚空者如虚空不可破壞、一切無勝者、藏者如人有大寶藏、施所欲者在取之、不受貧乏、如來虚空之藏、亦復如是、一切利樂衆生、事皆從中出、無量法寶自在、而無窮竭相、名虚空藏也、云云、理趣經、虚空藏章云、修行者若入此曼荼羅、令人現生所求、一切富貴階位悉得、滅一切貧窮業障云々、愍念貧窮、常行忠施、三輪清淨心無慳悋（けんりん）、當興等虚空三摩地相應、不久獲得虚空藏菩薩自云云、宿曜經、儀軌虚空藏條云、若人欲求福智當歸依此菩薩云々、虚空藏は、かゝる三摩地の尊なる故、法親王の賜ひしなるべし）既にして足利大將軍尊氏に謁して、寺院の再建を請ふ、文和三年（一一三四）、春、願書を京師に上る、傳奏して許可を受く、邦君齡岳

公、有司に命じて、當寺を經營す、延文二年（一三五七）、功を畢れるなり、是より密教を相承す（五代・橋口、一九八二、七一三〜七一五）、とある。

日羅の開いた龍巖寺一乘院も盛衰があり、成圓法師が虚空蔵菩薩を本尊として再興したとされるのである。

ともかくも、今は坊泊小学校の敷地となって上人墓と石造の仁王像によってのみ偲ばれる一乘院は、中世から近世にかけて本尊を虚空蔵菩薩としていたことになる。

アカンコ坂の大永六年の虚空蔵種字碑は、龍巖寺一乘院の虚空蔵信仰と関係したと考えるのが自然であろう。つまり坊津の隆盛期に、一乘院を中心として展開していた虚空蔵信仰の一つの表象として、大永の虚空蔵種字碑が建立されたと考えられる。

そして、一乘院の本尊である虚空蔵菩薩像はもとより、一乘院そのものが歴史のうねりの中に吞み込まれて現存しないことを考えると、まさに大永虚空蔵種字碑は、唯一の同時代史料であり、かけがえない歴史の証左であることになる。坊津に展開した虚空蔵信仰は、坊津の海上交通に占める役割を考えるとき、単に一地方にとどまらず、中世末の海上交通全般について、その関連を見渡す手がかりとして捉えなければならぬであろう。

## 六 一乘院と紀州の根来寺

一乗院の歴代の住職については、南北朝期の成圓を中興として、それ以後明らかになっている。その血脈をたずねてみると、鹿兒島や、別府と呼ばれた加世田などの近在と関係するはもちろんであるが、遠く京都の仁和寺や紀州の高野山、根来寺などの往来も盛んであったことがわかる。

『図会』の一乗院第四世頼俊法印の事績を見てみよう。

第四世頼俊法印、聡敏博達を以て称せらる、高野根来に遊て、教相の玄旨を究む、又南都東南院に至て、俱舎・法相を肆(なら)ふ、又根来寺学頭快憲僧都に随て、廣澤派の秘法を受く、後又仁和寺智恵門院宥海和尚に随て、廣澤の密法を問ふ、和尚頼俊を器とし、授るに自宗肝心密法淵源を以てし、一流附法の弟子とす、尋て經典四十函、及び仏像・道具等を與ふ、且告て曰、汝速に国に歸て、密教を弘宣し、邦家を鎮護せよと、於是應永十五年(一四〇八)、根来寺を辞して、當寺に歸る、所得の仏像・經典等を寶藏す、是より當寺の密法一新せり、(後略)

(五代・橋口、一九八二、七一五〜七一六)

また、鹿兒島大学図書館所蔵本『花尾社伝記(中)』には<sup>10)</sup>、

(永正)七年(一五一〇)庚午、忠治公創大興寺於鹿兒府、徵坊津一乗院六世頼政(割註 大永元年(一五二一)二月廿二日化)為之開山、初其四世頼俊、学宥海於仁和寺、学快憲於根来寺、傳之頼憲(一乘五世)、頼憲以傳頼政、又薩僧一吽、遊如上野、学円喜於大聖寺、竟代薰席、居二十年、崇拜弘法所刻不動阿彌陀兩像於其寺、後冷泉帝時、移諸信州善光寺、至吽還薩、奉其兩像、授弟子良範、於是応永廿五年、久豊命良範、創莊嚴寺於伊集院、本尊兩像、為之開山、寄附書籍、定小野流嫡祖、良範伝之精範、亦頼憲弟、而兄弟俱登高野、精範嬰疾、寂於根来、遺託頼憲、掌莊嚴事、以故伝之



覚盛、覚盛以伝俊盛（大乘開山）於是十月、頼政会一乗、莊嚴於大興寺、偕約定三州密門之三本寺、  
毎歳本月十四日、集会門徒、眞読般若理趣品、為永規焉、二十九日、忠治公、親署花押、還賜三寺、  
（坊津町、一九八二、三）

とあるように、特に根来寺との関係は密接であった。

『図会』には、一乗院を根来寺の西海の本寺とするが、これも故のないことではない。また『図会』には、

旧記には、往古は本山紀州根来寺傳法院・西海龍巖寺一乗院・関東本寺摩尼珠山明星院、（一）に遍照院に作る、（真言新義の学徒を総督し、諸寺に紀綱たること、鼎足の如しといへり（五代・橋口、一九八二、七一七）、

とも、述べている。

坊津の一乗院が、紀州の根来寺と深く関係することは大きな「鍵」を意味するといえよう。というのは、鉄砲伝来の経緯が示すように、種子島と根来寺とがまた結ばれていたからである（11）。

当時の根来寺は、遠く南九州に漂着した南蛮船が強力な新兵器をもたらしたことを、直ちに知り得る立場にあった。そして、それは陸上交通を介してではなく海上交通によったのではないかとの推察が、坊津の一乗院と根来寺の関係から帰結されるてくる。もとより、複雑な政治状況や勢力関係が存在したであろうが、根来寺と坊津とが、緊密な海上交通のネットワークで結ばれていたことは想定されるところである。

根来寺は紀伊国にあり、和泉山脈の南に位置する。覚鑿上人の開基で新義真言宗の本山として名を馳

せ、また根来衆という軍事力にたけた集団としても知られていた。鉄砲を中心とした強大な軍事力は、根来寺の勢力拡大に利することも大きかったが、またそれ故に、天正一三年（一五八五）三月二日に秀吉の攻撃にあい一夜にして焼亡する運命を背負うことになる（<sup>12</sup>）。

ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスは、その著『日本史』においてこの根来寺をよく描写している。

第三番目の宗派ないし宗団はやはり一部の仏僧が構成するものであり、根来衆と称する。彼らは当初、高野の仏僧らと同一の宗団に属していたが、後に分離して独自の宗派を形成するに至った。

これらの仏僧たちは、日本の他のすべての宗派とはまったく異なった注目すべき点を幾つか有している。すなわち彼らの本務は不断に軍事訓練にいそしむことであり、宗団の規則は、毎日一本の矢を作ること命じ、多く作った者ほど功德を積んだ者と見なされた（松田・川崎、一九七七、一五四～一五五）。

根来寺の規模についても、

その地にどうして二千もの寺院があり得るか疑われないためには「それどころか多くの人は、かならずと言ってよいほど、根来衆の寺だけで三千あるとさえ言っていた」、次の事情を理解してもらっておく必要がある。これら一万人の仏僧らが唯一の僧院の中で一人の上長の許で暮らしていたと考えるべきではない。彼らはそのようではなく、二、三、あるいは四里にわたる清浄で広大にして優美な盆地に展開して住んでいたのである。（松田・川崎、一九七七、一六三）

としている。

フロイスは、このような根来寺の様子を「仏僧たちが治める共和国」と表現したが、まさに根来寺は、「根来塗」などに代表される卓越した技術が展開する都市的な性格を有していたことが考えられる。ここに住む多くの人々の生活を維持するために、物資の貯蔵も大がかりに行われており、例えば、近年の発掘調査の結果から地面に埋め込まれた多数の大カメで菜種油が貯蔵されていたであろうことが知られている。大カメは備前焼で、現在の岡山県から海上交通で運ばれて来たことは、容易に想像できよう（13）。

## 七 根来寺の外港・加太

根来寺は紀ノ川の流域にはあるが、海からはかなり遡上しなければならぬ。それで、海を渡ってきた積み荷は、紀ノ川の河口付近で川船に積み替えられ、さらに陸路で根来寺に運ばれたのであろう。根来寺は、天正年間には大阪府南部までその勢力を伸ばしており、港も大阪湾から紀淡海峡の南側にかけて幾箇所も確保していたことが考えられる。

それらの港湾の中で、ことさら加太に注目するのは、紀ノ川の河口に近いばかりではなく、葛嶺二十八宿とよばれる行場を通じて鎌倉時代頃より根来寺と関係していたと思われるからである（14）。

葛嶺二十八宿を記した『葛嶺雑記』には、

友ヶ嶋 序品窟・観念窟・阿伽井・深蛇池

伽陀浦 迎の坊より東山手に弁財天社南山手に八幡宮・花皿井・薬師堂・金剛童子・錫杖井。西

浜手に粟島明神本地の虚空蔵堂。阿字が嶺に神変大士・蓮花井・御所井・毘沙門堂・水神井・勤行井・北浜手に頭襟石・けさかけ松おひ捨石・尊国山金剛童子。(以下の宿は略す)

一 乗山根来寺 同国郡(紀州那珂郡)、真言、新義本山(撰河泉、一九七九、一〇、一四)とある。

加太には、雛流しの習俗で知られた淡島神社があり、全国的な広がりを持つ淡島信仰の本拠地として女性を主とした信仰が今も盛んな所である。この淡島神社の境内には、みかん船の逸話で有名な紀ノ国屋文左衛門ゆかりの帆柱がある。加太は港湾としてのエピソードに事欠かないが、それは薩摩の坊津と同様、港湾としての長い歴史を物語っている。

『葛嶺雑記』には、淡島(粟島)神社の本地を虚空蔵菩薩としているが、『加太淡島神社文書』は次のように伝えている。

#### 十穀聖覚乗置文

右、依有当国粟嶋大明神御告、始而御在所に御社を立、御神を勧請申、年月をふるといへとも、御上葺よろいふきにて見苦御座候間、覚乗十穀を本願として、御社を桧皮葺に仕候者也、然処に、当社一殿に又御神乃告ありて、神宮寺を建立し、御本尊にハ虚空蔵を安置申へ(き脱)趣御夢想候間、一殿十穀をたのみ可取立由被仰候条、彼の御堂を建立仕、御夢想のことく、於泉州堺南北万民をす、め、御本尊を作立、寄進申候也、然に彼の仏前の参銭之事ハ、於末代当社内造営の針(釘力)乃代に、是も御神の告によりて定置候者也、余事に仕事あるへからず候、仍所定置如件、

文明六年(一四七四)甲午十二月十三日

十穀覚乗(和歌山市、一九七七、八七六)

文明年間、淡島神社の社殿の改築、神宮寺の造営、その本尊虚空蔵菩薩像の造立に、十穀断ち聖の覚乗が本願となって勸進活動を行ったとされるのである。

紀伊の加太に虚空蔵信仰があることは、薩摩の坊津に虚空蔵信仰があることと無縁とは言えないのかも知れない。根来寺の外港としての加太に思いを巡らす時、加太を出航した幾隻もの帆船が海原を越えて遠く坊津を目指したことも、空想だけのこととは思えない。

ともかくも、虚空蔵菩薩を祭祀する港湾あるいは燈台の先駆ともいうべき要衝は、互いに脈絡を通じていたのかも知れない。それは、紀伊と薩摩を結ぶ南海海道だけでなく、北前船の航海した日本海道や、紀ノ国屋文左衛門が荒波を越えた東海海道にも広がりを持つと思われるのである。

本節では、これまであまり知られることの無かった虚空蔵信仰と海上交通の関係について考えてみた。もとより、これからの課題が山積しているのではあるが、一つの視点として海上交通における虚空蔵信仰を提示することだけは出来たのではないだろうか。

虚空蔵信仰と海上交通という問題意識を発展させる意味からも、次章では琉球における虚空蔵信仰の展開に視線をむけることになる。真言宗が薩摩坊津から琉球の護国寺を拠点として勢力をもち、坊津一条院の本尊である虚空蔵菩薩に対する信仰は、琉球にも伝わっていく。またそのような教派仏教の枠外である中国に渡ろうとして果たせずやむなく琉球に巡錫した僧袋中も、また別な虚空蔵信仰を沖縄に定着させたのである。

琉球への往来は当然海上交通によってなされたが、虚空蔵信仰の動的な展開を琉球での伝播と受容を見

ることで締めくくりにしたい。

註

(1) 『鹿児島県史年表』には、「寛正二年（一四六一） 是春忠国、琉球に渡らんとして、一乗院に太刀を寄進す」「文明六年（一四七四）九月 幕府、島津氏の琉球特殊関係を承認し、又遣明使、坊津碇泊の際、硫黄積込み、且つ航海の警護を命ず」「永正一三年（一五一六）三月 備中蓮嶋豪族三宅和泉守国秀、琉球襲撃のため舟師十二を艘率て坊津に碇泊す」との記事をのせる（鹿児島、一九六七、六八〜七四）。

(2) 坊津の概要については、『角川日本地名大辞典 鹿児島県』、『坊津町郷土誌（上・下巻）』を参照した。

(3) 虚空蔵信仰については、拙著『虚空蔵信仰の研究』所収の各論文を参照されたい。

(4) 目井津の虚空蔵堂について、『新版 宮崎県の歴史散歩』二一三頁、『全国寺院名鑑―中国・四国・九州・沖縄・海外篇―』二二二頁を参照した。また、『日向国史』には「同（天正）十六年（一五八八）八月、祐慶、島津義弘の請に応じて鹿児島に赴く。義弘厚く之を饗し、猿楽を催す。蓋し、島津、伊東二氏は、襄に朝鮮の役に、加徳島に於て相締盟すと雖も、その後、関ヶ原の役起り、復、相背くこと茲に年あり。義弘、乃ち、祐慶を招請して、両家の和親を計らんとするなり。是より、両家の間、信使の来住暫く絶えず（喜田、一九三〇、三四八〜三四九）」とある。

(5) 土崎湊の虚空蔵堂について、北見俊夫は『日本海上交通史の研究』で「日本海の航路上、とくに

近世に栄えた土崎港は、雄物川の河口港で、川口より少し川上の方に樹木の繁った見晴らしのきく小高いところに、虚空蔵菩薩を祀る御堂がある。御堂の向拝の棟は普通ならば御堂と棟と直角になつてゐるはずなのに、ここでは港の方向を指すようにしつらえてある（北見、一九八六、二四四）」と述べている。また、『土崎港町史』には、「泉谷氏『土崎案内記』には次のやうに記してある。「虚空蔵堂は穀保町内の丘地にありて衆生の崇敬するところ、例年七月十二日には大祭を執行す、慶安の頃、此の丘地に榎の神木、小さき祠ありしを世に虚空蔵山と称へ来りしが、後の萬治三年、矢守和左衛門氏が穀保町の開起せらるゝに係り、社殿を建立して、福一萬虚空蔵大菩薩の尊像を拝するに今尚新たなるを見る、旧藩時代にありては此の丘上に竹竿を設けて燈火を掲げ、以て夜間舟行の便に供したりと云ふ（秋田市、一九四一、二八五）」とあり、さらに地藏院として、「一、新義真言宗 智山派 秋田市寶鏡院末寺。二、寺院創立年代及由緒 創立年代不明 傳ふるところに據れば今より以前二百数十年前虚空蔵堂の別當として建立されたものゝ由である。三、旧藩時代の石高 往時藩主への上納米は雄平仙三郡より雄物川を下つて穀保町倉庫に納められし物の由その節差し米と云て一俵より一差しづゝを虚空蔵尊へ献納せしものなりと言ふ（秋田市、一九四一、二九八）」とある。

(6) 『駿国雑誌』は、天保一四年（一八四三）の成立である。

(7) 一乗院は、琉球への真言宗の伝来にも大きな役割を担った。『沖縄県史』では、「一四世紀後半に察度王のとき、京都仁和寺の末寺であつた薩摩坊ノ津の竜巖寺一乗院から頼重が来島し、波の上に護国寺を開いて真言宗を弘めた（『中山世譜』卷三、察度王洪武一七年八月二一日紀、『琉球国

由来記』卷一「密門諸寺縁起、波上山護国寺記」（沖繩県、一九七五、一六一—二四六）」とある。

また、坊津一乗院と琉球との関係については、拙稿「虚空蔵信仰の南進―根来・薩摩坊津・琉球―」（『御影史学論集一三』所収）を参照されたい。

(8) 五味克夫は、「（『図会』所載の絵図は）文化年間作成の『薩藩名勝志』掲載のものと同様であるから、本図は文化年間ごろの一乗院境内の形状を写しているものといつてよい。しかも同絵図はその写実性に定評があるので、その建造物の配列、形状、大小等当時の実況に近いものを示しているといつてよいであろう」（五味、一九八二、一）とする。

(9) 『一乗院跡』では「調査開始時では一乗院の遺構は皆滅していると思われるが、調査が進展するに従い、基壇、溝状遺構、礎石等が検出される一方、土器溜りからは青磁、白磁、染付、五彩、三彩、土師器、陶磁器等が多数出土した。これらの遺物はおよそ一四世紀〜一六世紀に焼成された中国産の陶磁器が主体であることが判明した。」（坊津町、一九八二、三七）とする。

(10) 五味克夫「坊津一乗院跡と一乗院関係史料」（『一乗院跡』所収）から引用した。一乗院と花尾社との関係についても、詳しく述べられている。

(11) 日本への鉄砲の伝来は、天文一二年（一五四三）種子島に来航したポルトガル船によるものであった。この鉄砲伝来に関しては、南浦文之著『鉄砲記』に、「於此之時。紀州根来寺有杉坊某公者。不遠千里。欲求我鉄砲。」（釈玄昌（南浦）『南浦文集』慶安二年（一六四九）季秋中旬、京都中野道伴刊行・大阪府立中之島図書館蔵に所収）とあり、これが根来寺にいち早く鉄砲が伝わった由来である。また、太田宏一「根来寺と鉄砲」『和歌山市立博物館研究紀要 一〇』を参照された



い。

(12) 根来寺の崩壊については、『大日本史料』第一編之一四 正親町天皇 天正一三年三月に「二十一日、壬辰、羽柴秀吉、紀伊ヲ征ス、是日、和泉畠中・千石堀等ヲ抜ク、尋デ、積善寺・澤等ヲ攻略シ、進ンデ紀伊ニ入りテ、根来雜賀ノ一揆ヲ降ス、」という項目をたて、関係の記事があつめられている（東京大学、一九七二、八一～二三七）。

(13) 熱田公は「雜賀一揆と根来衆」（『中世社会と一向一揆』所収）で「山内に歴大な子院をもち、紀伊北部・和泉・河内に多くの氏人を擁した根来寺は、流通と分業の大きな拠点ともなり、寺内町・門前町も形成された。さらに、寺内町・門前町は根来塗・根来鉄砲に代表される独自の手工業生産を發展させた（北西弘先生還暦記念会、一九八五、二六一）」とする。新井洋一は、『港からの発想』で「根来寺は備前焼のみならず多くの物資を水路、および陸路によつて調達している。この寺は、港をもつ寺、いわば「臨海産業寺」としての立地特性を最大限に生かし、交易の価値を十分利用して、富と情報を蓄積していたのである（新井、一九九六、一一六）」とするが、ともに興味深い指摘である。また、近年の発掘の成果として、備前焼の甕について「これは、根来寺の経済基盤を考える上で興味深いもので、甕の内容物が一体何であったのかが問題視されている。内容物の説には、紺屋の染料、火薬あるいは酒作り用、油や味噌の貯蔵用等と色々な意見が取り沙汰されてきたが、この中でも最も有力視されているのは灯明用油の貯蔵用である。その当時としては、備前焼大甕も高価なものであったであろうし、まして、そのものを活用するとなれば、より高価なものでなければ、備前焼の大甕を使用する意味がなくなると考えられる。また、発掘調査から出土される大

甕の亀裂箇所には布をあてがい、その上から漆を塗って補修しているものも幾つか見うけられる。このことから大甕の内容物が液体であると想定される（和歌山県、一九九四、二二六）」とされている。あわせて『根来寺坊院跡―昭和五六年度―』三四頁の「出土陶磁器組成表」を参照されたい。

(14) 根来寺と葛城修験との関係について、宮家準は「根来の修験と葛城」（『興教大師覚鑿研究』所収）で、「根来寺は、覚鑿が保延六年（一一四〇）高野山金剛峯寺の衆徒の乱行をさけて、大伝法院領の弘田荘根来にある大伝法院の末寺豊福寺に移ったのに始まる。（略）この豊福寺は、鎌倉時代初期になる『諸山縁起』所収の葛木の峰の『宿の次第』に「豊福寺、菩提の井あり、行者の闕伽の井なり」と記されている。古来葛城の峰入の宿の一つに数えられていたのである（興教大師研究論集編集委員会、一九九二、八一―）と述べている。

#### 参考文献

- 秋田市役所土崎出張所（一九四一）（一九七九復刻）…『土崎港町史』、加賀谷書店・新井洋一（一九九六）：『港からの発想』、新潮社。
- 阿部正信（一九四五）：『駿国雑志（三）』、吉見書店。
- 太田宏一（一九九六）：「根来寺と鉄砲」『和歌山立博物館研究紀要一〇』、三四―四七、和歌山立博物館。
- 沖縄県教育委員会（一九七五）：『沖縄県史（第五卷）各論編四 文化一』、沖縄県。

- 鹿児島県（一九六七）：『鹿児島県史年表』、鹿児島県。
- 角川日本地名大辞典編纂委員会・竹内理三（一九八三年）：『鹿児島県』（角川日本地名大辞典 四六）、角川書店。
- 北西弘先生還暦記念会（一九八五）：『中世社会と一向一揆』、吉川弘文館。
- 北見俊夫（ ）：『日本海上交通史の研究』。
- 喜田貞吉（一九三〇）：『日向国史（下）』、史誌出版社。
- 興教大師研究論集編集委員会（一九九二）：『興教大師覚鑿研究』（興教大師八百五十年御遠忌記念論集）、春秋社。
- 撰河泉地域史研究会（一九七九）：『葛嶺雜記 完』（和泉葛城修験道関係資料第一集）、撰河泉文庫。
- 全日本仏教会寺院名鑑刊行会（一九七三）：『全国寺院名鑑―中国・四国・九州・沖縄・海外篇―』、同刊行会。
- 五代秀堯・橋口兼柄（一九八二）〔復刻〕：『三国名勝図会（第二卷）』、新潮社。
- 東京大学史料編纂所（一九七二）：『大日本史料（一一・一四）』、東京大学出版会。
- 中村雅俊（一九八七）：『虚空蔵信仰の研究』（御影史学研究会民俗学叢書一）、御影史学研究会。
- 中村雅俊（一九八八）：『虚空蔵信仰の南進―根来・薩摩坊津・琉球―』『御影史学論集一三』、御影史学研究会。
- 中村雅俊（一九九四）：『石巻の中世板碑にみる虚空蔵信仰―十三仏信仰成立との関係において―』、

- 御影史学研究会編『民俗の歴史的世界』（御影史学研究会創立二五周年記念論集・御影史学研究会民俗学叢書七）、一二一～一四二、岩田書院。
- 坊津町郷土誌編纂委員会（一九六九）：『坊津町郷土誌（上巻）』、坊津町。
- 坊津町郷土誌編纂委員会（一九七二）：『坊津町郷土誌（下巻）』、坊津町。
- 坊津町教育委員会（一九八二）：『一乗院跡』（坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書 一）、鹿児島県川辺郡坊津町教育委員会
- 松田毅一・川崎桃太訳（一九七七）：『フロイス日本史（一）豊臣秀吉篇一』、中央公論社。
- 宮崎県高等学校社会科学研究会歴史部会編（一九九〇）：『新版 宮崎県の歴史散歩』（新全国歴史散歩シリーズ 四五）、山川出版社。
- 森田平次（一九三八a）：『能登志徴（上）』、石川県図書館協会。
- 森田平次（一九三八b）：『能登志徴（下）』、石川県図書館協会。
- 吉田東伍（一九七一）：『西国』（増補大日本地名辞書 四）、富山房。
- 和歌山県教育委員会（一九八一）：『根来寺坊院跡―昭和五六年度―』。同委員会。
- （財）和歌山県文化財センター（一九九四）：『根来寺坊院跡―広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』、和歌山県教育委員会・同文化財センター。
- 和歌山市史編纂委員会（一九七七）：『和歌山市史（第四卷）古代・中世史料』、和歌山市。



## 第五章

### 琉球における虚空蔵信仰の伝播と受容

## 第一節 虚空蔵信仰の南進

### 一 はじめに

現在、虚空蔵信仰として最も盛んなのは、男女十三歳の者が虚空蔵菩薩に知恵と福とを祈願する「十三まいり」の行事である。まず、これに注目し、その成立と展開過程を京都の西、嵯峨の法輪寺を中心にして、江戸時代の史料をもとに考察した。この中で、「十三まいり」の各地への伝播ということも扱ったが、主たる目的は「十三まいり」信仰を、歴史的に位置づけることにあった。その結果、京都の町衆の力が、「十三まいり」成立の背景となったことが指摘できた。

次に、死後初七日から十三度の忌日に、それぞれの本尊仏が決まっております、その最終三十三回忌に虚空蔵菩薩を祀る「十三仏」信仰を検討した。この「十三仏」信仰は、室町時代に生前において死後の供養を営む「逆修」信仰として行われ、村々の一結念仏衆が主体となって多くの十三仏石造物を造立したことが知られている。また「十三仏」信仰には、足利將軍家の関与が大きいことが注目された。

この様に、筆者は研究のはじめの段階においては、虚空蔵信仰を歴史史料の中に求める作業を続ける一方、種々の伝承や伝説に登場する虚空蔵菩薩を考察の対象としてきたが、やはり歴史的に虚空蔵菩薩がどのように信仰されていたのか、それが今日に至るまでにどの様に変容したか、あるいはしなかったかを知ることには一番の関心があった。

とはいえ虚空蔵信仰の二次元的な広がり、言い換えれば地理的な側面についても決して無関心であつ

た訳ではない。虚空蔵菩薩の所在を求めて、北は青森県の名峰岩木山の麓にあたる百沢の求聞寺から、南は日南海岸に面した宮崎県の目井津の虚空蔵堂に至るまで各地を歩いてきた。そのような中で、虚空蔵信仰が想像以上に、各地に展開していることを確認することが出来たのである。

しかし、沖縄にまで虚空蔵信仰が伝播していたことを知った時には、驚きを禁じることが出来なかった。それは、筆者が沖縄における仏教信仰の展開に就いて、全く無知であった事によるが、また虚空蔵信仰の研究が従来の民俗学的方法だけでは全貌を明らかにすることが不可能であり、より広い視野に立った地理学的方法をも活用すべき研究対象であることを示している、とも言えるのではないだろうか。

さて、沖縄の仏教信仰は、王室と結び付いていた故に、その系譜がはっきりしており、比較的变化が少なく古い姿をとどめることが出来たようである。しかし、第二次世界大戦の激戦の中で、ほとんどの寺院は崩壊し、仏像や宝物はもとより、記録類も多くを残さない。従って、あくまで『球陽』や『琉球国由来記』といった、王室の立場で纏められた史料しか扱えないという制約がある。

本説は、沖縄の虚空蔵信仰を見ることで、虚空蔵信仰の二次元的な広がりの一端を理解することに主眼をおきたい。もとより、前近代社会において、信仰の伝播という一種の情報の伝達は、人の移動を意味する訳で、その点で時間的な経過が生じるのが、やむをえないことは勿論である。

## 二 沖縄の『疱瘡歌』にみる虚空蔵信仰

沖縄の虚空蔵信仰を示している資料は、『疱瘡歌（ほうそうか）』である。



これは疱瘡に関する俗謡歌を集めた歌集で、中扉に「大清嘉慶（かけい）十年（一八〇五）」「疱瘡歌並和歌曆集口説古名歌集文」「粟国（あぐに）親雲上（ペーチン）御作 波真川仁屋（はまがや）」とあるが、成立年・編者は未詳とされる。

目次は「嘉謝手報（かじゃでふう）ふし」以下二十五の節名が記され、禁歌として疱瘡歌を謡うときに使用してはならない十一の節名が記されている。収録歌は琉歌、口説（くどき）、和歌で総首一〇一首。疱瘡（天然痘）に関する歌を集めたものとして唯一のものであり、貴重な書である。伊波普猷氏旧蔵にかかり、現在琉球大学附属図書館伊波文庫所蔵となっている。

その本文冒頭の数首を紹介してみよう。

嘉謝手報（かじゃでふう）ふし

- 一 大床理の簾い巻上りは童 きよら瘡の御神いまんしやうきやさ
- 一 円学寺こゝう蔵きよら瘡の御神に 親の願のこと三つたほうり
- 一 鍛子（どんす）金蘭（きんらん）のへり取ひの筵（むし）  
る 敷（しか）は居らめしやり御疱瘡御神（おかさおかみ）
- 一 歌や三味線に躍り羽しきようて きよら瘡の御伽遊ふ嬉しや

（以下略）

この伊波氏旧蔵の『疱瘡歌』を、最初に世に紹介したのは、比嘉春潮の『翁長旧事談』である。

比嘉春潮は、明治十六年（一八八三）に沖縄県中頭郡西原村字翁長に生まれる。本名春朝。明治三十九年、沖縄師範学校を卒業、同時に南風原小学校訓導となった。その後都合により退職、「沖縄毎日新

聞」の記者となった。大正十二上京、改造社に入社、出版部に務める。昭和七年、柳田国男と「島」を創刊、という経歴の持ち主で、『翁長旧事談』の中で明治中期の沖縄農村社会の、疱瘡に対する村の対応や民俗、信仰などをよく伝えている。

天然痘は清瘡（又美瘡と書く）というて沖縄にも昔からあった。その流行は「十三年廻る」ときまっていた。十三年目ごとに痘苗を福建又は鹿児島から貰って来て流行させたものであった。といのは、この天然痘は誰でも一度罹らねば済まぬものであり、それには四、五歳から十二、三歳の間がよく、三歳以下では高熱のために死亡率が高いし、十八、九歳以上になるとやはり熱が高く、その上皮膚が硬くなつてあとに痘痕が残つて醜いマージャーになる事が多い。

それで「公事持ち（こうじもち）」（政府の事業）として十三年ごとに痘苗を輸入することになっていた。この痘種を将来することを「お申し受け」といい、医師を福建又は鹿児島に派遣し、患者中の体質健教で病気の軽いものを選び、その瘡蓋（かさぶた）を貰い受けて来る。携え帰った瘡蓋は細粉にして竹の管で強健な小児の鼻の穴に吹き込む。すると数日にして発病する。二、三回同様な方法を繰り返すと後は、自然に那覇・首里・田舎・離（はなれ・島々）と沖縄全体に伝播したそうである。

この天然痘に罹ることを「清瘡（きよらがさ）お願い」又は「清瘡（きよらがさ）お迎え」といった。

いったん流行すると、子供はほとんど全部が一時に患者になり、大人はことごとく看病に忙殺され、しばらくはすべての生業が停頓の状態を呈したとのことである。医療の術もあつたには相違な

いが、無理に熱さましなど用いてはかえっていけないと言うので、ただ熱のひどい時に卵の白味や芭蕉の茎から搾った渋汁で体を拭く程度のもので、自然の経過を待つだけであった。

それで天然痘流行となると、一時に幾千人の人が死んだそうである。

そして、『疱瘡歌』について、

伊波先生所蔵の「疱瘡歌並口説集」は嘉慶十年（一八〇五）乙丑正月吉日求来之と表書きのある写本で、歌七十余首、口説き五、六篇載録されている。

これを読むと今から百数十年前の沖縄人が、いかにこの悪疫を見ていたかがわかる。これは明治のころまで大して変わりはなかった。

まず痘種を齎（もたら）す医者に乗っている船を「清（きよら）がさの神の御船」といった。その「御船」が来て程なく清瘡が流行すると、小児のいる家ではこの神様を迎えるために門や家を清めた、

「緞子金欄の縁取り（へりとり）の蕙（むしろ）、敷かば入りめしより御疱瘡御神（おほそおかみ）」

というて迎えた。小児がいよいよ天然痘に罹るとそれは「清瘡の神」の御入来であるから、あらゆる款待をした。歌にも「伽羅沈香御座に焼き（たき）」とあるように、匂いのよい香を焚いた。それからこの神は赤い美しい色が好きだというのであった。「清瘡の神の御船」が赤旗を揚げて那覇港に着くと、子供たちに真っ赤な着物を着せて赤い旗を押し立てて通堂（とんどう・波止場の名）に迎えたという事である。患者の小児にはすべて赤い着物を着させ燈心までも赤く染めたのを用

い、あるいは窓や壁に赤い幕を掛ける家もあった。又音楽や舞踊が好きだというので病人看護のために寝ずにいる「夜伽（よーとぎ）」や「夜起き」には男たちは一室で静かに三味線を弾き歌を謡った。

「里の里ごとに流行（はや）る歌までも、軽く清瘡（きよらがさ）の御願ひ言葉」（里ごとに流行している歌までも、清瘡が軽くあれかしの祈りの言葉である）

と歌ったとおり、「瘡瘡歌並口説集」も大半はその時の即興歌を集めたものであろう。

「清瘡（きよらがさ）の御神躍（おかみおど）り好きでも、躍（おど）てお伽（とぎ）さは軽くたぼうり」（清瘡の神は踊りが好きだから、踊ってお伽しましたら、軽くしてください）

と、病児の看護は同時に神様款待のお伽であった。

このように直接瘡瘡神に祈るほかに、かるめ森御神・虚空蔵菩薩・御伊勢御神にも祈った歌がある。「かるめ森御神」は又「かるめのう御（お）すい」とも申し「かるめ森」という拝所（おがみじよ）があったと見える。その名のように軽くという意味で祈っている。

「かるめもう御（お）すい御守りよめしより、御名（みな）のごと軽く三粒たぼうれ」（かるめ森の神様、お守りください、御名のように軽く三粒だけ痘を下さい）。

虚空蔵菩薩は円覚寺だが、御伊勢御神はどこに鎮座しましたか不明である。

とある。

いま一度、神仏への加護を求めた瘡瘡歌を上げてみよう。

嘉謝手報ふし

(第二首)

一、円学(覚)寺こゝろ蔵きよら瘡の御神に 親の願のこと三つたほうり

「円覚寺虚空蔵清ら瘡の御神 親の願ひの如三つたほうれ」

恩納ふし

(第十一首)

一、はやる清かさの軽く出るやら(う)に 神仏揃て守てたほうり

「流行(はや)る清ら瘡の軽く出るやうに 神仏揃て守て給うれ」

七尺ふし

(第十二首)

一、軽く清らかさの出ること朝夕 御守やいたはうり虚空蔵仏(菩)薩

(第十三首)

一、いつも清ら瘡や今年ことかろく あすひやかなたはうり御伊勢御神

「いつも清ら瘡や今年如軽く 遊びやがな給うれ御伊勢御神」

ここに、円覚寺の虚空蔵菩薩が登場し、沖縄において、虚空蔵菩薩が疱瘡の神として信仰されていたことを示す事例となっている。

円覚寺は第二尚氏の菩提寺であり、鎌倉の円覚寺を模して創建された沖縄屈指の名刹であり、首里の最もよい場所を占めていた。しかし、第二次世界大戦時の戦闘で崩壊し、現在わずかに復元された総門と放生橋が残るに過ぎず、寺院としての復興は見えていない。琉球大学のグラウンドがその寺域であり、う

つそうとした森であった事は、もはや想像することが難しくなっている。

『球陽』に、この円覚寺方丈に虚空蔵菩薩が祀られたとの記事がある。

『球陽』卷之三、尚真王十六年（一四九二）の条に、

円覚寺ヲ創建ス。

始メテ地ヲ城北ニトシ、此寺ヲ創建ス。而シテ荒神堂、寢室、方丈（寺院の表座敷）、仏殿、法堂、山門、両廊及ヒ僧房、厨庫、浴室等アリ。之レヲ名ケテ天徳山円覚寺ト曰フ。三年ニシテ成ル。以テ芥隠ヲ延シテ、開山住僧トナス。ソノ方丈壇ニハ虚空蔵菩薩ノ木像ヲ奉ジ、法堂壇ニハ薬師弥勒勢至ノ三像ヲ奉イ、仏殿ニハ釈迦文珠普賢ノ木像ヲ奉シ、土地堂ニハ大帝判官権ノ木像ヲ奉シ、祖师壇ニハ菩提達磨大師ノ像、護法韋駄天ノ木像ヲ奉ス。但シ韋駄天ノ像ハ、モト香積（寺院の厨所）ニ請ス。イマ炊煙ノ焔（ふす）ブヲ以テ此ニ改奉ス。後年ニ至リ、其像甚ダ壊ル。亦住僧際外、題奏シテ鈍（びん・福建省の異名）ヨリ仏殿ヲ請求ス。背後ニ普菴禅師ノ図ヲ懸ク。

とあって、方丈に虚空蔵菩薩、法堂に薬師如来・弥勒如来・勢至菩薩、仏殿に釈迦如来・文珠菩薩・普賢菩薩、土地堂には大帝判官権、祖师壇には達磨大師像・韋駄天像を祀っていたことが分かる。

この方丈に祀られた虚空蔵菩薩が、疱瘡が軽く済むようにとの信仰を寄せられたのであった。

### 三 疱瘡に対する民間信仰

疱瘡は、痘瘡すなわち天然痘の異称で、ウイルスの飛沫感染によって起こる。通常は十二日間（七く

十六日)の潜伏期間の後、急激に発病し、特徴のある熱型と、皮膚に規則正しく進行する発疹を生ずる。伝染力および致命率が高く、有史以来人類を悩まして来た。

しかし、一七九六年にジェンナーによつて発見された種痘により発病が防止されることなどから、一九七七年(昭和五十二年)ねソマリアで発見されたのを最後に、自然界から発生報告はない。

そこで、WHO(世界保健機構)は、一九八〇年(昭和五十五年)地球上から疱瘡が根絶されたことを宣言した。そして、種痘も現在では行われていないのである。

種痘法の発見で、予防できた段階から、種痘の必要のない段階を迎えたことで、疱瘡は過去の病気になった。

疱瘡は、大変恐ろしい病気であつたので、民間信仰にも色々な方法がとられた。

江戸時代の紀行家である菅江真澄の著した『菅江真澄遊覧記』には、

野路をあるいて湖岸にでると、大口(八竜村)という集落がある。ここに、もがさ(疱瘡)の地藏菩薩という石仏がおわします。まだ疱瘡にかかったことのない童をつれてきて、この御仏の前から石をひとつ借りてもつていき、これに小石をいくつもそえてかえし、回復の御礼参りをするという。

とあり、また、

九日 このあたりは疱瘡がはやっている最中なので門戸に賀(ゆだめ、弓をためて正しくする道具)をたて、わらふだ(さんだわら)を笠にし、わらじを重ねて結び、それにとうがらしをふたつさしはさんである。これはこのような色のよい疱瘡を願つてのことであるという。疱瘡の神には、日に

三度食物を奉り、また茨（いばら）二本に露のとうもさしあげる。茨の実は秋になると、ことに色が赤くなるので、その色のように赤くなるのを願うてのことであろう。露のとうはどういう意で手向けるのであろうか。

などと、疱瘡についての記事が散見されるのである。

現在でも、サンダワラに供物を盛って、ホウソウガミを送る風習が各地に見られる。

疱瘡の恐ろしさが未だに記憶されていることと、疱瘡が、他の病氣と違って通過儀礼的な要素があり、疱瘡神として崇める信仰の残存とも考えられる。

さて、日本各地にさまざまな疱瘡に関する民間信仰が展開しているのであるが、虚空蔵菩薩が、一般的に疱瘡の病魔から救う菩薩とは考えられていない。

従って、沖縄の『疱瘡歌』に歌われた円覚寺の虚空蔵菩薩は、伊勢の神とともに、日頃から霊現のある神仏として親しまれていたことになろうと思う。

しかし、それにしても円覚寺には虚空蔵菩薩の他にも、先に『球陽』で紹介した諸仏が祀られているのであり、また、円覚寺の王家の菩提寺としての性格を考えてみると、庶民が容易に信仰を寄せることは難しかったと考えられる。

なぜ、虚空蔵菩薩が沖縄に於いて、疱瘡の民間信仰に関与するのかは、円覚寺が虚空蔵菩薩はもとより、建物・仏像・文書を全て戦火で失っており、これ以上明らかにすることが出来ないのである。

#### 四 薩摩半島の疱瘡信仰（コッゾ講）



各地の疱瘡に対する信仰に、虚空蔵菩薩が関与する例をほとんど見ないこと指摘したが、そのわずかな例外が、薩摩半島において展開する講行事の中に、見つけることが出来るのである。

「鹿児島県年中行事」の春の彼岸の項に、次のようにある。

春の彼岸には薩摩半島を中心にして彼岸講という主婦たちの講がよく行われている。多くは彼岸入りの日に子供たちの成育を祈って主婦たちが揃って神仏にモノメイ（物参り）をする。その朝に講の宿に集まって米を粉にして小粒のホソンドゴ（疱瘡の団子）をつくり、それをもって、子供を伴って、集落にある疱瘡の神といわれる虚空蔵さまに参り、団子を供えて拝み、子供たちにも食べさせる。

とある。

さらに、『加世田市史』の講行事として「虚空蔵講（こっぞこ）」のことが紹介されている。

加世田市津貫の上木屋、下木屋でも春の彼岸入りに婦女子たちによる虚空蔵講が行われ、「こっぞこ」と呼んでいる。市内では他地区でも「こっぞこどん」といわれるこの講があったらしいが、今は廃されてこの両集落だけが続いている。

下木屋には、文政六年（一八二三）の銘のある虚空蔵菩薩石像がある。この石像も廃仏毀釈の時は遠く山中に隠し、難を逃れたという。虚空蔵菩薩は、福德と知恵の菩薩といわれ、主婦たちは、子供たちに徳と知恵を授けていただくようにとの念願から、この講には母子全員が参加していた。

また、ほうそうの神としてもあがめられ、母親たちは親指と中指、人さし指の三本を使ってほう

そう団子を作り、これを供えるとき、「おほそがかるいかるい」と唱えた。

この加世田市津貫の下木屋の虚空蔵菩薩の石像は、像容的には必ずしも虚空蔵菩薩と断定できるものではないが、かつて廃仏毀釈の際には、担いで山奥に隠したと伝承されており、この地が廃仏運動が盛んであった事と、また虚空蔵信仰がいま以上に展開していたことが窺えるのである。

また、この薩摩半島には「疱瘡勸進」の名で呼ばれたホウソウ踊りが伝えられている。

私が二十五歳の時（大正二年頃）だったと思いますが、近くの加世田にホウソウが大流行しているとのことで、秋目（坊津町）の集落でも大騒ぎとなり、さっそくホウソウ踊りをして防ごうと言うことになりました。

当時すぐ上の坂本のお婆さあんが、この踊りの上手なかたでしたので、娘の子たちを集めて坂下のむかしの納屋で毎日教えてくださいました。踊りは、集落内の宮内ケンイチさん宅がおおきかったのでそこで踊られました。

十四、五歳から嫁入り前の若い娘さんが二十人くらいで、「呉台町のセンガメ女」などの踊りを終日踊ったものでした。この日は各集落から馬場組とか野中組とかいうように、たくさん踊りの組が出てとてもにぎやかなものでした。手踊り組の先頭は、塩屋の馬方踊りでしたがこれは塩屋の人たちだけが踊れるものでして、当時その先頭に立っていた人の踊りの上手だったことを今でも覚えております。

私どもの小さい頃には、もう「植えボウソウ」がありましたして何度もしましたので、私どもが物心ついてから後は、村内にほんとうのホウソウがはやったと言う話も聞きませんし、またその記憶も

ありません。ただ小さいころ隣村にはやったとき、集落の家の軒先に予防のまじないとして、刺のあるタラの木がぶら下げてあったのを覚えています。（秋目の山口テルさん、当時八十四歳）  
また、

子どもたちの種痘が完全について、そのカサブタが取れる頃になると、米の粉でホウソウ団子を作り、家で神様を祭っている所はその神前に、それ以外は集落のホウソウ神様の前に三つずつ供えた。子どもにはタカランバッチョをかぶせ、親は笹の葉を持ち、「ホソンカンサア、ノツキヤイ、ノツキヤイ」と唱えながら葉先で笠の上をなでてくれたものである。それが終わると、供えた団子は子どもたちに三つずつ食べさせ、また近所にも「ホソが無事つきました」と言って三つずつくばっていた。

この団子は三つ以上は決して食べさせぬものであったが、ホウソウ踊りのハヤシにも「オホソは三つでカルイトナ」とあり、この団子の三とどんな因縁があるのだろうか、今でも不思議に思っている。

今一つ、取れたカサブタをうっかり外に捨てて、それを狐に食われでもしたら、その子どもがばかになると言っ、紙にくるんでダンスの引出しに大事にしまっていたものである。（泊まりの鹿屋ハヤさん、当時八十二歳）

疱瘡踊りの中でも、坊津町鳥越地区のものが有名で、その歌詞の第一段が今の伝承にもあった「呉台町（ごだいまち）」である。

それには、

一、呉台町の千亀女（せんがめぞ）

十九や二十でお伊勢まいり

二、お伊勢さまのお土産にや

御疱瘡三つ賜（たも）うた

三、よか嫁じよが出てまねく

やろか押しもど戻そかギヨヤの

浜で

四、一つや二つや三つや四つや五つや

おひな女（じよ）がお伊勢まい

る

五、砂畑の煙草の色がサ

よけれどナ お軽うござる

とあり、伊勢の土産に疱瘡を三つ賜るという内容を伝えている。

また、加世田地区では「お伊勢講」として、

お伊勢講、上津貫地区では子供の生まれた家で、米粉でほうそう団子（ホソンドゴ）を作り、小さなものを三つ紙に包んで「ホソカルカル、三ツ」と唱えながらお伊勢さまに供えた。

とあって、疱瘡信仰が一方で伊勢信仰と結び付いている。

このように、薩摩半島の西南部では、疱瘡の信仰に虚空蔵菩薩と伊勢信仰が関係しており、この事は、

沖繩に於ける『疱瘡歌』において虚空蔵菩薩とお伊勢神が祈られているのと酷似するのである。

さて、この地方の江戸時代の地誌である『三国名勝図会』に、

#### 虚空蔵堂

久志村にあり、此虚空蔵は、痘瘡の願に靈応ありとぞ少児の未だ痘を病ざる者は、其輕きを祈り、既に痘を歴し者は、報賽なりとて、春秋の彼岸、参詣する者甚だ多しとかや、

とあって、薩摩半島に於いても、疱瘡と虚空蔵菩薩の結び付きは、すでに近世において見られることが分かった。

#### 五 坊津一乗院の虚空蔵信仰

さて、江戸時代に疱瘡の信仰を寄せられていた虚空蔵堂は久志にあり、疱瘡踊りが有名な鳥越とともに現在の坊津町にあたる。

薩摩半島の西海岸にある坊津は、古代より遣唐使船の出発地として歴史に登場し、とりわけ唐招提寺の鑑真和尚が苦難の末、天平勝宝六年（七五四）年に、坊津の秋目に至ったことはよく知られている。

室町時代以来、島津氏の中国貿易・琉球貿易の根拠地となった。特に十五世紀以後、遣明船の発航地になって繁栄。筑前博多津・伊勢安濃津とともに日本三津の一に数えられた。江戸時代には外国貿易港としての地位を長崎に奪われて衰退し、わずかに漁港としてその生命を保ち今日に及んでいる。

吉田東伍の『大日本地名辞書』の坊津の項には、坊津の地名の起源について、

地理纂考云、坊津の名は此地の龍巖寺一乗院の僧坊より起る、海東諸国記には、房津に作れり、そもそも此津の皇国西南の極、洋海の辺陲にして、絶域に対望す、因て昔時支那西洋の通商互市する者、此の津に輻輳せしを、慶長年中、長崎を以て諸夷来朝の湊と定められしより、繁華地を払ふ龍巖寺一乗院は真言宗の淨刹にして、前は海に向い後ろは山を帯び、登臨奇絶なり、とあり、この地が、一乗院という真言宗の寺院を中心として栄えたことを述べている。

『坊津町郷土誌』には、

坊津の歴史は、まず一乗院に始まり、そして一乗院の歴史とともに終始する。一乗院あつての坊津である。

とし、坊津と一乗院との関係がいかに大きいかを思わせる。

江戸時代の地誌である『三国名勝図会』に

は、坊泊（薩摩国河辺郡）の仏寺の項に、

西海金剛峯、如意珠山、龍巖寺、一乗院（地頭館より子の方、二町余、）

坊津村にあり、京師御室仁和寺の末にして真言宗なり、本尊虚空蔵菩薩（座像、定朝作、脇侍金剛力士同作、）開山百濟国日羅、中興開山成圓法師、

當寺の由来記等を按ずるに、敏達天皇十二年、百濟国の日羅、来て名山靈嶺（くつ・そばだつ）を遍歴し、此地に坊舎仏閣を营造し、上の坊・中の坊・下の坊といふ、てづから阿弥陀像三軀を刻みて、三坊に安置し、龍巖寺を号す、尋て敏達天皇推古天皇の御願寺となる、爾来盛衰一ならず、長承三年、癸丑、十一月三日、鳥羽上皇院宣を下し、當院を以て紀州根来寺の別院とし、西海の本

寺とす、又上皇の御願寺として、如意珠山一乘院の勅号を賜ふ、  
続けて、中興の成圓法師の事績を上げる。

其後星霜を経て、寺院漸く衰へ、或は断へ、或は続く、成圓法師なる者あり、延文二年、丁酉の  
歳、當院を再建して、中興第一祖となる、成圓法師は、素（もと）日野少將良成といふ、其父日野  
中納言某、鹿籠硫黄崎に配流す、良成京師より来り、父を省て、坊津に駐留せり、遂に発心して、  
此津西光寺住持日成律師に従て出家し、四度瑜伽を修す、既にして京師に上り、仁和寺常瑜伽院御  
室一品入道寛性法親王に従て、廣澤派の真言秘法を傳て、印可を受く、時に法親王虚空藏大士の像  
を成圓に賜ふれ、當寺の本尊にて、福德の本尊なり、（虚空藏菩薩は、南方寶部の尊にて、福德富  
貴を主どる、大日經疏曰、虚空藏者如虚空不可破壊、一切無勝者、藏者如人有大寶藏、施所欲者自  
在取之、不受貧乏、如来虚空之藏、亦復如是、一切利樂衆生、事皆從中出、無量法寶自在、而無窮  
竭相、名虚空藏也、云云、理趣經、虚空藏章云、修行者若入此曼荼羅、令人現生所求、一切富貴階  
位悉得、滅一切貧窮業障云々、愍念貧窮、常行忠施、三輪清浄心無慳悋（けんりん）、當興等虚空  
三摩地相應、不久獲得虚空藏菩薩自云云、宿曜經、儀軌虚空藏條云、若人欲求福智當歸依此菩薩云々  
虚空藏は、かゝる三摩地の尊なる故、法親王の賜ひなるべし、）既にして足利大將軍尊氏に謁して、  
寺院の再建を請ふ、文和三年、春、願書を京師に上る、傳奏して許可を受く、邦君齡岳公、有司に  
命じて、當寺を経営す、延文二年、功を畢れるなり、是より密教を相承す、

次に、第四世の頼世法印の事績に続く。

第四世頼俊法印、聡敏博達を以て称せらる、高野根来に遊て、教相の玄旨を究む、又南都東南院

に至て、俱舎・法相を肆（なら）ふ、又根来寺学頭快憲僧都に随て、廣澤派の秘法を受く、後又仁和寺智恵門院宥海和尚に随て、廣澤の密法を問ふ、和尚頼俊を器とし、授るに自宗肝心密法淵源を以てし、一流附法の弟子とす、尋て經典四十函、及び仏像・道具等を與ふ、且告て曰、汝速に国に歸て、密教を弘宣し、邦家を鎮護せやと、於是應永十五年、根来寺を辞して、當寺に歸る、所得の仏像・經典等を寶藏す、是より當寺の密法一新せり、（後略）

そして、天文十四年（一五四六）後奈良天皇は、一乗院を勅願寺とし西海金剛峯寺の勅額を賜うた記事を載せている。

藩政時代においても、一乗院は藩内着座門主祈願寺八ヶ寺の一つとして、真言宗広沢流百二十カ寺の末寺を支配する、新義真言宗の大本山であった。一乗院は、鹿児島の大乗院および大興院とともに、真言宗の三大寺院と称せられた。

このように、海外貿易の富を背景に栄えた一乗院も、坊津の貿易港としての地位が長崎に奪われ、また薩摩藩内の全ての寺院が一時的にしる廃された、明治初年の廃仏毀釈の嵐の中で崩壊し姿を消して仕舞った。

廃仏毀釈により完全に宗教活動を停止した一乗院の境内跡は、現在、坊津小学校の敷地となっている。その裏山には、歴代住職の壮大な墓地群があり、校門横に残されている石造の仁王像と共に、わずかにかつての繁栄の跡をとどめている。

この薩摩の地の廃仏は徹底して行われ、明治二年十二月、島津氏との関係で最後まで残された、福昌寺・大乘寺・一乗院・昭倍院・宝満寺・専修寺も廃することに決まり、藩内一寺も残さず一掃された。



一乗院も廃寺が決まると、次のように処置された。

一、寺院の建物は解体。

二、僧侶は還俗のうえ故郷へ退散。

三、木製の諸仏像、位牌、仏具などは、境内の二つの井戸に投入し、井戸はそのために一杯になったという。

四、石造の仁王一對は壊して門前に打ち捨てた。これは現存するが、そのために顔面や腕などに損傷がある。等々。

散逸した仏像や仏具、宝物や文書の一部は地元の努力で集められ、坊津町立郷土資料館に展示されている。その幾倍もの貴重な文化財が無惨に破壊された事を思うと、歴史のうねりとはいえ、残念な気持ちを抑えられない。

坊津町内のアカンコ坂に残るタラーク（虚空蔵菩薩の梵字）を刻した供養塔は、大永六年（一五二六）十二月三日の銘があり、建立の主旨は伝えられていないが、海外交易の全盛時代に、この地に虚空蔵信仰が確実に展開していた事を雄弁に物語っている。

この供養塔の存在は、史料の少ない中世の後半の坊津を探る、貴重な証左である。

さて、坊津の一乗院が本尊を虚空蔵菩薩とすることは、この周辺の地域で疱瘡に虚空蔵菩薩が関係することと、切り放すことは出来まい。

最も、一乗院は藩主島津氏の祈願寺で格式も高く、直接にこの本尊を拝することは叶わぬであろう。そこで、先に上げた久志村の虚空蔵堂に参詣する事になったのであろう。

『三国名勝図会』の指宿（薩摩国揖宿郡）の仏寺の項に、

安泰山源忠寺

虚空蔵堂（本尊座像、高三尺三寸）

當寺の境内にあり、此像は、往古漁人海中より得しといひ傳ふ、痘瘡に祈願すれば靈驗ありとて、近郷よりも参詣する者多しとぞ、

とされるように、痘瘡と虚空蔵菩薩の結び付きが広がって行った事を知るのである。

沖繩の大清嘉慶十年（一八〇五）の前後に成立した『痘瘡歌』に、虚空蔵菩薩と痘瘡の結び付きが見られ、薩摩半島に於いては、現行習俗及び近世末に遡って虚空蔵信仰としての痘瘡祈願が見られるのである。

このことから、両者の間に何らかの関係を想像することは、許されるであろう。

そして、沖繩と薩摩半島の双方で、痘瘡と伊勢信仰との関係が伺えるのも、両者の共通性を補強する。

## 六 琉球護国寺の虚空蔵信仰

前章までの考察で、痘瘡に対する信仰を通して、琉球国時代の沖繩と薩摩半島の坊津の虚空蔵信仰に共通の性格を見いだした。

しかし、沖繩の場合、痘瘡歌に登場する円覚寺は第二尚氏の菩提寺であり、痘瘡の信仰に向けられることが、素直には理解し兼ねるのである。そこで、薩摩坊津の虚空蔵信仰が琉球の地に伝播したことを

考えねばならないが、薩摩と琉球の当時の交易の盛んな事を思えば、無理な展開ではない。そこで、琉球の仏教信仰に付いて、特に坊津との関係を中心に検討してみたい。

『沖繩県史』では、琉球への仏教伝来について、

まず英祖（王）が在位していた咸淳年間（一二六五～七四）に、僧禪鑑によって仏教が伝来された。彼の生国は不明であるが、当時沖繩と日本との間に貿易船が往来していたことは確実である。英祖は居城たる浦添城の西に極楽寺を建立し、禪鑑をそこに居住させて仏教に帰依した。これは沖繩における仏教伝来の文献上の初見である（『中山世譜』卷三、英祖王咸淳二年紀附記、『琉球国由来記』卷十一密門諸寺縁起、天徳山龍福寺記）。

その後、十四世紀後半に察度（王）のとき、京都仁和寺の末寺であった薩摩坊ノ津の竜張寺一乗院から頼重が来島し、波の上に護国寺を開いて真言宗を弘めた（『中山世譜』卷三、察度王洪武十七年八月二十一日紀、『琉球国由来記』卷十一密門諸寺縁起、波上山護国寺記）とある。

また、特に真言宗の伝来について、

次で察度（王）代には、真言宗の頼重が来島した。『中山世譜』に「護国開山住僧、頼重法印入滅す。蓋し頼重は乃ち日本人なり、何年に国に至り以て寺を波上山に建てしや、今考ふべからず。然れども洪武十七年（一三八四）頼重入滅す。則ち元朝の末、或は明朝の初、其ノ国に至りしこと疑なし。」頼重の来島年は不明であるが入滅の年は明瞭だとしている。薩摩の坊津の一乗院には、頼俊、頼憲、頼政、頼忠という名の住持が多く、六世頼政は、一乗院の灌頂院道場の建築費勸化の

為に、琉球に渡って数年滞留したと云われて居り、坊津が唐や琉球との交易船の港であったとも云われているので、頼重もこの住僧ではなかったかとも云われている。琉球における真言宗の祖である。

とされている。

頼重という僧が、波上山護国寺を開いたのが琉球における真言宗の最初である。しかし、頼重の出自については、その没年を知るだけで、坊津一乗院との関係を推測するのみである。

『琉球国由来記』の「波上山護国寺」の項でも、

察度王御代、有建立哉。開山頼重法印者、洪武十七年八月二十一日入滅。惟恨、第二世以来数百年、無記楮。故不知其幾世矣。

と、同様の記事を載せるだけである。

さて、同じ『琉球国由来記』には、

波上山三光院護国寺

波上山者、为国家鎮守、祈願所也。

御本尊、虚空蔵菩薩。是惣名略有二種。一者僧寶、今尊是也。二者仏寶、五仏是也。故云五大虚空蔵。諸於瑜伽中、三業濁水清。故於心月輪中、本有智々光明常恒。能滿諸願、諸妊具足。故此尊殊而奉勸請本地瑜伽道場者也。（此本尊者、自大寺建立之初、安置者歟）

とあって、護国寺が第二尚氏の祈願寺であったことを述べる。

護国寺は、先に述べてきた王家の菩提寺である円覚寺に劣らぬ琉球屈指の大寺院であり、その本尊を

虚空蔵菩薩とするのである。

この護国寺も大戦の戦火で山門を残して全焼したが、関係者の努力で、復興を成し遂げた。もともと、この本尊虚空蔵菩薩は、『沖繩仏教史』によると、

旧記に依れば本尊は虚空蔵菩薩とあるが、康飾二十四年（一六八五）当時の住持頼久和尚は尚貞王のために日護摩を修する事になり神徳寺より不動明王を迎えて以来、沖繩戦に至るまで不動明王が本尊であった。此の仏は昔、中城村の糸蒲寺に奉安してあったが、火事で寺が焼失した際に安里の神徳寺に移安されていた。

とあるように、虚空蔵菩薩から本尊が不動明王に変わっている。

それにしても、琉球の真言宗の要である護国寺が十四世紀の後半の創建から、十七世紀の後半にかけて、虚空蔵菩薩を本尊としていたことは大変興味深いのである。

護国寺の開山頼重上人は、やはり坊津一乗院の虚空蔵信仰を、この琉球にもたらしたと考えるのが妥当である。琉球には、真言宗である護国寺の虚空蔵菩薩と、一世紀遅れて禅宗の円覚寺に置かれた虚空蔵菩薩があったことになる。

『疱瘡歌』に歌われた虚空蔵菩薩は、円覚寺のものであったことは、何度も述べてきた。そして、王室の菩提寺である円覚寺の、尚円王以下歴代の国王、王妃等の霊を安置してある方丈に祀られた虚空蔵菩薩と疱瘡の信仰が馴染みにくいこともふれておいた。

史料的な制約で、想像を逞しくするほか無いが、本来、疱瘡の祈願は護国寺の虚空蔵菩薩に対して行われていた、と考えるのである。

このように、薩摩坊津一乗院と琉球の護国寺とは深く結び付いていたと思われる。

七 まとめ―根来寺と鉄砲伝来―

坊津一乗院の由来によると、天正元年（一五七三）紀州根来寺が豊臣秀吉によって焼き亡ぼされた時、根来寺の覚因法師らが根来寺の宝物を抱いて当院を頼って逃れ来た、とされている。

また、『三国名勝図会』には、

旧記には、往古は本山紀州根来寺傳法院・西海龍巖寺一乗院・関東本寺摩尼珠山明星院（一に遍照院に作る、）真言新義の学徒を総督し、諸寺に紀綱たること、鼎足の如しといへりとあり、紀州根来寺の影響が濃いことを伺わせる。

また、琉球護国寺も創立当時より明治までの五百年間は新義真言宗であったとされている。

根来寺は、覚鑱上人が新義真言宗の本山として開いたもので、天正十三年（一五八五）豊臣秀吉に依って焼討ちされて焼亡した。

その学僧は京都の智積院と奈良の長谷寺に身を寄せ、智積院は新義真言宗智山派本山、長谷寺は同豊山派本山として、新しく出発したのである。

根来寺は智山派・豊山派からは独立した単立寺院として、慶長年間に浅野氏によって再興された。大師堂、多宝塔は戦火をまぬがれ、多宝塔は永正十二年（一五一五）再建のもので、現存中最大の物として貴重なものである。

秀吉によって一山崩壊した根来寺は、その歴史にも謎が多く、最近になって各方面からの研究が進んではいるものの、明確でない部分が多く残されている。

根来寺は、本尊は大日如来であるが、虚空蔵信仰という観点から見ると、二つの点で結び付きの糸口が見える。

その第一は、根来の名の由来についてで、

『紀伊国名所図会』によれば、平安時代寛治年中の修験行者で、伊勢の人、根来坊という人物のことをあげている。

つまり、密宗の一字を建立せんと願っていた根来坊は、那智山の滝に一千日こもって修行中、根来山が密教相応の霊地であるとの夢のお告げにより、この地にいたり、行者堂のかたわらに一字を建立し、それを豊福寺（ほうふくじ）と号し、本尊として虚空蔵菩薩を安置したそうなのである。

とあって、根来寺以前にあった豊福寺の本尊が虚空蔵菩薩であるという。

『紀伊続風土記』に、

○根来寺（一乗山大傳法院）真言宗新義無本寺 禁殺生

根来寺の疆域（きょういき・領土）周回凡四里許中央平坦の地、東西長く南北短し、伽藍其間に連亘して区域を四つに分つ、西にあるを圓明寺境内とす大門の良位三町許にあり、其良に接する者を豊福寺境内とす、豊福寺の東に連なる者を大傳法院境内とす、傳法院の巽に接する者を密嚴院境内とす、其他東に菩提谷關伽井谷鼓谷あり、北に小谷あり、西に西蓮華谷三岡等あり、南に前山あり堂舎子院其間に充付して伽藍の数凡て七十余宇子院凡て九十余宇院此古堂舎の大略なり、天正の

兵火に悉焼亡して其遺るもの大塔大師同のみなり、

とあり、根来寺は天正の焼討ち以前には、圓明寺、豊福寺、大傳法院、密巖院その他によつて構成されていたことが分かる。

この内豊福寺は、『紀伊国名勝図会』によつて本尊が虚空蔵菩薩であつたことが知れ、先に挙げた根来の名の由来と関係するのである。

さて、根来寺と虚空蔵菩薩の関連の第二は、新義真言宗の宗祖でもある興教大師覺鑊の、虚空蔵求聞持法に対する信仰である。

虚空蔵求聞持法は、虚空蔵菩薩を本尊仏とする密教的な修法で、聞持すなわち記憶力を求めて修せられる。そして、この法によつて聞持を得ると一度聞いたことを忘れないとされるのである。

古代仏教においては、多くの經典を暗記しなければならぬ学僧を志す者が、まず第一に修すべき法とされ、宗派に拘らず熱心に行われた。

中でも空海は、ある沙門からこの虚空蔵求聞持法を示された事で、仏門を志す機縁となつた。この話は、空海著『三教指帰』序文にあつて有名なものである。

これを受けて以後、この法は空海門下によつて大切に扱われ、やがて真言宗の秘法ともいふべき位置を占めるようになった。

覺鑊も、空海の系譜のなかで求聞持法を修したのであろうが、特に熱心で、『太平記』の卷十八「高野与根来不和事」には、

覺鑊トテ一人ノ上人才ハシケリ。一度三密瑜伽ノ道場ニ入シヨリ、永四曼不離ノ行業ニ不懈、觀法



座タケナハニシテ薰修年久シカリケルガ、即身成仏ト乍談、猶有漏ノ身ヲ不替事ヲ歎テ、求聞持ノ法七座迄行フ。

と、虚空藏求聞持法を七度行つたとされるほどである。

これは、いささか伝説的な誇張が込められているが、

保安二年（一一二一）、醍醐理性院において賢覚法眼に灌頂をうけ、また求聞持法も伝授されたという。覚鑿自身も、賢覚相伝の求聞持法については「求聞持事」（『興教大師全集』下）で述べられているところである。

あけ翌年の二十八歳、八大立願のもと、六月二十四日の晨朝より始めて、八月十七日に早晨をもつて結願とした求聞持法を修した（「立申大願之事」『同上書』）。その時の助成僧は、先にのべた事相の秘談を授けられたという隠岐上人明寂と、もう一人は永尋であった。

翌年二十九歳の正月、今回は十大立願のもとで求聞持法を修する（「求聞持願文」『同上書』）。前のものは、真言行者としての心眼を開くことを願い、この年のものは、自らの深智を開発することによって、師であり助成僧をも務めてくれた明寂の深智の開発をも祈願したものであった。いわばこの頃は、求聞持法の修法において、自らの肉体を極限状態にまで追い込むことによって、心眼を開き、深智を開発することに専念したであろうか。

とされるように、とりわけて求聞持法に力を注いだ事は事実である。

そのことを裏付けるように、密厳院境内に、

求聞持堂 同（方五間）

があり、また大門の北にある三岡にも三間四面の求聞持堂の存在が記録されている。

覺鑿は一方では不動明王の信奉者でもあったが、虚空蔵菩薩への帰依もひとかた成らぬものがあつた。さて、根来寺が最も勢いを誇つたのは、いわゆる根来衆が活躍した南北朝以後、特に戦国時代であつた。鉄砲伝来以後、いちはやくこれを取入れ、鉄砲隊を組織したことはよく知られている。

日本への鉄砲の伝来は、天文十二年（一五四三）種子島に来航したポルトガル船によるものであつた。この鉄砲伝来に関しては、

南浦文之著『鉄砲記』が詳細かつ正確である。

その『鉄砲記』に、

於此之時。紀州根来寺有杉坊某公者。不遠千里。欲求我鉄砲。（この時において、紀州根来寺に杉の坊なにがしと云う者の有り、千里を遠しとせず、我が鉄砲を求めんと欲す。）

とあり、これが根来寺にいち早く鉄砲が伝来した由来である。

そして、林真治先生の「根来寺僧兵抄」には、

根来寺僧兵四人の旗頭の一人杉之坊の実兄津田堅物算長が種子が島で技術を修得して、翌天文十三年帰国、根来山の門前町に住む鍛工芝辻清右衛門を指導して和製鉄砲の製造に取り組んだのが内地における鉄砲の始まりであるが、この時点ではまだ満足できる段階にまで至っていなかったようである。

『紀伊続風土記』では根来寺から二キロばかり西南の岩出町金屋をその製作地に模しているが、根来寺のすぐ近くの岩出町森に「鍛冶垣内」という古い小字名がありここも有力な候補地と考えら

れる。

とあって、このようにして軍事力を高めたが為に、かえって秀吉に依って徹底して破壊される不運を被ることになる。

さて、『鉄砲記』には「不遠千里。欲求我鉄砲。」とされているが、鉄砲伝来の天文十二年（一五四三）から約二十年遡った大永六年（一五二六）に、薩摩坊津にタラクク（虚空蔵菩薩の梵字）の供養塔が建てられていることに注意しなければならない。

つまり、この時期は根来寺が最も活況を呈したと同時に、根来寺の西海の別院として坊津一乗院も隆盛の極みにあったと考えねばならない。種子島にもたらされた鉄砲の威力は、まず坊津一乗院の知るところとなったであろう。

そして、坊津から根来寺への伝達は、薩摩半島と琉球の疱瘡信仰が海上を隔てて関係したように、海上交通に依った可能性を否定できないと思う。

#### 註

- (1) 拙著『虚空蔵信仰の研究』（御影史学研究会民俗学叢書一、御影史学研究会、昭和六十二年十二月刊）所収の各論文。
- (2) 池宮政治「『疱瘡歌』解説と本文」（『琉球大学法文学部紀要 国文学・哲学論集』第二十号）による。
- (3) 『日本民俗誌大系 第十卷 未刊資料Ⅰ』（角川書店、一九七六年七月刊）所収。

- (4) 桑江克英訳註『球陽』（三一書房、一九七一年七月刊）五十頁。
- (5) 「男鹿の秋風」文化元年九月十日条（秋田県）による。（『菅江真澄遊覧記』五、東洋文庫、平凡社、一九六八年七月刊）
- (6) 「男鹿の春風」文化七年四月条（秋田県）による。（前掲書）
- (7) 『角川日本地名大辞典 四十六 鹿児島県』（角川書店、昭和五十八年三月刊）に所収。福元三好先生が執筆。
- (8) 『坊津町郷土誌』下巻（坊津町、昭和四十七年十二月刊）六六四頁。
- (9) 『坊津町郷土誌』上巻（坊津町、昭和四十四年十二月刊）五八三頁。
- (10) 前掲『加世田市史』
- (11) 『三国名勝図会』第二卷（新潮社、昭和五十七年八月刊）七八〇頁。
- (12) 『増補 大日本地名辞書 第四卷 西国』（富山房、昭和四十七年四月増補再版刊）六一七頁。
- (13) 『沖繩県史第五卷 各論編四 文化一』（沖繩県教育委員会、一九七五年二月刊）一六一頁及び二四六頁。
- (14) 『琉球国史料叢書』第一（名取書店、昭和十五年十二月刊）二二六頁及び二三〇頁。
- (15) 名幸芳章『沖繩仏教史』（護国寺、一九六八年九月刊）一一九頁。
- (16) 岩出町根来山誌編纂委員会編『根来山誌』（晃洋書房、一九八六年十月刊）十頁。
- (17) 『紀伊続風土記』第一輯（巖南堂書店、明治四十三年十二月刊）六二一頁。
- (18) 前掲『根来山誌』十五頁。

(20) 釈玄昌（南浦）『南浦文集』（慶安二曆季秋中旬 京都中野道伴刊行）所収。前掲『根来山誌』三八三頁。

## 第二節 『琉球神道記』にみる十三仏信仰

### 一 袋中上人と『琉球神道記』

柳田国男は『海南小記』に「袋中大徳の『琉球神道記』のごとき、内地へ持って帰って久しい後に上木したが、沖繩の見聞録に費やしたのはその一小部分だけで、主としてはあの時代の普通学とも言うべき天竺、震旦の略史、仏教の伝来や十三仏の由緒などを、島の人たちに語ろうとした説教の種本のようなもので神々の縁起はもっぱら安居院の『神道集』により、暗記のままを書き置くところを見れば、その目的は推測ができる」と記している。<sup>(1)</sup>

本稿では、『琉球神道記』に説かれる十三仏信仰と、その背景となった袋中上人の宗教観の一側面について考えてみたい。

袋中について『日本史辞典』（角川書店）は、「袋中 たいちゆう 一五五二～一六三九（天文二一～寛永一六）江戸初期の浄土宗の僧。芝増上寺で浄土の教義を学び、一五八三（天正一一）中国に渡るうとして失敗、琉球に渡り、尚氏の保護を受け、『琉球神道記』『琉球往来記』を著わす。一六一一（慶長一六）帰国し京都三条に檀王法林寺を再興。東山五條に袋中庵を創建した。『血脈論』ほか浄土教学の著述が多い」とする<sup>(2)</sup>。玉山成元は『国史大辞典』の「良定」（袋中の別名）の項目で、「近世浄土宗発展の上に大きな功績を残した学僧である」とした<sup>(3)</sup>。

袋中は、一五五二年（天文二一年）に現在の福島県いわき市で生まれ、一六三九年（寛永一六年）に

飯岡西方寺（京都府京田辺市）で八十八才でなくなつた。浄土宗の学僧として著述が多く、中国に渡ろうとして果たせず琉球に至り、尚氏の保護を受けた。琉球から帰国した後は京都三条に住した。その後、京都・奈良の府県境、浄瑠璃寺などのあたりで暮らし、最晩年には飯岡に住し、そこで亡くなつたのである。この袋中は、浄土宗名越派の教義のみならず諸学を学び、『梵漢対映集』の著述にみられるように梵字への造詣が深かつた。

袋中にまつわる逸話に次のような話がある。大島彦信の「袋中上人と琉球巡錫について」によると、「幼いころから神童の誉れがたかく、五歳で千字文を暗記し、六歳で五経を読論したといわれるほどの秀才で、両親の信仰の影響をうけてか、七歳の時、自らすすんで能満寺の天蓮社存洞上人の門に入って出家した。幸い存洞は叔父にあたつていたので特に心をもちいて教育し、九歳のころには浄土宗所依の経論はもちろん、その他の必要な経論祖釈などはみな多く暗記してしまつたという。」

続けて、「存洞上人はそこで大いに望みを託し、上人十四歳の春、永禄八年三月一四日には剃髪染衣して、まず沙弥戒を授けて名を「袋中」と与えた。存洞上人は試みに「袋中」とは如何なる意かと問うたところ、上人は即座に「錐袋を脱する意」と答えたので存洞上人はがくぜんとしてその英才振りに驚かされたという。すなわち袋中の名は、『史記』『平原君伝』の話に「賢士の世に処する錐の囊中に存するが如く、未必らず露はる」とあるのによられたのである」とされる。<sup>(4)</sup>

琉球の記録を見ると、『琉球国由来記』には<sup>(5)</sup>、

本国念仏者、万曆年間尚寧王世代、袋中ト云僧（浄土宗、日本人。琉球神道記之作者ナリ）渡来シテ、仏経文句ヲ、俗ニヤハラゲテ、始テ那覇ノ人民ニ伝フ、是念仏ノ始也。

とあり、『琉球国旧記』には<sup>(6)</sup>、

万暦年間。尚寧王時。日本僧。有袋中者。(即名□浄土宗也。會著琉球神道祝部記)始到琉球。撰仏教佳句。以和俗言。而教于那覇人。

本国念仏。自此而始。

とある。さらに『球陽』には<sup>(7)</sup>、「尚寧王十五年、扶桑ノ僧袋中、国ニ到ル」として、

日本国浄土宗ノ僧袋中、本国ニ雲遊ス。逗留三年ニシテ、神道記一部ヲ著作ス。且ツ仏経ノ佳句ヲ穗取シ、以テ俗言ニ和シ、而シテ之レヲ那覇人民ニ教フ。日夜之レヲ誦シ之レヲ読ミ、人ヲシテ善心ヲ興發シ、悪志ヲ懲戒セシムルナリ。本国ノ念仏、此ヨリシテ始マル。

とある。

袋中が『琉球神道記』によって高く評価されていることは、『大日本史料』が慶長一〇年、『琉球神道記』の刊行をもって項をたてていることにも伺える<sup>(8)</sup>。

慶長一〇年四月一五日

陸奥ノ僧良定袋中、琉球ニ抵リテ浄土宗ヲ弘メ、琉球神道記ヲ著ス、

「琉球神道記」 积弁蓮社袋中集

(卷第一並序) 明萬曆三十三年龍集乙巳〇慶長十年、四月之亡日也、

(奥書) 此一冊有草案、自南蛮帰朝平戸至中国、於石州湯津薬師堂初之、上洛之路中而書之、於山崎大念寺終之、集者袋中良定 判 慶長十三念十二月初六云璽

〇序文及び奥書ヲ併セ考フルニ慶長十年、良定琉球ニ在リシトキニ、筆録セルモノニシテ、十三年



帰朝ノトキ、ソノ草案ニヨリ、此一本ヲ書写セシモノナラン

とあり、『琉球神道記』は袋中が琉球にいたときに書き留めた草案を、帰国後、石見銀山で賑わった温泉の薬師堂において整理したものだとしている。

続けて、「沖繩志 一名琉球志」「磐城志」「檀王法林寺文書」「袋中上人傳」「磐城誌料」を取り上げている。そして、「檀王法林寺文書袋中上人傳及ビ磐城誌料ニ、琉球往来記ヲ著ストアレドモ、今其書ヲ得ズ」とするようになり、この巻が刊行された明治三五年頃には、『琉球往来記』が史料編纂所の手元になかったことが記されている。

『大日本史料』はさらに続けて、「続日本高僧傳」付録「寤寐集」(袋中自記)「琉球神道記」を引用し、最後に、「道の幸」上として、

寛政四年十一月一二日○上略 けふと檀王法林寺へ行、○中略 中興開山袋中上人自筆の琉球神道記、弟子東暉の枕草子五冊、尊同愚答記とて、建治元年、龜山院、花山院通雅卿を御使とて、勅問有し御答を、了患上人の自筆なる有、又、袋中琉球より帰国の時の船えしるしとて、見崎十右衛門と銘あるさし物有、猶くさくさ有し、○下略、法林寺二八、袋中ガ琉球ヨリ齋シ帰レリト傳フル、支那西湖ノ古画幅アリ  
としてゐる。

横山學は、「袋中『琉球神道記』『琉球往来』・喜安日記」において<sup>9)</sup>、「日本の古書には古くから琉球についての断片的記載はあったが、まとまりのある形で記述されたものとしては、僧袋中による『琉球神道記』および『琉球往来』が最初である」としている。さらに、『琉球神道記』が日本において一般に流布するのは、全五巻五冊本として刊行された慶安元年以後正徳頃の間である。この時期に九度の重版のあったことを、当時の出版書目から知るこ

とが出来た。(略)実際の見分に基づく記録であるから、新井白石は『使琉球録』(陳侃)と共に最も信頼のおける文献として重んじた(五七頁)としている。

このように、『琉球神道記』は琉球に関するまとまった記録として、最も古い物としてその価値が高いのである。とりわけ、島津氏による支配以前の琉球の姿を、かいま見ることが出来ることから、琉球文化を研究する上での基本資料であるといえる。ちなみに、柳田の『海南小記』は大正一〇年の刊行であった。

## 二 『琉球神道記』にみる十三仏信仰

伊藤唯真は「僧袋中と琉球」で<sup>10)</sup>、「この書(『琉球神道記』)は五巻からなり、第一巻は仏教的世界観、第二巻はインド仏教、第三巻は中国諸代帝王のことを記し、第四巻で琉球国内諸寺院の本尊を教義的に説明、最後の巻で琉球の神仏習合的な諸寺院の縁起などを述べている。」(略)

「袋中の編述は、第一巻で国土の源流を知らせるために四州を挙げ、神祇は諸邦に通じて表裏があるので、第二巻で仏国のインドを、第三巻で王国の中国を、第四巻で琉球の諸寺院本尊の垂迹の本地を明かし、しかるのち第五巻で琉球の神祇を挙げるといふ、整然たる構想に基づいているのである。」

続けて、「淵源から説き起し、到り着くところをば鮮明にするという手法で、袋中は最後に琉球の神々について述べた。まさに「琉球の神道の記」である。袋中の『琉球神道記』は彼独自の構想で諸邦のこゝから書かれているが、極まるるところは琉球であった。その宗教についての記述は、まさに琉球神道に

関する最古の記録として貴重である」と述べている。

『琉球神道記』において、十三仏信仰が展開されるのは巻四である（11）。

因に十三仏の種字を云ば、カン不動、バク釈迦、マン文殊、アン普賢、カ地藏、ユ弥勒、ペイ薬師、サ観音、サク勢至、キリク弥陀、ウン阿銭、バン大日、タラク虚空蔵矣。

さらに、

又此琉球国には、十三仏の道場、一一に之無と雖、此諸聖、或は胎内、或は死後までも、利益変化し給ふ故に、此に挙なり（12）。

とある。

袋中と十三仏信仰との出会いについては、袋中の自著である『寤寐集』に（13）、  
覚、矢目如来寺に、公儀へ訴詔の事有て、一夏住す。其内門徒の龍清院が所に遊歴す。卓の上に、  
方五寸計のほぐあり。見るに十三仏の次第を書く。我云、此反故は何くより。答云、夷中（イナカ）  
の時衆房主が所より取来。我云、借候へ。進候云。

是奇瑞のことなり。某梵漢集を作る。此次第を案ずるに叶はず。諸抄にもなし。十王経にもなし。  
今喜て集に書入了。

とされ、実際『梵漢対映集』に「十三仏」の項をたて、不動から虚空蔵に到る諸仏を解説しているのである（14）。

近年発表された、真喜志瑤子「琉球神道記―キンマモンと外来の神仏」（15）と、渡辺匡一「蛇神キンマモン―浄土僧袋中の見た琉球の神々―」（16）という二つの論文は、文学の方面から『琉球神道記』を

検証している。その関心の主体は、巻五の琉球の在来神である「キンマモン」であるが、その理解のために巻四の寺院について丁寧な分析がなされている。

真喜志は、「十三仏事本尊の諸寺への配分記事について、従来、十分な注意が払われてこなかったように思われる。」(略)「筑土(鈴寛)氏の、「この条は、琉球寺院の由来、本尊靈験談をもつてしたものではなく、いはば仏の儀軌で仏の説明のみとどまって、ままた日本の靈験談をもつて補足してゐるにすぎない」(「琉球神道記解題」という説は、四巻の記録が、琉球の宗教の状況とは遊離した記述であるとの印象をあたえる。」

「しかし、『由来記』(一七一三年成立)巻一〇の公私廃寺本尊の項と比較すると、これらの記事は、巻四の記録通りに実際に奉安された本地仏であり、そのなかで、『由来記』成立時には廃されていたものの記録が『由来記』の記録であるという可能性がよいと思われる。」

続けて「とくに注意したいのは、『琉球)神道記』の記録は、実際に、十三仏思想によって奉安された記録である、ということである」としている。真喜志の作成したのが第一表である。

渡辺は、巻四の寺院の配列に注目する。「『神道記』の寺院の配列は十三仏の仏事(忌日)とは全く関係がない」(略)「この配列は仏によってではなく、寺院の方に重点を置いたものようである。一番に挙げられるのは円覚寺、尚真王によって建立された尚家の菩提寺であり、琉球臨済宗の総本山である」(略)「王府との関わりが強い寺院への配慮の中で配列されていたと考えられる」としている。さらに渡辺は、真喜志の論に対して「袋中の滞在時に、十三仏信仰が琉球に入っていたことを確認できる明確な資料は存在しない」(略)「『神道記』をもって琉球における十三仏信仰の有無を論じることには慎重を期する必要があるだろう」としている。

確かに真喜志が「とくに注意したいのは、『神道記』の記録は、実際に、十三仏思想によつて奉安された記録である、ということである」と強調している点については、説明が十分でないとの印象をいだくのである。ただ、第二尚氏の菩提寺である円覚寺に、足利将軍家の十三仏信仰が取り込まれていた可能性もまた否定できないところである（17）。

円覚寺について『球陽』卷之三、尚真王十六年（一四九二）の条に（18）、  
円覚寺ヲ創建ス。

始メテ地ヲ城北ニトシ、此寺ヲ創建ス。而シテ荒神堂、寢室、方丈（寺院の表座敷）、仏殿、法堂、山門、両廊及ヒ僧房、厨庫、浴室等アリ。之レヲ名ケテ天徳山円覚寺ト曰フ。三年ニシテ成ル。以テ芥隠ヲ延シテ、開山住僧トナス。ソノ方丈壇ニハ虚空蔵菩薩ノ木像ヲ奉ジ、法堂壇ニハ薬師弥勒勢至ノ三像ヲ奉イ、仏殿ニハ釈迦文殊普賢ノ木像ヲ奉シ、土地堂ニハ大帝判官権ノ木像ヲ奉シ、祖师壇ニハ菩提達磨大師ノ像、護法韋駄天ノ木像ヲ奉ス。但シ韋駄天ノ像ハ、モト香積（寺院の厨所）ニ請ス。イマ炊煙ノ楷（ふす）ブヲ以テ此ニ改奉ス。後年ニ至リ、其像甚ダ壞ル。亦住僧際外、題奏シテ鉞（びん・福建省の異名）ヨリ仏殿ヲ請来ス。背後ニ普菴禪師ノ図ヲ懸ク。

とあつて、方丈に虚空蔵菩薩、法堂に薬師如来・弥勒如来・勢至菩薩、仏殿に釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩、土地堂に大帝判官権、祖师壇に達磨大師像・韋駄天像を祀っていたことが分かる。『琉球神道記』巻四では、円覚寺は釈迦如来の道場とされている。

袋中の時代の円覚寺については必ずしも明らかに出来ないが、むしろ円覚寺の虚空蔵菩薩に信仰が集まったことも知られている（19）。十三仏信仰を虚空蔵信仰としてとらえる私の視点からすると、大きな

疑問が残されることになる。今後さらなる検討が必要となろう。

### 三、袋中上人とエイサー

平成一〇年は、袋中三百六十回遠忌にあたり、『花ものがたり―民衆とともに歩んだ袋中上人―』が刊行され<sup>(20)</sup>、沖縄では袋中とエイサーについてシンポジウムがあった。

『琉球新報』の平成一〇年七月に「起源は念仏踊り エイサーシンポジウム―袋中上人の取り組み紹介」と題して「エイサーの始まりとされる「念仏踊り」を伝えた袋中上人の三六〇回忌を記念したエイサーシンポジウム（主催・夏祭りin那覇実行委員会、浄土宗沖縄教師会）が、二五日、那覇市の久茂地公民館で約四〇人が参加して開かれた」という記事が見られる<sup>(21)</sup>。

このシンポジウムで基調講演を行った宜保栄治郎は、『エイサー 沖縄の盆踊り』<sup>(22)</sup>の自序に、「沖縄の民俗芸能研究に足をつ込んだからはや三十五年が過ぎようとしている。その間絶えず私の脳裏にこびりついていたのは沖縄のエイサーと大和の盆踊りは同じかという素朴な疑問であった。」

「山内盛彬や喜舎場永鏐の両先輩がすでに盆踊り（エイサー、アンガマ）は念仏踊りであり、祖霊の供養が目的であると論述しているが、私にはこの結論がどうしても恋歌中心の現在のエイサーとは結びつかないもどかしさを感じていた。そこで私は現在のエイサーから過去のエイサーに逆上る帰納法で調査を始め、ついに琉球国由来記の袋中由来譚が間違いのないものであるという結論に辿り着いた。結果的に山内と同じ結論ではあった。」

続けて「だが山内、喜舎場の研究、論述は一般の人の目に触れることが無いため、いまだに定説として普及されておらず、庶民の間はおろか郷土芸能研究者でさえエイサーは「えさおもろ」を源流とし、五穀豊穰を目的として沖縄で発生した独自の文化であるとする誤った見方をしている」とした。

エイサーの成立と伝播に、念仏が関係することは十分に理解できるが、それが袋中の系譜とどう結びつくのかは今後の課題であろう。池宮正治が紹介した伊礼本『念仏集』<sup>(23)</sup>に「拾三仏（十三仏）」が記載されているが、沖縄に具体的に十三仏信仰が見いだされる初めての報告としてきわめて貴重であると考えられる。このような資料の分析が、やがて袋中とエイサーの関係を、より明らかにすることになると思える。

#### 四、袋中上人伝―袋中上人の虚空蔵信仰―

なぜ、袋中は十三仏信仰に強い関心を示したのか。彼の伝の中で検討してみたい。

「袋中上人傳」<sup>(24)</sup>の冒頭は次のように始まっている。

上人名は袋中、字は良定、或は辨蓮社、或入観と云ふは別號也。奥州岩城郡の人なり、父は賀氏法名道裕、母は幡氏法名妙喜、父母ともに心清閑にして内には三寶に帰し外には忠貞を専にす。男子二人、女子二人あり、以八和尚は嫡子、今袋中上人は第三の子なり。

抑、上人降誕の首末を尋ぬれば、同国に能満寺といふ精舎あり、虚空蔵菩薩の肖像を安置す、妙相圓滿にして端嚴無比なり、誠に又なき尊像なれば寶龕常に秘閉して金鎖かたく守れり。

或時、幡氏志願の事ありて一七日を期して参籠し給ひしに、満散の夜の夢に團、(ダンダン・丸いさま)たる月輪、口の中に入たまひ胎中揺動すと思ひてやがて夢覚ぬ。夜もやうやく深く、か、げし灯も絶えだえなりしに、挙身より輝赫たる光明出で、幽室の内を照すに昼よりもなをあきらかなり。これより有身の心地しぬれば、四威儀に和げてつゝしみをくわへられけり。(絵)

十月懐抱に間、母身安泰にして、後奈良院御宇天文二十一年正月壬子の日に、上人誕生したまひぬ。相好端正にして容貌溢潤なり。光を伸る眼目、笑を含む顔面、みな秀逸の相ありて、かつて塵中の物にあらず。

しかるに、出胎の後、この子右手を握りてひらかす。闔家皆あやしみいたり。三七日の後に拳手をひらく。掌の内虚空蔵菩薩の肖像あり。又、降誕の日時刻をたがはず、能満寺の虚空蔵菩薩の寶龕、人の寶鑰(ヤク・かぎ)を開かざるに、をのづから開きぬ。見聞の人、奇異の思をなして、これをたうとまざるはなし。

父母鐘愛浅からずして、小字を徳壽丸とぞ付られける。(略)

また、卷末の臨終においては

廿二日(寛永一六年正月)には茶毘のよし聞へければ、年来、上人の教導を蒙りし道俗男女踵を継で西方寺に群集し、茅を折、木を積て道俗男女異口同音に念仏しつゝ、火化しけるに、折ふし微風動揺して火焰空に上る。

其の一々の焰、屈曲して、みな虚空蔵菩薩の梵字となれり。満山の人々、かゝる異霊をみしゆへに多くは帰り得ずして、其夜は西方寺に通夜し居たり。(絵) (略)



つらつら上人一生の化導を案ずるに、智目の照すところ和漢に通じて輿典を製し、行足の履むところ、都鄙を経て梵刹を建り。實に先賢にも不愧。又、遺弟の依杖なりしか。

のみならず降誕の初には掌内に尊像を握り、茶毘の終には、空裏に梵字を現はす。時の人、虚空蔵菩薩の化身なりと仰きしも、更にうたがふべからざるものなり。

とされる。

- ・ 生誕の際、右手の内に虚空蔵菩薩の肖像を握っていた。
- ・ 出生の時刻に、秘仏である能満寺虚空蔵菩薩の扉が自然に開いた。
- ・ 亡くなった後、茶毘の煙が虚空蔵菩薩の梵字であるタラークになった。
- ・ 人々は袋中上人を、虚空蔵菩薩の化身であると考えた。

このように、袋中は十三仏信仰の頂上仏である虚空蔵菩薩と大変ゆかりのあることが分かる。

袋中と虚空蔵菩薩とのつながりは、それだけにとどまらない。『琉球神道記』巻五に  
に次のような話がある<sup>(25)</sup>。

又中比、波ノ上ノ拝殿ニシテ、祝子ト内侍ト合歡ス。尔ニ両根着シテ離レズ。衆徒是ヲ憎テ面殿ニ曝コト三日ニシテ離ル。其清メニ地ヲ三尺掘去、浄沙ヲ布。相撲ヲナスト云。私云、倭ニ永正年中ニヤ能州ニ乱兵起ル。石動山ニ夫婦忍入テ隠ル。衆徒ノ好ミタル故ニ尔ナリ。夫婦交合アリ。離ズ。講堂ニ曝コト三日ニシテ分離ス。其響三里ニ聞ト云。

去バ仏戒ニ、仏閣・僧房・社祀・墳墓等ナリ。鬼問経ニ、靈所ニ淫スル者ハ、餓鬼ト成テ、深く男根ヲ苦トナリ。

ここで波上権現と対比させている能登の石動山は、鎌倉時代から明治の神仏分離に至る間、北陸地方における虚空蔵信仰の拠点として有名であった。そしてこの石動山は、袋中の師の出所でもあったされるのである（26）。

『寤寐集』第二六話に、次のようにある（27）。

仏像ソトバ開眼事。我幼年ニシテ学セシ師ハ能州畠山ノ弟ノ子ナリ。畠山右衛門大輔義秀ト云、乱国ニ依テ発心他国、本国ニシテ石動ソダチ、能密方ヲ行ナハル。大二験アリ。其本寺山崎専称寺、代々消亡。

このように、袋中にとって虚空蔵菩薩は特別な存在であり、彼を虚空蔵信仰者としても差し支えないと思われる。その袋中が、十三仏信仰に出会った喜びは、先に紹介した『寤寐集』の記事からもうかがえるのである。

袋中の人となりを知るために、『寤寐集』所収の各話について検討してみた。「寤寐（ゴビ）」とは、寝ても覚めてもという意で、『寤寐集』には文字どおり袋中の夢と心覚えが書き留められている。すると、彼が弘法大師に対して一方ならぬ思い入れがあることに気づいた。

第三二話には、「祖師先師の本地は伝にあるとおりが、良忠はいかにと十余年思っていた。寛永元年八月六日の暁の夢に、弘法大師が我が室中に現じて我に供養した。あたかも良忠と同じだと不審が晴れた」とあり、

第三三話には、「先年上洛のおりは伊勢より熊野詣り高野山に至った。不動坂のあたりで扇を一本拾った。京都では論旨を申請し、幾日も待っていた。宿所での昼寝の夢に、我の前に弘法大師が立って味

噌の橘の大ききほどに丸めたものを五六粒を下さったのを見て覚めた。その日、酉の刻に拝領し繪旨を受けることができた」とある。

第三四話では、「琉球国で見た夢。竹林に堂があり、中尊は摺本の大日曼荼羅、脇は弘法大師と聖法尊師であった。我が帰ろうとすると弘法大師が衣の袖を切つて我に給わつた」と記している。

さらに第二五話においては、「寛永二年十一月十四日暁の夢。七月の墓参りのようだったが、突然、弘法大師が来たまうと言うので驚いて外に出ると、七尺ばかりの背丈で、持仏堂を訪ねておられるように思った。弘法大師が我に対して座られたので、形見に衣のキレを手の大ききほど切つていただいた。覚めてから思うに、これも新編の寺社縁起に弘法大師の門人と書いた縁かと思う」とし、自らを弘法大師の門人であるとしている。

袋中が浄土宗の学僧であることは何度も述べてきたが、虚空蔵菩薩という密教的な信仰を持ち、弘法大師を信奉する一面を持ち合わせていたことになる。

本稿では、柳田『海南小記』から始まって、袋中の十三仏信仰、さらに彼の虚空蔵信仰と弘法大師信仰とを展望してきた。『琉球神道記』の理解のためにも、また琉球の宗教史やそれから派生する民俗宗教を理解するためにも、袋中に内在する虚空蔵信仰・弘法大師信仰を認識し、それを考慮することが必要になるかと思われるのである。

註

(1) 『定本柳田国男集』第一巻、筑摩書房、昭和四三年刊、二六七頁。

- (2) 高柳光寿・竹内理三編『角川日本史辞典』第二版、角川書店、昭和六二年刊、五七九頁。
- (3) 『国史大辞典 一四』吉川弘文館、一九九三年刊、六三七頁
- (4) 『琉球新報』一九六五年九月一〇日・金曜日、一二面
- (5) 『琉球史料叢書 第一』名取書店、昭和一五年刊、一四〇頁
- (6) 『琉球史料叢書 第三』名取書店、昭和一七年刊、九二頁
- (7) 桑江克英訳注、三一書房、一九七一年刊、七〇頁
- (8) 卷一二の三、九三頁
- (9) 『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館、一九八七年刊、第二章第三節、五一・五七頁。
- (10) 『日本人と民俗信仰』法蔵館、二〇〇一年刊、一八八頁。
- (11) 横山重編著『琉球神道記』大岡山書店、昭和一一年刊。四二〜六八頁。
- (12) 前掲註<sup>(11)</sup>。六七頁。
- (13) 横山重編著『琉球神道記』（前掲註<sup>(11)</sup>）二六五〜二九四頁所収。第五話、二六八頁。
- (14) 『国書総目録』によると、『梵漢対映集』は（類）悉曇 二卷二冊、（著）袋中（良定）、正保二年刊とある。「十三仏」は下巻の三折から七折。
- (15) 『仏と神』（岩波講座「日本文学と仏教」第八卷、岩波書店、一九九四年刊）。第五章 一三三〜一五五頁。
- (16) 『文学』第九卷第三号、岩波書店、一九九八年刊。七四〜八四頁。
- (17) 第二尚氏と寺院の関係について、上井久義先生の「琉球の宗教と尚圓王妃」（『東西学術研究所紀要』

第三四輯、関西大学東西学術研究所、二〇〇一年刊）を参照されたい。また、足利將軍家の十三仏信仰については、本論文第一章第三節を参照されたい。

(18) 前掲註(7)、五〇頁。

(19) 円覚寺の虚空蔵信仰については、前節でふれている。

(20) 紫翠会出版、平成一〇年刊。

(21) 琉球新報インターネット・ニュース 更新日時 一九九八・七・二七（月）。続けて「基調講演で、宜保栄治郎沖繩大学教授が「沖繩のエイサー、八重山のアンガマは、どちらも念仏踊りを起源とするもの」と紹介。伊藤唯真日本私立短期大学協会理事が「袋中上人は琉球に仏教を分かりやすくして伝えた。尚寧王にも影響を与えた」と語った。」「一六〇三年、浄土宗の学僧であった袋中上人は、長崎から明国に渡ろうとしたが琉球に漂着。三年間の滞在中、尚寧王らに厚遇された。仏教の言葉を分かりやすくしたものを「念仏踊り」として沖繩に広め、これがエイサーの起源といわれる。宜保さんは「（エイサーの）歌詞をたどっていくと、袋中上人の念仏踊りに行き着く。エイサーは、それと中国の盆の習慣が沖繩で合わさったものだ」とエイサーのルーツを語った。また、伊藤さんは、当時の琉球に念仏信仰を広めた袋中上人の取り組みを紹介。「漢文や和語による経典をそのままではなく、こちら（琉球）が分かる言葉にし、とらえやすいように曲調を入れた」と説明した」とある。

(22) 那覇出版社、一九九七年刊

(23) 「伊礼本『念仏集』―解説と本文―」、法政大学沖繩文化研究所編『沖繩文化研究』一八、一九九二年刊

(24) 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局編『浄土宗全書』一七、山喜房佛書林、一九七一年刊、明治四〇年  
〜大正三年 浄土宗宝典刊行会の複製。

(25) 前掲注(11)。一一八頁。

(26) 小峯和明「琉球神道記の世界」(『仏教文学』第一七号、仏教文学会、平成五年三月刊、八二頁)で  
は、「奇談―大和との対比」の中で、「波上権現での珍事に大和の例をひきあわせ、仏典で普遍化した  
もの。大和からの視点がよく出た例だ。永正年中(一五〇四〜二一)の北陸はたとえば、永正三年に一  
向衆徒が越前に入り朝倉に撃破されるように、一向一揆が頻発した時期にあたる」とされる。また、能  
登石動山の虚空蔵信仰については、第四章第二節を参照のこと。

(27) 前掲註(13)。二八四〜二八五頁

## 本論文収録の初出一覧

章	節	論文名（原題）
1	1	「十三まいりの成立—嵯峨虚空蔵法輪寺について—」（『御影史学論集』第三号、御影史学研究会、1976年刊）
1	2	「十三まいり信仰の成立と伝播—絹織物技術との関連において—」（『日本民俗学』第122号、日本民俗学会、1979年刊）
1	3	「虚空蔵信仰と十三参り」（『仏教年中行事』仏教民俗学大系第6巻、名著出版、1986年刊）
1	付1	「法輪寺と『平家物語』の世界—小督局・滝口入道と横笛—」（嵯峨虚空蔵法輪寺、1984年刊）
1	付2	「虚空蔵信仰と十三まいり」（『歴史公論』第52号、雄山閣出版、1980年刊）
2	1	「十三仏信仰の成立について—空海の入定と虚空蔵求聞持法—」（『御影史学論集』第6号、御影史学研究会、1980年刊）
2	2	「十三仏信仰の伝播について—京都誓願寺十三仏堂を中心として—」（『御影史学論集』第12号、御影史学研究会、1987年刊）
2	3	「隔夜スル法師—十三仏信仰伝播者の問題—」（『仏教と民俗』第17号、仏教民俗学会、1981年刊）
2	4	「淡路島の巡礼—弘法大師信仰と十三仏霊場—」（『まつり』第36号、まつり同好会、1980年刊）
2	5	「石巻の中世板碑にみる虚空蔵信仰」（『民俗の歴史的世界』御影史学研究会民俗学叢書7、御影史学研究会編、岩田書院、1994年刊）
3	1	「漆器業の虚空蔵信仰—伝統産業における信仰と技術伝承に関する民俗地理的—考察—」（『ジオグラフィカ センリガオカ』3、関西大学文学部地理学教室編、大明堂、1997年刊）
3	2	「浜仏壇と虚空蔵信仰」（『生地屋とろくろ』第3号、木地屋とろくろ研究所、1993年刊）
4	1	「白山平泉寺にみる虚空蔵信仰—越前における白山信仰圏との関係—」（『宗教民俗論の展開と課題』、法蔵館、2002年秋刊予定）
4	2	「虚空蔵信仰の伝播—能登石動山・美濃高賀山・山城法輪寺、本尊の像容を視点として—」（『御影史学論集』第9号、御影史学研究会、1984年刊）
4	3	「海上交通と虚空蔵信仰—薩摩坊津の大永6年虚空蔵種字碑をめぐって—」（『地理学の諸相—「実証の地平」—』関西大学文学部地理学教室編、大明堂、1998年刊）
5	1	「虚空蔵信仰の南進—根来・薩摩坊津・琉球—」（『御影史学論集』第13号、御影史学研究会、1988年刊）
5	2	「袋中上人と『琉球神道記』にみる十三仏信仰」（『民俗儀礼の世界』（森隆男編、清文堂出版、2002年刊）

## あとがき

筆者は、虚空蔵菩薩に関連する諸々の信仰の成立と、その伝播に関心を抱きながら研究を続けてきた。現地調査を重視する地理学の徒として、この信仰の展開をおいかけ北は津軽の岩木山神社から南は薩摩坊津にいたるまで、全国に渡って虚空蔵菩薩を祀る寺社やあるいは虚空蔵菩薩にまつわる伝承を訪ねてきた。

虚空蔵菩薩が実際に村落において祭祀されているのを初めて知ったのは、本論第一章第一節の冒頭で述べたように、篠山市の知足という集落においてであった。篠山城跡の北方多紀連山に食い入る谷筋のひとつに黒岡川がある。黒岡川は、篠山の城下町を通るため繁華街で氾濫して被害がもたらすことがあった。そのため上流の谷筋はいち早く圃場整備がなされ、さらに黒岡川の放水路として新黒岡川が掘削された。この経緯は、『丹波篠山町の地理』（関西大学地理学教室実習調査報告書一八、一九九三年度）に詳しく紹介されている。

さて、西流してくる黒岡川が南に向きを変える所に知足がある。この知足の氏神が「こくぞうさん」（虚空蔵菩薩）であり「京都の嵐山からもたらされた」と伝承されている。仏教上の菩薩である虚空蔵菩薩が氏神であることへの不可解さ、なぜ京都から伝えられたと伝承されるのかという疑問が、私の虚空蔵信仰研究の原点である。

本論をまとめていて、この知足の虚空蔵菩薩の社を再訪したいと強く思うようになった。そこで平成一四年（二〇〇二）六月に、近いにもかかわらず長い間足を向けることのなかった知足をたずねた。「こ



くぞうさん」のお社は、筆者が記憶していたより立派で、よく手入れがなされ掃除も行き届き、村人の信仰の篤さが伝わってきた。拝殿の長押に、以前は気がつかなかった祈禱札があった。それは、

タラーク（虚空蔵の梵字）

奉修 虚空蔵大菩薩 村内安全 除災與樂 如意所

嘉永元年（一八四八）九月良辰 鹿王山法主凱言

というものであった。知足の人々は、江戸時代から信仰してきた虚空蔵菩薩を、明治維新の神仏分離、廃仏毀釈に際して、仏を氏神として祭祀するという知恵で存続したのであった。

本論をまとめて、この知足の「くぞうさん」に回帰してきた。なぜ、知足の虚空蔵菩薩は京都の嵐山から迎えたと伝承されているのか、筆者はまだまだ虚空蔵信仰研究の道半ばであることを思い知らされるのである。

本論は地理学教室の諸先生からご指導をうけながら、新大学院研究棟である尚文館と総合図書館という恵まれた環境の中で執筆に取り組むことができた。尚文館の七階からは生駒山を背景に大阪の町並みがよく展望できる。虚空と大地の境界に入道雲が湧き立つことに素直に感動を覚えた二〇〇二年の夏であった。